
女子文壇
二月一日發行
六年第貳號

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に各種の賣藥を服し東京市内有名大家某先生の診斷服藥した猶は橫濱獨逸病院長(ドクトル)の藥餌も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚背白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳嗽甚しく骸骨同樣に成り最早此上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥蓐の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に望みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢查を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及び**印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分貳圓◎十四日分四圓◎廿一日分五圓◎卅五日分七圓五十錢○七十日分十四圓遞送料十錢◎爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能◎肺結核◎肺炎◎氣管支加答兒◎肋膜炎◎肺炎加答兒◎たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舗へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込み乞ふ

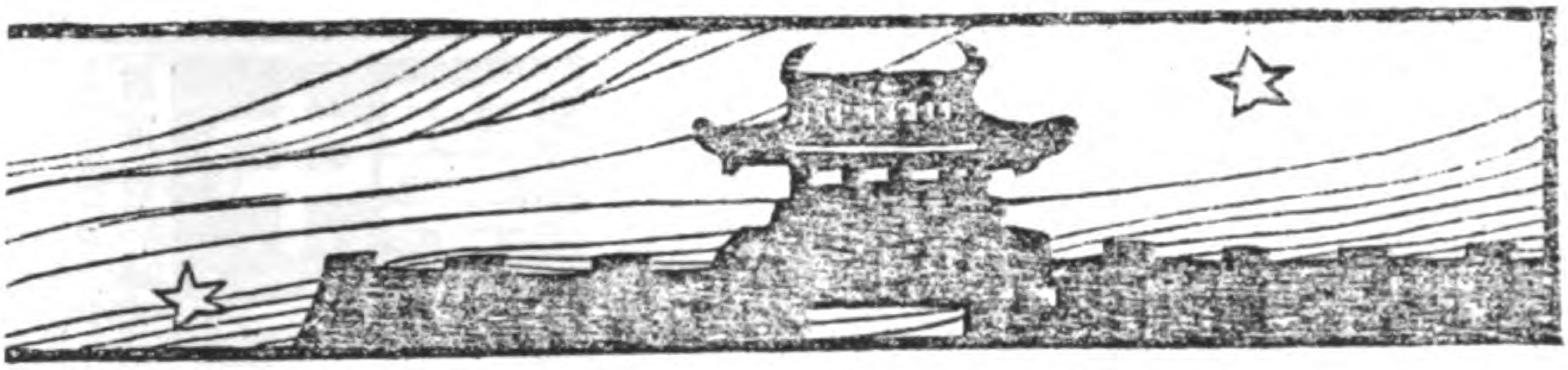
東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舗 川名助次郎(電話大森六九番)

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
橫濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七

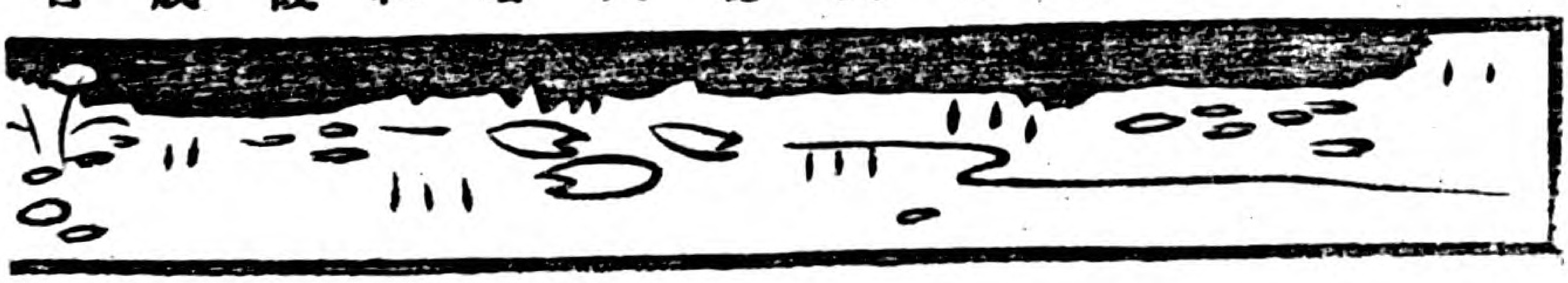
東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
靜岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

肺治散特約店
東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
大阪西橫堀舟町橋西詰 賣藥卸賣株式會社
馬關西南部町 賣藥會社
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀬戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
相模橫須賀汐入町 茶本商店
東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
越後國長岡市 藤井卯吉
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通大 野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 小谷回春堂
長野市大門町 小林傳兵衛
(全國到る處の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)



女子文壇 二月號（六年貳號）目次

【本欄】（一―四八）



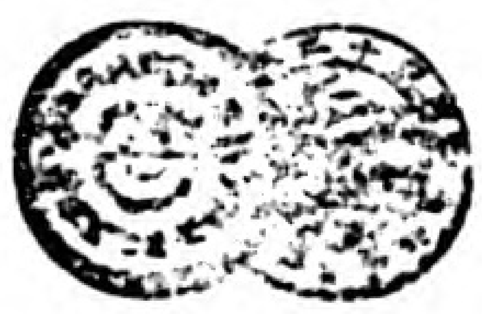
女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第五回内國勸業博覧會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登録商標
壽美禮おしろい

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



ヴワイオレツト水製

ぬり製 大壜二十錢 小壜十二錢
水製 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ淸々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

錫、藍、紅彩蝶香ひ罐詰八錢
別製罐詰五拾錢
大袋二錢 小袋一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞贊する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標
西洋白色くなるあらひ粉
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舗 東京兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製 （電話浪花二七六五番）

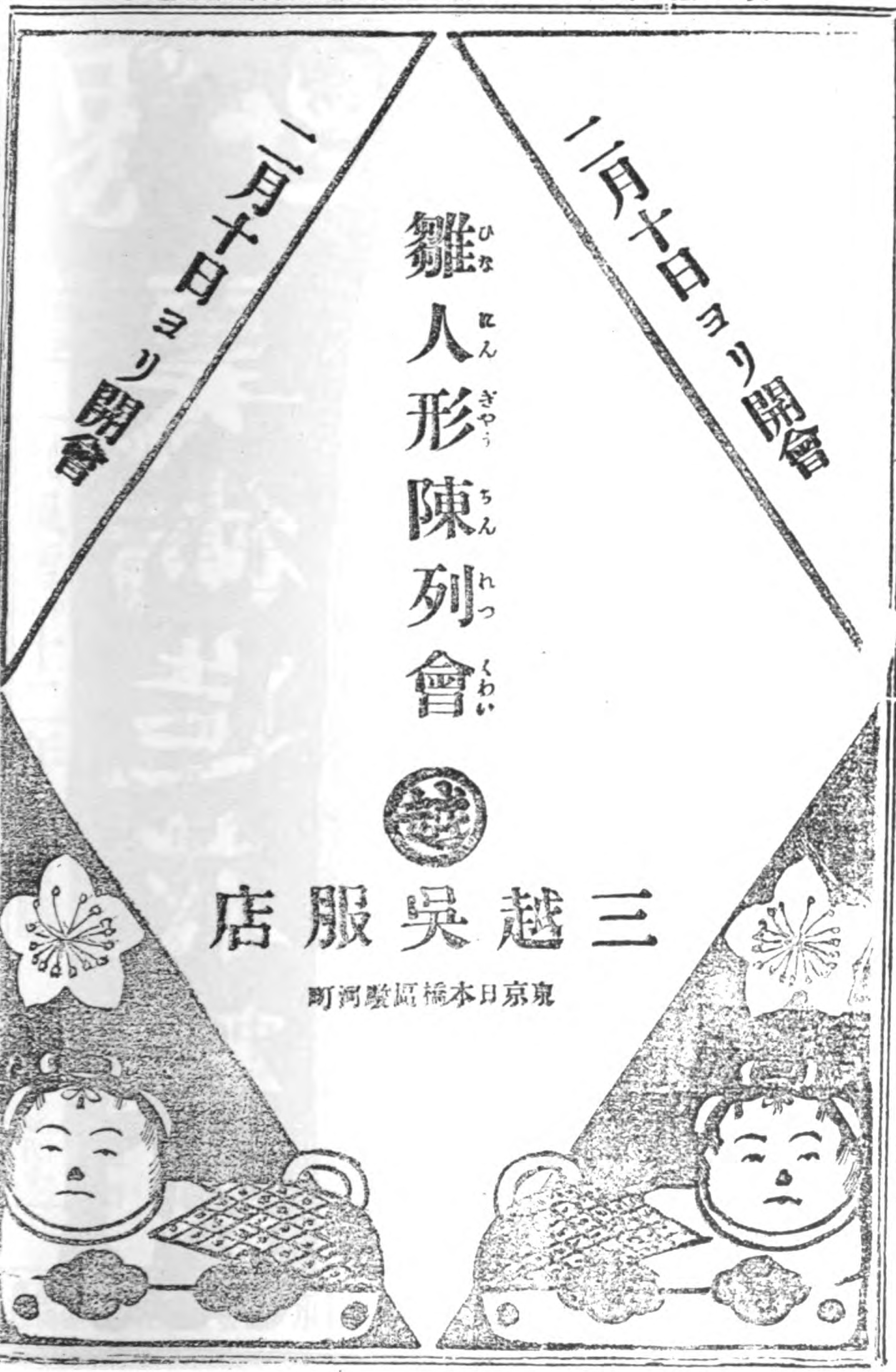
販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

水　と　空

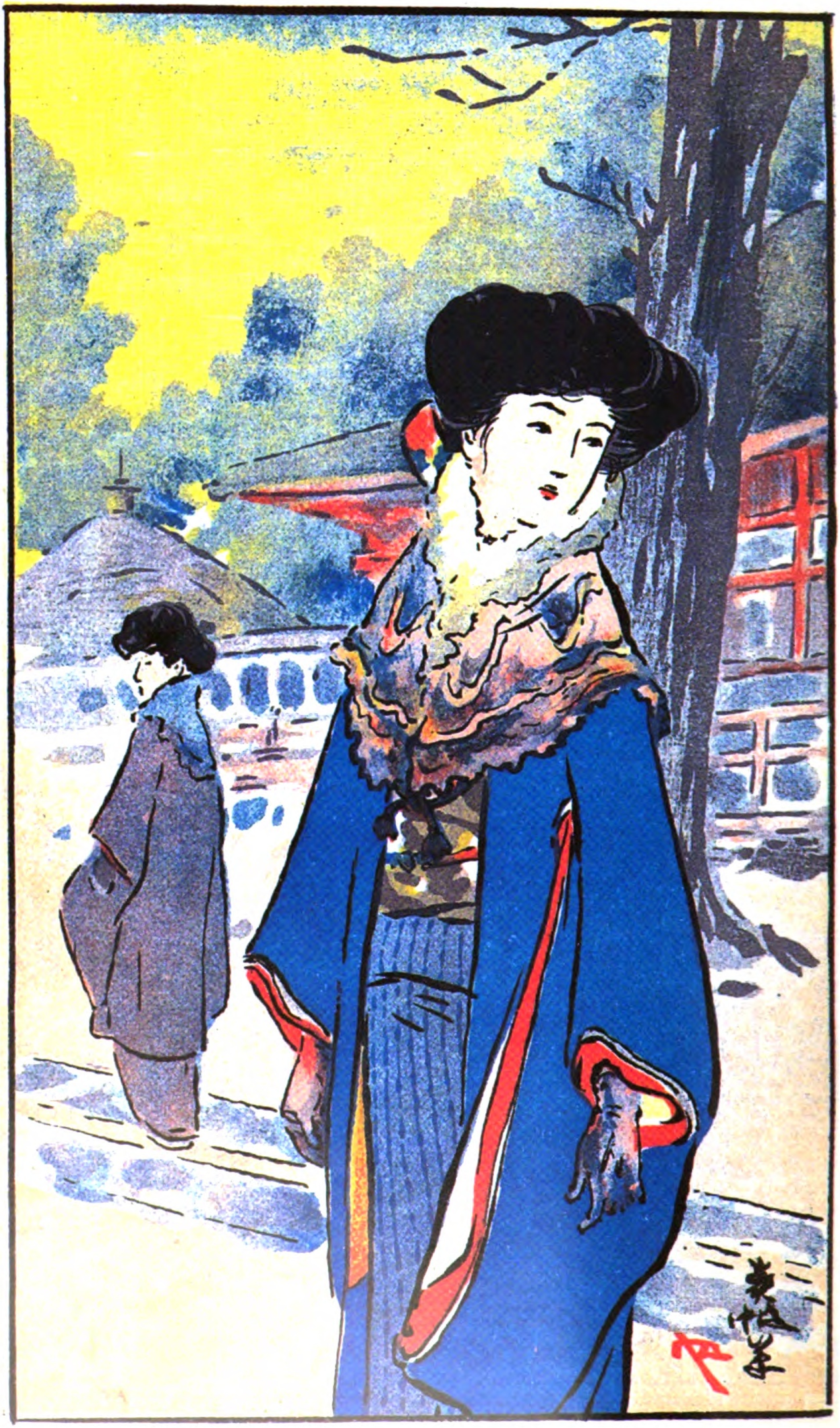


（大江原色版製版印刷）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



霞む日




ヴワイオレツトねり製新製
壽美禮おしろい
壽美禮
製造本舗
壽美禮堂
東京東両國元町 電話浪花二七六五番

川合眞澄子女史著●東洋の新美術!!!（最新刊）

美術編物造花法教本

總クロース製
美本全一冊
定價
金八拾錢
郵税金六錢

本書は從來の造花法とは大に其方法を異にし**一條の絲と一本の鍵針**にて如何なる花卉をも自由に造り得べき樣工夫したるものにして二百有餘個の編方解剖圖と數葉の寫眞版とを加へ詳密丁寧に其方法を説明したる獨特の書なり、されば多少編物に心得ある諸姉は本書によりて直ちに編物造花の妙技を修得し**優美なる花卉**を容易に編み造る事を得べし今や時代の進運と共に女子の手藝漸く盛況を來たし造花の如き將に大に海外に輸出せられんとするの時に當たり此の一新機軸を開かれたる女史の苦心斯界に貢献する事實に多大なりと謂ふべし苟も手藝に志ある婦人は勿論殊に技藝を主とせらるゝ**女學校の教師**及び**學生諸嬢**は是非一本を購ひ熟讀玩味せられんことを望む

下田歌子女史題歌
東京造花教習所主幹
塚本鐵吉氏著

第二版

最新造花術

菊版全貳冊
裝釘優美
上卷下卷
定價各金五拾錢
郵税金八錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 振替口座（東京）第二八〇九番 目黑書店

少年之友

二月一日發行 五卷貳號 （價）一冊郵税共金拾錢 六冊同金六十三錢

美麗な口繪

◎悽絶快絶 獅子吼……（原色寫眞）

▼淺間山上より▼犬之種類▼變な顔▼諸國風景寫眞帖（其二）

◎新作お伽 魔法の木の葉……水野葉舟

◎少年小説 ジョンの行衛……矢部白雨

▲川中島の一騎打　村田犀川

▲二つの袋……加藤白光

◎淺間山大噴火に遭遇したる實驗談……

◎面白い蜘蛛の研究……太田秀峰

▲野ざらし……草村小枝女

▲蓄音機の歌……夕ぐれ

▲畫ばなし……竹久夢二

▲犬のてがら……石井愕堂

▲朝鮮人はなぜ白い服を着てるか……海老沼雨華

◎冒險實話 鰐が仇……掬芳散史

▲動物と鏡……一白生

▲世界奇聞……思水漁郎

▲寫眞解説 ▲お歌會始め ▲少年新聞等其他滿載

◎少年文壇 △普通文△短文△和歌△俳句△短詩△笑ひ話△考物△少年クラブ△懸賞披露

（ろノ二）

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五）

賣捌 東京堂 東海堂○北隆館 良明堂○上田屋 至誠堂

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

中村秋人君著

名媛と筆蹟

洋裝四六判美本紙數三百頁　正價金四拾錢　郵稅六錢

▼孃ちやんも見るべし姉さんも讀むべし

一、富美宮泰宮兩内親王殿下、各宮妃殿下、各姫宮殿下三十方に、名流婦人、女子敎育家、女流作家、女流畫家四十二人の優しき美しき幽かしき愛らしき話のみを叙し附錄として三皇孫殿下、各若宮殿下の御愛嬌話と婦人に關する數項とを加ふ。

一、筆蹟は有栖川宮妃殿下を始め、各宮妃殿下同姫宮殿下及び名媛の書畫數十枚を挿む然して其取るところ大概ね幼少の手に成れるものにて恰も天眞爛熳たる天使の姿を髣髴として偲ばしめ其愛らしさ云はん方なし就中閑院宮妃殿下六歲の時御染筆に成りし繪畫と八歲にして渡米留學せし津田梅子女史の八歲の時故國の慈母を慕ふて送りし愛嬌たつぷりの書翰は見る人をして思はず莞爾と眉を開かしむるものにして頗る興味あり

一、著者は虚榮虚飾の塵烟を厭ふて、清を探るの年少氣鋭の健筆家にして又大に考へつゝある子煩惱なれば其觀察の着實にして精細、其一句一章は必ず敎育的の意味を含み、然も取材の如く優しく美しく幽かしく愛らしき筆を縱横自在に振り讀んで解り安く味ふて淸新の趣味を覺えしむる近來の快著也、

▼お母さんも味ふべし敎育家亦一讀を要す

東京　本町　博文館



北白川宮成久王妃房子内親王殿下

（最近の御撮影）

陸軍中將長岡外史氏の家庭



(長岡中將)(安然子)(夫人芳子)(朝吹常吉氏夫人 磯子)(京子)(護一)(護郎)

(はノ一)

鐘淵紡績株式會社四十六回決算報告

貸借對照表

貸方（負債之部）

一株金	一四、〇〇六、八〇〇・〇〇〇
一諸種積立金	三、四六三、一九一・〇〇〇
一別途準備積立金	一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一配當準備積立金	八九九、五二七・〇〇〇
一外國借入金 但此英貨三萬九千七百八十五磅三志二片也	三九〇、〇〇〇・〇〇〇
一社債金	二五五、〇〇〇・〇〇〇
一配當未拂割賦金	八、一三三・五八一
一未拂金及買掛金	七九六、二八九・一六〇
一仕拂手形	四、〇八七、〇二〇・九二〇
一諸預り金	六五六、八〇二・九九三
一鐘紡同志會預り金	一〇三、五八四・四二〇
一鐘紡共濟組合預り金	九一、九六八・八一二
一故中上川氏紀念奬勵資金	一〇二、四七〇・〇〇〇
一職工衛生資金	五九、三七二・二九六
一使用人病傷老衰退職恩給資金	二八六、九六一・〇七〇
一職工幸福増進資金	二二三、一八六・二〇七
一職工救濟資金	二三、九七二・六〇三
一職工休養院引設費預り金	三〇、〇〇〇・〇〇〇
一前半期繰越金	七四八、〇四五・九四九
一當期純益金	七三〇、九六七・六五二
計	二七、九六三、二九三・六六三

借方（資産之部）

一拂込未濟株金	四、九二二、〇四〇・〇〇〇
一新株第二回拂込未收入金	一、三一二・五〇〇
一土地	五四〇、八四九・七四五
一建物	二、一六八、二二八・二二七
一器械	四、〇三七、七〇一・七八〇
一防火裝置	一七五、四三四・五八四
一工場用具及什器	六九、五三六・三三一
一東京本店新設瓦斯糸工場	一、七七八、六六三・二二三
一京都支店新設第一、第二絹糸工場	二、八九七、三二五・三八八
一洲本支店新設紡織工場	一、七一九、七五七・六八三
一高砂支店新設太糸工場	二、三六一、〇五八・二九三
一中津支店新設織布工場	三六七、七二一・八六一
一兵庫支店織布工場增設勘定	七九四、七七六・一六一
一博多支店織布工場增設勘定	三六、〇四〇・二二〇
一舊日本絹綿紡績株式會社より承繼京都白川工場用地	五一、三七〇・四九〇
一同上大阪西島工場用地	二七八、七〇四・一六五
一有價證券及手形	一一、二五七・五五〇
一銀行預金振替貯金及現金	五四四、六二六・三一八
一特別預ケ金 但此英貨三萬九千七百八十五磅三志二片也	三九〇、〇〇〇・〇〇〇
一職工立替金及假拂金	四一、五七八・六四六
一製品、屑物賣掛金及運搬途中綿糸	四八四、五三〇・〇九五
一小賣店、賄所及醫局勘定	五一、二六〇・七八〇
一原料、製品、仕掛物、屑物、石炭、荷造用品、豫備器械付屬品及工場用品	四、二〇九、二四五・二〇三
一期日未經過火災保險料	三〇、二七四・四二〇
計	二七、九六三、二九三・六六三

損益計算

一總收入金	一五、二五〇、七八一・八二一
一總支出金	一四、三一九、八一四・一六九
差引	九三〇、九六七・六五二
内 固定資産及新設工場創業費消却	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
再差引 當期純益金	七三〇、九六七・六五二
前半期繰越金	七四八、〇四五・九四九
計	一、四七九、〇一三・六〇一
内 株主配當金 但年一割四分（舊株一株に付金三圓五十錢新株一株に付金一圓三錢八厘）の割	五七六、五四〇・五八四
諸種積立金	一〇〇、〇〇〇・〇〇〇
役員賞與金	三八、〇〇〇・〇〇〇
後期繰越金	七六四、四七三・〇一七

右報告候也

明治四十三年一月

東京府南葛飾郡隅田村
鐘淵紡績株式會社

取締役會長 日比谷平左衛門
専務取締役 武藤山治
取締役 高辻奈良造
同 岡本貞烋
同 藤正純
取締役長 尾良吉
同 山口武
同 永江純一
同 前山久吉
支配人 山口八左右

右審査候處相違無之候也

監査役 平賀敏
同 野崎廣太
同 筑紫三郎
監査役 清岡邦之助
同 安田善三郎

追て取締役一名の改選は武藤山治氏再選重任に決し監査役の改選は平賀敏、野崎廣太、筑紫三郎、清岡邦之助、安田善三郎の五氏再選重任せり監査役一名の缺員は現在のまゝ補充せざることに決定せり

女子文壇の廣告によりお申込の節は其旨御書添を乞ふ

惡筆は一生の損



速に入會して頗る能書家となるべし

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる惡筆にても最も短日にて上達すること全く機械的なり

▼本會書者兼講師

稻川雲谿先生

玉木愛石先生

小野鵞堂先生

外講師大家數拾名

▲見本詳細會則無代進呈

帝國習字速成學會

東京本郷區大學正門前

電話下谷三〇壹壹番

電話下谷三貳壹〇番

名家の令嬢



九州唐津の素封家令嬢
森らん子



新潟縣の素封家久須美秀三郎氏
令嬢宮子

箏曲家今井慶松氏ゝ其門下



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御幷添を乞ふ



未だ此雜誌を見ざる少女ありや!!!

少女

(毎月一日發行)

定價一冊拾錢(送料壹錢) 半年(郵税共)六拾三錢

(口繪插畫澤山)



二卷第貳號　**二月號要目**　一日發行

發行所 東京京橋區大鋸町 **女子文壇社** (振替口座第壹七貳九番) 最寄書店になくば直接御申込を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

東洋唯一の家庭雜誌

婦人畫報

二月一日發行　二月の巻　一冊廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共二圓八拾八錢

讀物

◎日本婦人の使命　菊池博士
◎◎渡米實業團諸夫人
◎吾が家庭　一木博士
◎◎觀光團婦人が初めて見し日本
◎模範婦人實例　井上博士
◎◎職業に依りて生活する婦人
◎大石良雄の妻　大町桂月
◎◎貧苦の爲めに兒を捨てし慘なる物語
◎米國婦人小兒　嚴谷小波
◎◎安田家の御座敷拜見
◎英國人の妻定め　秋元春朝
◎◎田舍と都會の小兒　岸邊福雄
◎昔の女學生今の女學生　鳩山春子
◎◎犬公方德川綱吉公夫人……遠山稻子
和歌入門　佐々木信綱……其他滿載

畫報は愈光彩燦爛讀物は益穩健摯實！

畫報

▼春の椽　石川寅治氏筆　二頁大美人畫
▼貴婦人と令孃　日英博出品
▼天皇陛下陸軍始め行幸
▼米國觀光團　女學校遠足
▼閑院宮妃殿下　毛利公爵邸に於る
▼渡米婦人の歸朝
▼東伏見宮妃殿下御染筆御繪
▼盆景…
▼毛利邸に於ける梨本宮妃殿下
▼半月畫報…
▼山階宮妃殿下
▼各婦人會の新年會…
▼西洋風の結婚式　大澤博士令孃
▼新婚旅行の九條男夫妻
▼其他依例寫眞豐富

東京飯田町四の四　東京社
電話番町二三三九
振替口座一八一八

（にノ四）

米國鑛山業谷内良造氏の家庭



（長男義清）　（長女光子）　（夫人清子）　（谷内良造氏）　（二女操子）

讀者の家庭



（和歌山縣）森田鴻枝子



（東京）山水すが子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肥滿病新藥

（米國新輸入劑）

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶとく肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人◎ぶと〱ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤◎ふき出物多き人◎脹滿◎ぶつ〱逆上腫等輕症は一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば色は艶白となり程よくやせて嘗つて美顔窈窕たる美人となる事を保證す

諸孃姉の福音



藥價◎一劑一圓五拾錢　二劑二圓九十錢　三劑四圓卅錢　送料十錢宛

▲肥滿性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◎世界唯一 **月やく下し藥**……見よ……病める婦人　月經なき女子

専門博士賞賛指導の新發見良藥

▲勿驚……藥力最强度……其効極て峻烈……有効無害……保險藥



本劑は婦人二三ヶ月の**月經**不順月經閉止月經**滯**りは一二劑にて必ず流下す**四五月**以上又は**血塊**にても特製或は別製分服用せば安心に忽まち**流經**す夙に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ▲藥價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖　東京々橋區中橋和泉町　振替口座一〇六七七番　**小宮愛生堂**

（ほノ一）

男女ぬけ毛で困る人

●ヘルバー 入十ケ ラムス入 壹瓶壹圓

内地送費十五錢
清韓臺灣卅五錢

此れ迄男女ぬけ毛落毛止めとしては適當の藥がないためありふれたる毛はい藥やふけとり香水をお使ひになりても効力誠に疑しく十分に信用が出來ず獨り當製藥所により新に市上に提供せられたるぬけ毛どめヘルバーは植物より採集せる極て有効なる成分を集造したる化學的の特効液なれば其主成分の作用により根本よりぬけ毛落毛を止む新製品にして此れ迄の使用者も悉く滿足せるものなり

脱毛液（けぬきぐすり）

●ヘールビン
●壹瓶壹圓
●特製參圓
●送費十五錢
●清韓臺卅五錢

本劑は極て有効なる脱毛成分を集成せるものにして主成分の化學的作用により皮膚に害なく根本より脱毛す毛深き人毛多くて困る人は速に本劑を用ひて其苦を忘れられよ着金即刻密封郵送す

右貳種共代金引替送りは謝絶す

東京市牛込區北山伏町一番地
百合園製藥所

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀
河村愛子



代々家傳の妙藥
經通丸
月々ぐ藥

調劑元

東京市丸の内

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滯りも男子宮等を痛めず安々と通じ經症なるは其夜にあること請合也飴藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を認まる丶方は八錢を要す

有樂町二ノ二
江戸屋

(ほノ二)

誌友



（根室）多田よし枝



（東京）尾島千代子



（東京）片岡三々吉

外光



（東京四谷愛住女學校の校園）



（兵庫縣林磨志緒外誌友）

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

若き人も老人も讀めば必ず活動の出來る良書なり

百萬圓の富を藏せる**幸運兒**となるを心に忘るゝ勿れ然して天下に覇を握るべし

大工業家
大學者
大發明家
大政治家
大富豪
大農業家
大軍人
大商業家
大園藝家

と爲るの心得　二百五十餘項

袖珍判美製本　紙數二百五拾頁

資本不要

出世の秘訣

正價金參拾錢　郵税四錢

逆境に立ちて**煩悶**せる青少年は**速**かに本書を讀んで**志望**を意の如く**達**せよ

△生存競爭の激しくなるに連れ、獨立自營の道愈々困難を加へ、世間有爲の青少年諸君が徒らに遠大の志望を抱きて陋巷に蟄居しつゝあるを慨し如何にせばよく資本なくして實業家たり事業家たるを得べきか、如何にせば金滿家と同じく社會に介在して縱橫に其の敏腕を振ひ、志望を遂するを得べきか、如何にせば思ふが儘に活動し赤手にしてよく巨大の資金を得べきか等の問題を分ち青少年に必要なる東西古今の實際的成功の根源を究め、百五十項に區分して丁寧親切に指導せる良書なり請ふ近日製本出來の上は速に購讀せられんことを

發兌元　東京神田旅籠町一丁目　文光堂　（振替口座東京一九五五五）

大賣捌　東京堂○東海堂○北隆館○至誠堂○上田屋○良明堂○大洋堂外書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

作文之最良材

女子文壇社編輯局撰

女子懸賞文集 第二

●中判五百頁 特賣價金貳拾錢 郵稅六錢

懸賞文集 文壇の光

●大判二百四十頁 特賣價金拾錢 郵稅一錢五厘

（各々殘僅少なり賣切れると絶版す）

世に作文書多しと雖も、妙齡花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東宮侍講本居豐穎先生題詠、文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌　國學院學士小森松風君編

美文作法

●大判二百卅頁 特賣價金貳拾錢 郵稅四錢

殘本僅少賣切れると絶版す

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者 中村木公君著

實地精査

女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入

特賣價拾五錢 郵稅四錢

殘本僅少賣切れると絶版す

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

東京市京橋區大鋸町十三番地　女子文壇社出版　（振替口座東京第壹七貳九番）　賣捌 全國書店

女子文壇 第一 第二 第三 增刊 （好評嘖々）

新美文

全一册美裝
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

口繪 入選作家十二人 寫眞 及石版彩色 樂翠三隅筆 密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百様の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

附錄

◎小寒日記……薄田泣菫
◎裏の家……吉江孤雁
◎憧憬……小川未明
◎一轉機……高須梅溪
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火葉……澤村胡夷

短篇小說

全二百卅頁 美裝 當選作家十一人 肖像 原色版

定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

懸賞傑作

◎破疊……秋葉淸子
◎女客……加藤貞子
◎町の出水……赤崎愛子
◎桃代……佐藤增子
◎朝顔……吉田駒子

其他美文、書簡文、新躰詩、日記文、和歌、俳句、論文、小說總評等豐富滿載

女子名文 新作家



口繪 原色名畫頗鮮麗 入選作者十七人 寫眞光澤紙密刷

全一册美裝
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

若き女子が大懸賞應募の小說、美文、詩歌併の文藝な興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

附錄

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

東京市京橋大鋸町十二番地
女子文壇社出版
（振替口座東京第壹七貳九番）
賣捌 全國書店

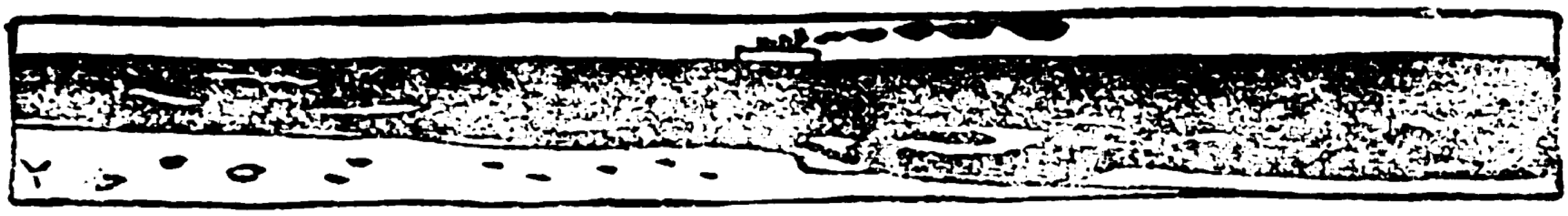


女子文壇

第六年第貳號

明治四十三年二月一日發行

露といふも草の名　茗荷といふもくさの名
ふきじざいとくありて　めうがあらせたまへや
春の花の琴曲　花風樂に柳花苑
柳花苑の鶯は　おなじ曲をさへずる
月の前のしらべは　夜寒を告ぐる秋かぜ
雲井の雁がねは　琴柱に落つるこゑ〳〵
長生殿のうちには　春秋を留めり
不老門の前には　月の影遲し
弘徽殿の細殿に　たゝずむはたれ〳〵
朧月夜の内侍の督　光源氏の大將
誰そや此の夜中に　さいたる門をたゝくは
敲くともよもあけじ　宵の約束なければ
七尺の屛風も　躍らばなどか超えざらん
羅綾の袂も　引かばなどかきらざらん



歸郷

水野仙子

空鼻を啜りながら、藤屋の主人は豆洋燈に燐寸を擦つて、チヤキ〳〵と燧石を切つた。

ザアッと水を打ち撒ける音、バケツの把つ手が倒れて、ガラン〳〵と鳴つた。それすら妙にあたりに響いた。朝は人の心も心の奥まで靜かである。

流れる間に流れるのを遮ぎられて、雜巾水は其處だけ黒く通りに凍つた。絞られたまゝに未だ湯氣の殘つて居る雜巾とバケツを下げて、頭髮の延びた番頭は、通りの庭を薄暗い勝手と店の間の暖簾を分けた。ふと大根の實らしい味噌汁のにほひが鼻を衝く。

「おかみ樣　戸矢部さんが中氣になりやしたと！」

容易ならぬといふやうに聲が重い。

「なにや、戸矢部さんが中氣になつた……」

「はア、今小林さんが寄つてさう云つて去ぎやした」

「おや〳〵まづ」

勝手元で働いて居た内儀さんは、板の間につつ立つて赤くなつた手を一巾半の前掛けで拭いて居る。

「どうしつぺまづ、可哀いさうになア」



「なんても昨日俄に倒れたんだとかつて云ひやすけ、手も腰も利かなくなつたんだつて……」

「うゝむ」

内儀さんは爐傍に膝をついて居去つた褄を繕つた。

揚手拭ひの顔にはつと赤く灯影がさして、チラ〳〵と小さな炎が瞳に動いた。バケツを風呂場に置いて來て、番頭は圍爐裏の火に足の爪先を炙つた。竹筒の附木入れを結ひつけた煤けた自在鍵に、一升焚きの鍋が稍々肩を曲げて、味噌汁がぐら〳〵と煮えくりかへつて居る。

「何や……」

ふと小耳に挾んで此家の老母が口を入れた。佛壇に線香を立てゝ、鉦の音を澄まして、暫く手を合せて瞑目して居る。

「戸矢部さんがどうしたつて」

主人は拍手を納めて、煙管を持つて、焚き落しのうづ高く盛られた火鉢の前に座つた。

「戸矢部さんが中氣になつたとい、昨日俄にだつて」

「ほゝう、戸矢部さんがな……成る程そらア困る」

「戸矢部さんが中氣になつたや」

老母は驚いたやうに言葉の尻をあげて、長火鉢の横座の薄い蒲團の上に座つた。

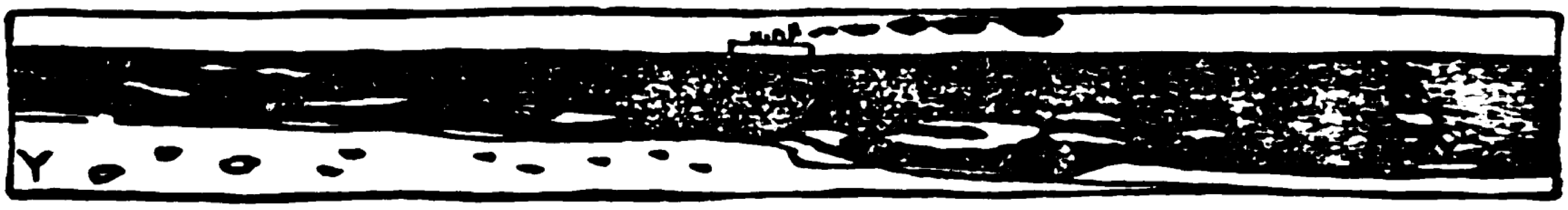
「中氣とは思ひがけなかつたな、一躰あんな人がなんのかなア」

「どうして喰ふべ、これから先」

「さうれな、仲間うちてども喰はして置くより外あるまいわ。何にしても大變なことになつたわい」



「小林さんが澁して去ぎやしたつけ、昨日も今日も休業だつて……必と伺てせう、代り番こに行つて世話してやつてるんでせう」
「いやみんなもなか〳〵大がいてねえわい、第一出商れなくちやなア」
「可憐いさうに」
「一躰戸矢部さんの故郷は何國なんだ」
「茨城、たしかさうだと思ひやしたね、なァになんても若いうちに家を飛び出したまゝ音信不通になつて居て、先方では生きてるのか死んだものか知らないで居る位なんです。」
「こんなことになんなけりやいゝがと思つてたんだのに、此頃は目もよつぽど惡るくなつてたしね、家の前を通り越して八幡町角あたりから引つかへして來ることなどがあつたんだもの」
「何にしてもとんだことになつたもんだ」
石川町通ひの馬車が、朝の町に浸み込むやうなラッパを吹いて、勢よく驅けて通つた。
「お卷、お卷、早くお汁鍋を下してくつりよ、煮つまるかも知れないぞ」
妹娘は張り切れさうな頰を赤くして、丸々とした手でやがてお膳を運んだ。釜の鍔には吹いたあとの糊がこびりついて居る。味噌の泡が岸によせて干乾びたお汁鍋には蒸氣が熾に騰つた。
高窓の汚れた硝子から、隣りの屋根の消え殘つた雪が汚く覗いて居る。
佛壇の線香は燃え盡きようとして、細い煙りは花立ての、埃の見える南天の葉の間をさまよつた。
鍋から釜から椀から、白い蒸氣がゆらめき騰つて、汁を啜る音が暫く聞こえた。
〽とうんとん〳〵唐辛の子――



七色合せた山椒の子――の子

イエ――甘い辛いはお好み次第

學校へゆく子供の足音が續いた。

終宵鼠が荒れて居た。時には目の前てすら丸い背中を鍋の蓋の上に現はして平氣な彼等は、闇には殊更人を恐れなかつた。枕許を掠めたと思ふと足の上を渡り越して、恰度鬼事でもして居るやうに駈け廻る。

「畜生！」と闇に苦笑しながら、すわ〳〵する肩に纏つたものを引き擔ぐと、古毛布はたわいもなく腕にゆすりあがつて、足袋を逃れた脛に冷え〳〵と夜氣が觸る。嚙られて惜しいものもなければ、それを苦にして叱る必要もない。煩いと逐ふにはあまりに一人は淋しいやうな氣もした。松葉の燻る爐傍に胡座をかいて、粥を啜る朝から、カタコトと尾の長い奴が現はれて、人を馬鹿にしたやうな恐れるやうな、丸い黒い小さな目から、曾つて抱いた女の一人の名を思ひ出すやうなこともなくなつてからは、彼等の輕い足拍子は、眠られぬ時覺めた時の、たゞ一つの話し對手である。

ふと覺める。音もない。ぞく〳〵する體から、鼻の先の冷たさはまた格別、瞬いても〳〵際限なく闇は續いて居る。風の音――遠く――暗い野の遠い果てには黒い濤が荒れて居る。荒れて狂つて寄せて引いて、畝つて續く其濤の末また遠く、煙のやうな眞つ黒い雲がむく〳〵と漂ふて居る――カタカタ〳〵と忍びやかに可愛い奴の惡戲、と思つた時ははつきりと我にかへつて居る。海などゝは思ひも及ばぬ山國の、野でもない小さな町の一隅に、破屋でも九尺二間は闇を劃つて居るのだ。足そくの字にして縮めた體には襤褸が觸れて居り、下には破れ疊が一枚敷かつてある。其下には床がある。それか



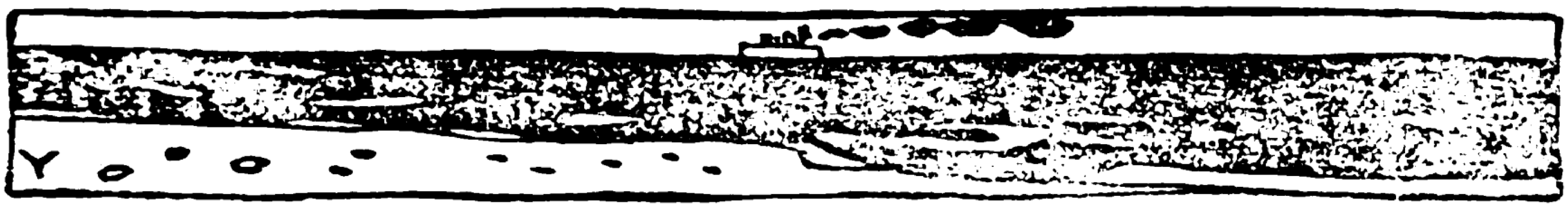
らが地だ。まだ〳〵上には屋根もある。右の手の方は入口の障子で、左は壁の崩れた押入れ、頭に向いては大小を張つて落ちるのを押へた壁が圍み、足に續いては壁一重隔てゝ仕事師夫婦が二人の子供を挾んで寢て居る。幾時か知らん――一番鷄がないた。さて今日は幾日だつたか――十五日に保土原を廻つてからなんでも四五日は經つた。十二月か、雪が降る雪が積る、辷る、凍る、えゝ寒い〳〵。かうして目が冴え切つて、仕方なしに起き出して、落葉を焚べて煙草をふかした曉もあつた。

寒氣がしん〳〵と體にとほつた。動けば風が潜るので、凝乎として居るうちに、下になつた手が痺れ出した。見定めてそれかとほんのり見える障戸の白むのが待ち遠しい。思ひ出すまい〳〵と昔を葬るのに苦心したのも今は昔となつた。思ひ出たとてそれが今の吾が身に辛くもなければ、たゞもう一日〳〵の遣り繰りにさへ苦心すれば事足りる身である。過ぎ去つたことや明後日のことを考へるのは贅澤な話である。起きなければならぬ、喰べなければならぬ、商ひに出なければならぬ、そのならぬによつて體は操られて居るに過ぎないのだ。

松葉の殘り少なかつたのが少し心細かつた。むら〳〵と靡く煙りの中に、高目の鐵瓶を下さうとした時、鍵にかけた手が硬張つて動かなかつた。はてと思つてうむと力を入れた。と同時に千本の手でもつて突かれたやうに我にもなく前にのめつた。しゆうとたつた灰神樂の中に「失つた！」と言はうとした口も重かつた。大變と思ふ間も遲く縋りあがらうと焦慮つても〳〵腰も足も手も働きを失つて踠けば踠くだけ胸は裂れるやうに動悸を打つた。人を呼ぶにも口が利けぬ――觀念して強いて心を落ち付けた時、鐵瓶の湯が覆つてふす〳〵と其處から臭い煙りだけがのぼつて居るのを見た。ほうと溜息をついてあまりの思ひがけなさに暫く惘然となつた。



ぎし／＼／＼と荷を擔いて通つたのは同業の小林と云ふ男、
「お早よう！」と外から聲をかけて、
「まだか——戸矢部さん」と其まゝ行き過ぎようとしたが、ふと呻くやうな叫ぶやうな聲が耳にいつたので、
「如何したい、今日は」と荷を下してがらり戸をあけた。
啞のやうな精一ぱいの聲を絞つて、爐の中に黑いものが動搖いた。
「如何した／＼戸矢部さん」男は草鞋のまゝ床に驅けあがつた。
「…………」刺子の手袋を嵌めたまゝの手に抱き起されてすつかり頭巾て、包んだ顏を、「大變なことになつた！」と言つた積りだが、齒痒いや自分にもたどれろ／＼と聞こえた。
町には洋燈店が二軒あつた。一軒を富田屋と云つて店の新らしい方を藤屋といつた。その擔ぎ商ひから身を起して今のやうな店にした富田屋の方には、子分といふやうな賣子があつて、市日の町の中や、三四里四方の近在に荷を擔いで賣りに出て居た。總領の娘に婿が來てから、久しく閉ぢて置いた蔀をあげた藤屋には馴染もなければまだ其頃は品も揃はなかつた。しかし若者夫婦が心を合せて精を出した結果は、二三年のうちにちよく／＼卸に運ぶ小店なども二三軒出來、外から入り込んだ行商や富田屋に借を拵へた賣子などが、朝の出掛けや夕方の歸途などに、店の前に荷を下して不足な品を補つて行くやうになつた。其頃から藤屋ては戸矢部といふ名を知つた。一年ばかり富田屋の賣子をして居たとのことであるが、其時は別に一軒を持つて、新らしく入り込んだ賣子を二人ばかり、一緒にといふよりは寧ろ使ふやうにして同じ鍋の飯を喰つて居た。其二人からちよく／＼氣風者といふ言葉を



耳にした。白眼勝ちな目、それを厚く蔽ふた瞼の間に深く刻んだ皺、說き出すやうに言葉は低く靜かだつたが、負けるのは嫌ひ、知らないといふのは恥辱のやうに、なんでも人の言葉を打ち消した。恐らくまたなんでも知らないといふのはなかつた。至るところの風土や習慣もよく語つた。確に東京辯て市中のことは見るがやうに語るので、「東京にお生れですか」と聞くと、「いゝ生れたのは下谷邊の近在ですが……」と言つた。

一年と續かず三人は散々になつた。一人は女房を持つて土地に居坐り、一人はまた旅から旅と渡つて行つた。戸矢部はこれも女を引き入れた、郷社の鳥居の前に小さな店を出した。其處で二人女が稼つた。一生を通じて行末を考へたのはたゞ此一二年の間であつた、少しの貯へが出來たところからふと其氣になつて、寄るともなく寄りついた島に、身を入れるだけの貝をつくらうとした。併し螺の廣い空巢に棲み馴れた僦房は、自分の棲家をつくる煩はしさに飽いて來た。氣の利かない醜い女は不用になつた。さうなると不思議なもので、喰べさせるものさへ惜しくなつて來る。減つたまゝに品物の殖えない棚に、目につく程埃が積つて、其時はもう女は居なかつた。仲間うちでは一番小淸潔として居た服裝がだん〳〵汚れて來た。さうして間もなく町の端づれの馬宿の馬小屋の、脇の小さな小屋に寐起きするやうになつた。

養子問題や何かで富田屋が混雜いて居るうちに、藤屋ではめつきり手を擴げて來た。富田屋の賣子と定つた者はなくなつて、仕入れ元の違ひから、打て一錢二錢の高下をわけて、大抵兩方へ出入りするやうになつた。藤屋で借りをこしらへては富田屋へ行き、富田屋に不義理をしては藤屋へ來る男もあつた。



そろ〳〵目が惡るくなり出したのは此頃、戸矢部は夕暮れまで一寸方角を迷ふことがあつた。梅毒性――のといふことは自分でも知つた。折も折、近年同業者が著しく殖えて、勢ひ商ひの高が減つて來たので、卸し元に借りをこしらへないのが上乘であつた。

また霜が降りて雪が降りて木枯が吹いた。一頻り漬け菜の葉が流れた里々の池や小川に氷が張つて壁に懸けた乾葉に霙が横ざまに吹きつける日なぞは、紙笠一枚にホヤ二三本位賣つて歸つて來る。道順の時には其足で藤屋へ寄つた。愛想のいゝ内儀さんは、歪になつた赤銅の十能に、焚き落しを山のやうに盛つて火鉢にあけてくれる。小僧の揃へる笠三四枚やホヤの半打位を、店先に下した荷に結ひ付けて、乏しい縞の財布から小錢を摑み出し、それを火鉢の脇に、指先でさすり分けながら並べてる、時には小僧に白銅か廿錢銀貨かを見分けて貰ふことがあつた。一日〳〵と目の惡るくなつて來るのがわかつた。飽かず火鉢に翳して居る手に、鼠の喰つたやうな手袋が篏まつて、掌や指の先が赤く覗いて居る。十二月だのにまだ袷せらしい、と思つて内儀は、取つて置いた老人の着古しや、襟卷の古いのなんぞを惠ぐんでやつた。譯のわかつた女、話の面白い人と思つて居るので、藤屋の内儀にかうされるのだけは喜んだ。たゞ店の小僧や、仲間の者なぞに、少しても馬鹿にしたやうな口を利かれると、顏色を惡るくして怒つたものだ。

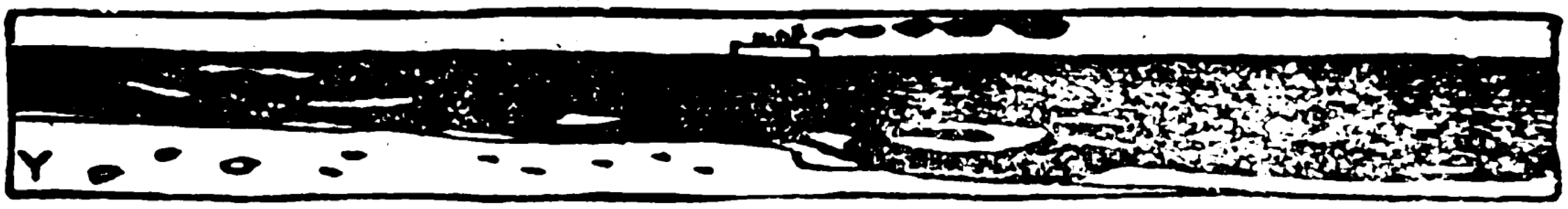
「今晩は」と潛りをあけて首が出る。照りかへしや硝子器の反射を集めて、宵から閉ち切つた店に滿ちて居た光りが、ぱつと重い臉を射た。「よいお晩！」と交つた聲が應じる。パチ〳〵〳〵と算盤の球が響いた。來る年の大小を刷るために、繪刷物の見本をひらいて、あれのこれのと品評をして居た番頭の間に割り込んで、燒け爛れた鐵火鉢の緣から周章てゝ手を放す。仕入れの用はそつち退けに、か



うしていつもゆつくりと搆へ込んで、帳合ひをやつて居る夫婦が、時々合槌を打つたり話し掛けたりするのを對手に、それを樂しみにいろ〳〵な昔を物語つた。若い時に服役した工兵の作業演習の時の地雷火敷設、大隊長の目にとまつて褒狀を貰つたことや、その時の怪我の跡だといつて額の傷を見せた。此道にまだ經驗の淺い夫婦に、ホヤ製造所の内部の話もして聞かせた。會津地方を筆尾をして歩いて居た時に、或る田舍の警部と商ひの上から喧嘩をして拘留され、原籍照會の結果、欠席裁判一年半の宣告を受けた時の話は、恰度壯士劇でも見るやうに人々の手を握らせた。牢獄の中のことも面白く委しく物語つた。「人の見ることの出來ない處まで見て來ました。いゝ經驗です」と笑つて、自分も其夜は自分の話に醉つて歸つて行つた、驅け出した餘勢が停止ることが出來ないやうに、其折は西の國の港に隱て居て、毎日の新聞で事情を知り乍ら、つひに日清事件の豫備の召集に應じなかつたのて。

どうかして幾何でも前の借に金を入れた時などは、内儀は錢櫃をがら〳〵いはせて、ポストの脇の今川燒などを奢つた。小僧の居眠りを叱る聲に氣がついて、やう〳〵品を穴のあいた麻風呂敷に包んて歸つて行く、火氣に馴れた顏に、耳を切るやうな風は鋭く刺した。ところ〳〵の檐を占めて居る今川燒きの角燈をぼんやりと眺めて暗い路地から暗い小屋へ這入り、手探りに燐寸を擦つてそのまゝ冷たい床に潜り込む。サカ〳〵と霙を踏んて、隣りの馬は時々戸板を蹴つた。

茨城縣猿島郡クヅカケ村戸矢部長太、辛じてこれだけ聞き得た。引きつられるやうな口を廻していろ〳〵といふのを判斷するのはなか〳〵容易てなかつた。澤田といふ、擔ぎ商ひをしながら小さな店も持つて居る男が、早速矢立てを拔いて手紙を書いた。今までの生活狀態から發病當時のこと行商連中が毎日一人づゝ交代に看護をして居ることも書き添へて、それに行商連五人の名をづらりと書い



た。クヅカケ村の本字が如何してもわからなかつたので、表書にも假名で書いた。永年放浪して居たことゝて、兄か親か其宛名の人の生死も覺束ない話だといふ者があつて、受取人がなかつた時には慥かに戻つて來るやうにとそれを書留にした。

これ等の人達の中には、元も子もなくただ其日〳〵の賣り揚げによつて喰つて行くといふやうな人もあつたので、一日を休んで猶其上一人の扶養を分擔たうとするのはなか〳〵苦しいことであつた。總代をたてゝ願つて來たので、富田屋でも藤屋でも快く幾分かを補助してやつた。かうして六日ばかり經つたけれども、クヅカケ村からは何の音沙汰もなく、若しやと思つた人も來ず、書留もまた戻つて來なかつた。連中はまた集つた。手紙の戻つて來ないのを見ると、兎に角家は其處にあるに違ひないといふことになつて、若しそれでも反響がなかつたならば、その時は役場に願ひ出るなりどうなりとて、一決して電報を打つた。電文に就てもまち〳〵な説が出たが、遂に「キトクムカヘニコイ」となつた。

中一日置いて返信が屆いた。そらとばかりまだ糊の乾ない印紙を切つて見ると、「ユカレヌシンデモカマハヌ」人々は顏を見合した。

三たび連中は澤田の家に會議を開いた。恢復の見込みのないものを、いつまでもかうして置いては唯一人の爲めに他人數が干上らなければならぬ。返信が打てる位ならば滿更喰ふに困るやうな生活でもあるまい、戸矢部さんは讀み書きも可なりに出來たのを見ても、家は相當に暮して居るに違ひないから人々は思つて、「シンデモカマハヌ」といふ無慈悲な言葉も、家を飛び出したまゝ十數年間といふもの、どんな事情があつたにしろ、一度の音信もしなかつたことに對して、當然の仕打ちとは思はな



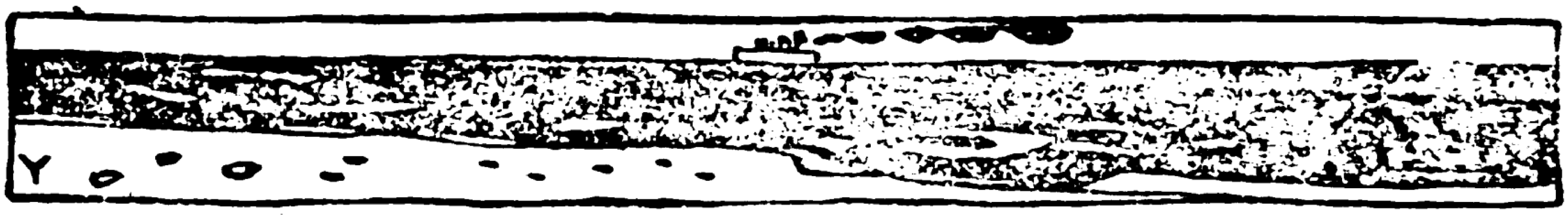
いまでも、さして苛酷であるとは思はなかつた。送りつけられたなら籍のあるものを、まさか受け取らないといふやうなことはあるまい、その時には警察もある。かう理をたてゝ送りつけることに相談が決つた。

「喜びなんしよ戸矢部さん、茨城から電報が來たぞい、かうだ、ユカレヌツレテコイつていふんだ——ないまア貴方も安心しなんしよ」元氣な聲で小林といふ男があがつて來た。彼は殊更に躁いで見せた。歸るのは厭だと駄々をこねやしないかと、人々はそればかり氣遣つたのだが、たゞ利かぬ手を内懷にしたまゝ、首を襟に埋めて默然として居た。涙が一つほろりと膝に染みたのを小林は見て居た。自分達の謀計を見扳いて居るのではないかとも思はれたが、兎に角大人しく云ふことを聞いたのを幸ひにして、其夜から二人づゝ爐に火を燃やして番をした。若しや舌でも嚙み切られてはと思つたからで。

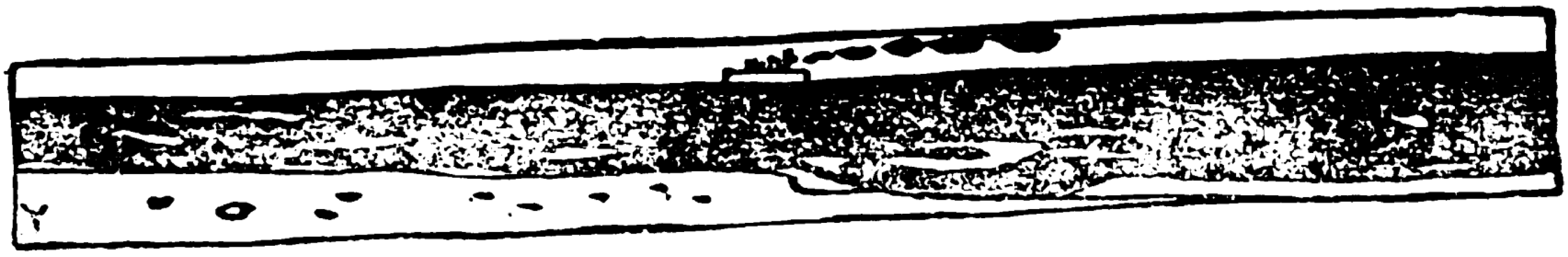
藤屋の内儀と妹娘とは、お高祖頭巾と肩掛けにくるまつて外に出た。二三日雪のないかはり空風が吹き續いて、枯れたやうな空氣に下駄の音が高く響いた。閉ぢ籠つた夜の街に眠つたやうな電柱が並んで、ところ／＼の軒下に荷車が淋しく橫はつて居る。きそばの提燈、七福パン屋の屋臺店、金鍔の燒ける匂ひが鼻をうつた。その前だけ燈のさして居る硝子戶の菓子店へ寄つて、二人は少しばかりブツキリ飴を買つた。

「此處だ／＼必と」と娘は先にたつて溝板をがたつかせた。二三軒先の鍛治屋に鐵槌の音がして、火花が時々闇に散つて居る。家と家の間の暗い間隙を荒土の壁に傳はつて進むと、畑らしい空地に三棟の長家の灯影が見える。

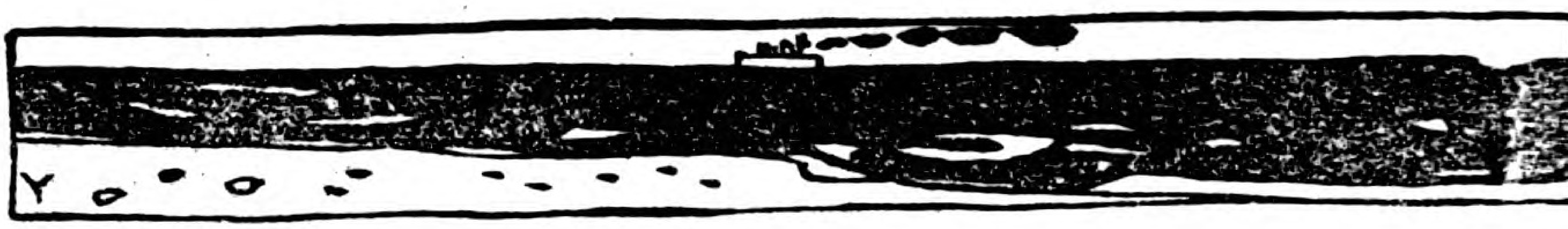
「此處だ／＼」足塲の惡るい石ころ道に躓きながら來て、端の家に聞き馴れた話し聲を聞いた。



「今晩は」
爐の火に胡座をかいて居た三人の男は急いで居住居を直した。
「やつこれはようこそ」
娘は提灯を消しは消したもの丶、下駄の散らかつて居る庭に足を踏み入れたま丶暫く上るのを躊躇つた。
「は丶丶まアおあんがんなんしよつていつても此通りだからなんだけれど、兎に角まアあがつておくんなんしよ」
莚の敷かつてないとこには床が見え。床の上では新聞紙の屑や板切れなぞが散つて居る。炭俵が一俵と手桶が一つ、隅の方に疊が一疊あつて、其上に座つて居る戸矢部の脇に汚い長火鉢が見えるだけ、丸るでがらくたを、片づけた小屋のやうだと思つた。爐の火だけは熾に起こつて居る。實際それてなくてはやり切れないからて、莚を通して床の下から風がすわ／＼する。馬小屋が夏の暴風に潰れてから、笑つて語つた馬の同居から、屋賃の出る此長家にうつたのだが、これでも家かと思はれる程荒んて居る。
「オ丶寒い／＼、耳が切れさうだ」といひ乍らまた一人這入つて來た。
「やお内儀さん」とあがらうとするのを一人が、
「どうした藤さん、あの澤田さんは」
「うん隣りに居る。呼んで來つか」
「い丶や此處でも聞こえるだろ、おう、澤田さん――」



「おう」――
「なに此隣家の人がねお內儀さん、今まで仲善く暮して居たんだから、お名殘りに俺が送つて行つてやるといふんでね、恰度いゝ幸ひだと思つてさうすることに決めやした。ほんとなら我々が一人隨いていけばいゝんだけれど、何を申すにも御存じの通り我々だつても稼なけりやあ喰えない身分なんだし……また……」
「いやさうですともい、これだけ屆かせるのだつてなか／＼貴方容易なことでないんだから……そこは貴方その位のことは戶矢部さんにだつて不性して貰はなけりやならないわい」
「は、まアそれて生中見も知らぬ人に賴むよりはと思ひやしてね、何しろ先方のことを見屆けて貰はなけりやなりやせんからね」
「なんだ油がなくなつたんでねえか、不景氣な洋燈だなア」澤田が這入つて來た。
「おゝお內儀さんお寒いのによく……なんともまだお禮にもあがりやせんで……どうも此度はとんだ御厄介をかけまして相澄みやせん、お陰樣でどうかかうか片がついて、今晩いよ／＼出發せることになりやしたから……」
「いや皆樣もなか／＼お骨折でしたねえ」
「戶矢部さんもいくらか名殘りが惜しごせう、聞いてみたら十二年になるつていひやすからね」
ぽつちりとして居た二分心の洋燈が、吸ひ込まれるやうにうつすらと暗くなつて來る。ぽつ／＼と呟いた。
「油がねんだ／＼」と澤田は振つてみて、



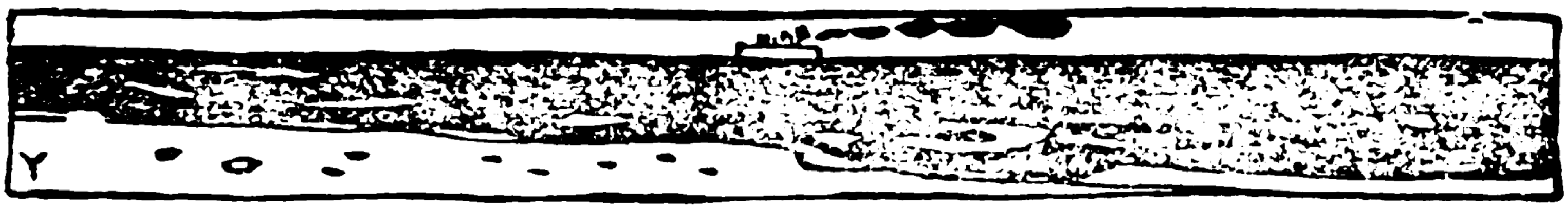
「困つたな、買つて來なくちやなんね、錢はすつかりあれに入れつちまつたしと……貴方一寸先刻の財布を……」と戸矢部の懷に手を入れようとするのを「あ、いゝかいてゝから出しときなんしよ、一合幾何だい、二錢あつたら澤山だつぱい」と內儀は財布から銅貨を摑み出した。



「さうですけ、すみやせんね何だ彼だつて……それぢやあ……
…私も財布を置いて來てしまつたんだから」

「すみませんね、どら俺が一つ行つて來つか、此處らで石油を賣つてるのは何家だ」と一人の男が起つた。

「さうだな、あさうだ／＼あの婆さま家て賣つてらア」



「よしきた！」男は洋燈を其まゝ下げて身輕に出て行つた。

「あの婆アさまつてば先刻、いよ／＼今夜はお別れがいつてもう／＼泣いてるんだ——」

「戸矢部さんも此間まで水を汲んでやつたり何かしてそりやア仲がよかつたんだぜ、二人とも風變り者だから氣性が合つてたんだなア」爐傍を動かない二人は小聲にこんなことを話し出した。

「これはね、家の老人の下つ着だつたんだけれど、寒さ凌ぎにと思つてない、なアに隨分極くなつたんだけれどそれでも下さ着ればわからないから……それからこれは少しばかりだげつと餞別のお印ばかり、何か喰べたいものでも買つておくんなんしよ、それからこれはお巻が滊車の中でゞも喰べるようにつて買つて來たんだから……」と内儀は風呂敷を開いて並べたてた。

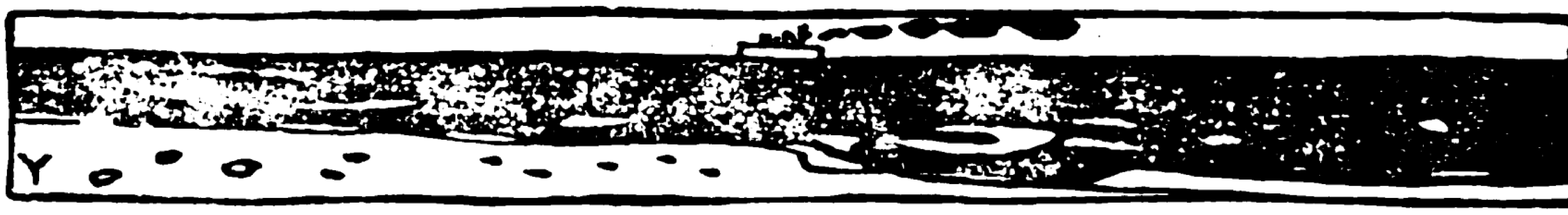
「お内儀さま、さう度々して頂いては恐れ入りやす、先度のことでさへお氣の毒に思つてんですのに……」

「いゝえ碌なことは出來ないんだから……それから今夜お名殘りに五郎を磯の停車場まで送らせるから、あそこを通る時に一寸外から聲をかけておくんなんしよ」

「戸矢部は始終うつむいて居たが、目をしばだたいて何やらそろ／＼云つた。品代の貸しが一圓小ばしあるのを、拂ひもしずに其上種々貰つては、と云ふものらしいと見て取つて、

「なんの貴方そんなことは……」と内儀は言ひ消した。澤田は留めるのを聞かず財布から紙綴の帳面を出して餞別の高を書き入れた。帳面には戸矢部千治病氣歸國に付寄附帳と金釘流に書かれて居る脇に年月日と國の名町の名を書いて洋燈行商連中としてあつた。

「何も無いやうてもそれても屑屋に拂つたのが二圓と三十八錢ばかりになりやした、それから洋燈の



品が少しばかりあつたのは私が引受けることにしてその代が三圓二十五錢、富田屋さんから御餞別として金五十錢外に古シャツ一枚と足袋一足、一圓が私の分として五十錢が小林春吉、同じく和田瀧太郎、三十錢が齋藤貞藏、同じく三十錢也伊勢藤次郎、二十錢が佐野與一、これは近所に居る篩屋さんてす、十五錢と手拭一本坂本おせきさん、これは此家の大屋のおばあさんて……えゝと金員が〆めて九圓と〇八錢也とかうてすな、そのうち汽車賃二人分が三圓五十錢として、途中雜費旁一泊……どうしても一泊はしなけりやなりやせんからな、えゝ一泊費要旁途中雜費が三圓と充分に見積りやした、それに付添人の手當てとして……友達甲斐に送つて行つてくれるといふんてすけれど、まア相當な日傭二日分の七十錢をやることに決めて、差引二圓足らずがまあ戸矢部さんの懷に殘る勘定になりやす。お内儀樣まあこれて差支ありやすまいね」

澤田はかう讀みあげた。

「いや皆樣のお骨折て戸矢部さんも無事に歸られやすわい、御緣があつたらまた會ひやすべ、それぢやア戸矢部さん、お體を大切にしてまた壯健になつてこつちの方へおいんなんしよ」

「さうだ〳〵壯健になつてまた來て貰はなくつちやなんね、なア戸矢部さん」と一人が景氣をつけた。

「九時二十分發てすね、そんぢやらそん時一寸言葉をかけてくれるように……五郎と磯に仕度をさせて置くから、ぢやアまア皆樣よろしくお賴の申しやす、戸矢部さんそんぢやら――」

さつと勢ひ込んて來た風に、入れたばかりの提灯の火を取られた。深い暗碧の空に、星が碎けて散れて居る。

大屋の老婆は戸口まて出て車の影を見送つた。風呂敷に包んだ溲瓶を蹴込みに置いて、膝の上には細かなものを纒めた風呂敷包みを乘せた。

同業者五人に篩屋さんも交じつて、富田屋の養子と藤屋の若い者二人の都合九人は、各手に毛布や何かをかぶつて町端れの停車場に向つた。

花なる人の戀しとて

横瀬夜雨

千代もと我れは祈れども
母は子ゆゑに死なんといふ
世にひとりなる母を除きて
わが有つ物はあらじとおもうに

――花守――

曉方からの雨でまた候足が冷たくなり縮めても腹へおつけても矢はりづき〳〵痛い、ゆうべから左枕のまゝ動かぬから胸も切ない。不圖眼を明くと床のかけ物がうすらに明く見えて、下に小さく切つた紙きれが散らけてゐる。あんなとこまで放つたんだらうかと今さらふしぎがる、枕のわきにもシーツのはしにも狼藉として亂れてゐて。

かさかさと小さな音を踏んで猫が來た、納戸へ行けこらと一つ喰はせてまた頭を載せると枕のはしにもまた有つた、欄間ごしの覺束なき光にかざして見る裂けぬのは齒で喰ひ裂いたし、ナイフか鋏で斷つたのとは違つて多く横筋交に裂けてるから、手にとるもとるも皆よめにくい。これだけにしておけばのちの患はない起きたら通草の籠に詰めようと思つた。

新しき年は來た、りう子は××になつた筈だ、くに子は×××、はゝき木はきく子は、人は皆花やかなる日を迎へて花やかなる衣をかざつたてあらう、ひとりわれよ、生くる命のせんもなく今年もまたひとり眼が覺めて。

覺めてまづ何をか見る、壁の色の黄と障子の棧のくろきと、一生を通じてわが朝に見る色はこれあるのみ。しかたが無い。

彼のプライド多き子がちかひのふみに垂らした血すら處女の秘密の一つてあつた、名を孝行に假りて新しき人に嫁いだのはその秋である。

女を信じたのが愚であつた。孤獨十年の苦に泣かん

よりは、双棲一年の樂を享けんことをおもひ、偽ならざる眞をおもひほろびざる靈をおもひて奇蹟をつくらうとしたのが惡かつた、現實はつひに人を禽獸たらしめずば止まず彼女にはかつて美があつた。

太陽は惡人をも照らすとセチカは説く生きながら葬られたる墓を出て、明かなる日に當らうとはもう爲まい、日も月も星もはじめから照つてはゐなかつた。



つかまつて立つて見なさい、帯を締めてやるからと母が言ふ、雨は止みませんかときくと、えまだといふ、手と一しよにつかまつてる肩が動くので重心がとりにくく、つい膝の上へ重なつてへたばつてしまつた。

それでも笑ひながら、締めてくれて、足袋はといふから、何ひとりで穿けますと斷つて散らかした紙の中から片つぽ、かい巻の下から片ッぽと探し出してやつと穿く、ゴムだからつるりと突つこめばいゝのだ。

雨だとまた終日苦しまねばならぬ、元日から、つまらないと思ひながら、紙きれを片よせて机の前へすわる。戸は行きしなに母が明けた。水の如き冷氣寢起きの肌に泌みて眼鏡の蔓が冷たかつた。

羽根布團を折つて右の痛い腰へ當てようとすると中からしわだらけの「冷涙記」が出た。しまひの方をよみかへす、

落葉の風に吹かるる。
寂しらを笠に受けつつ、
旅立つかかよわき君よ。
送りてよろぼふ足の
危ふさは誰か助くる。
頬にのぼる寂しの色は
迷ひ出し夕の空の
雲に似てはてなく暗し。
雲よかへれ、わが懷に。
わが胸に乳房の玉の

かがやきは君ぞ知るなる。（ゆ）

こんな女もあつたと書いてある。金糸の縫をした紅い小さな片袖に添へてあつたと書いてある。

今夜も月は輝いてをります、ああ別世界。

歸つたのがゆめのようです。

現實に生きていらつしやるうちは、月もごらんになりませう、私をお思ひになる時もございませう、苦痛は死によつてのがれられます。その死が許されないなら狂がある、けれどそれまでにはもつと苦みを經なければならないのでせう。

あなたは私より一むかしも長くその苦みをつゞけていらした、死は生きるよりは易くらくてございますその上に暗い長い前途と、苦痛多き現實と、傷められたお心とをおもへば何の爲に生きていらしたかわからない。

が、私が十七十八十九、せめて二十の年を數へるまでは、草にかくれてくださいますな。

一日一日と新しいとに胸を跳らせつつ、だん〳〵世

の中に隱れていつても私はけつして、あなたから離れませぬ。
今、はても知れなかつた迷ひの道も終りに近づいたように思はれます、絶望の底よりたゞ高い天が仰がれます、そしてやがて來る日に共によろこんで下すたら……（K）

狂せよ、われ君の爲に祝せん、死ね、君ははじめて安からんと言ふと書いてある。『神あり、淺間の火を西に雨して佐久の平を燒きつくす日あらん』と書いてある。『十年の後飽海の濱をさまよひて淨福寺の山門にわれこゝに來ると題するものあらん』と書いてある。『冷涙記こゝに終る』と書いてある。
花なる人のこひしとて、月に泣いたはゆめなるもの、つらけれど、紅葉あやなすあしほろの、ふもとに今はかへらうよ。
大洗の濤は荒い。舟一つ二つ濤に隱るる沖合に春の燕の翻り飛ぶを認めて。眉美き姉の振の袖を想像した、その夏十五て嫁いだ姉は海を見に來なかつたので追ひ捕へたがうなをハンケチに包み母と共に歸つたのは筑波の西なる父の家てあつた。
騎兵の馬になつた子の背に跨つて砂埃を蹴立てて組討をする中間にも入らず、楢の大木の下に集つて楢の子てめどいちをやる群にもまじらず、庭には鐘樓が殘つてゐた、それに登ると人豆の如き一帶の稻田を隔てて、壁の白き瓦の碧なる、森の外れの我が家！群を拔いて高い家根は學校の庭からもそれと指さるるので。瘤々した百日紅の幹をめぐりては母を思つてゐた。
村の東に土手がある、その堤の内側には椢と榛の大きな林が立ち續いてゐる。むかしは狐棲み雉鳴いて川沿のひたひた水には鳥の糞の青いのが見られた。わが詩ごゝろは早く堤の草に培はれ、わが涙は多く林の鳥に誘はれた。木爪の子の酸つぱいのも採つて喰つた白楊の幹をよぢて鬼虫（かぶとむし）も捉へて見た。が母はわが心の主てあつた。
本尾秋遊の死んだ日だ、雲見ゆる土手に上りて、水門の扉に凭りかゝり愁然として『行けども行けども歸

らざる人を送りて野は青き」と歌うたとき、河井醉茗伊良子清白の二人とおなじ堤に立ち、御光に似たる夕の光の筑波山をめぐるにあひ、朧氣ならぬ墓の影を見た時、なほ母はわが心の主であつた。……母は終に、心の宿を失ひてひとり家に歸れる子を見たのである。

戀を戀して旅せし日は短かかつた。が、今醒めて何をおもひ、いねて何を夢みると問ふ人が有つたらそれは死尸に策つもの丶たぐひてある。

年三十にして母に介抱さるるつたなさも今は憾むまい、一度は湯殿の石だたみへ仰向に轉んで、頭を血だらけにし、一度は胸を撲ち、近く三度めて腰をぶつてから母の注意は造次にもわが身邊を離れずなつた、帯もしめてやると言ふから大人しくメて貰ふ、夜は壁を隔て丶寢るが時々見にも來る。

最後の慈愛！　あまんじて、最後の慈愛に浴していためる心を癒さう。

天地こ丶に新なり、母よ、兒は生くべし。

あ丶されど、雨の朝、雨の元旦。餅も無く屠蘇も無し。雨の中をもたらしたる賀状すべて二十三通。

拜啓。

新春また廻り來りてこ丶に一齡を加へ立派に中年男と相成申候。少き間は趣味も同じく境遇にも一致したる點多かりしかど、長ずるに隨ひ、四圍の狀況は二人の間をして漸く間隔あるに至らしめ申候。わが病める君を思ふの念は十年前の昔も十年後の今も徑庭無之、境遇の變遷が相互の消息を稀ならしめたるに過ぎず候。小生ゎ思はぬ病の爲殆一年を空しうし有形無形に大損害を招ぎ候、大戰の後を享けてさらに妻子を提げて、新なる戰場にのぞまざるべからず御あはれみ下さるべく候。

兄が過去一ケ年に精神上多大の修養を遂げられしとを疑はずと共に、複雜なる人生の迷宮中に超然として一個の蟬脫を完成せらる丶よう希望に堪へず、これ病める君が唯一無二の天職と存じ候。

四十三年一月一日

讀過涙落つ。

二十三通おほくは犬の繪が描いてある。中には二人半の子の親になつたとの報告を兼ねたのも有る。Tよりも來たいきなり二つに裂いたので、まあなぜだい、綺麗なのにと惜がつて、母がいふ。



伊良子暉造

もとのなかつぽの琴ちやん、今の小池主計大監夫人からも來た、夜雨君と書いてある。二人で葡萄を採らうとして熊ん蜂におびやかされた秋は十年の前になつた。

夢殿守より封書、告別を兼ねたる最後のたよりなり、ははき木と共に誰とか先生の歌の會に出ると書いてあ

る、やつぱり二人ながらお孃さんだつた。

Sよりバナナケーキ、『湖畔の悲歌』の講義がおしまひになつたお祝だとて贈らる。水戸て妹が自分が喰ひたいのて明けてくれ〳〵といぢめたとを思ひ出す。香だけは好きだ。

好一、學校からカバンと新聞とを一しよくたにぶらさげて歸る。くらくなるころ緣側の柱にもたれて雨雲を見た。

寂しきついたちはかくて暮れた。

夜、蜆汁二杯かへる。

湯に入るつもりて帶を解きかけたが手がかぢけて自由にならず腹立つてやめにした。

やんごと無きあたりに飼はるる犬がある、病づいて犬猫の病院に入つたが飯をくはぬ、氣の利いた男が赤毛布を腰に卷いて女官の風をして高杯に盛つて出したら喰べた、と『報知』にあると、榮さんが長火鉢の前て母に話してゐる。女官と見たのはまだしも客待ちのくるま引と睨んて吠えつかなかつたのがめつけものだ。

お才の話に越後にはかてめしとて、大根だ菜だといふ節々の青物を切り刻んて米と一しよに炊いて水をさし〳〵煮るといふから大牢の珍味てあらうと思つて、『草生水日記』の作者――お才と同鄕の早蕨に、聞いたら、宅てばヨークにだつて喰べさせませんとおこつて來た。富めるものは幸なるかな。

富めるものは幸なるかな。
願はくばわれに萬鎰の黃金を與へよ、われ我が死を購はむ。
然らずば、寶冠を造りて彼の女王の誇を有てる鳥を飼へる寺の子に捧げばや。さて冠の玉の中に金字もて唯一句ちりばめむ。
あなかしこ。女子を辱しめし者は女子なりしなり、娼婦は心は賣らずといひ、處女はみづから純潔を保ちたりと稱す。吁處女とは何ぞや。
わが唇に上る笑は冷なれど、わが母も亦女なるを思へば、奈何せん、わが淚のつねに熱き。

佛もむかしは凡夫なり。
われ等も終にはほとけなり。
いづれも佛性具せる身を
隔つるのみこそ悲しけれ。



抒情詩

森川葵村

一、

……

はら〳〵と
何時しかに朽葉に時雨れ、
思ひ寐の見果てぬ夢に
浸みてゆく冷き雫
吹きやみし凩の
なごりに鳴れる樋の水――
燥ぎし後の心のさびしさ……
言ひ知らぬ
狂暴のなやみに
心は追はれ、追はれて、
窪地に息づく
朽葉の胸に
浸みてゆく時雨の雫……

二、

急調の月光に、
霧は野を飛べり。
洪水のごと
高潮の音樂は白く流れて
闇く點ずる
沈音よ、――眠る木立の輪廓よ、
月光の嵐に
吹き散らふコスモスの
薄き肌は
銀色に刺されて傷む。
急調の月光に、
夢のごと淡き情緒は、
斷々に追はれ行く。

模樣としての自然

東京美術學校講師　島田佳矣

圖案上模樣を組織作成する方法を大別すれば、二樣の行き方がある。一は古代模樣先人の既に作りたる模樣を基礎として、その樣式を斟酌し、更に變化を與へる作り方にして、今一は、直接自然を模樣化すると云ふ方法である、此二方法は今も行はれつゝあるが、殊に近來は非常にこの自然物につきて變化する模樣が行はれ、それは恰度繪畫や彫刻の方面に於ける自然を寫生すると云ふ事が、重ぜられる樣になつたと同樣に、圖案の方にも同じ傾向に自然を模樣化し、圖案化すことが尊ばれる樣になつたのである。

元來圖案は、其の模樣を施す品物なり、その用途なりに適應する樣に裝飾する、即ち、應用的に美化するものであるから、同じ自然を美化すると云つても、繪畫や彫刻の自然を美化するのとは大に趣を異にしてゐる。そして自然物を模樣化するには種々の要件や要式があるのである。先づざつと話せば各國各時代に倣つて作ることもあれば、感應を專ら目的として特種の樣式を作り出すこともある。例へば我國で時代を揭げると、推古や天平時代の風格に倣ひ、或は藤原、鎌倉、東山、桃山、德川等の各時代により作ることがある。彼の先年三越などが、元祿模樣を作り出したり、桃山式を應用したり、光琳式によつたり、又白木屋が芦手模樣歌繪などを工夫したりして居る。即ちこれである。又支那各時代の模樣を基礎としたり、印度式に作り、又埃及、希臘、羅馬等の各國各時代の風尚によりて變化作用することがある。これを要するに模樣に關しては、前にも述べた如く、其品の用途と、施すべき物に適應すべきもので、隨つて模樣は線の作用によつて、人の感應を種々與へる。その物が嚴格だとか、優美だとか、高尚だとか、溫雅だとか、洒落だとかに見えるが如く、模樣は物と用途とによつて、各異つた感を與

へるものだから、自然と模樣化する場合に、此の嚴格優美、溫雅、洒落等の風尙に注意すべきてある。そしてこれらの感應は、模樣の配置と模樣に用ゐられる自然物の何たると、模樣の局部形式の作用とに基するのてある。

更に自然物を資料として模樣化することを云へば、模樣を直線的にくづすとか、曲線的にくづすとか、又はその自然物の變化方法を繁簡にしたりすることがある。これらは皆品物の種類、用途の如何に從つて、以上の各方法の何れかを撰んて自然物を變化するのもある。即ち、近來內外國共に圖案模樣の風潮は工藝の種類によつて、一樣には云ふべからざるも、大要模樣はなるべく簡潔に、形式組織の作用配置も極めて明瞭に、所謂直覺的に感ぜさせる樣になつて來た傾向がある。隨つて配色の如きも、人の眼に銳く感ぜしめる樣に工夫するやうに作るのてある。例へば諸種の印刷物、染物、織物、陶磁器、金屬器、木工等の各種工藝品に見ば多くはそれてある。要するに現今はこれらの品に自然物を應用資料として模樣化すると云ふことが盛に行はれつゝある。即ち、品物と用途によつて各適應するやうに模樣化し、變化して、人をして各樣の感じを與へしめるのが目的てある。

終りに一言女子諸君に希望したいのは、近來日本人は一般に、此の模樣圖案に對して、注意をする樣になつて來たが、中等敎育に於ける從來の圖案を學ぶにしても、此の圖案といふ事に尙一層注意してもらいたいのてある。何故かといふと婦人は將來一家を治める人てあるから、頭髮の裝飾とか、衣服とかに關しても、圖案的の意匠の趣味があると、これら品物の撰定についても好都合てあり、有益てある。例へば一つ道具を買求めるにしても、同價の品にして高尙な、優美なものを撰ぶことが出來る。故に專門家にあらずとも、一般にこの圖案趣味あるものを養ふといふことは、非常に必要にして、敎育上注意を要することてある。（談）

作家と家庭

窪田空穗

作家とせずに、廣い意味で、藝術家として、然う云ふ人々の家庭問題に對する感情が、多くの人も云ふが、自分の狹い天分から云つても、他の所在職業の人に比較して、比較的不幸なものであると云ひ得ると思ふ。て、藝術家には、別に定義は就かないが、兎に角、自分の心持、感情を、宜い加減に瞞着す事の出來ない人、即ち、自分の心持、感情を執拗く追及し、執拗く摑んで居ると云ふ性質のものである。言換へれば、極端な自分單位の人が、家庭に對して持つ感情は、或意味に於いて、精神上の要求が、比較的に多いと云へようと思ふ。言葉は少し漠として居るが、自分單位にして居るその心持を、少くとも合點いて貰ひたい、了解して貰いたい、もう一層具躰的に云ふと、夫婦の間に恰度、男性と男性との間に於ける友情、即ち、相方に理解し合つた精神上の關係、然う云つたものを要求するだらうと思ふ。

處が、今度女性の方から見て、女性が果して、然ういふ要求を持つて居る藝術家を、實際に愛して行く事が出來るでせうか。即ち一方に於いて、さう云ふ藝術家の心持を、合點き了解し得るだけの、自分の心が養はれて居て、而して同時に、一方に於いては、生活上の苦勞と戰つて行けるでせうか、何うせ藝術家は、物質に於いては、貧しいものであるから、その妻たる人は、生活上に於いて、此の二つの苦勞に對して、果して堪え偲んで行けるでせうか、若し然う云ふことが出來るならば、非常に幸福な事だと思ふ。

若し、妻たる人が、藝術家と云ふ夫の心持を、理解する事の出來るやうな人であつたら、多くの場合には、嫉み合ひとても云はうが、其處に必ず、個性と個性との衝突が起るでせう。即ち、相方對當の立場に立つて、握手して居るのでなく、何れかが勝利者となり、又劣

敗者とならなければ、治りが付かない樣な氣がする。理屈から云ふと、相方が互に理解して行つたら、それだけ好い愛情が湧いて、好い理由であるが、男女の場合に於いては、即ち、異性間の場合に於いては、然う云ふ事は、非常に困難であると思はれる。

然しながら、此處に一つの問題は、婦人が自分の夫が、藝術家であるからと云ふ事が動機になつて、結婚するやうな事は、些つと有り易い事の樣に思はれて、多くの場合、社會上の地位と云ふ如き事を除外して、女子が果して男子の職業の意味を理解し、その爲めに、結婚すると云ふ如き事は、餘り多くあるまいと思ふ。家庭といふものは、今少し單純な動機に依つて造られるものと思ふ。

若し、然う云ふ意味で、即ち、藝術家に對する、適當なる理解なくして、結婚したならば、其の家庭は空疎と云ふ感じを免れないと思ふ。夫は妻に對して、精神的に缺陷を感じ、妻は夫に對して、與へられるもの少く、要求せられるものの、多いと云ふ感じを免れないと思ふ。此際、妻が從順に、犧牲になつて行くと云ふ心持が持てれば、その家庭は、平和にだけは行くだらうが、又然ふ成り行くのが多い樣であるが、それにしても、双方心より持つ滿足であるか何うかは、疑はしいと云ふ氣がする。

藝術の神は嫉妬の神であると云ふ言葉がある。藝術は專念それを思ふ者にのみ生き、且つ意味がある。夫が、全身の愛を、藝術の前に捧げて、そして陰氣な仕事をのみして居ると云ふ事は、他の職業をして居る者に比較して、妻として苦痛の場合が多いだらうと云ふ事が想像が出來る。

問題が全然感情の事なので、當然の結果が何うてあるなどとは定め難いが、少くとも、藝術と云ふ事と、家庭と云ふことゝは、何等の親しい關係もない。否、全然關係のないものである。一見その間に關係があるらしく思はれながら、畢竟斯う云ふ問題も起るのであらうが、他の所在職業に比較して、藝術家といふものは、最も家庭と緣の遠いものであると、云ひ得ると思

ふ。隨つて、藝術家の家庭と云ふものは、前にも云つた如く、他の如何なる職業の人の家庭に比較して、最も圓滿と云ふ感じに遠い、無理の多い、不幸な立場にあるだらうと思はれる。

新代女性の立脚地

一色醒川

近代的女性と言ふ語には、一種悲慘な調が含まれて居る、近代と云ひ若くは現代と云ひ、其周圍を氤氳する太氣から既に違ふ、強者は其の刺戟の激甚を喜んで猶ほ濃厚を欲するが、弱者は其の酷烈なる惡熱に堪へ得ないのである、而もこの大渦旋の裡に弱き者の極みと言はるゝ女性が遲れながらに自覺し、惹いて懷疑煩悶に陷れるを見ては傷ましき思ひを爲さずして居られないのである。

吾邦に於ける過去二千年來の女性は、太抵同じ樣な徑路を通て來た、其間に出た幾多の節婦賢母も、畢竟は其類型を等しうして居る、服從と云ふ埒を踏み破つて異例ある行動をしたものは無い、要するに天下は泰平であつた。

然るに爰に單調なるレコードを破つたものは、維新以來泰西の新らしき文物を、或は宗敎より或は敎育の方面より學ぶうち、男女同權の見地から、或は天職擁護の主張から、獨身生活をする婦人が出來た事である。勿論在來と雖も世を捨てゝ尼寺に入つた人、家庭を持たずに殿上に仕へて身を了る人等はあつたらう、が、其れとは異つた意味で、更らに社會に於いて多く貢獻せんが爲めに此婦人等の獨身生活は實現したので、立派な信仰あり人生觀ある上の事である。

しかし今日其あとを顧みて忌憚なく言はゞ、其れは活きた人生と渉る處が無かつたと云つて宜い、要するに理想を一枚隔てゝ、識見と云ふものに囚へられた、語を替へて言はば本心を欺いた、少くとも非人情的な

言動てあつたと言ひ得る、殊にミッションスクール出のバイブルウーマンの如きは、其信仰其識見と言ふ事さへ殆んど、飜譯的と云つて宜かつたのてある。斯くて獨身生活は多く終りを全くし得なかつた、其れは、所謂老嬢と言ふものゝ事實に於いて證明される、或は晩婚者の自白を聞いても此消息は分る、而して其天職擁護の目的を遂行し得た人は寥々たるもので、その多數は犧牲となつたのてある。

此、記録は近代女性論の前序として確かに知り置かねばならぬとてある。て、女子教育家等が見るところあつて、女子教育に餘まり難かしい學問は



害あつて益が無い、賢母良妻の資格を得ば女子教育の目的は達せられたものだと云つた、反動が來たのであるが、かく第三者が周圍から彼是主張するまでも無く、次ぎ〳〵に成長する女子が物心つけば、教へらるゝとも無く自づと之を認める、同性に貫通する一縷の脈絡より感ずるとは歴史の空文を讀むにも優り其の鋭敏驚くべきものがある、今日の女子はもはや其本能に反いて、理想に囚はれ、識見敗けする如き心機に同する事は出來ないのである。けれ共又此の若き婦人の修養或る程度に達する時、男女同權天職擁護等の眞理にも逢着する、是れ等の自覺は殆んど彼女の胸に生ずる必然の新紀元であると云つて宜い。

女性の心機は女性で無ければ分らないけれ共、現はれ來る凡百の現象より類推する時は、女子の煩悶の中樞問題は殆んど結婚問題にあるものゝ樣である、尤も其の以前には戀愛もあらう、其の以後には生活と云ふ事もあらう、しかし戀愛や生活に就いては男子の方が女子よりも更らに頭を惱ます樣だ、女子に在ては其の中心は單に結婚の一事にありと言つて差支ない。結婚の事と雖も獨り女子の專有問題では無いが、事實其運命を左右する丈け、女子は男子よりも更らに深甚なる、憂慮があるは疑ひを容れない、これが封建時代の服從制にあつてさへ猶且つ然りである、況んや惺々として醒めたる自意識を以て、結婚の根本問題にさへ懷疑を有する今日に於いて、どうして輕々に沒了するとが出來やうぞ、思へらく自分は何故結婚せねばならないのか、何故男子の如く結婚するも可、せざるも可と云ふ態度に出づるとが出來ないか、何故男子の暴威と姑の苛責のもとに服從せねばならぬ乎、結婚はわが個性を沒し生きながら死したる者の如くなるのではなからうか、これは單に卓上論議の問題では無く自己の一身の進退處決の事實である。

顧みて既婚の人を見れば必ずしも幸福では無い、戀愛の時と打つて變つた夫の冷淡、新舊思想の衝突より生ずる姑との紛紜、さもなくば生活の不安、快活なりし友のヒステリー等、例はいくらもある、されば獨身

生活か、家事の都合上いさゝか婚期が後れてすら、友人の手前肩身狭く同窓會席上にも卑下して居る、獨身の小學教員と云へば頭からして侮蔑される、頭髮薄く顴骨高き老嬢の相は見るに堪へない、しかし誰れ壓する者も憚る人も無く自分天下の自由生活も愉快てあらうと云ふ氣分にもなる、かと思へば又若き夫妻を目送して胸が踴る、一刻前には理性が確立する、一刻後には感情が盛りかへす、何處までも自主獨立男子に對する反抗氣が生ずる次の一刹那は、身を强者に委ねて甘へて見たく叱られても見たい氣分になる、本能の衝動は無意識のうちにも生殖の任務をすゝめる、自覺の眼は何等かの理由無くんば許可を與へまいとする、此處に沈痛なる葛籐が生ずる。是れ深く同情すべき事なるにかゝはらず、社會の因襲は唯若き女性が通有抱く思考として顧みない、甚だしきは我儘として高壓する、女子も亦其の止むなきに諦めて、因襲の命ずる處に赴き、所期の如く良妻となり賢母となる、斯くて天才も埋沒すれば閨秀も世帯じみて了まふ。斯の如きはひとり女子にのみ見る現象では無いが、男子には結婚後依然として内部生活に新らしき苦悶があり動搖がある、女子はさうではない、結婚を以て一生の身の定めなりとし、家庭を終局の死所なるが如く思惟して怪まず、當初の意氣も主張も忘れ果て、人生はこんなもの、今までの一切は若き日の夢と心得、近代的自覺などは空の空なる文字となつて了まふ、果然女子は結婚を分水嶺として一身を改める、結婚に重きを置くは謂れないとてはなかつた。

近代女性の自覺が斯の如く凋落的痿痺を以て終りを告ぐる事は、自覺そのものの痛苦に比して猶ほ悲慘である、若し結婚に依て此自覺を失ふべしとせば結婚はたしかに咒ふべきものである、こゝに至ては既婚者が老嬢の運命を傷むと老嬢が既婚者の末路を弔ふと、其悲慘いづれてあらう、局外から見れば其の軒輊を定め難い、斯く云へばとて私は徒らに諸嬢を煽動するものでは無い。私は思ふ、女子は獨立すべく出來て居ないものである、結婚その事既に男女相互の相補足て、

自然の大則であるが、しかし男子に在ては猶ほ獨身を以て世を終へ得る、女子は然らず斷じて結婚すべきものである、私は偉なる女性と云ふを見るに、皆幾分か男性に近きことを認める、或は中性とも云ふべき人がある、即ち男性に近き分子がえらいのであるとを思はずには居られない、女子は唯女子として立つ事が出來ない、夫と結び、更らに母となる底の、二重三重の變化を俟て初めて完くせらるゝのである、男子に於いても同樣だが女性に於いて更らに適切なる意義が生ずる、是れは一面女子の特權であつて又義務である、一つは強みであるが同時に弱みである、母親の本能は子供を可愛がらずに居られない、この弱點を男子の暴虐に基する社會の因襲が附け込んで當初抱ける自覺をも失はしめんとする。失ふもの丶罪ではない、奪ひしもの丶罪である、然らばこの自然の成行の儘この自覺は萎靡するに任して宜いのであらうか、これ亦しかすがに然りと言ふ事が出來ない。

私は一つの疑問を提供する、女性の本能と自覺とは果して兩立する事が出來ないものであらうか、換言すれば結婚すれば自覺はどうしても捨てねば存在するとが出來ないか、私は或は諸卿の諦め方が餘まりに輕卒ではあるまい乎とも思ふ、而も諦めと言はゞよく聞えるが或は其の自覺が根本的で無かつた爲め、高壓のもとに一も二も無く降參した薄志弱行では無からうか、諸卿よ凡そ遠大なる事業の成就は一朝一夕の故では無い、諸卿が懷疑を解かんとした煩悶は、自覺の續く限り恒に新らしき活問題として殘るであらう、此問題は只青春の一關を過ぐる時の問題ではなく死ぬまでの一大謎である。

諸卿よ、明治維新の近因が、山陽の日本外史に胚胎したと言ひ、王政復古を遠く楠公の七生報國の語に結びつける、かゝる事は諸卿も既に陳腐とするまで知つて居らるゝだらう、しかし眞理はいつも眞理である。英國ではゼンッルマンを仕上げるには純潔なる三代の血肉を要すると云つて居る、漱石氏の『趣味の遺傳』には相思の男女の愛が一代の後に及んで成ると云つた消

息がある。私は諸卿に望むのは此處の消息である、一旦これと覺悟した深さ、期待する遠さは、十年二十年の後ては無い永遠の後てある、この永遠的觀念無くしては何事も出來ない、懷疑あらば解決さるゝまて懷疑を續ける、自意識は沒了せずして常に新らしく、此氣分を失はない樣にする、此思想の力は實に侮るべからざるものである、プラトーンの哲學が五世六世の後に於て、釦の掛け樣にまで影



響するとエマーソンが言つた如く、此覺悟此思想を持して以て、後世の同性同属に傳へねばならぬ、諸卿が變に諦めて志を挫折せば千年萬年女性の浮む瀬は無いのてある諸卿の生涯において女權の擴張は見られず、諸卿の手に於いて直接社會事業が成就せずとするも、其自覺を失はずんば其人は生甲斐ある生涯を送れるものと云つて宜い。

自己一身を中心とするとき淺薄なる利己的煩悶が附

隨する、自己は人類の連帶責任者の一人であると考ふる時には其自覺に伴ふ思想が又一變する、諸卿がわけも無く男子に對して敵慨心を以て反抗するとは、徒らに屈從すると同樣卑しいものである、よし諸卿が家庭に於て面白からぬとありとせよ、其の如く男子は社會に於いて猶更厭な辛い事がある、新舊思想の衝突は家庭ばかりでは無い、官吏としては同僚と意見の合はぬと、商人としては取引の困難、排擠もあれば中傷もある、男子は一々言ひはせぬが苦るしいとは家庭に限らない、要するに今日社會が病的なのである、亂調子である、この根本的解決は更に大問題で、トルストイは無抵抗を主張する、ニーチエは超人的生活を提唱した、基督敎の犧牲、佛敎の悟道、其の他簡易生活など種々なる解案もあるが、私は箇々の家庭の平和に基せずしては企圖は期し難いと思ふ、若しも女子が自らの苦痛を訴へ自らの薄命を傷む思ひから、更らに一歩を進め赤心より强者の悲哀に同情し、疲れてかへる戰士を慰藉する態度に出づるならば、何ものかの新らしき愉快なる消息に默會し得るとと思ふ、而も其れが決して女性の尊嚴を傷け其の自意識を沒了するとは無い。

敬愛する女子諸卿願くは永遠に若く健かなれ、不屈不撓の彈力を保つて其の自覺を研き勝利を幾百年の後に期せよ、同じ性の爲めに其身を自重して貰ひたい、感じ易きは其の特長ではあるが、餘まりに輕々しく感動するは女子である、而もそれが消極的のとである、枝葉のとである、私は諸卿の若き日に於いて根本の精神修養をせらるゝとを望むものである、漬物の漬け方を知らずとも家庭を持てから後一二度困れば出來るとだ、茶の湯活花琴乃至牡丹餅の製法何ぞ憂身を窶さんやである、それよりも太切なのは容易に出來ない精神修養である、女子の哲學禪學は決して困つたものでは無い、半可通で困るのは半可通が惡るいので、更らに思想を鍛練せしむれば宜い、前述の强者に同情するとか疲れし人を慰藉するとか云つた事なぞこそ一朝一夕の業では無い。而も心ある男子は斯の如き女子を伴侶と爲すべく希へるのである、其の精神修養は何處より得來るべきか、しばらく宿題として他日の研究にしたいと思ふ。

床

加藤介春

晴れた空、
しづかな晝、
あたたかい芝生の上。
青い芝生は
薔薇の墻て圍まれ、
きえ去らぬ歡樂を堪へる。
枕もない床、
柔い芝生の凹み。
うららかな空氣が、
二人の胸を流れて行く。
赤い薔薇の前ては、
繰返へす強い接吻。
歡樂の床、
芝生の上。

褐色の胸

私の前には、
夜も晝も
きえ去らぬ褐色の影。
何物か近づく時、
遠くからそれを感じて、
にはかに萠えあがり動く。
「どこへ行く」足音、
何もない「われらの幻」
褐色のものものしい影、
褐色の駈けりやすい胸。

私の作と私の周圍

長谷川　しぐれ

私は隨分吾儘勝手でして、趣向が浮んで、さあ書きたいと思ふと、矢も楯も堪らず、斯う云ふ時は、家庭なんかとは、全然離れて了つて、自由自在に思ふ存分に書いてみたいと考へるのですが、何うかしますと、又斯んな時に限つて、來客があつたりして、眞實に齒がゆくてならないのです。しかし、然うかと云つて、可笑しな事には、それ程書きたい〳〵と思ひますものの、さて暇が出來て、愈々書かうと書齋の机の前に座つてみますと、存外にも、今迄一生懸命で書かうと思つて居た事がつまらなかつたりして、自分では今日こそと考へました日を、朝から晩まで、唯ぼんやりと書齋に座り込みまして、つまらぬ本を引出したり、手當次第に雜誌などを拾ひ讀みしたりして、暮して了ふことがあります。眞實に考へてみますと、隨分と吾儘勝手な考です。

それに、母が宅に居ないものですから。母ですか。母は箱根の塔の澤の方で、妹と二人で、溫泉の方をして居まして、今では、彼方が本宅のやうで、此方が別宅と云つた風で、私がまあその別莊守の格なのです。只今此方の宅に居ますのは、歳取つた父と、私と、弟が二人に、妹が一人で、皆で五人暮なのです。而して、箱根の方に居ます母親や妹が、少しの事は手紙で用を便じますから、此方と往復しますのも、何か大事でない限は、滅多に會はない程ですから、此方の一家の事は、交際から、日常の確り切つた仕事など、總て家庭一切の事は、私一人で切廻して居るのです、皆樣ご覽ですと、私などは、唯遊んで氣樂に、書きたい時に書いて暮らして居るやうに、お思ひなさるかも知れませんが、斯んな理由ですから、なか〳〵氣儘などころではありません。兎に角一家と云つたものを、私一人で切廻して居るのですから、家庭の責任と云へは、存

外に重い責任があるのてす。

私が原稿を書く時間てすか、それは前にも申上げました樣に、これてなか〱忙しいのてすから、到底時間的に書くなんかは出來ません、唯暇な時間のある時に筆を採るのてす。それに、父は歳を取つて居ますが、隨分壯健な方てして、毎朝五時前には起きて、運動かたがた、自分て庭などを掃くものてすから、若い女や下の者が、何時までも寢て居るわけに行かないものてすから、隨つて朝は早く起きます、而して又、歳長の弟の方は早稻田の文科へ參りますし、下の弟の方は曉星へ通つて居ますから、殊に下の弟は、學校が八時に初まるのてすから、通ふ時間に二時間は掛りますので、毎朝五時前には起きて仕度するのてす。斯んな風てすから、夜は毎晩早く寢なければなりません。私の兄弟姉妹てすか、七人あつたのてす。隨分澤山てすが、今は五人て、箱根へ行つて居ますのが、直ぐ私の下の妹なのてす。兄があつたのてすが、亡りましたので、今ては私が一番上の姉のわけてございます。

家庭とモデル問題てすか、お友達や、親戚の人なんかを、ちよい〱モデルにして書いた時なども、モデルになつた人も、隨分勝手なものてして、好い事のモデルに書いた時は默つて居て、偶にその人の惡い癖などが出ますと、その時に限つて、蔭口なんかて大層うらまれるのてす。而してその人をモデルにして書いたのてなくても、同じ樣な若い女を描かうとしますとつい知らず〱日常交際して好く知つて居る、お友達や身内の者なんかの癖が出るものてす。

私がこれまて書きました作などは、モデルは依然知人を描くにしましても、着想とか事件の發展などは、實際の出來事を書いた塲合もありますが、多くは自分て勝手に發展さしたり、着想したりしたものが多いのてす。てすから私の小説は浮薄だとか、慊足らないとか言はれますのてせう。これからは私も成る丈は實際の事實を、ありの儘に書きたいと思つて居るのてす。

此頃日本新聞に毎日書いて居ます『晩鐘』といふ長篇小説は、あれは私の知人てして、築地の童貞院に出

て居る人を描きましたので、重に實際にあつた出來事を中心にして書いて居るのです。それから近い内に『新小說』に載る筈になつて居ます『闇』は、これも多くは事實を描寫したものです。

脚本の方ですか、近頃は書きませんが、今私は歌劇を書いて居ます。近い内に、又坪内先生に見て戴かうと思つて居るのです、從來平安朝時代を舞臺にした歌劇はありますが、私は今度奈良朝時代を舞臺にして書いてみました、脚色は傳說から得ましたので、夢に大臣が乞丐になり、乞丐が大臣になると云ふのでしたが、私はこれを男と女とにしましたのです、之れは自分では、いささか考へました積なのです。坪内先生に伺ひますと、西洋にも之れに似た傳說がありますさうです樂器ですか、樂器は矢張ピヤノを土臺にしまして、その他も皆んな西洋樂でなければ不可いと思ふのです、先日鈴木皷村さんにその內の一部分を作曲して戴きました。それから舞踊の振付の方は、お存じでせう、彼の市川團子に付けてみたいと云つて居ましたが、何うも存來の日本の舞踊の型では面白うございませんし、團子などが踊りますと、何うしましても長歌がかりの舞踊風になりますので、今では未だ出來て居ないのです。何れ來春までには書上げて、趣味かなんかで御世話になつて、皆樣の御意見をお伺ひしたいと思つて居るのです。實際僅か十六七枚ばかりのものですが、幾度考へて書直しましても、なかなか思ふ樣に出來ません。地の唄や白などの言葉は、萬葉の内などからも採つて居ます。(談)

浪子の墓

小說『不如歸』の女主人公

外山霞

田舍から初めて東京へ出た或る女學生が、方々見物をしてあるいて何に一番興味を持つかと思つたら、泉岳寺に於ける四十七士の墓でもなく、上野公園でもな

く、實に小說『不如歸』でお馴染になつた浪子さんの墓であつた、其女學生は浪子さんの墓を見たいと言つて大騷ぎをしてゐた。

德富蘆花氏の小說『不如歸』が我が婦人の讀書熱を高めたことは今更冗言するまでもない、現在の貴族をモデルにした事實に近い悲劇だと云ふことが、端なくも小說以外に女子を動かしたものと見えて、今や百餘版も重ね、明治出版界稀有の勢力を占めてゐる、單に讀書界に勢力あるのみでなく、劇に仕組まれては、新派の忠臣藏とさへ言はれてゐる、物は異ふけれど興行すれば必ず當ると云ふ意味で『不如歸』と『忠臣藏』は新舊兩派の大關である。劇から轉じて活動寫眞となり、覗きからくりとなり、生人形となり、繪葉書となり、今は唐人笛吹く田舍の町町の子守すらも『不如歸』の名を口にするやうになつた。然れば似而非の『不如歸』も隨分現れた、曰く新不如歸、曰く續不如歸、曰く後の不如歸、曰く何、曰く何、はては大道の讀賣にさへほとゝぎすの聲を聞くやうになつた。

浪子は實に此『不如歸』の主人公であり、而かも讀者の胸中には浪子が不如歸か、不如歸が浪子か判別できぬまで深く浪子の名は印象されてゐる。

小說と事實との交錯

小說は小說であり、事實は事實である、事實は骨子としたからとても小說必ずしも事實でない、世人、殊に一般低級なる讀者は事實と小說とを混同したがる、『不如歸』が當時に於ける家庭問題、新舊思想の衝突と云ふやうな事に眼を着けたのは確實であるが、作中の事件及び人物が現存してあつたと否とは、作の上に大いなる影響を與へない。

けれども文壇にもモデル問題の持上る如く、兎角實際社會と作物と結び付けやうとする處に、異つた興味を感ずるものと見えて、浪子さんの墓にも亦緣結びを願ふ人達の參詣するやうになるかも知れない。

事實問題を述べる序に少しく『不如歸』作中のモデルに就いて語らうならば、川島武男は軍人ではない實際は會社員である、片岡中將夫人繁子は大のハイカラで意地惡で虛榮心の強い人らしくなつてゐるが、實際は西洋仕込でも、精神は堅實、且怜悧、溫情ゆたかな人であつて浮薄な氣のない事は世に知れてゐる。又妹の駒子は今は某華族夫人であるが、之も同情に富む優しい夫人である。

唯『不如歸』の浪子の病死した事と、夫の不在中に離別された事とが事實であるだけて、其他は事實に遠い事が多い、一も二も事實にして了うと却つて『不如歸』の作者、及び作中のモデルと見られてゐる人達にも迷惑を感ぜしむるであらう、殊に此處に紹介しやうとする浪子の墓、乃ち大山信子の墓に就いても、其區別を明にして置かないと困る、紹介する處は大山將軍家の墓地であるけれど、紹介する意味は何處までも浪子さんの墓である。

東京名所の一つ

今や東京名所の一つにまで數へられて日ましに參詣者の多くなりつゝある浪子の墓！先づ參詣者の便宜を計つて案内記的に書いて見やう、

青山行の電車て、青山三丁目の停留所て降り、南町の側（南側則ち青山終點に向つて左側）の大きい横町（角は荒物屋）と玩具屋を這入つて花屋、石屋、休息所などを左右に見て電柱の七本目頃に來ると十字街になる、其右角に巡査派出所がある、是から右側を注意して行くと次が千歳と云ふ休息所、次が岡澤大將の墓所。之を這入ると四方は墓地て各々生垣がある。二つ目の生垣を左に行くと右側に大きい石碑が樹木の間に透いて見える、之は野津大將の墓。左側の角が大山氏の墓所の横に當る。是て不明なら、派出所（四角）の處を石尾に附いて右に二三間行くと右は人家て左側は墓地である、其の墓地の二つ目の（二間巾の道）横を這入つて生垣の内を數間行くと右が野津家表、左が大山家の裏になつて居る。是ても猶不明なかつたら派出所の巡査に聞き給へ、巡査は莞爾として浪さんの墓を敎へてくれる。

扨て墓所は東向きて、六間四方の地所て丈三尺程な要の生垣に圍されてある。此の三十六坪の內、十坪許りは、少し高く一面に小石が敷詰られて、墓は二尺許りのが東の角に二つ、中央に大きいのが二つ、右の角に新しいのが一つある。其の中央の二つは高さも大きさも共に同一てある、卽ち、各々一坪許りは三尺ほど石を築き其上に高さ一尺位のが三段になつて上に三尺の高さて幅は一尺二三寸角のものてある、中央左の方の表には「正四位大山巖夫人澤子墓」として裏は「正四位吉井友實長女萬延元庚申四月十四日生明治十五年八月二十四日歿」とある。右方のは表に「正二位侯爵大山巖長女信子墓」、裏には「明治十年一月五日生母吉井

氏明治二十九年五月二十一日歿」とある。是が、所謂浪子の墓と稱するものである。右の角にある——信子の隣りの——大理石の生新しい墓が、毅一さんとしてモデルに用ゐられた人て、表に「海軍少尉候補生從五位大山高」裏に「正二位公爵大山巖長男明治十九年二月十六日生母山川氏明治四十一年以軍艦松島航遠洋四月三十日於澎湖島殉難五月二十二日埋葬」とある、吾人の記憶に新しい悲劇を殘して居る。



周圍の光景

墓所の色彩としては、たつた一本六七尺の——薄紅の山茶花が十一月の末から十二月の初め頃迄、淋し氣に咲いて居るのが何とも云はれぬ趣がある。吾人が此處に立つて小說不如歸を想ふ毎に、浪子と山茶花との配合が如何にも自然て、且寂靜を感ぜしめる。此の山茶花を除いたら、霜さゆる月の寒い晩にがさ

〵地を走る桐の枯葉を思はせる大きい青桐が二本、東側の隅にある、その他は生垣に沿ふて十數本の榊があつて、いづれも八九尺のもの許りで悲劇の幕が閉ぢられると同時に植えられたものであらう、是等を除いたら、塵一つなく、清淨な掃木の跡が地にある許りだ。然し春の彼岸にても參詣すると、四邊は一重櫻の花が散り布いて、墓の樣な感が薄いけれども、五月雨のしと〳〵降る夕暮、青葉若葉の樹の下を辿つて、墓畔に佇めば、思は更に遠く〳〵熱海の海岸に馳せる、秋の夕べ、黄ばんだ枯葉を漏れる、心細い、力の無い日が碑の半面を色彩てをるのを見上げた時、そこには吾々の感じた小説以上の哀愁の思が胸にひし〳〵と迫る。石碑は平凡であり春夏秋冬沈默を守つて青山の一隅に立つて居るけれども、是程感興を以て來り。是程同情を持て、參詣される墓はあるまいと思ふ。浪子の墓の周圍には、世に時めいた大臣がある、一道の達人と云はれた人も、又は名譽の戰死者、有名な藝術家、其他種々の名だたる人々の墓はある、然し四時參詣人の絶えた事の無いのは恐らく此の墓を除いて他にあるまい。茲に至つて、宰相死して何の偉嚴ありや、猛將薨じて何の力か有すると云ひたくなる。然しそは主觀的の考へてあるから、參詣者各自、それ自身に由て又、樣々の感じもあるであらう。

墓前の二十分

前に參詣者絶えずと云つたが、然らば如何な人々が參詣するかと云ふと、唯一言、あらゆる階級の人が來ると云ひたい。然し今、自分の知つて居る事を少し書いて見やう。

過日、自分が參詣した時は二十分許の間に五組の參詣人が來た。初めに來たのは二人連で破布を着た老婦人と三十前後の吾妻コートの妻君、共に風姿の好い人だ、同情の籠つた默禮をして「是が不如歸の浪子さんのお墓です」と老婦人に敎へながら低聲に小説の筋を話して居た、度々來た人らしい。次のは大變ハイカラの三人の女學生「お氣の毒ね」などゝ何か私語いて行つた。後から子守が二人、いづれも活動寫眞の不如歸を語つて居たが墓とは何等の關係もない樣に生垣を脊にして日なたぼつこをして居た。するとぞろ〳〵近所の小學校の生徒らしいのが五六人、先の子が「是あ浪子の墓だぜ」と云ふと後のは碑を覗いてゐたが、「噓だい、信子つてんだい」と云ふ。すると先の子はすなほ

に「左樣か、ぢやあ吉つらんが嘘ついたんだね」と云つて見守つて居た。この子供等が去つた跡はシーンとして、元の寂寞になる、と、酒屋の小僧らしいのが懐手をしながら傍を通る「あはれ血に鳴くほととぎすトコトツト」と流行唄を唄つて去つた。

一寸二三十分間でも斯う云ふのであるから、日曜とか天氣の好い日とか又、盆とか彼岸とか、或は名高い人の葬式の日とかであれば、必ず二三組の人は此の墓の前に佇んで、種々の回想に沈むのである。

石工の實話

去年だつたが、ある石工が此の墓の隣りの墓を修復する爲め一日其處に居たが、色々な人が來るけれど、やつぱり若い廂髮の人が多いと云つて驚いて居た。その時「近頃官員樣達は奥樣の事を何さんつて、さんづけにするそうだが本當でせうか、己あ今迄、如何ないゝ處だつて嬶を呼ぶのにさんづけなんか、するもんぢあないと思つてたが」と云ふから、何故だと云ふと「だつて、先日、此處へ來た四角な帽子の書生さんが、不如歸が名高くなつてから妻君をさんづけにする樣になつたなあつて云つてましたぜ」と云ふ、自分は微笑を禁じ得なかつたが、所謂妻君をさんづけにするのは之れに原因いて居るかも知れないと思つた。軍人が妻君を、さんづけにして居ると云ふ事は何かにも書いてあつたように思ふ。

餘談は置いて、大山氏の墓所は以上の樣に參詣者が多い、隨つて木を折つたりなどする人もあるかして、近頃、門の内から閂をかけ前は鍵が懸けてある。だから花を捧げ水で浄めたいと思う人は、巡査派出所の隣りの「千歳」といふ茶屋に依賴すれば、下女か下男が、箒と水桶と花とを持て案内してくれる。案内の序に案内の案内をして置く。

うめくさ

▲赤き笑ひか、然らずんば白き笑ひか。
▲佇立ずむものは妨げなり。
▲木の幹は細きほど愛すべし。
▲反抗と服從とは極點に到つて一致す。
▲衣服を飾らぬ女は手紙を飾る。
▲暗黒を知るものは光明を知る。
▲女に限られたる心持なし。
▲女も一個人なり。

Setting[6] two of the largest glasses together, they peeped through them, and were surprised *to* [7]*see* the weathercock of the opposite church *brought*[8] *close* to their eyes. They called their father to see the strange sight.

さて最も大なる硝子の二枚を合せて之を窺きしに，向側の敎會堂の風信機（カザミ）が直ぐ目の前に現はれければ一驚を喫し，此奇異なる光景を見よとて父を呼びたり．

He looked through the glasses, and what he saw suggested to him the [9]*possibility* of constructing a curious toy.

父は早速其硝子を窺き見たるが，其觀察は彼をして奇妙なる玩具を造り得ることを案出せしめたり．

Galileo, *hearing*[10] of the toy which made distant things appear *close at* [11]*hand*, saw *at* [12]*once what*[13] *a* valuable help it would be in studying the heavens. He *set to work*, and soon made the telescope.

ガリレオは，遠距離の物を手近に見えしむる玩具ありと聞き，直にそは天體を研究するに頗る有益なる補助となるべしと思ひ，斯くて彼は工事に着手し，程なく望遠鏡を製出したりとぞ．

"To him that wills, the way is seldom wanting."

「細心注意する人には，事物を發明する方法乏しからず」

〔註解〕 (1) had not=*if* a man *had not* (2) allowed to pass, 通過せしめられた． (3) as well as, と同樣に． (4) shot up, 上に發出した． (5) It did more, 更に多くの事を爲した． (6) Setting....together=when they set together. (7) to see, 見た故に(其原因を示す)． (8) brought close, 近寄せられた． (9) possibility, 可能，爲し得べき事． (10) hearing=when he heard, 聞たとき． (11) close at hand, 手近に (12) at once, 直に (13) what a, なんと (14) set to work, 着手した，働き始めた．

Humors.

滑稽

Mother—"Tommy, what's your little brother crying about?"

母—「富や，どうして赤坊の弟が泣て居るのかい」

Tommy—"Because I'm eating my cake and won't give him any."

富太郎—「私がお菓子を食べて坊に一つもやらないからです」

Mother—"Is his own cake finished?"

母—「坊は自分の菓子を食べてしまつたのかい」

Tommy—"Yes; and he cried while I was eating that, too."

富太郎—「ハイ，私がそれも食べて居たから泣きました」

Tourist:—"There sandwiches are disgracefully small."

旅客：「此サンドウイッチは不體裁なほど小さいな」

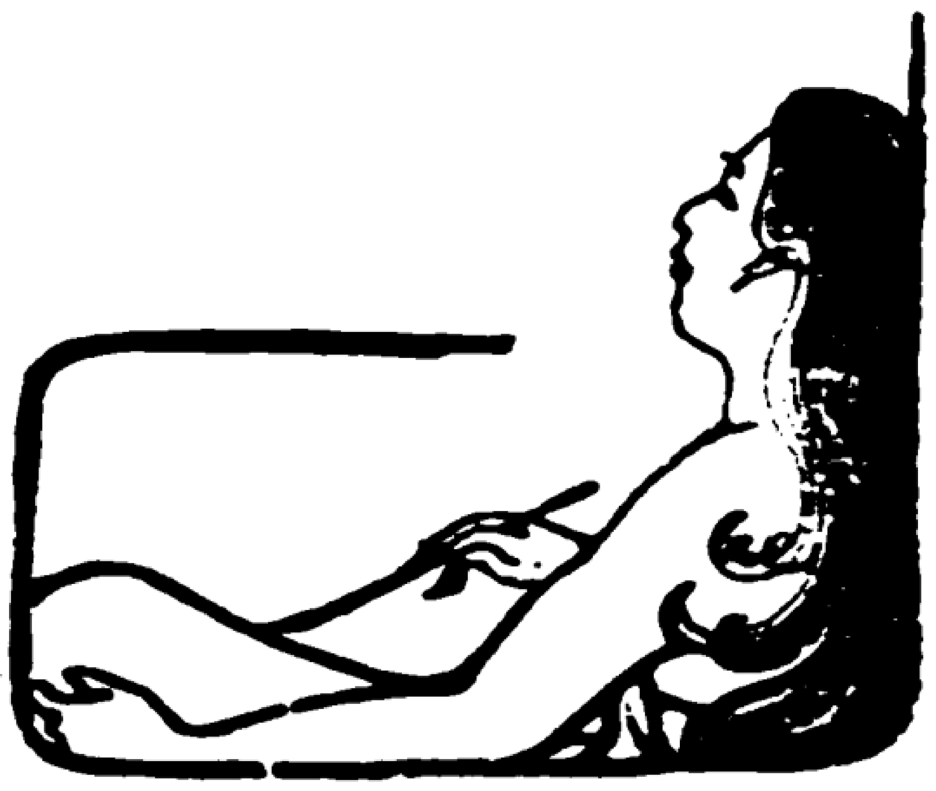
Lady Behined the Counter:—"But then the train stops here only one minute."

店番の女：「でも汽車は此處に一寸の間しか止まりませんから」

英　　文

（第六年第二回）

星野久成



ラムプのホヤと望遠鏡を發明したる話し

Accidental Inventions.

Very often an invention has been suggested (by) some trivial event, which would have passed unnoticed had(1) not a man with eyes and brains seen it.

1. Argand, a poor Swiss, invented a lamp with a wick fitted into a hollow cylinder, up which a current of air *was allowed*(2) *to pass*, thus giving a supply of oxygen to the interior *as* (3)*well as* to the exterior of the circular flame.

At first Argand used the lamp without a glass chimney. One day he was busy in his workroom, and sitting before the burning lamp. His little brother was amusing himself by placing a bottomless oil-flask over different articles. Suddenly he placed it upon the flame of the lamp, which instantly *shot*(4) *up* the long neck of the flask with increased brilliancy.

It did (5)*more*; for it flashed into Argand's mind the idea of the lamp-chimney, by which his invention was perfected.

2. One day the children of a Dutch spectacle-maker were playing with several of their father's glasses before the door of his shop.

偶然の發明

或發明は瑣細の事より考へ出さるゝこと屢々これあり，而して其事たる若し具眼頭腦の人あつて之を視察せずんば終に世に看過されしやも亦知る可らず.

1. 貧しき一瑞西人たるアーガンドは燈心を中心の圓筒に嵌めたるランプを發明し，其圓筒の上に空氣を流通させ，斯くして環狀の火焰の外部と共に内部にも酸素を供給したり.

初めアーガンドは硝子のホヤ無きランプを使用したり. 或日彼は其仕事部屋に在て忙がしく働き，燃えるランプの前に腰を掛け居たり.

彼の小弟は'底なき油壜を種々の物に被(カブ)せて自から遊び居りしが，突然彼はランプの焰の上に其の壜を置きしに，火焰は忽ち壜の長き頸より登りて更に光輝を增加したり.

加之，此事はアーガンドの心裏にランプの觀念を閃かし，是に由り彼の發明は成就せられたり.

2. 或日或和蘭の眼鏡師の小供等が其父の硝子を數枚持出して其店の入口の前にて遊び居たり.

きもの

河井酔茗

脱ぎ捨てた四五人の女の着物が室の中に堆くまろめられてある。

彩色のはれ〳〵しい、て觸感の柔かな、絹布の着物ばかりだ。

燃えるやうな緋縮緬の長襦袢や、桃色の八橋のくけ紐や、一番下へ着る白の筒袖の半襦袢などには、未だ温味があるやうに見える。

納戸色の縮緬の新しい羽織と、栗色の羽二重の少し古びた羽織とが、さも疲れたやうに用捨なく重なり合つてゐる。

子供の着物は皆躍り出しさうだ、光淋と、明治と、元祿と、アールヌーボーと、四條派と、江戸と。西京との擬作が、單純な線と、色彩と、形とに現れてゐる、紅梅色の水や、白い大きな葉や、萠黄色した花や、子供の眼には不思議に美しく映るのであらう。

玉蟲色に輝く甲斐絹の下に、小紋縮緬がおとなしくうづくまつてゐる。胸の邊りが乳のやうに膨らんで、腰から下の方が一面に皺よつて、行儀をくづして了つた。

脱いである女の着物の上には、なまめかしさと、あつたかさと、誘惑と、虚榮とが彷徨て居る、虚榮心、女に取つては命に代へても宜い虚榮心が、此處にお留守をしてゐるのだ、女が歸つて來て着るのを待つてゐるのだ、美しい虚榮、罪のない虚榮、着物だけ置いてある處を見ると、女の虚榮は許すべきものだと思ふ。

幾枚も重ねたまゝに袖が亂れて、入口から流れ落ちさうな水紅色が、能く女を語つてゐる。

閉切つた室には衣の香が籠つた、まだ外の光は明るいけれど、電燈を點けた、室の光線はパツト變つた、女の着物は一時に夜の色に目覺めた、厭かれたる虚榮は更に美しく見えた。



短篇小說

水野葉舟選

○風の晩（天賞）

横濱　矢野きみ子

風の酷く吹く晩、夫の源作が宿直なので、お松は一人、淋しい床に這入つた。

豆洋燈の灯がぼんやり四方を照らして、部屋の隅々には何かゞひそんでゞもゐるやうで、何となく陰氣臭い。――此家へ來てから未だ一年にならないが、夫のやさしい言葉に、毎日々々樂しい思ひて過ぎたお松は、宿直の爲め、夫と一所でないのを淋しく思つた。斯麽風の吹く晩、夫の勤めも大變だらう。きつと一晩寢ずにゐらつしやるに違ひない。本當に嫌やな晩だ。今頃は夫も家の事などを考へてゐらつしやるだらう。

と、十一時が鳴つても、十二時の打つのを聞いても、眠らうとはしなかつた。寢返りを打つて許りゐて、時たまじつと何かを見詰めるやうであつた。

風はだん〳〵強くなるかと思へる程、庭の木を鳴らし、窓や外の戸をごと〳〵さす。電線のうなりが、夜の靜けさを破つて、ひどく響く。

お松は何とも知れぬ恐ろしいやうな思ひに襲はれて今夜はもう眠るまい。どうせねられないのだから……と思ひ乍ら、夜具に顏を埋めた。でも何時か夢路をたどつたらしく、時計の打つのを一二度聞かなかつた。

翌朝、夫が歸へつて來たのを見てお松は安心したやうに、嬉しさうな顏をした。――風は曉方、すつかり止んで、朝の日は心地よく照つてゐる。

「貴郞、昨晩は隨分大變てしたらうね……」

といたはるやうに、火鉢の前へ座つた夫の顏を見て、お松は斯樣言つた。

「あゝ……」

夫の答は只之れだけだつたが、顔色が何時もより冴えない。――もしや、とお松は恐ろしい事を想像してどきつとした。

「貴郎、別にお變りはなかつたのですか」

と思はず斯樣聞かなければならなかつたのである。

「何に、別に……けれどね……」

と句を切つて、

「妙な夢を見たのさ。病んでゐるお母樣にても變りがなければ……と思つてゐるんだ」

何となく力のない話振りに、お松も思ひ當るやうな事がある如く、

「さうですか……妾ね」

と二人の間に、夢の話や昨夜の話が始められた。

お松が妾の叔母樣の亡くなつた晩が丁度斯麼でしたと言ふと、夫も俺も其麼事に逢つた事がある――と話して、果ては二人とも不安に襲はれたやうに、默つてしまつた。

庭の木の影が障子に映つて、春寒い風が開けられた窓から、訪れ入る。――

晝頃から源作は、昨夜の勞れで横になつて、うとうとした。

三時頃、お松は枕元に座つて着物を縫つてゐる。郵便脚夫が一通の封書を投げ入れて行つた。見ると以前一所に某會社へ勤めた事のある菊子と言ふ友達からである。

夫の寢顔をそつと見て、手紙を讀み下して見てゐる内、お松の顔色がだん〳〵變つた。――文面には、矢張り一所だつた友達が、昨夜死んだと言ふのであつた。しばらく逢はなかつたが、入院した事は菊子から聞いた。けれど一度も見舞つた事所か、其麼事は少しも念頭になかつたのである。然し、今斯樣して報を受けて見ると、自分の行かなかつたのが、不實のやうに思えてならない。殊に親には遠く離れてゐる人――嘸や心細かつたでせう。と、お松は其友達の身の上に思ひを寄せて、自分の行を悔ひた。――

灯がはつきり部屋を照らす頃、夫はやつと起きた。お松が直ぐ其事を話すと、默つたまゝ考へてゐるやうであつた。

お松は頭痛がすると言つて、二三日床に就いたり、起きたりしてゐた。源作も妙にすぐれない顔色をして

ゐたが、それても勤めは休まなかつた。

或る雨の降る日、風が強いのを突きのけるやうにして、電報が配達された。お松は其聲を聞いて、はつとした。而して恐ろしさうに手に取つた。夫の歸りを待たうかどうしやうかとまどつた。——腦には此間の風の強い晩の事が、まざまざと浮んだ。戸や障子が風の爲めに鳴る。——春寒い日、雨がし

きりに降る。

て、云つても無言つて、書齋に入つて、どつかりと机



（天賞）編みもの　水戸市　玉川すま子

とにかく、今度の中では一番出來のよい作だつた。作者に、も少し、文章をはつきり書いて欲しいと言ふ注文をします。一言、言ひそへたいのはこの作は何といふ事もなく、不安がこの家族に押しよせて來て居るといふ事が、雑然と書いてあるやうで、その中に泌々みへるといふ奥が自分には嬉しく思はれたのてある。

○小膽女（地賞）

とよ子

お歸り遊ばせお寒う御座いましたらう

の前に座られた、又かと思つてお世辭のつもりて、彼のレクホンが、やつと玉子産出しました：：フン：：時期が來れば産つて、そつけない、返事、今日は月曜日、會議が有る筈誰かと衝突でも又そんな事思ひ出す餘計なと、自分で自分の心を、淨めやうと思つも昨年の大病以來益々こんな事、考へる樣になつた、チン、、お茶の沸く音に驚いて茶盆取りに立つと、春子が裏から飛んで來て、お父さん今雛鳥が非坂さんのお屋敷へ入つたて私が捕へて來たつて手柄顏に注進する、そうかつ、て一向張合のない返事、また裏に行なと思つて掛け出す筈みに、夫の見て居た新聞を蹈んだ折惡しく、義士傳の所が少し、破れた：：馬鹿、て云ふ大聲に春子は驚いて、部屋の障子に付き當つた、此間張換た計なのに二三ヶ所破かした、惡い時には惡い事が重なる。

　何んだねー：：少し氣を附けなさいて、云へば、や春子はシク〳〵泣いて居る、こんな時に夫の御機嫌は取つて慰むる樣にすると、善いんだけども、五年此方：胸には浮ぶが慰めた事は一度もない、それ所か膨れ面するのが私の癖だ、お茶を持つて書齋に行くと、夫は未だ服のまゝ兩手を組んで何か考へて入らしやる樣子無言て、お茶盆置て來る、妻子有る爲つて、何日も、お云ひなしたが：：：：何か獨立事業、又思ひ出す、職務の爲めに、正直一づに勤める夫は、持てないし口先計の、ずるい事此上もなしと云ふ島田や井駒は中々持てるつて何日も、市川さんがお話して入らしたがほんに目のない世の中だ、お母さん甘酒屋の文ちやんがお踊の稽古して居るから見てくるつて春子は出ていつた、ほんに三味線の音がする此節季、師走に呑氣だ毎日は召し上らないけども、此んな時お酒でもと思つて、二合買つて來てお燗付る、最初は無言てのむて入らしたが少し顏がホーと赤くなつて來た頃：：やつぱり、酒だつ、てさも晴々したらしい顏附をして春子今日も能く遊んだらお正月にはの：：羽子板買つてやるぞて頭をなぜて居られる、大分御機嫌になつて來たので、今日の牛肉は如何て御座います、草薬町で買つて參りましたが、て伺がふ、フン、和わいなー牛肉は彼店に限るつて何日ものお言葉、先づ是で安心春子牛肉もいゝが此白根をお食べ白根は大變身體の滋養になるて自分のお皿のを皆んな子供にやつて居らしやるマア：：見て居れ最後の勝利は己れだ、今の奴は皆な目が無いからな——て、御飯のお茶碗をお出しになる

其れを聞いて居る私はなぜか胸が一ぱいになつて來て目からは熱い物が出て來る、百姓の子はだめだつて云はれるのがつらさに、洋燈の笠て顏を隱して居る目敏い春子はちやんと私の顏を見つめて居る、悟られまじと思つてお茶を取りに立つ、明日は當直だから辨當の用意しろつておつしやる、臆の小さい私は明日も登校下さるのかと思ふと嬉い、子供の着物の破れを縫つて靴下を繕らつて居ると遠い所で按摩の笛の音がする、外ては此間の大風に取殘された桐の葉がガサガサと落ちる。

却つて男の方がよく書けて居る。

○お兼さん（人賞）

德島　多田らん子

機場の隅てお兼さんは明日の天氣をきづかひながらカチャ〳〵と、も少て仕揚る綾斜子を精出して織つて居る。兄嫁さんは是も敗けぬきてたすき掛けに成つて臺の向て管卷をして居るとハ、、、、と突如大きな笑聲がして土間から顏を突き出した者がある、內の二人は吃驚した。

「あら市さんて」と同時に兄嫁さんもお兼さんもいつた「精が出るな」と例のニヤ〳〵と笑つて兄嫁さんの傍へ座り込んだ、何時になく頭もきれいに刈つて小瀟洒とした双子の綿入に白縮緬の兵兒を矢鱈に前て廣てゐる。

「ひどい今夜はめかしとんな」と兄嫁さんが云ふと「フン」と笑ひながら懷中から重々しさうにゴールデンバットを出した、

「おや市さんは卷煙草を……」

「わしやつて此麼もの位ゐ吸はんて」と得〳〵然と吸ひ出す、兄嫁さんもお兼さんも鳥渡驚いた如に見てると餘計に市さんは氣取つてこんなものだといつた風に無闇に吸ひ出す、其れがまるて藝でもしてる如だから可笑しい。堪らないからお兼さんがクス〳〵と笑ふと兄嫁さんも御本人の市さんまでが笑つて了つた。

「まあ阿房ぢやなあ」とお兼さんは笑ひながら直ぐカチャ〳〵と織出す兄嫁さんが其れから二つばかり管を卷くと市さんのゴールデンバットが一本了ひに成つたボイと吸餘を土間へ投つて

「おい新富座の芝居はえゝぞ」と糸を繋て居たお兼さんにいふ。

「はう、て何の藝題て」

「まだ知らんのかい」
「行けへんもん」
「行かいても觸れて來たのに」
「何時？」
「何時て一昨日」
「そんな者が來たか知らな兄嫁さん」と云ふと矢張り兄嫁さんも知らないでも市さんは獨りニヤ〳〵と笑つてゐる定めし菊さんに會たのだろうお兼さんの方をジロ〳〵と見て居る、
「いやよ人の顏ばつかし見て、……」と始終心易い男ても恁う凝視れては羞しいのか赤い顏して目を外した市さんは今日新富座で大江一座といふ新劇の初日を見てきた事藝題が不如歸だとか何んとか云ふ女形がよかつたとか話して居ると「ひどい話がはずんどんな」といつて芳さんが來た芳ざんは兄嫁さんの弟で今工業學校の四年生此家へは始終出入をして居るこの間約束してをいた猶に。兄さん（主人）を誘ひに來たらしいが相憎留守なので兄嫁さんに話すと又かとしかられるので默つて居た。市さんは下拙な口調で例の芝居の話をつづける芳さんはお兼さんの機臺の傍に立つて聞いて居たが、お兼さんの織てるはたの目を見たり糸に觸つて見たりして。
「精出しとんな」と憚るやうな少さい聲て云つた。
「……」お兼さんは何んとか答へたのだつたが殆ん口の内だつたので外へは聞えなかつた。
市さんは座長の武夫が良く出來たの山木の下女が向ふの光さんに似てるなど言ひ出した。
聞手の三人は色々と問ひ返すといやそれは恁うだとかあゝだとか說明辨解し大いに勤て中々自說に屈伏させないでは置かぬといふ勢である其れに芳さんは常から大の理屈家であるから市さんの揚足を取つては追及するので一倍面白時々兄嫁さんもお兼さんも腹をかゝへて笑ふて居たが急に思出したのか夜食の茶を焚きに本家の方へ行つた、市さんは例の煙草を出すと柄にもないなど揶揄ながら芳さんに一本取られる市さんがマッチを擦ると芳さんもそれて點けて
「お菊さん行つたんか。」といふと只ニヤリと笑つて一その笑の間には聊かプライトの氣味の嬉しさうな面影が漂つてる。
「お前やつてお兼さんと行つたらえてないか」
多少本家の兄嫁さんを憚るやうだつたが芳さんよりも敏くお兼さんの方を見た。

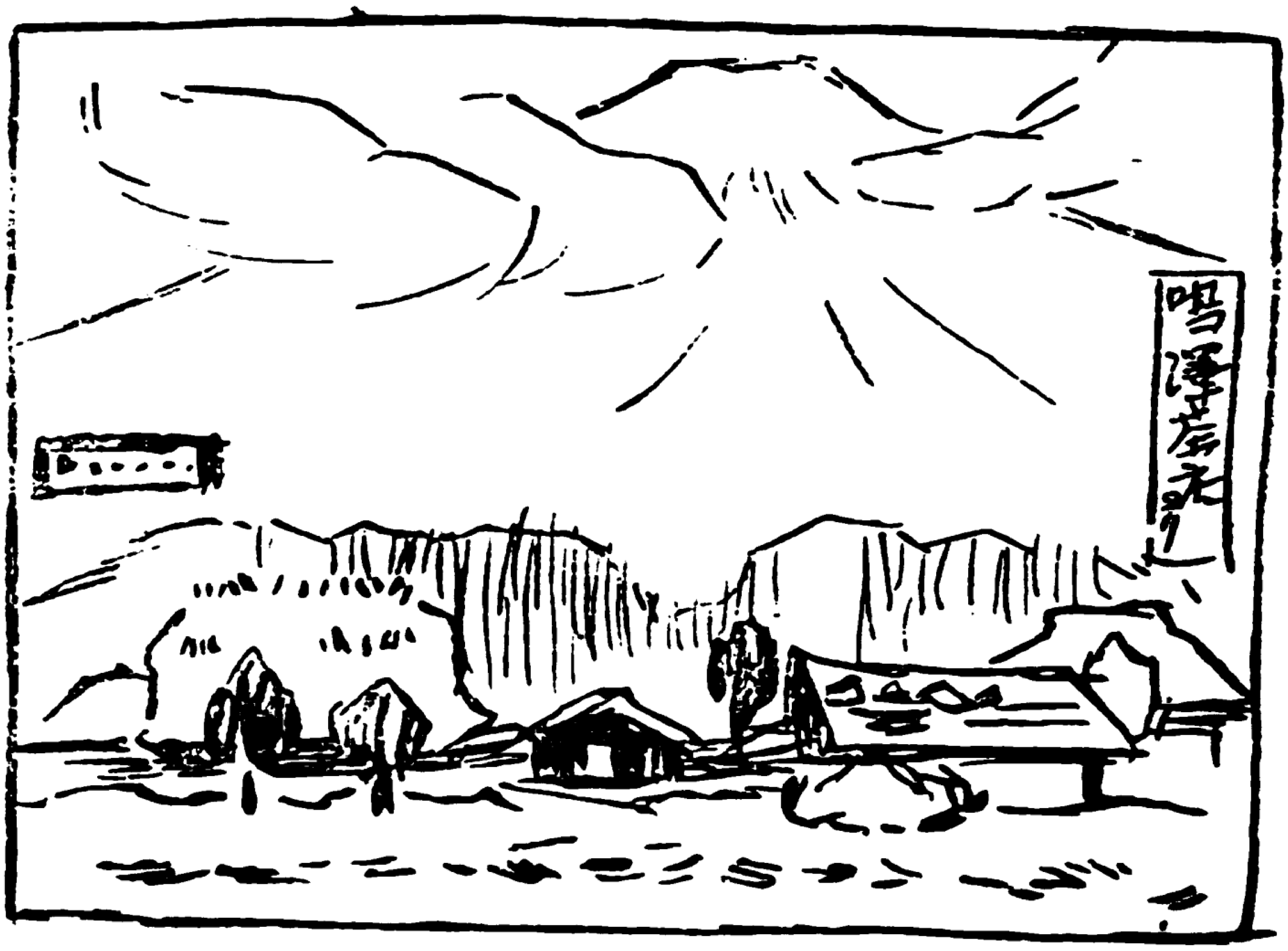
「あらやらしいの市さん」てとは云ふたが、やはり兄嫁さんに聞えては悪いといふ風にうつむいて睫毛の長い目でソッと芳さんを盗み見た話が一寸途切れて了つて土間を隔てた臺所の竈の下のパチ〳〵といふ音がよく聞える。

市さんと芳さんとはいつの間にか縁に行く約束をした、カチャ〳〵とお兼さんは相變らず織つてゐる、臺所でお膳を出す音が急に聞え出した。話が又元へかへつて小言へに成つたと思つたら市さんは芳の肩をポンと叩いた「阿房奴…‥」と芳さんはいつてお兼さんの方を見たが。きこえぬのか一心に織つてゐる。

甚くうすいが、何處かこの社會の空氣に觸れるやうな氣がした。自分はたゞこれだけの點でこの作を入にした。

【秀逸】

○晦前



（地賞）　旅行スケッチ　淺草　井上八重子

牛込　星野愛子

冬の日は冷たい氣を含んで窓から這入つてくる。勝手元の流しの方には、鍋の中に未だ洗はない小皿や茶碗や杓子などが水に漬つたまゝ詰め込まれてある。亭主の角治が役所へ出てから未だ二時間と過たぬ中に、妻君のお時は、隣りの椽側に腰かけて、隣りのお京と無駄話しをして居る、

「えゝ、四月頃になるんでせう」

「お時さんは幸福なのネ、どん〳〵御製造なさるんだものとお京は四十になつて既に婆さんになつたやうな顔をして居る。處々皺が寄り歯が拔ける、お負けに腰迄いたむと言つて居る。お時はお京よりか八ッ計り下だが親子のや

うに見える。少し肥え氣味な、少しあばたのやうに見える。色白な顔は、何處となく樂天的な、健康さうである。廿歳になる時角治と一緒になッて、以來十歳の男の子を頭に四人の子をあげて、今度又六ヶ月と言ふ大きな腹を抱へて平氣で居る。

「たくさん産るうちに、どれか滿足なものがあるでせう」とお時は反身になつて、片手を突き乍ら言ふ。

「子供程大切なものは有りませんよ、ほんとうに、私はネ、初め一人男の子があつたんですが、亡くなられましてネ、それつきりもう出來ないの」とお京は兩手を袖口に縮めて、柱の根につくばつて居る。カン〳〵〳〵と鉋の尻を叩く音が今日も向ひの家から聞える、お時の家では、喜太郎(長男)が威張る聲やら、五歳になる林次の泣く聲などが、葉の枯れて折れ〳〵た芭蕉の蔭の方から聞える。

「母ちやん、!」と一番下の今年三ッになる照坊が、汚くなつた白い金巾の前掛をかけて、大きなお京の下駄を突つかけて、裏口の方から廻つてスタ〳〵とやつて來た。

「あれ、又お母さんの跡を追つ掛けて來る。今行くんですよ」と睨み付ける。子供は默つて母を見て居る。

「あゝよくお出でになりましたネ。お母さんはヒドいのネ」とお京は手をとつて、椽側に上げてやつた。

「大晦も來たネ、お時さん」

「えゝ、新年が來るも可いが、大晦か來なければよいけどもネ」とお時は笑つた。そして、

「私の家なぞ、一家中の滯りが皆此の晦に集つてしまつたものだから、西も東も動けない、ほんとうに夜逃げでもするより仕方が無い」と又笑つた。お京は眞面目な顔して、考へ込んで居る。

「私のうちなんか、何うすればよいか、途方に暮れちやつてるの」

「でも無いものは拂へないから、矢張り同じ事ですものネ」、とお時は呑氣らしく言つた。

「お母さん!、お母さん!」と泣き聲で林次が又叫び出した「お母!さん、兄いさんが――」……お時は知らん顔して居ると、何時の間にか又二人何にかペチヤ〳〵饒舌つて居た。

午後お時は照坊を連れて三丁許り離れて居る姉の處に出て行つた。又無駄話をしに行つたのだらう。

お時の家の二階六疊は郵便局の雇の吉田さんと言ふ三十前後の男に貸してある。今日は休み日だと言つて

十時頃迄寝て居た。別に讀書するでもなければ、階下て子供が泣いたり喧嘩したりするのを、其麼に氣にも止めない。飯を食べたら午後になつて居るので、何處にも出やうとしないで二階にくすぶつて居る。

「喜ちやん〳〵」と梯子の口から子供を呼んだ、子供は騒いで居るけれども、返事をしない、

「喜ちやん！　喜ちやん！」と手を叩く、喜太郎は漸く格子口にやつて來て、默つて鼻の低い顔を上に向けた。

「お母さんが居る？」ときくと、

「何うだか、見て來てあげやう」と出て行つたが、居ないと言つて報せに來た。吉田さんは、本月の間代を來月に延ばして貰ふ事を交渉しやうと思つた。子供は今迄わい〳〵やつて居たのが、今度は隣りの裏の方に引移つたと見えて、いやに鎮まつた。

「ご免なさい」と格子元に古ボけた二重廻しを着た四十前後の男が立つて居る、返事がない。

「ご免なさい――お頼み申します」と家の中を覗いて見るが、ヒツソリとして鼠一疋居る樣子が無い。

「ご免なさい、もし、ご免なさい」と格子の鈴をわざとがた〳〵させたが、矢張り何の應答も無い。それも其の筈、吉田さんは耳が遠くてよくわからないのだ。

「ご免！　お留守ですか」と一層高い聲を立てた。が駄目だつた。其人は、隣のお京の處に行つて尋ねた。お京はお時の姉の處に行つた事を知らない故、家の內を尋ねたり、吉田さんに聞いたりしたけれどわからなかつたので、「何處かへ買ひ物にでも出たんでせう」と言つた。男は寒さうな顔して其儘かへつて行つた。子供等は、近所の子供も加はつて大勢又お時の家の庭に集つて、わい〳〵言つて居た。便所の手拭が庭の水溜りに落ちて、菊の枯殘りがガサ〳〵になつて倒れて居る。

この作のやうに、筆述者といふだけては困る。

○神官

京都　吟子

ガラリと猿戸が開いた。

若々しい女の聲で「何誰？」と內らから訊かれて、

「立花です、只今、歸りました」

と云つて玄關の沓脱で利休下駄をカチヤ〳〵脱いで疊を擦るやうな溫和しい步容で女のゐる隣りの部屋へ入つた。

疲れた風に、スースー息をしながら、ドサリと座蒲團

の上に座つた。娘は襖を開けて
「今日は御緩るりて、．．．．戸外はよほどお寒くムりま
しよう」
と、茶卓にのせた煮花をすゝめながら、
「召しあがりませ」
立花は常例のやうに一寸、面喰つたが、顔を背けるや
うにして、
「有り難う、今日も婚禮で遲くなりました」
「左樣でございましたか」
と、丁寧に云つたが、別に氣にも留めずに娘は立つて
行つた。
娘の影が見えぬやうになつて、立花も漸つと落着いた
といつた風に、茶卓に手を掛けて、うまそうに一口に
呑み乾した。
「ホウ、今日も亦、婚禮！寒なり小口にはよくありま
すな、花嫁さんは別嬪てすか」
と、老人が襖の彼方から頓狂な聲て聞いたら、娘が、
「又、父が彼那ことを申します」
と、たしなめるやうに、云つた。
立花は娘の語を耳に入れぬかのやうに、老人に咄しか
けられて急に元氣らしう、座つたまゝて、大きな聲を
出して今日、大神宮で行はれた婚禮の花嫁や花婿の話
をした、花嫁が見ともよくなくつて立派な花婿には氣
の毒だとか、衣裳が何うだの斯うだの、女の云ふやう
な事まで委しく氣を注けてゐた。
立花は大神宮の神官である、生れは何んでも山陰の方
の山奥て、幼さい時から神社の雇になつて、年がゆく
に從つて位置もよくなる、神社も轉じるといふので、
今ては大神宮の古顔の一人となつてゐる。
老人が相場に失敗して、店を疊んで、遠い所に縁附け
た獨り娘のお春といふのを、丁度、その時、夫婦仲が
もめたのを幸ひ、其れを好い機に自分の方へ取り戻し
て親子二人、水入らずて此處へ引越して來て「貸し間
あり」の札を掛けた時、初めて來たのが神官の立花て
其れからはもう、二年半か三年にもなる。
毎日、神社へ出勤して四日目か五日目に宿直の番に
當たると、出掛けに必つと「今日は泊つて參ります」
と云つて置くのが永い間、立花が云ひ落とした事のな
い常文句て、兎に角、變な程、生眞面な人てある。
家には外に下宿人が三人ほどゐる、町の專門學校の學
生てある、毛色の變つた立花は自然と皆の目に止まつ
て、たえず、話題に上る、そんな時に老人がゐると立

花のもの云ひや態度を眞似て若いものをワア〱笑はせる。第一に立花の年齢について誰も的確、云ひ當てるものがない、小柄な瘠せ作りな、肩附きの心持ち張つた、凄く底光りのする眼、高く徹つた鼻柱、三分剪りの頭幾日も湯に入らぬ厭やに男臭い軀の臭ひや千筋の手織木綿の着物に黒木綿の兵兒帶を締めた、などは何處を見ても若々しい風が無い。夏頃は擬ひパナマに黒絽の三つ紋附を羽織つて出勤してた、この頃は茶色の中折帽に羊羹色に褪せたインバネスを着てる、退けて歸つて來ると直ぐ木綿の手織に着替えて煎餅のやうな薄つぺらな座蒲團に整然と座つて机に向つて書見をする、時々、紙屑を投り込む音や机の軋る響きで僅かに在宅だなあと知る位ゐ、極く靜な、烟草ものまぬ、只、菓子のみは何時も机の引出しに缺かした事がない、而して、机の上に



（人賞）まんざい　本所　安藤エイ子

は五六冊の和書と風呂敷の疊んだのとが行儀よく並べてある。

天長節の前の晩、立花は一本の軸を大切にして持つて返つた、軸の中央に張つてある白紙をはがして床へ掛けるのを見たら、其れは兩陛下と皇太子兩殿下の石版畫であつた、欄間には呉春の富士山の墨繪、其れから一方の壁には足柄山秘曲傳授の歴史畫の石版繪が掛けてある。

全宿の人にもの云ふのを見た事がない、只、立花が家中で一番、氣の置けぬらしく見えるのは老人である、老人とは始終、心易く話を交へて居る、其處へ娘が出て來ると樣子が一變する、立花は居住居を直すか、話をやめるか、マルで固くなつて終ふのである、

一人の學生が「立花君は女嫌ひだ」と云つた、

外の一人は「身體がわるいのだ」と云つて

「女に好かれた事がないからだ」と云ふ者もあつた。

ある晩、飯が終むと立花は老人を誘ふて菊人形を見に行つた、其の歸途に二人で賑やかな町のとある蠣屋へあがつた。

老人は始め、斷つたのだが立花にすゝめられて到頭、一二杯の酒を傾けた、二人とも徴然と醉が廻つた、老人は上機嫌で舌なめづりをしたり、掌で半ば禿げた頭を撫て見たりなんかして居たが、嗄れた低聲で十八番の端唄をうたひ出した、傍に遠慮する人がないから又、家に居るとお春が「お止しなさい」といふのだが今日は其麽、憂ひもなし、老人よほど有卦に入つて見へる、立花は食卓に肘を載せて默つて聽いてゐた。

端唄が途切れると老人は自分の若い時の咄をした、散財といふものゝ面白い事を云つて聞かせた、立花は氣乘りせぬらしく聞いてゐる、老人は又、六十五にもなるけれど彼麽、面白味は忘られぬ、偶には、も一度、やつて見たいと思ふ事があると云つた。

老人はそんな事を云ひつゝも何かもつと大切な事が立花に話したかつた、其れは娘の身の上である、廿七八の中年增で色の白い十人並越えた女、只、出戻りと云ふだけで本人も多少、卑下してゐる、交際ふて見るとこれと取り立てゝ云ふ事もないが、十五で母が死んでから老人の手で育つた割には素直な親思ひな所がある老人が後妻も迎へずに自分一人を可愛がつて呉れたのを泌み〴〵嬉しく思つて、口癖のやうに「氣の毒な〳〵」と云つてゐる女である。

嫁に貰ひたいと云ふのも隨分あつた、小學校の校長や

五十圓位ゐな官吏も中にはあつた、然し、二度目は厭やだし、家族の多いのも好かないので兩方とも斷つてしまつた。

老人は何故か立花を賴母しい人と思つて成らう事なら娘の婿にと望んでゐた、娘は隨分孝行ものだが、此ればかりは相應に自分の好き嫌ひを老人に云ふのが常であゐ、て、娘は立花の何だか穢くるしいので氣が進まない、ても、老人は頓着せなかつた、よく〳〵見込んだ所があると見える、今晩は折もよし、酒も入つてるから今にも云ひ出そう〳〵と尻をもじ〳〵さす位ゐてあつた。

老人は立花の節儉家なのに第一、惚れたのだろうと娘は思つた、表の狀挿に郵便貯金の通知書が時々、來てゐる、其れは立花の名宛てゞあつた、五圓の債劵を幾枚も持つてゐて抽籤の廣告が出ると、そつと、番號を比べて居るのを見た事もある、時には町の吳服屋で可なり高い絹物なんかを買つて國の妹に送つてやつたりしてる事もあつた。

娘は然し立花のやうな無粹な舊弊な、而して、英語の一つも讀めぬ人よりも、切めて學士とか得業士とかの妻に行きたい、お父さんの目先の、見えぬのにも困ると思つてゐた。

老人は遂々、元氣をつけて云つた、第一、娘の氣質の淸い事、それから、自分が相場に失敗する迄は京都の中京の立派な商人であつた事、今でも多少の小金は無いでもない、けれども、いつ、何んな事がないとも限らぬから平素は仕末をして間貸しもしてる、が、貴君が嫁にしてやつて下さらば、其れも止しにして……と醉つた口でクド〳〵云つた、立花も「ハイ」とか「成る程」とか云つてたが「貰つてやつてくれぬか」と老人に駄目を押された時、思つたより元氣な調子で

「二階の〇〇さんが欲しがつてるから、左樣、なさつたら何うです、お春さんだつて……」

「滅相な、書生なんかに遣れますものですか、那れは皆弄るのです、第一、あんな年の若いものは當てにはなりませぬ」

と、老人は一向取り上げる景色もない、强いて賴むやうに、終ひには泣かぬばかりに懇願されて立花は一應考へて何分の返答をすると云つた。

手を拍つて勘定を、と立花が命じたら、老人は胴卷の中の大きな皮財布から五圓紙幣を出して、止めるのも聞かずに仲居に渡した。

歸りの途で、色んな世間咄の果てに、學生が金を浪費するのが見ツライ、といふやうな話を老人がした。

家に歸つて、老人は自分の部屋へ入ろうとする立花を呼び留めて勝手の小間へ通つた、烟草の烟が一面に罩もつた中に色の白い娘は針仕事をして、部屋の中央の炬燵の周圍には二階に宿まつてる學生が四五人も生き生きした聲で語つてゐる、立花は襖を閉ぢて立ちすくんで一寸、躊躇したが、老人のすゝめる座蒲團の上に座つた。暫らく經つてから、娘は進まぬ顔に一寸笑顔を作つて立花に何とか愛想を云つて、湯に行こうとした、老人は「既う遲いから、明日の朝、行つたがよかろう」と云つた。

「でも、寒いから、湯に入つて溫まつて來やうと思つて――」

と、其の儘、炬燵の片隅に小さくなつて當たつた。四五人の中、一人減り二人減りして、○○君一人だけになつた、老人は○○君が呑氣に炬燵に當たつてるのを見て厭やな氣になつた、早く、居なくなればいゝのにと獨りでヤキモキしてるのがよく分る、立花は懷から菊人形の番附を出して疊の上に展げて、所在なさそう其れに眼を落として居る、十時の柱時計が鳴つた、立花は膝の前に注いてある茶を一口呑んで、

「明日は又早いから、失禮します」

と、立ち上がつた、老人は驚いた眼附きで其の跡を眺めたが、やがて、思ひ出したやうに、立つて立花の室へ這入つて行つた。

ぐる〱書いてある割合に印象が不明瞭だ。

○僕の姉さん

大分　原田澪子

姉樣は僕と二つ異ひて、今年十八の美しい女學生だ分家の叔母樣達は、只美しい娘で愛らしい所が尠なひと云ひなさるけれど、姉樣には、それは優しい涙もろい何とも云得ぬ女らしい所がある。僕とは一番仲好しなので、僕の知つてる姉樣が眞實の姉さんだ。

姉樣が、夕方臺所で下女の手傳ひしてると、帳場にいらつしやる母樣が、きつとお菓子やおさつを買つて僕等に分配て下さる。けれど襷掛けの姉樣は何時ものけ者だ。僕は心外で堪らないけれど、母樣には何とも云はず、炊事場に持つて行つて姉樣に上げると、

「そう、有難う」と、言葉少なに泌々と僕の顔を見つめなさるのが常だ。僕の氣の故かしら、其の時の姉樣の眼は必然濕んで見える。上げたお菓子を袂にしまつ

て、呆然と考へ込んでいらつしやる姿を見ると、僕は涙の出る程姉様が懐かしくなる。此の姉様が、如何して母様のお氣に入らないのだらうと僕は母様を恨んだ事もある、姉様も、母様と一緒にいらつしやる時は、それは丁寧に嬉しさうに色々な事を話して居られるけれど、あれは姉さんがわざとあゝしていらつしやるのらしい。母様が外出なさると、姉様は小聲でお父様と何かお話しなさる事がある。母様の里歸りなすつた時なんか姉様の部屋て、父様と二人余程長さうな手紙を擴げて、姉様は眼を赤くして居らした。翌朝姉さんの出校後に、僕はペンを借りに行つた序、何の氣なしに書き放してあつたノートを見たら、

「お母様、御手紙確かに拝見致しました。父様にも泣いて頂きました」なんて、二三行毎に紫インキの棒が引いてあつた。

此の前の水曜日だつた、僕が池松君の所に寄つて、何時になく水道町を通つたら、十間許し先の、通りの左側に車を止めて、丸髷に結つた奥様風の人と、姉様が一心に話して居らつしたが、何かのはづみに後をふり返つて僕の顔をチラと見ると、姉様はそこ〳〵に別れてお終ひなすつた。丸髷



あいらしい子　扇布　仁田みれ呼

の方は、僕の二間許り先の曲りから横町へ車を走らせてしまつた。チラと見た丈てよくはわからなかつたが何だか大變姉樣に似て居た、絹張りの洋傘をステッキの樣に疊んて、足許の小石をつゝき／＼うつむき加減に歩いていらつしやる姉樣に、僕は大またて追ひつひた姉樣は沈んだ顏にニッコリ笑を見せて、

「幸ちやん、今日は如何してこんな所に來たの」と、不安な眼てある。僕は池松君の事を話して、

「今の方は誰？」と聞いた。

「ええ」と吃驚して、彼の方　學校の先生よ、ても今日の事誰にも話してはいやよ、ね、云はないてしようと、細い腕を僕の肩にかけて、のぞき込む樣になさる

「ええ。今の方、姉樣によく似て居ましたよ」と云つたらはつとした樣に、涼しい眼を一寸見張つて、やがて顏を少し紅らめ、

「そう、何所が似て居たの？」と、嬉しそうな尋ね方てある。て僕が氣づいた所をありのまゝに話すと、

「本當？」と嫣然し乍ら恍惚となさつた。

姉樣は非常な文學好きて、初終小說を讀んていらつしやる。朱筆をもつて口を眞つ赤にしていらつしやる事はあるが、どんな多忙な時だつて、店に出て帳場をお務めなさる事はない。月夜なんかには築山の根にシヤガンて、何時も呆然してゐなさる。僕は姉樣の浮々とした顏を見た事がない。所が昨日、始めて霽々した姉樣の表情を見た。

當番て少し遲く學校を出て、二三軒行つたら、京町の方て姉樣の後姿を見た。それが縞の背廣を着た男と二人だから心外なのだ。話を聞いては失禮だからと思つて、四五間後から從いて、若し姉樣に危險な事があつてはと思つて居ると、男は立町の角て別れるらしい、しきりに何か言つて居たら、姉樣は笑ひ乍ら、風呂敷包から白い封筒——寫眞らしかつた——を出してお渡しなさつた。男は滿足そうに、茶中折の帽子を取つて、輕く會釋し乍ら別れた。姉さんは京町を眞つすぐに、家の方へお歸りなさる。僕は靴音を氣にし乍らも小走りて、立町の角まて來て「どんな男かしら」と町を透して見たら、男は角から、三軒目の煙草店て買物して居た。未だ二十四五の色の白い男だつた。彼男なら每朝縣廳の門を入るのを見かけるのだ、とうなづいて姉樣に追ひついたら、妙にニコ／＼して居らした平生沈み勝の姉樣には全く珍らしく冴え／＼してゐらつしやるので、僕も嬉しかつた。宅に歸ると平常の通

り、沈んだ姉様に成つてお終ひなさつた。
僕は彼の男の事を尋ねようと思つてるけれど、如何しても云得ない。

も少し姉さんの胸の奥が出て來さうなものだ

○約　束

名古屋　月　霊　子

月給日の午後は最う良作の懐中は淋しかつた。朝から何時になく元氣の好いお久我の顔を見ると、非常に心苦しく感じた。

夕飯後二人は連れ立つて下宿屋を出た。途々お久我は最う裏布の見積りや、柄や、色合の事ばつかり考て居た。何時か行會つた、粹な女の姿を思ひ出して、其の時其の女の着て居た、着物の柄から、色合からすつかり見た儘に、自分のも『さうしよう〳〵』と、さうも思ひながら、思はず足を浮かして居た。

不偶良作が見えなくなつたので、お久我は一二間足を返して、キヨロ〳〵しながら、辛と『古本有り』と書いた紙札の下に屈んで居る良作を見付けてホッとした。

其の店には脂ぎつた赫い顔の男と、皺の寄つた蒼黒い顔の女とが煤臭い古本の中に蹈くまつて、食事をして居た。良作は一錢か二錢の間を、意地になつて云ひ爭つた揚句、二冊ばかり手に採つて出て來た。お久我は何となく良作を見て氣恥かしい事に思つた。

『堀り出し物だぜ、どうだ是れから古本屋を片つ端から素見して歩かうぢやないか』

這那事を云つて良作は連りに、古本の中に時に意外な物のある事を話した。お久我は心を空にして、唯默つて頷いて居た。

暗い小路を脱けて急に明るい道を歩いた。街の兩側にズラリと並んだ露店には、蟻のやうな人のかたまりが、くつ附いて居た。カンテラを兩方に立て、種々の本を莚の上に、順序よく並べた露店の前までくると、良作は人を掻き除けるやうにして、本を一つ一つ取り上げて見た。お久我は焦々して、躰を搖ぶり〳〵其の後に佇つて居た。往復の人が、良作のねぎる騒がしい聲を聞きつけて、好奇な目をして覗いて行く。其の度に乾度お久我の姿を流して見た。

『恰度か、宜しッ』良作は勢ひよく財布の底をはたいた。急にお久我の胸は搾られるやうに感じた。熱い泪

がポロ〳〵零れるので、其れとなく手巾を出して、高く鼻かんだ。

『どうだい、安價だろう、新て買やあ是れて十圓がものはあるぞ』這う云つて、良作は嬉しそうに十册ばかりの本を捧げて見せた。お久我は聞えない態をして、横を向いた。

『最う歸ろう、何處まで行つたつて同じ事だ』

良作は態と空惚けたやうな顔をして、其處からブイと踵をかへした。お久我は良作が憎いといふよりも、自分は良作の爲めに何だと云ふ事を考へて、泌々情けなく思つた。其の時不偶前を行く、若い女の、テラ〳〵した塗下駄と、白い脛にまつはる友禪のけだしと、ふんわりした綿のふきとを見て、お久我は寒さうに袷の衿を掻合せた。僅か一錢か二錢の費にも目に角を立つ程の月給取りの果敢なさを、身に泌みて厭はしくなつた。

明るい街からまた仕舞屋の立並んだ、陰氣な路へはいると、良作はお久我と一共に歩くに忍びなかつた。

『何有、買つた處で畢竟縮箭の肥だ。妻の一笑が俺のパンを得る道に直接何のもたらす處がある』と這う思つて見ても矢張り氣の毒だ、濟まないと云ふやうな感じを去る事は出來なかつた。

『私は今夜一體何しに來たんだらう』と突然お久我が呟やいた時に、良作はぎくとした。

『何しにつたつて、好いぢやあないか運動になつて』

這ういつて良作は媚びるやうに、そつとお久我の頬に接吻した。お久我は急に燥いだ態度をした。お久我は心の中では泣いても、平氣で居やうと云ふ虚榮が有た。

『其の本の中には好いのが有るんですか』

這那事も云つて見た。

『あ、あ、有るとも、先づトルストイの復活にさ…………さうだ此の青果の壁上なんぞ此間出版されたばかりなんだよ』良作は渡りに舟といふ格て喜んて答へた。お久我はまだ雜多出來つたけ面白さうに、詰したり聞いたりして、可笑くもない事に聲を立て笑つた。良作はお久我の笑聲を聞て、無暗と安心して了つた。

お久我は其の夜寢つくまで、『着物一枚買つて呉れえない、意氣地無し〳〵』と、心の中て繰返し〳〵罵つて居た。

こさいものだ。然らされはまだ感じ方が足りぬのだ。



詩

河井醉茗選

○海の底（天賞）

神戸市　田中落葉子

光がさす、暗い〳〵海の底に
只一線スウーと美しい光が——
見て居ると喘ぎながら
痩せた魚や病の樣な魚が
岩の影や藻の中から急いで來る
この細い光の中に這入らうと思つて
——
光が消える眞闇になる
何處からか白い風が吹く
とあはれな聲をたてゝ
海の底に魚が騷いて居る
しばらくして風がやむと
夢の樣な光が流れ込む
どうしたんだらう魚は居ない
と見て居ると目の大きな口の大きな
恐しい魚が一尾
どこからか、この光の處へ來た
愉快さうにさも誇らしう泳いで居る
物もない靜かな海の底に——

一際優れてゐる、詩を解する者は少くもこれ位な空想の境も知らればならぬ（評）

○紅の紐（人賞）

茨城　黒澤とよ子

山茶花にあかい日がさして、靜な日だ、私は障子の破れ目から、廣い〳〵秋の空を眺めてゐると、女がひとり、髪をふりみだしてかけて來る、又男が女を追ふて來た。女は紅の紐を、眞白な手にからんで持つてゐる。男はその紐を、取らうとしてゐるのだ、女は渡すまいとあせる、「さあその紐を放せ！」と男はあら〳〵しく、女に近づくと、「いゑ放しませんたと へ死んでもこればかりは……」と血走る眼で男を見た。男は力をこめて、ぐいと紐を引きしめた。ああ女の細い手は切れさうになつた。男はます〳〵つよく、引きしめる。女はなほ堅く紐を握つてゐる。男はまたぐつとひきしめた。

真白な女の手から、赤い〳〵血がだらだらと流れた。

散文になつて了はないやうに氣をおつけなさい、此作ぐらゐならよろしい(評)

【秀逸】

○蛇の炎

東京　夕ほし

どうしてこんなに夢をみるのだらう
神經が過敏になつた
そうだ、神經衰弱!と、女は獨り言して、うら〳〵しいまひるの空を、あてもなく仰いだ。
肉眼ては見えるか、みえない幾百の神經。重り合つてゐる、蛇の中に、取り卷かれ、悶いても、悶いても、身動きすら出來ない、手も、足も、胸も、蛇の炎に、我ともなく溶け消えてしまつた、昨夜の夢をふと思ひ出して、慄然とした。
かの蛇のやうなものを、神經といふのてはあるまいか、俄に頭がグラグラする、蛇!?……、刹那、女の全身は、たとへもない、恐怖の念に滿された。

女自身と云ふことを今一際强くしてみたら好かつたに相違ない(評)

○月と吾

A

今、天地に曇れるは月と、はた吾心と――。
執着の愁に其月くもる。
夜の雲けおもくたれて下界と天界のけじめ閉すと。東に雲流る、
月くもる。
愁に靑き月の面よ、
嘆に冷えし吾頰よ、
あはれ魔におそはれし子は、弱く暗の沈澱にくぎられしみぬよに誘はれんとして、ゆくに足こはばる
かくて冷たかる地に身をすえて、
ひたなきぬ。
月はいま、なやましげの瞳下して
あはれあはれ又、雲に掩はれぬ。
月よ月よ雲に沈む勿れ!
死したる地にみをなげて、
凍えける瞳すゆれば、あゝ月曇る、
雲は流る、
雲よ雲よ、月と吾とにつながるゝ
糸をばきる勿れ、しばしは、
月をわれにゆるせ――

調子もあり、感情も高い、惜むらくは平凡他奇なきこと、此際お孃樣らしく澄してゐてはいけない(評)

○扉

伯耆　足立春子

誰てす!またしても〳〵、
そんなに擊つてはいけませんよ、
見なさい、此のいた〳〵しい扉を、
今暫て破れてしまいますよ、
それてもあなた、破つてもいゝてすか、
此の!此のいた〳〵しい扉を、
やつぱり擊つのてすか、
じやあ少し!、少し
ひく〳〵打つてください
扉の震動の少しづゝ

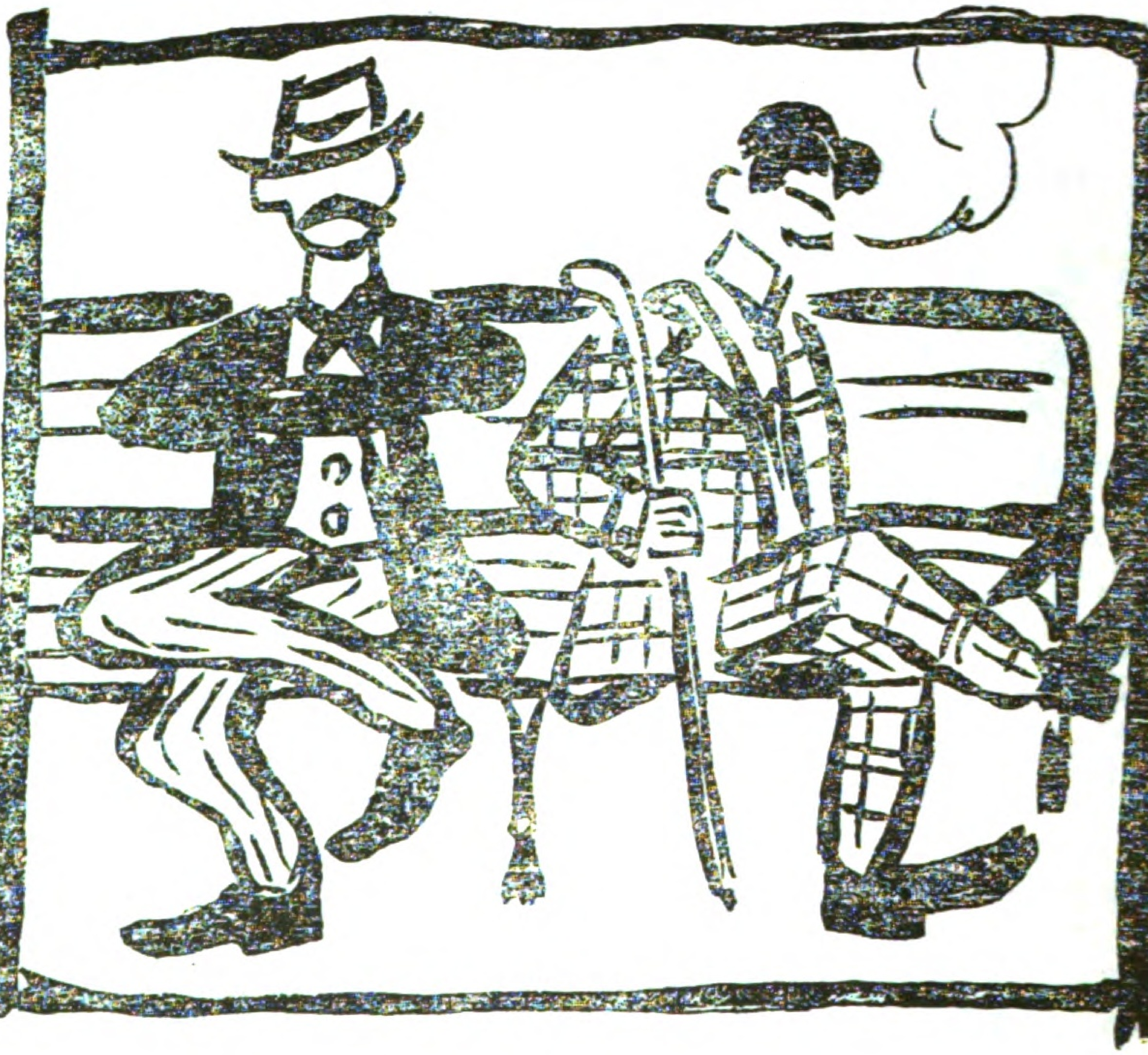
聞へる樣に！、いつ迄も。

「見なさい」には少しお里が見えます（評）

○喜劇

岸　つぎ子

奇劇なり――
おどけ心
てきごゝろ、おかしき夕べ
ふと我行くと
君泣かせ興じけむ。
その涙、いつはらめ
泪とは何時かなりぬ
今思ふ。
抱擁の丘のまぼろし。
喜劇なり――いとつらき
さなりいとつらき――
あゝ我が生の奇しき行路よ、
老いらくの冬のしじまは、
おもはする、泪とともに、
そのかみの曲げごゝろを――。



ベンチの人　水戸　小堀としこ

覺つたやうな、覺らぬやうな、現代に通有な

好い詩想を捉えながら、猶やりつばなしたるを免れない（評）

○まぼろし

殘　月

湯が盥のふちをタブリ〳〵こえて、白いみ影石の上をサラ〳〵と流れて行く。

あの流れる音を聞き得たなら、山と山との谷の間を流れる岩清水の微かな音よりも猶可愛いだらふ。

タヲルへ石鹼を泡立たせ、目をしかとつぶつて顔を洗ふ。

ふと私の眼の前には、幾萬の群集がどよめいて居る、若い人、老いたる人、男、女、低い高い其の中を北の方から立派な青年

が人浪をかき分け〳〵だん〳〵こちらを向いて來る、丁度私の前まで來ると馳け出した、一心に南を目ざして、何事か深く决心したらしい顔つきをして、あゝなつかしい姿、戀しい後影

私をすてゝ追ふものは何？
憎い人ねたましい人。
顔を洗ふてしまふて眼を開けると同時にまぼろしはフッツり消えた。
夏のはげしい日射は青葉のかげから斜に私の白い身躰にまで達いて居る

夏の晝らしくない、寧ろ初めは夜かと思つてゐた(評)

○ゆく手

信濃　吉川多美子

何處へ行かうか？——
私はいま、新らしい「時」の門に立つて居る。
華やかに粧ふた春の人は、
皆一齊に、新らしい「時」の門出を讃美しつゝ、或る——行手に足を運ばして居る。
何處へ行くのだらう？——私は。
私は行くべき路を知らぬ——
知らなくても行かねばならぬ。
後から黒い冷たい影が追ひ迫つて來る。——
「行け！行け！」、汝の行くべき處へと、唆かして居るやうだ。けれども……
あゝ私は、何處へ行くのだらう？
誰も教へてくれるものはない。
漂渺として、無窮に繋がれる「永遠」は
いま眼の前に、無言に私を迎へて——
その「第一歩」を瞶て居る。

新代人の考には相違ない、歌としてはまだ〳〵情緒がない(評)

○炭の赤くなる一時

牛込　星野あい子

圓い黒い、そして冷たい炭が、互みに抱き合つて居る。——相談でもして居るかのやうに——、灰は畑畝のやうに四角にならされて居る。
カン——カン——……と灰の底の底の方で何か響くやうな音。
あゝ、あゝ見給へ、炭の腹があんなに赤くなつて居る。もう堪へ切れなくなつたのだらう。あの腹、あの胸。
何故かたみに熱を起したり、火を發したりするのだらう。
火花がパッチ——パッチ——と飛んだ。あの勢ひでは、未だ〳〵赤くなるにちがひ無い。そして赤くなつた後で、身體が勞れたら何うなるだらう。

創意ではないけれど、散文詩の見當はついてゐる(評)

○醒めし心

金澤　むらさき女

華かなりし
甕の美酒を
歡樂の
飲飽きて

只夢醒めし　如くにぞ
若き心は　眼みはれる。
身中の血汐　ことごとく
手先にこめて　眞暗なる
闇を探れば　あな奇しや
右も左も　壁なりき。
騒ぎたつなり　我心
焦れし後は　疲れ果て
身動きならぬ　箱中に
「悔」の潮は　よせてきぬ。

かたすぎる(評)

○月はいまだ

横濱　せゝらぎ

杜かげの家は廢朽れぬ
落葉こそたゞ風に鳴れ
かさこそと蹈みゆくは人
その森の奥がに消えて。
佇むは我のみひとり
新月のいづるをまてば
夕のかね、靜かにきゆる
森のおく精やこもらむ
またゝきてうるめる眸の
木を透いて星はみゆれど
戰ぐ葉にそらは遮られて
あゝいまだ月はのぼらず
華かの幸は逐はねば
沈默の森こそ慕へ
のがれては人なき國に
われ一人入るとはすれど
わが想ふ國はうつくし
わが慕ふ地は廣きに
戀もなく束縛もなき
自由なる天地をおもへど
月光の、せめては下に
安息の墓をもとめむ
かなしみの胸のひとときに――
あゝいまだ――月はのぼらず。

月のぼる前の感想などは實に歌って歌ひ盡きない程の强い調子のあるべき筈だのに、斯う單調では何ともしやうがない(評)

○白い石

土佐　寂靜子

あゝ此處で再び彼の人に逢へる氣がする、紅くなつた木の葉のちら〳〵散る下に、わざと置いた樣な白い石、腰かけて語つた白い石立つたり坐つたりして野の道を透かしみた白い石彼の人を待つ時の。紅い木の葉がちら〳〵散る。あゝ再び彼の人にこゝて、今、今、逢へる氣がする、優しい瞳、黒い大きな眉、「愛します、」きつぱり云つた彼の聲、唇、熱い紅い唇!!、再び此處で彼の人に逢へる氣がする。あゝ散る紅い木の葉、白い石、彼の人。

此の如きやりつぱなしは却って愛すべし(評)

○嵐する夜

美作　霄子

見よ大空のそこゝに
烟に似たる雲佗しげにうかび出て、
貧しき日は暗く恐れふるふ。

垣根に美しき花空しく砕かれ
冷たき香のみ恨みはながし
あゝ、うたへる小鳥も疲れては
いかにせむ、嵐する夜のかなしみを
……

陳腐なやうだが何となく懐しさがある(評)

○鐘　和泉　香雲子

朝霧かけて　おほいなる
野の寺の　鐘は聞えぬ。
野の寺の　鐘の音につれ
丘の寺の　鐘も鳴り初め
野の寺の　弱き響と
丘の寺　強き響の
鐘の音あふ
いと廣き田の面をすぎて
我胸の　絃にふるれば
野の寺の　鐘の音に似し
弱き響は　起りぬ――。
丘の寺の強き音を君に與へむ
君がみ胸の　高き音に
我が胸の　低き音と
相ひびかむ

二つの鐘の音はよかつた、それだけ(評)

○電線の唸り　熱海　片山　里

怕ろしい夢に襲はれてふと眼が醒めた。
眞夜中である
枕許にぼんやり有明が點つてゐる、
静かだ――恐ろしく静かだ……
心は又た眠りを促す――と、
静寂の底から仄かな音が……耳から
心へ稲妻のやうに流れ込むだ。
……何だらふ……何だらふ――
私の神經は震へながら鋭敏に駛けめぐり駛けめぐる――
……
電線の唸り――さうだ……
死んだ人――死ぬ人――
呼び交はし泣き交はし行き來する靈魂の跫音だ。――
おゝ可厭……可厭……ぢつとしてゐられぬ。
蒲團へもぐる――未だ聞える、
耳を掩ふ――まだ聞える、
焦心つても駄目だ何時か汝もあの音を立てるのだ、と何處かで言ふ。
逃げやう〳〵と心が叫ぶ。――
おゝ可厭な音――まだ……まだ……
……

所謂官能の刺戟であらう、強くは言つてゐるがまだ心からの誠實な態度とは認めかねる(評)

――――

○花びら　濱　子

或暮方、只一輪しか咲かない乳色の花にバラ色の夕陽が照つて居た、もう〳〵羨ましい程美しい色彩。
其瓣がホロと地に落ちて終つた、マアどうしやう、……妾は拾つてソッと唇にあてた、散つた後の淋しい姿……
拾うた瓣がだん〳〵黒ずんでゆく、晝日も暮れて終つた――。

○メロディ　愛知縣　服部　徳穂

白々と
音樂の如く
あゝ――月は照りぬ。
いづこより……はた

いみじき夜るのメロデイよ。
なま白き
夜霧て咽ぶ
いづこへか……
風もなき——あゝ月光をあびて
……
あふぐ
涙ぐみし空には
ほゝ笑みつ歌ふ——月の夜のひ
とふし。
いづこより……はたは、
いづこへか——
調べゆく、あゝ
いみじき夜のメロデイよ。

○奇なる印象

鏡孤

あの窓——あの窓
やにわに近づくとふと消えてしまつた、
スケッチブックにする〳〵と鉛筆を走らして居る、つとのぞいて見ると私の姿だ、
何だかからだが強くつよくおしつけられる樣な氣がする、
ラケットと金色の徽章とが目の前にちらつく、それもまた消えてしまつた、
此度はからだがクル〳〵まわつて今にも倒れてしまいそうだ、
けれど自分はぴつたり机の前にすわつて居る。



○叫びも得ずに

古田秀枝子

に充ちた一室に深くもだしの青い灯が、私のよわい頬を流れる、少女！
力かよはき女の名とは知れど
呪はれの戀を抱いて、今私は誰れの名を呼ばう。
花も小草も枯れ盡きて、果て知らぬ大野に迷ふ子があるならば、それは私の心てあらう。
赤きはわれを嘲ける色とうす紅の棘絹裂けば、音もなく消えて行く若き日の追憶に、昨の夜も破らんと心狂ひし繪の人を、また懐しく抱きしめて、冷えた涙の灯に光るを見た。

三本杉　筑前

坪井よし子

○霧の海

沼津　植松操

柔らかな狭霧が
ゆるく流れる——
苦しいやうな——
悲しいやうな——
波のうめき聲が
暗い狭霧の間から漏れてくる
私は一人渚に立つた
淡い薄い夢のやうな漁火が
消へては點つてゐる……
細い吐息の消え行く、玻璃窓には風も無く靜寂　霧の中から流れ出てオゾンの香が

咽せるやうに
强く濃く我が官能の庭へ
狭霧が靜かに流れてゐる——

○木枯

奈良縣　國西たづ子

木枯に霙さへ交へて、吹き荒てゐる。
私の心にも……
庭の落葉は、非常な勢て、高く／＼卷き上げられた。そして天に漂つた、果ては何處へ、再び落ち着くてあらう……
あゝ。若し、我が魂魄に影があるなら——さうだ。丁度彼の落葉の樣だ……

壓迫

播磨　さゝ舟

夕ぐれだ。薄ぐらい町をぬけて野に出た。町の周圍には一體に薄黑い煙が取りまいてゐる。自分は今まであのむせくさい煙の町の中に居たのだ。
灰色の人は煙の中を彷徨ふてゐる。
何だか恐ろしく胸がくすぶる。
町の煙が流れて來たのだ　思はず後にすさつた。
廣い／＼野の眞中に來た。胸がすつと開いた。
煙もない、雲もない、只靜かな自分の天地をゆくりなく見つめた、
ぼこ／＼した茶色の土の上に赤い實が落ちてゐる、うめもどきの樣だ。あたりは暗くなつて赤い實の影は見えない。
町には淋しい燈火がついた

○弱者

白露

北の隅から現れた灰色の雲が見る／＼空を掩ふ
にじむ樣に。
いやに冷たい風の吹く時——
黃ばんだ桑の病葉に
疲れきつた、羽根の破れた蝶が、
憐れみを乞ふ樣にすがつて居る。
あれでも命が惜しいのかしら
弱いものよと嘲笑つたが、
すぐ後から思つた自分の身を
あゝ同じだ弱い子だもの——
儚ない冷たい心に成つた。

○病床

丹後　蠶内若葉子

隅端に小さい洋燈が、
蒼づんだ光を放つて、
淋しく室内を照らして居る。
雨がしよぼ／＼降りだした。
私は寐返した。そして天井裏を凝視てゐると、
ぐる／＼回轉ながら下つて來る。
危險い……
何だか烈く體を押へる、
と、思ふと、暗黯が周圍から迫る、
……凋落……死……腐朽……
逼迫おもひが交替胸を領してゐる。
不安……滅却……
けれども、あゝ……泣くまい。
運命を言ふ底知れぬ力が全體を支配してゐるのだもの、
誰だか戸を開けて、はいつて來る、
看護婦だ。
雨が矢張降つてゐる。

○思ひ出

府下　坂口とら子

その當座の妬み……悲しみ……嘆き
ああ夢……
長しへに
夢は悲しきものよ、又思ひ出多きものよ、
淡き野邊、はた寂寞の森に
手に手を取りて、そぞろ歩みしとき、
幸福の光りは
みつめしその眼の中に北斗とさえぬ温き血しほは手より手に、
「戀になやめる人もあるか」と叫びし時は
早や數ふ、幾年月ぞ
ああ、何をか嘆かむ
甘き戀の期間は短きものよ、辛きは氷に冷し骸軀を
靈深きこの武藏野に埋めむ
さらば君夕日は沈む

○眼を瞑つて

越後　吉田かほる

高い教會の玻璃窓から眞晝の日が壇上の、メッキ花瓶に映つてキラ／＼と鋭い光線が反射して私の眼を射る。
タッ……と睨む樣に見詰めて居ると段々强く射す最うたまらない茫々として何も見えない……目を閉ぢた……暗い——眞闇い……魂が凹んで、底へ／＼と滅びた國へ行く樣な氣がする。
又一層强く力を入れる
耳がゴウ／＼と海鳴の樣に鳴る……白い小い輪の樣な物が眼の中でむら／＼と湧く——熱い

涙が出る――。
靴の音が高い天井に響いた――
急に瞑つた眼を開く――牧師が壇上にのぼつた
――影が二つになつて、どんよりと。
私は頬につたう熱い涙を拭うた。

○波濤

筑前　中西まさ子

ほのしろく孕める空は
もの寂し見よはるばると
つらなれる磯の涯遠し
見るはあゝかの南極の
氷光力……大海の一つら……
つめたげにしづめる光り
光なく朶にはあわれ
騒ぎ立つ波濤の色の
つと躍り白く崩るる……
灰色の心は波の
空に泌くうれひの胸よ
なげき伏す渚はくろし
どう〳〵とかゝる時聞く
山上の森の呻吟のごとくにも
ゆらぎなる波濤のひゞき……
やゝあれば其のうつゝ
潮鳴り近き來り
みる〳〵に渚は浸たり
たぎり落つる潮泡
磯はたゞあらそいあらぶ
涯しなき大海のひかりぞ
うすれゆけあな灰色の
波濤のひゞき

○山にゆきて

四多摩　三ヶ島芳子

村人の集合の席にわが室は清められ
机針箱糸車せまき納戸に片づけられぬ、
約束の時間は來られど、人はなほ來らず、
寂しく待てる火鉢には、おこりはてたる火を包む
堅炭の灰眞白なり。
わが家なれど室なれど、われまた入るにしのび
ざれば、ひそかに出てて山に登り、
自然の室にこそ忍び入れ。
道は落ち葉にうづもれて、
冷き土も踏み得ざる
服物滑る階段は美しき布敷かれたり。
幾本立てる丸柱、石にも玉にも増りけり。
しばしもたれて背に抱けば肌の温みもうつろひ
てはなれ難きにぞ榛の木によりて打仰げば殘る
楓の紅ゐにけふも迎へずかの空に
くれゆく秋の夕日かげさして輝く木の下に
眞白き野菊の花さへも夕紅さしてうなだれぬ。

○夕暮れ

伊豫　本多白萩

裏口から外へ出た、何の考へもなくひとり、西の山の麓の方に、農夫のたく、かゞり火が、夕もやにぼーと！にじんて、廣く高く
それ〳〵次第〳〵にうすうなつて、おとは只御定まりのおとなりの、琴の音のみ？
物音一つしない、
虫さへもなかぬ？静かだ？あゝ？かうして私の好きな〳〵秋は、あの、煙よりも静かに静かに逝つてしまつたのか。

新詩句

本月も新詩句は極めて振ひませんでした、新詩句と認めて宜いと思ふやうな句は殆んど一つもないと言つて關ひません、僅にそれに近よろうとして未だ技倆の足りないと思はれるものは四五句ありました、それを左に掲げます。

朱塗の欄干に白い雪が積る　雛子
秋草の帶きとしむる、人は瘠せた　華水
眞白な霜の上に山茶花が一つ落た　とよ子
夢の様な月、女はしかと抱かれて　はる子
春の風に花は魂誘はれた　ひな子
風、枯野の電柱が泣く　寂靜子
月が物言つたとみると白雲が掛つた　若葉子
あゝ靜だ、深く、深く沈んてゆく心　小菊

新詩句はむつかしいものに違ひありませんけれど、皆さんが恐れたり迷うたりする程のものではありません、要するに混沌として未だ形式も體裁も出來てゐないものですから、斯うでもあらうか、あゝでもあらうと迷ふ必要はないので、只向ふ見ずに思ふことさへ一句に仕立上れば宜いので、却つて其點に於て初心の方は入り易からうと思ひます。

夕のとひ

湖畔の女

ひとゝき燃えし晩秋の夕日
つひに——暮れて紅葉のいろ衰え
冷き影ぞたゞよふ——。
　ひきかへしゆく光の浪
あゝ落潮の音——闇のひゞき——
そこひもなきなげきのふちに
くだりてゆくその深さ——。
夕の鐘はかはらぬ淋しさを——。
……落潮の音につれて沈みゆく血の
人の耳にささやき……
悲しき或物を見とめさせんとするさ
ま——。
　あゝ　　あゝ……
かゝる夕ぐれの
その大なる問ひに對して
答ふる言葉を知らぬ我身——
小さき我身の耻ぢにかくれんと
足音を竊みつゝゆく愚かしさ——
いつまで—いつまで—身のはぢに
自らかくれんとはするぞ——。
ひざまづきつゝ額に加ふる手
口にとなふるさま／＼の祈りの
たゞからなりす木の葉の如く
むなしく地におちての後の驚き……

さびしさに　（十月の一日）

冷かにすき透うつた十月の天地
しみ／＼と知る深いさびしみ
（水の樣にすき透つた空
空の樣にすみ切つた水）
聖きにふれて暖まらぬ胸の
しきりになづかしみ感ずる
何をかの願ひの
むなしくもだして居る痛い心
もつと—もつと—と迫る思ひ—
ゆきかふものにすがつて
訴へんとするそのこゝろ——。
憐れに鈴をならしてゆく
小さい動物のむく毛にも——
絶え入る如く淋しみの
小鳥の羽の重きにも
我此羽織の赤いうらにも
そのはかなさが迫つて居る。
いろかへて日に日に窶れゆく木立に
すゝり泣く果實のはかない運命を
ほとぼりの覺めた冷い
日光のなほもまつわつて
次々までのばしてゆく生命と——。
片日かげに霜を見る冷な道を
そゝ走りゆく敗殘の子の
背に負ふた幼いものゝ
色の黒さと蒼さと
目の縁の爛れたると眉のぬけたると
さま／＼の遺傳をあらはに
やゝ暖い日當のかはを
とりとめもない思ひを抱いて
光のさすかぎり、追はれ追はれて
泣きながらもゆくはかない、冷い十月
あゝ淋しいつれない姿と——
ほとぼりのさめた日光のさして……

散文



編輯局選

○朝の光（天）

東京　鈴木春子

暖かい、唯暖かい。一種の輝きを含んで赤々した色に火が燃えつゝある。其をぐるりと圍んで、弟や妹達がうつとりと夢みるやうな眼ざしをしてゐる。

焚火は、ぼうつと高く燃え立つ。其赤い炎の上から、まわりから、白い烟が輕う波うちながら昇つてゆく。そして散らかす樣に、もや／＼にもつれたり、ふうつと吹き外れて、私の亂れ毛をかすめたりする。風が吹くのだ。其炎や烟の渦のなかに、絣や、眞白いアップローンや赤い裾などが、ちら／＼してゐる。

長弟は十五、細長い顏で、くつきりと眉が、女の樣な優しい丸みをもつてゐる。けれ共、少しも特色のない平凡な齒がゆい子。次は、きつと顏の筋肉のメつた、はき／＼した江戸子肌、學課の內でも數學が得意。鐵雄といふは末の弟、非常な凝性で、體格も巖丈である、其僻、畫が大好きで、何時も默つて何かゝいてる。たつた一人の妹は、まだ四つである。赤い、ふつくらした頰と、房々した眞黑なおかつぱが目に立つ。瞳の働きも口の働きも兄弟中で一番、其替り、自分の言出した事は、理が非でも押通さねば止まぬ。今皆同じ樣に顏の筋肉をゆるめて、樂しさうに話してゐる。

渠等の小さい胸は、唯眼前の景で一ぱいになつてるやうにも見える。けれ共、其澄切つた各々の瞳に、不安らしい曇のかゝる事のあるは、大方、學校の先生の恐ろしげな顏や、生徒を叱責される時の教室中に響き渡る聲でもあらう。

母屋の前の敷石が鳴つて、お鍋を下げた母樣が、がら／＼と此方へ來る。其姿が、不圖妹の目に閃めくと、直覺的にお乳といふ慾望が湧く。

（おつぱい……母ちやん！……）。

縁台の上に座つてこしらへてゐたね〻様を、ころ〳〵と火のなかにころばして、見向きもせずかけてゆく。

私も、つと火をはなれて、井戸端にゆく。冷たい空氣が、すうと觸れる。

かゞやかしい朝の光線は、まだ地には射さぬけれど、かすかな白い光をふくんだ色が、冷たう澄んだ空へ〳〵と流れてゐる。庭の木の葉は、大分落ち盡して、赤い、烏瓜のからんだ籔の上から、少く頭を出したお隣の屋根が、すつかり見えるやうになつた。それでも蜜柑、木こくなどは根强い生の力を深緑の葉に保つてゐる。木こくの厚い葉には、焚火のやうな暖かい色をうつすらと含んで、微かなやさしい音を立て〻この冷たい空氣のなかに暖かいさゞ波を漂はしてゐるやである。——

天然を觀る力が一段と深く、且新しい、印象的の描寫も鮮明で耽美派とても謂ひませうか、兎に角忠實なる藝術的態度を嬉しく思ひます（評）

○雲見る朝　（地賞）

伊豆　A

夢の樣に波がひいて墨色した砂地が、一間ばかり上つて居る。未明なので足跡一つ無い、先づ私がつけてあるく。かわききらないて、水がペチャペチャ殘つてる處は薄氷でも張つてる樣。遥か△△橋のほとりへ一隻の舟が上つたらしい。此船は宵に網を伏せておいて未明にあげて來るのだ、伊勢ゑびのピンピンしたの、かわはぎ、島鯛等が主にか〻る。網を一ひだ、一ひだたぐつて、からまつた魚をぬく、さゞえもつく、惡く引か〻ると、中々ぬけない。どうしても破れるとみえて、毎日干し乍ら繕つてゐる。竿に干す時、海の雜草や藻の美しいのがハラ〳〵と落る。都からきた當時、それを見付けては、非常に嬉しがつてひろつた、赤い色した木の枝の樣なのはサンゴだと喜むだ、がこ〻に、三年、もう目もそ〻がなくなつた。私は其當時を思ひ乍ら〇〇〇山道へと足を向けた。山も空も未だ醒めないが、今日も晴らしい、そう思ふと心が勇む。日ごと一とところをあさるより致方の無い今の身、天氣が何よりも嬉しい。空に瞳をやる。朝々に光無い身を、しいておこして、變つた雲をみ、一日として同じで無い神の仕事を仰ぐのがせめてもの今の光であるけさの雲は、昨日よりは劣つてゐるが、大厦、高樓、立つくす都て見るとは、氣持が違ふ。薄緑にすいた海、はるか水天の際、鼠色の雲の、おどみ永く横にひかれて、其上を朱色の雲が羽衣を擴げた樣に、ちらばつてゐる、砂のぬれた部分へ空の雲のいろいろが映つて、朱色のくもの美しさ、藍はかゞやいて玉蟲色に、落はえてゐる。

あゝわび貝の内面をみる樣。雲は動かぬ。私は立止るてもなく、徐々步むて、神社の階段から山道へと出た、松の木の茂みが暗い。

太陽が出る三分——五分——もう一寸、せり出しをみる樣な氣持で——。半身形になり、卵圓になり、あゝあゝ、天地は今めざめた。

砂利道をふむてすべる樣に坂を下つた、米搗小屋のわきて川に向つて揚子つから男を先づみた。



冬枯れ　相模　善浪達子

日は雲に一たん掩はれたのだらう影がない。僅に、金茶色の雲の中に、こほもりが翼をひろげて並んだ樣な金色のくもあるばかり、それがだん／＼逆まく波の樣なかたちにうつり行く。

（朝の日記の中より）

注意深い作（評）

○スケッチ（入賞）

羽前　あらゝぎ

がさ、がさ、——がさッ、——今朝、淡雪ほどに白かつた霜に畑の桑の葉が落ちる音であつた。

裏に向いた窓を明けて、眞赤な灰のうへの炭火を、またなきものとみつめてゐた眸に、面を撲つ冷氣の泌むと覺えた時、外に吐く、息が白かつた。

朝日がとゞかない方は、音もさせなかつたが、見てゐるうちに光がゆき渡ると、ばらり〳〵落ち初めて、やがて、誘ひ合はしたやうに、見透す木の間を、ばら〳〵と落ちる。がさ、がさ、——がさッ、微かなやうて强い響き。それは地に布く音かと思つたら、梢をくゞる落葉のすれ合ふのてあつた。

私は、何か樂の音ても聽いてゐるやうに、氣がそは〳〵して、何時までも窓にたつてゐた。

私の目には、そこらの亂雜なのと、とりとめもなくうごいてゐる埃ばかり見えて氣がむしやくしやした。

今朝櫛の、齒を入れなかつた髮の下つたのも煩るさいが、冷ッこい襟頭に、手が觸るのがぞつとしさうに思はれてそのまゝじつとして逆上せた唇の皮を剝いてゐた。日向に顏を向けると、いつも自分の頰が淡紅に映發つて見えるやうて——うつとりとなる。まぶしい眼を使ふと後れ毛のいく筋かゞ、ぼやけて、横に、綠、赤、紫、黄、など虹の色々に輝いてみえる。

唇がピリ〳〵痛むて指先に少し血がついてきた、急いて白紙をあてゝ、ずらし〳〵指て押へてゐた。

頭か疲れたやうになつて、着物を通す日の暖みが、背にばかり感じられた。

きちんとしたい、片附けたいと、思ひながら立てなかつた。

桑の葉の落ちたる有様は初めて聞きました、なるほどスケッチに書くだけの價値はあります（評）

【秀逸】

○襟祝

德島縣　吉田紫花

裏の絹樣が明日お輿入をするので妾は今日其の襟祝に招かれた。

餘程早かつたので未だ誰も來て居らぬ樣子お勝手の方から華やかな笑聲がもれて來る、軈て絹樣のお母樣が出て來られて、サア〳〵どうぞ表へ、格別見て頂きます樣なものは一つもございませんけれどと先に立つて案内せられる襖を開くと御親類の伯母樣が一人座つていらつしやる計り、三つ四つ置き配つた火鉢には今ついだ計りの炭がチン〳〵云つてゐる、十五荷といふ調度は只もう千紫萬紅、見るに眼も眩く位てある、先づ正面の衣桁には明日着て嫁かれる三枚重ねが掛つてゐる、雪よりも白い白無垢は汚れなき處女の心と姿水

色、紫、色様々で五ッ通り、水仙の丸の紋はやさしい絹様にふさわしい、金糸の光る帯も幾筋が懸つてゐる下には木綿物の常着が山の様、絹様がまだお乳をのんでゐる時分からお嫁入りの支度にとて機音の絶え間もない位であつたが斯う澤山にとは思はなかつた、次は絹物の小袖、ふつくらと綿を含んだ色の好いふきが美しう重なつて八ッ紅絹が匂ひこぼるゝ、此の中には妾が縫つたものも五六枚交つてゐる、呉服屋の來る度にこれは新柄、あれは流行と買ひ蓄へたいうぜん類の切は帯や襦袢に仕立てられて襦袢には一々半衿まで掛つてゐる、新木の馨懐かしい簞笥つや／＼しい鏡臺、裁箱針箱などは只見事と云ふより他はない、此の澤山な調度は皆御両親の慈愛の塊、絹様の幸福が思ひやられて母のない妾は斯かる折殊に寂しい涙が流れる。

叙事は佳、然し情に乏し（評）

○ひでり

萩花

八月六日、空には浮雲一つない。三十日來の日照に土は乾き切つて所々割れて、ぢり／＼と烈しい日光の中を塵と一緒にとぶ。垣に朝顔は赤くこぢついて居る。楓は時ならぬ紅して、南瓜が二つ三つ蔓枯れて是も赤く苦し相に轉んで居る。種許りの萎びた茄子が光澤も失せて葉は茶褐色。胡瓜は赤く皺が寄つて四寸位で止つて了つたらしい。草や木葉は塵で眞白。水氣一つない畑の土は目も開けぬ位ぷー／＼とぶ。枯れ切つて疎らになつた生墻から撥釣瓶の畑井も覗いて見て居た二人の乞食はみり／＼とくねを破つて入つて來た十五六の目許り光るのと九つ位のと。邊を見廻し乍ら井戸の傍に寄つて來てきーと撥釣瓶を下す。と、ぎ、ぎ、ぎ――と異様な音をたてゝ釣瓶は下つた。小さい方のが希望の色を輝かせ乍ら中を窺いて見る。やがてつーと上げて釣瓶に口をつけて吸はふとすると水は半より入つて居ない。然して砂利許りざら／＼と入つて來た。乞食は手を離した儘其處に蹲れて了つた。ぢり／＼と日は乞食の顔にも照つて塵は目と云はず鼻といはずとんで入つてだら／＼流れる顔の汗にも附着した。小さい乞食は砂利の入つた釣瓶につかまつた儘つる／＼吸つてる

自分の血

默つて雑誌を讀んでた。とポタッと落ちた物がある。何氣なしに抑へるとピッチョリ潰れて頁の餘白の所になま／＼しい眞紅の雫が染め出された。自分の血だ：：私は見るに忍びなくなつて眼を閉ぢてそーと頁をくつた。

縣道

シットリと露を含んだ初夏の朝。リン〳〵リンリンと鈴の音。バク〳〵バク蹄の音。リン〳〵リンリンバクバクバク……。枝折戸あけて縣道に出て見た。手甲あて丶紺の巻脚袢といふきりゝとした装の十七八の村娘。淺黄の手拭をかる丶頬はほつと健康の色が匂ふて僞りならず美しい。むく〳〵肥つた栗毛の駒の轡を左手に掴んで。傍には四十二三の是も村女。「お八重さあ、おめえそんて酒田初めてだのう」「そうだいおら酒田初めて――」と娘はにこつり笑んで恥しげにうつむいた。瞳は奇望に輝いた――と思ふ。「そんては三日も居てゆつくりそらう見せて貰はねばならねえのう「ホ……」娘は勇ましく力を入れて轡を引きしめた。リン……バク……。やがて縣道の朝霧に包まれて了つた――。

何れも好小品「ひでり」は最も良いと思ひます（評）

○根岸めぐり（三）

鏡子

根岸と云へばすぐ胸に浮ぶお汁粉で名高い岡野も、庭の一部にわずかの名殘りを止めるぎり敷きつめた御影石をふめば「入らつしやい」と女中の呼聲に迎へられた玄關も、今は白衣の看護婦が折々行交ふばかり、門にかけられた「耳鼻咽喉科專門養生院」の木札を見ては其むかし「しるこ」となゝめにかゝれた風流な看板が、思ひだされる、此處へは小さい時父につれられて能く來た事があつたが道は一向におぼえがない。

パッと紅を彩る夕陽を絹張になゝめにうけて、空氣草履の音輕く明石縮のはでな單衣に鐵納戸にたつた模様の一重帶、稍根下りの島田にあげた艶やかな姿すれちがふ瞬間にぷんとする麝香のかほり、私は振返つたこれこそ現代にかくれなき閨秀書家根岸の里に住む女史であつた、私は道に女史の姿を追想しながらうか〳〵して一丁餘程を歩るいて終つたが、たしか其間には是と感じる樣な處もなかつた、やがてやゝ町らしい處へでたが其所を眞すぐに向裏へはいると程なく道は三筋に分かれて突當りに神社がある。たしか三島神社とかしてあつた、鳥居さわに狸料理鶯源亭と狸の繪のかいた瓦斯燈が立つて一方の道へ指さしゝて居る、きゝなれぬ名と思ふ、とむら〳〵と好奇心にかられて何となく氣味惡い心地しながら寂りした薄暗い道をたどると、道は神社の後をまわつて益々せまく、行く事凡そ半町にして左にまがると、すぐにそれとわかつたが是と音立てる程の家でもない、料理屋と云ふよりむしろ玉突場てある、而し狸料理とあるからには普通の料理ではないに違いない、と云つてまさかに玉突場へ入るわけにもいかない、仕方がないから誰かにあつたら聞

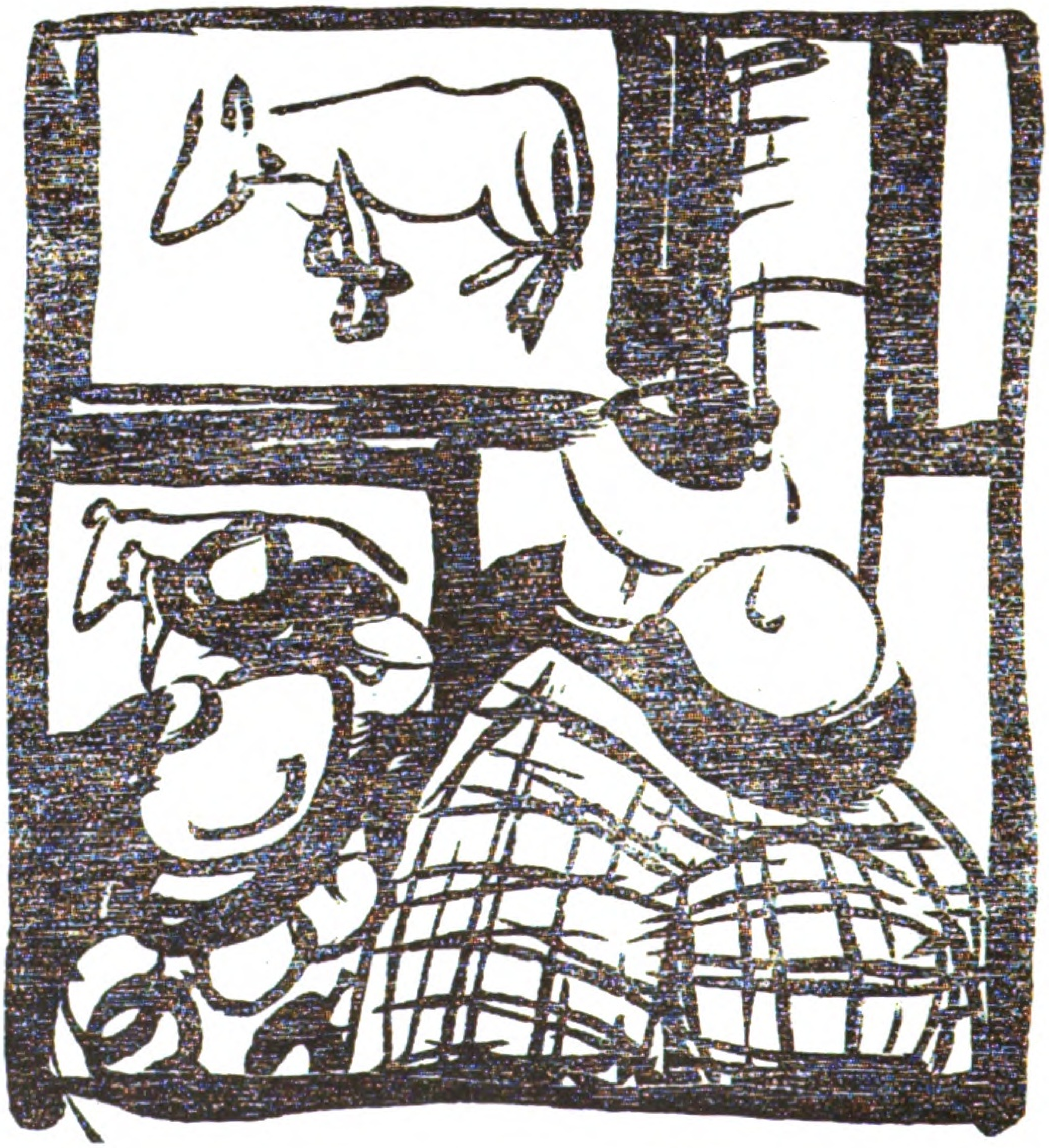
いて見やうと思ながら元來た道へ引返し、社の境内へはゐると、社殿に腰を掛けて三ッばかりの子供を守りして居るおぢいさんが居たので、早速そばへいつて、狸料理の内容を尋ねて見ると、聞いて終へば何んの興味もない話。あの横町を狸横町といふのでそれで名づけただけで料理には何の關係もないと言はれていさゝか氣抜けがした。

お馴染の根岸案内はます〳〵面白くなつてきました、ずん〳〵綴けて下さい（評）

○人は去つた

横濱　せゝらぎ

双手を擧げて止めるまもない人は去つた、消え難き傷みをわれに殘して遂に人は我より去つた。孤獨――限りない寂寥と心細さは犇々と胸におぼえる、花咲けど散り易き束のまの、わが春はまことに短い儚いものだつた。永久に永久に、身ははなされて魂は獨りに歸り住んでから、愛は渇いて胸は破れた、諸共に死ぬべかりし熱情も夢のたまゆらにさめかけた、逐へど返らぬ悌人よ、目をあげて偸み見し面は仄に白かりき、濃き眉毛、夢かに見てし面影は――うるめる眸のごとき星の耀き、地は闇ふかうして、言葉なく二人は立てりき、皷動のひゞきいかに高かりし、火よりも紅く熱く燃えたりしわが頰、手にふれてはたゞ慄きぬ――聲はなかりき。



繪馬堂　青森　松尾千代子

悲しき運命のまゝに漂つて、傷められし幼きわが魂は明るき國をすてゝ暗きに暗きにと迷ひ行つた。ふるさ

とはるかの地に慕ひながら、闇の底に魂のやすみを求めたけれど遂に許されない、さびしさは性となつて空虚な胸の奥に魂は哭いて泣いてゐるけれども。友とはなれ、母に背ひて希望もすてた、犯せる罪の今さらに大なるを知れども、誰のまへに身を投げ伏せて悔ひやう、心は遂に昔に返らない、誇りもなく華もなく、さびしさすら醫するによしなきに、現實はわれに絶望のものだ。あゝ孤獨、わがゆめはとこしえに寒くかなしいものだらう。さびしい。

鳥の羽の動くやうに、自由自在に動いてゐる情緒を淡む（評）

○解かれし被布

常陸　木村那賀子

一ツ一ツに解かれた切を眺めては、今更のやうに無念の涙がほろり／＼と疊へ落ちるのでした、貴女でなくつてはと、先生から特に賴まれた紋羽二重の被布、自分よりも一年も前に來て居る者をのぞいて、と思へばはかない少女の誇りにつひやす／＼とうけ取つた仕事、いざとなつては云ひ知れぬ不安に胸を痛めた、あのむつかしい〇〇屋の……と思へば、心配で／＼一度入れる鋏に幾度尺ざし當てたらう、二日間と云ふものは、好きな新聞もろく／＼讀まずに、私にとつてはまあ命懸けて縫ひ上げた品、火のしかけて、たゝみ付けた所、我乍ら上出來と、押さへ切れぬ嬉しさと、誇りとにいそ／＼と先生にお目にかければ、まあ／＼此麽にばら／＼に解かれて了つた、先生もあまり慘酷な……惡るければ、何處が惡いと何故仰言つて下さらぬのであらう、惡い所を敎へて直ほさせて下さるのが先生では御座いませんか……ああ、口惜しくて／＼何うしても涙が止まりません、殘らずのお弟子は皆一樣に私の顏ばかり凝めて居ります、必といい氣味だと思つて居るのでしよう、先生はやつぱり無言で今解いた切え火のしをかけて居ります、其お顏にはお怒りの樣子があり／＼と面にあらはれて居るのでした。

二時、三時、四時、ともう三時間たちました、けれども先生は依然として無言です、そして今度は自身其被布を縫ひ初めました、けれど／＼私にはもう物云ふ事も出來ません、あゝ私は、此まゝこうして座つているのでしよか、涙を流しつゝいつまでも、あゝ悲しい——口惜しい、けれど私は、人に物習ふ身なのでした……。

女の子さんには有りさうな經歷談（評）

○別れ

信濃　優梨子

枕元の洋燈も、何故か今夜は暗い樣である。

凝つと私に抱き寄せられた雪ちやんは、小さい枕をは

づさぬ許りに、つと摺り寄つて居る。

「お姉様！」小さい聲で斯う呼んで、ぱつちりとした目を上げた。「妾お繼母樣のとこへ行きたかないわ、お姉樣のとこに居たいの」又清ちやんは思ひ出して云ふ「あら又そんな、今日お祖母樣が、何て仰有つて？え忘れやしないでせう、お繼母樣ねそれは好い方よ、どんなに雪ちやんを可愛いがつて下さるでせう、お父樣もね、毎日雪ちやんの行くのを待つて被在るの、ね雪ちやん、あしたは彼の汽車に乘つて行くんですよ、嬉しかなくて？」わざと私は氣強く云つて、昵と雪ちやんの顏を見詰めた。雪ちやんは凝と俯向いて默つて終つたが、其ふつくりした頰には留度なく涙が流れた、私はもう堪らなくなつて、犇と抱き締めて共に泣いたどうして斯うも私に懷くのであらふ。

此春、上野の櫻が吹雪と散る日、叔母の忘れがたみの此小さい從妹を、しば〳〵田舍へと連れ歸つたのである。母の死てふ強い〳〵悲しみを、其小さい胸に深く刻まれて、やゝもすれば暗きに沈まうとする從妹を、淸い〳〵愛によつて慰さめ樣と思つて——。

理想、空想を命として居た學生生活から、現實の家庭生活に這入つて、生活に疲れた人を見、單調な生活に倦いて、苦痛て〳〵堪らぬのを、此いぢらしい從妹に慰められて居たのである、あゝ別れ！あすからの苦しみを何によつて忘れやう。

なさぬ仲おゝ美しい此花の蕾を繼しい人の手に掛けるのか、と思ふと堪らなくなつて又泣いた。

雪ちやんは、一杯に涙のたまつた目を靜かに閉ぢて居る。涙にぬれた頰が、薄暗い光りに白く見える。

ガタンと音がして、時計は十二時を打つた。

誇張して書いてあるわりに情が映りません一層の力を要する作です　（評）

○色　紙

金澤　むらさき女

赤や黃や紫やいろ〳〵な色紙のはいつてる疊紙を、大事そうに抱へて日當りのよい緣側に腹這うて、順々にそれを並べて、嬉しさうに眺めてる喜美ちやん！それを見る度に私は直に幼い時に歸ります。何時てしたか、多分春の終り頃と覺えますが、木の生氣の滿々てる庭に向つてる椽端て、例のやうに並べてゐますと惡戲者の利さんが、いきなり來て其美くしい振袖にしてほしいわつて云つてた色紙を搔さらつて、滅茶苦茶にしてしまふんだもの。私は泣いて〳〵泣き乍ら其哀れに取散らされた色紙を拾ひ集めて、ポロ〳〵涙を落して皺をのばしましたが餘りの悄なさに、又新らしい悲が湧いて來て、居間にかけ込んで思ひ切り泣きました。其中いつの間にかねむつてしまひ、氣がついてあたり

を見ますともう薄暗くなつてゐて、鈍い三日月が窓ガヲスを通して後の竹藪の上に、淡くかゝつてゐるのを見ました。私は其時何かしらにつこり笑つたのを、覺えてゐます……子供心にも美くしいと思つたのでせうか――。喜美ちやんは餘念なく遊んでゐます。じつと見てゐる私に慕かしい追憶が春の潮のやうに響きながら寄せてまゐりました。

昨年人形に就いての追想を書かれた江森美子さんの文章と異曲同工（評）

○朝と夕の鐘

伊藤よしゑ

薄暖い朝日が窓の障子や格子や松の影を淡くうつして居る日曜の何と無く淋しい朝、窓際の机によつて、色々の事を考へて居ると、東の山の麓からニコライの朝の禮拜前の鐘が鳴る、それでも他にくらべるとゴンゴンとせき込み氣味、あの早く鳴るのが二十世紀の時間を空費せぬ所かも知れないけれども何しろ鳴らす鐘は五つだつて云ふ話し、何時だつたか建てゝから間も無い時にあの前を通つて、好奇心にかられて中を見やうと思つたけれども、門からは一歩も向ふへ足が[illegible]まなかつた。

開いたまゝの長方形の入口から、キリストのいのりをして居る所や說敎をして居る所の繪が、光線の工合か丁度本物を見るやうに浮き出て、今にも私に向つて口を開きそうになつた、それ以來通らないけれども、あのおごそかな堂にあの鐘を合圖に集まつて、神の前にひれふす人は幾人位であるのだらふ。

あの鳴る鐘……淡い恐怖に滿ち乍ら靜かな室内に一人ボッチンと私は座つて居る。夕ぐれ、私は紫の空に今輝き初めたばかりの宵の明星に對して無言ではなしをして居る。いつも窓に立つて、あの一番先きに輝き初めて一番光りの大きい星について幾年か前から、つかみ所の無い疑問とあくがれと歡樂とを以て宵毎にながめるけれども……金米糖でもなし、ダイヤモンドでもなし、空に咲く花でも無かろうし、多分エンゼルのやうな淸い女神のよろこびと愛と希望に輝いて居る顏であらうと思つて居るそして何時までも立ちつくすのだ。

地に夕もやが下りて空の紫があいになり、あいがくらい色になつて、二番星、三番星がチラホラ、輝き出すと、もう闇は梢から屋根へはい上つて、だん／＼夜の領に落ちて行く、風がガサ／＼と公孫樹の枝をゆすつて、又隣りの槇の葉に移る頃、異つた國から迷ひ込んだとは思はないけれども、市の西南にあたる隅から、ゴーン／＼と夢のやう、ながくゆるやかに餘韻を殘してひゞく鐘の音、低い鐘樓の屋根を出てから市中のた

て込めたもやの中をくゞり／＼何處まで行くのだらう……淋しい思ひをいだいて、足の冷たいのも羽織を着てないも忘れて、私はボンヤリと星の輝く下に立ちつくして居るのだ。

決して下手てはない、寧しろ上手すぎる位てありながら、おもしろみの割に少いのは何う云ふものてせう（評）

○甘諸堀の朝

徳島縣　上野浦筆子

下男が先え蔓を切つて行く、後から父と兄さんと私の三人が堀つて行く、堀るだけ弟が畚に入れる、まだ朝日の昇らぬ曉てある、雨の空には殘の月が薄く白く、名殘惜しそうにボンヤリ光つてゐる、吹くと云ふ程てもないが、頰にあたる西の風は冷たい、紅くなつてゐる柿の葉がホロ／＼散る、まるて繪の様に見える、寒い故か誰一人話する者がない、皆泣く様な顔をしてゐる、ツイ向ひの紅葉の中から、煙の上るのが見える、矢張私等の様に甘藷を堀りに來たが、あまり冷たいので焚火をしてゐるのだろう、空を三羽連れの鳥が寒そうに鳴いて行く、續いて通玄寺の明の鐘が鳴る、兎角する内に朝日が光り出した、甘藷の葉に宿つてゐる白露が、水晶の玉を蒔いた様に光り出した、今年は豊年の故か、小さいのは少しもない、皆大きなの許てある、日が出て暖くなつたので、皆一度に活氣が出て莞爾しだした、遂に兄さんが話の緒を切つた「困つたな——今年の甘藷を食べると、筆さんは好い家えお嫁に行けない」と突然話かける「何故」と問ひ返すと兄さんは笑乍ら「今年の甘藷は皆大きいだらう、てそれを食べると口が大きくなる、すると好い家は貰ふてくれない、はゝゝ」と大きな聲て、白い齒を出して一人笑ふ、他の者も云ひ方が



上野にて　本郷　鈴木とみ子

突然て可笑しいのてクス／＼笑ふて居る樣子、「そんなら妾、小さく切つて食べるは」、と言ふと、他の者は堪らずドット噴き出した、兄さんは敗けながらにつひて笑ふ、妾の胸には云ひ知れぬ可笑しさと面白さが滿ちて來た、落葉かきに行く子供が二人、籠を背にして何かさゝやき乍ら上つて來る、私等は腰が痛いので暫く腰をおろす、其間に弟が熟柿をち切つて來た、冷たいが中々旨い、里の家々に上る朝餉の煙が幽に見える、此煙見て御飯に氣がつひて又堀に係る、蔓切りはすんだので堀手が一人增した、下男はシハ／＼例の氣焔を吐き出す、兄さんが對手にして又問答する、皆が勢出した故か、間もなく堀つて仕舞ふ、弟の脊には山の樣に甘藷が滿ちてゐる。

此の如く朝早くから甘藷は掘るべきものと知りませんてした（評）

○煩え

淀江　原崎友子

只何事も硝子ごしに見る樣な感覺のにぶい頭腦てす者
だめな事さと自らもあきらめては居るもの丶矢張私は
くり返し解決に苦しんて居るのてす
兩親——兄の心——私の探るべき方針——
幾度繰り返しても同じ所迄進むと亦行き止りにバッタ
リ分らなくなるのてす
ジット見て居ると障子が音もせずに縱横に搖れ出す、
そしてあたりが眞暗になつて私は大きな暗い物に對す
る少さな小さな者になつてしまいます
私は今醒めてるてせうか。夫れ共夢みつ丶あるてはな
いてせうか？あ丶若しや——若しや——！一度生を失な
つた靈ばかりの身てはないてせうか？…………サ
ッと吹く初冬の風が夏のま丶に掛けられてある軒の風
鈴をならして、障子の隙間から冷たく流れ込む！「あ
丶つ厭な風が——がばとつ丶ぷすと亦暗の中にあらは
る丶、幾多の妄想は私に醒めよ／＼とせまるのてす、
あ丶醒めたい、醒めたい。けれど今どうする事も出來
ません
あれ？雨が——バラ／＼と
アッそうぢやない。そうぢやない。夕にそよぐ木枯の
音てした
忘れやう忘れやうと思ひますけれ共、矢張前途の不安
は忘られません。くり返し。尚くり返し。そして亦石
垣の崩れるやう、ジリ／＼／＼。後じさりする私の心
は再び筆を取り直して進むのてす
斯くして日々に衰へ行く私は——日增に深い／＼霧の
中にさ迷ひ入て——遂には行手も分らぬ暗に終るのて
はないてせうか？
あ丶醒めたい、醒めたい、醒めて充分の解決が得たい
何時私の夢は醒めて高い理想の垣は作れるてせう。

悶える人の心持、若くして純なるもの（評）

○貝

丹後　中澤伊志子

「姉ちやんこれ頂戴な」

姪が小さい桐の箱を枕もとへ持つて來ました、開いて見ると美しい貝！小さな美しい貝がらてす。

なつかしい追憶の貝がらてす、どうしてあげられ樣、神崎の波靜かな春の磯て、仲のよい友達同志、砂漠のやうに遠くひらけた砂濱の上に落花のやうにちりみだれたこの美しいさゝやかな貝殻を拾ひあつめたときはどんなに樂しかつたてせう。砂原はまづ白い砂が波にうちあげられるたび細い線をおもしろく描き、その上におちた貝がらはうらゝかな春日にきら〳〵輝やいて居ます。波はたえ間なく渚にこの美しい貝がらと砂とを運んておだやかな歌をさゝやいて居ました、折々は鷗が幽かにないて目路はるかに翔つてゆく。あゝ此のうすい――紅や白やうす綠の――花瓣のやうな貝殻どことなし潮の香がこもつて、耳をすませば沖のどよめきもきこえさうてす。

なつかしい磯の貝がら、海鳥の卵のさゝやかなベッドを砂と共に自然の美しいベッドになつて、幾日そのつみない夢をまもつたてせう。この秋の夕日がさびしくさすのに貝は矢張り少し磯くさい香を狹い室に漂はして、嬉しいやうな懷かしいやうな光りに輝いて居ます

姪は私がだまつて居るので、貝を手にとつて窄口をして嗅いて居ましたが、やかて

「わたし、歯がいたくなつた」と姉の方へ走せてゆきました。

感興を持ちながらわざとらしいのが缺てす（評）

○わが室

吉田ほつゑ

溫い床に寢がへりして、霜の朝の寒さが思はれる。閨の戸近くて小鳥が鳴き初めた。戸ぼそから流れ込む曉の光が、薄白く夜具の襟から天井板から、後ろの唐紙に細長くうつる。

今日も最早明けてしまつた！、――十二月と云ふさびしい意識の中に、二十日と云ふ感じがしみ〳〵と迫る、まだ今年も幾日あるだらうかと、數へるのも心細い。十一日限り！と何やらさびしい〳〵宣告を胸に受けた誇りとなせし十九の少女の生涯を守るのも、今は十一日となつた。二十の齡を冠らせられて、花やかなりし少女の胸に、重い痛みを覺えるも近い日てあらう。暗い行く手の第一の扉は、將に開かれんとして居るのてある。

未だ嫁がぬ子を持てる親の、如何に人知れず思ひを惱ますことてあらう、まして他の子の嫁ぎの事など見

ては、一としほ胸をいためて、老の身には倚も鑑れの影の深く見えるのであるに。――女子は嫁ぐべきもの！生煮への獨身論などにかぶれて、世にすねて居る子の親こそ、堪へぬ悲しい思ひの如何許りてあらう。思想の相違からとふ是非ないけれど、私は苟且にも其樣なことは口にしますまい。あゝ狹くても、小さくても此私の室、汚れた塵の痕もない。わが身と、わが心といつ迄か此處にかうしたまゝ置きたいのだけれと。

底深く一道の哀愁流る（評）

○寫眞評判記

京都　萩廼家

はあこれはね、自ら健脚をもつて誇つてゐる所謂健脚會員が、紅葉狩の折、清瀧の河畔て寫したのです。何よりも向つて右の端からね……ほらこのハイカラはね、何より彼より音樂が好きてすの、ピヤノヴヰオリンオルガンお琴などは朝飯前てすつて。が、オルガンだけはピヤノの癖が退きませんので、なーる程とは思へませんけれども音樂てはオーソリチーてすよ。

次の、ソマトーゼをお飮みなすつたやうな方は、布袋といふ渾名をもつてゐらつしやるので、御本名は禰野樣、テニスてはチャンピオンてすがダンスと來たらありませんね。だつて大きいお臀を憶面もなう振られて得意がつてゐらしやるのてすもの。

その左の鍋を冠つたやうに見える方が雅號を桃の花とおつしやつて、私と姉妹の約束がしてありますの、この方稱戀愛文學を好まれる方はありませんね。て暗に蚊士の尊號が奉つてあるのです。

次の派手な飛白？ほゝゝすが子樣笑つてはいやてすよ、いえこんなに澄ましたつもりてありませんてしたのにね　光線の工合てせうよ。

次の、一寸首を傾げてゐらつしやるのが地球儀といふ方てすの、それはね、常にお頭を右の方へ……恰度二十三度半傾けてゐらつしやるからてす。この方です、一時校十六年をうらぶれの……つて長詩を作られて、往年の俤は何處へ中に鳴り渡つたのは。けれど今は、往年の俤は何處へやら失せてしまつて極めて無口になられました。

その後ろの下膨れが皮肉屋の誠子樣てす、如何に暗く而してそれが如何に淋しくあらうとも私さへあらば心配するべくあまりに無用てある、なんてね直譯躰てやられた日にや溜飮も下つてしまひますよほゝゝゝ。

その右が七面鳥樣です。一週間に一日として同じ着物の時はありませんね。そして二十錢のたつた白粉が一ケ月に少なくとも十個は要るのですつて。私この方とは大の仲惡。え、そりや何故だかね……

これてもねすが子樣、皆それ〲勝手な野心がおあり

なさるんですよ、文學は我が糧也、と唸られる方もあれば學士號のない方なんかへどうしたつて嫁がないとかね、そりりや隨分よ、……といふてゐる私？ほゝゝまー笑はないでおつまみなさいビスケツトでも……。」

（評）驚くべき讀者です

○窓より

越後　佐藤浪子

窓下で唄ふ子守歌を夢のやうに聽いて居た、と時計が鳴つた、驚いて起ると弱い初冬の光線が柿の實にさして居る、「ねんねん小山の兒兎はどうしてお耳がお長いの……お母さんのお腹に居た時に枇杷の實食べたから、それてお耳がお長いやーア』透き通つた聲で節廻し好く唄つて居る、私はボーツとした眼で窓からのぞいた、英ちやんがおんぶ仕て居てアーと小さいあくびをして居た、昨夜戯れて結んでやつた一寸程のチヨン髷に、掛物の緋縮緬迄が其儘あつて、トンく足拍子をする度にヒラヒラする、可笑くつて堪らない。クルクルと寢衣の帶を直して手拭と揚子を持つてまた窓に凭れた、菜畑一枚隔てた隣はすぐ絵屋さんの物干場だ、今お染さんが衣紋竹に通した一染の男物と振の長い縞お召の綿入を、最早う落ち掛けた青桐の下の日蔭へ掛けた、胸からは、露を含んでユラユラと咲いた白菊（私は何日も御殿女中の姿のやうだと思つて居る）に隠れて、緋鼻緒のからんだ白い素足がまばらの根元からすいて見える、眠り不足のはれぼつたい眼をして始終ソワソワした調子で頻りと着物をいぢつて居た、チヨイと後へ振り返ると、大きな丸髷の根ごしに白いぐず引が結いてあつて、首筋の邊りに昨夜の白粉の香が殘つて居るやうだ、隨分賑かだつたと昨夜の事を思ひ出して居たら『姉さんの寢坊やアイ』と弟が大きな聲して馳けて來る驚吃して顏を引込ますはずみにお染さんと視線がパツタリ合ふた、猶更びつくりした、まア先樣より私の極りが惡かつた事。



母　水戸　玉川すま子

○床を離れる前

牛込　星野愛子

カラ／＼と往來を牛乳配達の車が、急しげに通る音がする。私が寐て居る二階の書齋は、六疊で豆ランプは光りを縮めて、上から漸次黑くなつて來たホヤの底にヂリ／＼呻つて居る。傍に寐て居る妹を顧れば、夜着の襟を額迄冠つて、死んだやうに眠つて居るので何となく自分一人此際部屋に目を覺して居るのが、淋しく感じた。

手を伸して机の上にある懷中時計をとつて見ると、六時に十分前である。階下の勝手の方では、お母さんが起きて、火を煽いだり、摺鉢を摺つたりする音がする。

今日は○○先生の二十年勤務紀念表彰會がある筈だ。バイオリンを演奏することに定つて居るが、果して旨くゆくかしら、迚も楠田さんのやうには行くまい、兎に角出來るだけの腕を絞り出して見やう。などゝ考へた。バイオリンで思ひ出したが、あの上手な横井さんは何故學校をおよしなつたらう。皆が言ふやうに、品行が惡るかつたかしら、でも其麼方ぢやないやうだつた。藝者になつたとか、妾になつたとかいろ／＼の噂があつたが、世の中では下らぬ事を言ひふらすものだ。横井さんの事は事實だか何うだかは知らぬが、若し事實でないとしたならば、横井さんの心は何麼だらう——などゝ思つた。

階下の柱時計がボン／＼と六時を打つた。起きやうかなと寐返へりを打つた。机の引手がピカ／＼光つて居る。一輪さしの菊の花がカラ／＼に枯れて見つともない程だ。

ユラ／＼ミシ／＼／＼と突然二階が搖れ出した。オイ地震だぞー」と父の聲、ハツと思つて頭を擡ると、未だ余震がユラリ／＼と二階を船のやうに搖つて居る、胸の動悸が未だ鎭まらない。妹は何にも知らずに、だまつて眠つて居る。是れからは眠られまいと思つたから、遂ひに床をぬけ出た。二階の雨戸をあけると、朝の空氣がじめ／＼して、霧でもかかつたかのやうである。

○老

麻布　江森美子

木枯吹きすさぶ夕べ、迷ひ婆があると云ふので、好奇心にかられて、急いで走つて行くと、なるほど交番のまはりには事有り氣に多勢の人が立つて居る、居並ぶ人の肩と肩との間から伸び上つて見ると、八十路の阪をも越えたらしい、よぼ／＼の弱々しげな老婆、頸のあたり痩せ細つて、藍縞のうす綿着物に茶縞の半天其れも、縞目さへわからぬ、むさいお婆さんは先きから俯向き勝に、細い／＼杖に衰へに衰へた身をもたせて、さながら死んだ者の如く、何を思つて何を考へて居るのか、身動きもせぬあれでも息があるのかしら、どうだかうたがはれるほど、私はお婆さんを地上へ立たしてをくのがいた／＼しくてならなかつた、ぐるりの人も皆其う思つて居るのであろう「こら寄るなと言ふになぜ寄るか」と時々大聲を出して叱りつける髭いかめしき制服の人の胸にも情けの露の、湧きしか、死せるが如き老婆の肩に手をかけて「今ぢき送つて、やるから此に這入つて居れ」と地上より五寸ばかりも高い交番へ助け上げた、お婆さんは、始めて、氣が付いた樣に、きよろ／＼するので、制服の人は又「そら其所に腰掛けて居れ」と小さな木作りの腰掛を指されて、お婆さんは嬉しそうに、「をまはりさんの、とこを拜借しては、すみませんね」其の聲は細く、かすれて、幽冥界からでも言つた樣お婆さんは漸く正面へ腰を下したので、群集の瞳は一樣に慈深い顏に集まつたお婆さんは又涙聲にこうしてお世話になつた事が、家へ知れると、是と是とが、（右手の親指と小指を出して）ひどいめに、合はすの、私をあゝ、いやだ／＼と俯向た時、私の胸は言ふに言はれぬ、苦しさを覺えて、五六滴の涙は、知らず／＼頰をかすめた。今までひしと、つめかけてた人々も、其れ／＼に踵を返した、物と見えて、私がはるかに、見返へつた時は、赤い電氣の光りが淋し氣に照らしてゐた。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　四谷　味方こう子

みなし子は彼の千丈の絶崖のこぼれる石に坐したるこころ

○（地賞）　信濃　吉川多美子

天人の好むところをまなべりとこの春の君も羅を被き居ぬ

○（人賞）　上毛　柳澤もと子

白椿くちづけませるおん顔も月夜はしろき色のみがよき

【秀逸】

○　牛込　平塚白百合

落ち髪の一すじだにも惜しといふ若々しきをねたく思ひき

○　鹿児島　山本さゑ

紅染の衣はいつしか色あせぬ新らしき子を今日は君戀ふ

○　相模　はる子

世の中の大方人は若き日の戀の辛さはなげかぬと云ふ

○　三重　川原みさを

戀する子こゝに歎きぬよろこびぬ雑木林の春の夕ぐれ

○　岐阜　華水子

思ふ事うちつけにいふあさましき子となりにけり二十二にして

○　金澤　むらさき女

十二月終りの夜は狹霧さへかゝりし町の美しかりき

○　讃岐　小野定子

金刀比羅の社門を出てて瀬戸の海の青きが上の初日おろがむ

○　沼津　植松操子

清らかに靜かに風にうごくかな星ある空の秋の夕雲

○　信濃　中島たま子

遠山の高峯にかゝる雲見つゝ紅葉の下をあゆむ悲しさ

○　韓國　なてし子

紫にはた紅に灯のゆらぐとよのあかりの宵に見初めし

○　京城　なてし子

神が射る千束白羽の征矢鳴て初日にあけぬいと美くしく

○　大阪　龍子

君のもつその好きこゝろそれよりもはなはだ強きわがもの嫉み

○　大阪　梅本八重子

少女てふ命居りしある宵の淡きなげきと濃きよろこびと

○　四谷　笹原芳江

われ病むにかゝはりなし云ふこころ面かげに見ゆ水仙の花

○　京都　宮原みどり

ほろほろと銀杏こぼれぬ山寺の夜明けの白きしき石の上

○　千葉　鶴岡一枝子

今日も又空を仰ぎて一つことわれ思ふとは母につげそね

○　明石　落葉子

あらいつか我おとなびぬ停車場の人ごみ中に君をまつまて

○　備中　馬越昌子

つめたくも心の園の青苔に夕のしづくしみ入る思ひ

○　兵庫　杉山春翠

今日すべきことの一つを明日の日に延すてふこの性となりける

○　信濃　志間かげ子

死の國にゆく子は來よと白き旗暗き河原にひるがへり居り

○　陸前　浮草子

忽に來る泣きも得ぬ悲しみのたちまち消ゆる我れは少女子

○　大阪市　花輪

美しき林檎一つにくちびるをつけし夕を罪とし云ふや

○　長野　淺田千代子

わが心奪ふ君をば憎みえぬいとはしたなきさがを悲しむ ○ 伯耆 足立春子

いつの日か赤きつゝじを手折り來て我にさゝげし其人を戀ふ ○ 美作 光成晉子

あはたゞしう心かなしむ過ぎし日の嬉しきふしに思ひ至りて ○ 豐後 橋爪湖花子

初秋の庭に咲くなるコスモスのさびしき性をこの君に見る ○ 長野 古畑正枝

君と我笑まず語らず丘に立ち寂しき秋の落日を見ぬ ○ 長野 古畑よし

十年のむかしも今日も二心持ちまさぬ故なほさらに戀ふ ○ 信濃 飯沼春枝

我が信濃水淸ければ少女等は皆玉の如顔白き哉 ○ 陸前 小岩やなぎ

淺ましき我れはおみなよ名の成りし人きく每に淋しさに居る ○ 高知 寂靜子

秋の雨幼き子等がまゝごとにつみきし花のしめやかにぬる ○ 島根 すみれ

熱病みて蜜柑を吸へば柑子咲く家に待たれし日のうかびきぬ ○ 和泉 谷ふじ枝

窓によりうるめる目にて我を見し君乘る汽車は山にかくれぬ ○ 信濃 紅百合

紅の花火と燃ゆる溫室に醉ひごゝちして歌おもふわれ ○ 大阪市 山内溪子

ぬかるみのゴロ／＼石につまづきてこけなむとして君にいだかる ○ 陸奥 美能

ものもなき心の奧をことさらに見せよと云ふにことならぬかな ○ 大阪市 吉田靜子

時雨する岡より漁村の火見えてあたり淋しき初旅の宿 ○ 麻布 夕ほし

あるときは君おもひれの窓に咲くあかきうばらに口づけもせし ○ 鳥取 安木春子

わが心只何となくものたらず君とすむべき日は近づけど ○ 丹後 壺内わかば子

花の如裝ひぬれど冬枯のその寂しみを抱き居る人 ○ 出雲 山代夏子

秋の家われたゞ一人闇の夜に醒むと思へば水の音する ○ 大阪 秋野洋子

いと憎き人かな君はまたも來て築きし城をくづして去りぬ ○ 茨城 黑澤とよ子

人中にひとりうつむく如何なればかゝる寂しき子となりしわれ ○ 上總 森嬉美子

手ずさみに調べし琴のあへなくも君と我とのあにしとなりぬ ○ 岩手縣 中島幽美子

れがはくばわれにわけませ美しきみ面にみつるその嬉びを ○ 岩手縣 及川かよ子

怪しうも思ひをすれば胸の扉に寛の影さしぬ狂ほしきかな ○ 濱松 平岩白

しら／＼と夜の明けてゆく梅の園花のしづくを春の風吹く ○ 伊豫 夢の子

男の子みな我を戀ふると思ほへていさゝかむれのとゞろくをしる ○ 鳥取市 粂澤敏子

わがかどや稻田の畔ひろ／＼となかの小道を駄馬一つ行く ○ 新潟 新井田つれ子

雲空を眺めあぐみて悲みに沈む思ひを筆にするかな ○ 沼津町 中村愛子

物あまたあつめて君が御胸をたづれてありぬ日每日每に ○ 神戸 阿山とし子

君による日を思ひつゝ夕暮はいと兒りやすき丸柱かな

和歌

すみれ會白百合子

○

我胸の悲しきこゝろは尼寺の扉しまりて灯のともる時
すみれ會野宮みさほ

○

霜枯れし秋の野原のきり／＼す命にうみし人を悲しむ
すみれ會白萩女

○

室の梅二つ三つ四つ咲き初めぬ日影もうけず涙ながして
すみれ會一栞女

○

悲しきは姉の失せたる後の日の小雨降る日の入相のころ
福岡 磯部良久子

○

くだかけの聲ものどかにあけそめて昔のまゝの春は來にけり
熊本縣 金子片枝

○

ふと清きおん聲きこゆうつゝかとふたゝびつよううちけしぬれど
信州 畝子

○

西天に星たゞ一つきら／＼と世を照らしあり暮六つの頃
防府 池田まさの

○

寢醒れば亡き母上の枕邊に見ゆるが如し夢か現か
岩代 笠間松江

○

思はずも君の情の文に逢ひこゝろ亂れぬ我は少女子
越後 吉田かほる

○

神をまつそのつかのまに荒くれの男の子來りて抱きて去りぬ
京都、本郷春野

○

はつ結のうらはづかしや高島田まへにうしろに鏡して見る
備中 野菊生

○

彼の君の瞳に似たる星ゆらぎ君なつかしきこの夕かな
沼津 渡辺とよを

○

たぐひなきかの美しき夕榮もやみとなるなりつかのまにして
大阪 岡本春子

○

羞なておへてやゝはじらひの面そむけ伏目に笑みぬ美しき人
神奈川 木村涙花

○

しづけき夜はゝづえつきてもの思ふ胸にひゞきてふるあられかな
信濃 麻田いと子

○

こと知らぬ少女の胸をあざむきて濃き血をば吸ふ君なりとしる
信濃 紫野峯子

○

盲目ならばかくも思ひのまさゞらんなどゝ思ひぬ君を見る度
信濃 古林千代枝

○

朝の霧薄るゝまゝにあらはれぬ君が住む家と山の御寺と
埼玉 宇田ひさ子

○

すや／＼とかたゐの背にいぬる子も白き頬をすれ春の日のまち
京都 寺井芥子

○

恐ろしき前兆なりとて辻に立ち多くの人とはゝき星見る
京都 芥子花人

○

小さき川家鴨を飼へる踏切の小さき家の横を流るゝ
成田登子

○

秋の朝君と手を取り菊の園そゞろにゆけば霜ばしら立つ
牛込 原けん子

○

野の冬はいたく淋れぬわれ君と遊ばずなりし哀しみに似て
牛込 癸子

○

戀てふは何ならずとし見ゆれども得難かる故物思ひする
信濃 望月森賀子

○

故郷の方へむれ飛ぶかりがれの行へ懐かし月おしてれり
京都 伊藤ふじ

○

夕暮れの春の風ふく岡崎に動物園の鶴啼きたれり
防府 古賀實枝子

○

沖遠く八重の汐路を飛ぶ雁の行方はいづこ故郷の山
徳島縣 上野浦筆子

○

しろき梅いくひら散りぬ春の月淡くさしたる故郷の家
樺太 ときわ

○

年毎に愛でにし父は今あらでかたみに開く白菊の花
四谷 柳の人

○

蜜吸ふと美しき蝶飛ぶ如く男の子等數多われをめぐりぬ
石川清子

○

秋の日や庭の小椽の姉君のちひさ鏡に銀杏の葉散る

○
飛驒　知代子
ひと時は眼さへくらみて知覺なきもの丶やうにも君にいだかる
○
飛驒　眞砂子
まことめく言のみ云はずたまさかに僞りを言へわれうみたれば
○
羽前　あらゝぎ
うつらうつら人をおもひてわがいぬる冷き床に水の音する
○
淡路　加藤菊子
名も知れぬ草にも花の咲くものを咲く時なけむわがどちの戀
○
長野　丸山榮枝子
山姫の心をこめて織なせし紅葉ちりつゝ秋の暮れ逝く
○
北海道　今村りせ
我心三十路を越えし人のごと日に寂れ行く廿年なれども
○
むらさき
秋風の野を吹く夕その野邊に强ひてあまひて相別れにき
○
群馬　大濱千代子
櫨の葉は夕日の空に赤う立つ少女の胸の血のごくにも
○
大分縣　本田一枝子
夕されば杜の小徑にさまよひて獨り歌へり秋のくれがた
○
本鄕區　渡邊高子
送り來し友に別れて獨りのる渡しの小舟に夕日冷めたき
○
伊豫　よしゑ
戀ふるにも戀はるゝ身にも我が性は合はじと思ふ秋行く日かな
○
東京　わかば
はかなくも破れし戀を追憶て君嫁く夜の淋しさに泣く
○
小樽　清野芳枝
ほの〲と我世の春は明けんとすうすくれなゐに薄むらさきに
○
三河　宮田梅子
落葉かく少女すぎ行く小山路に夕霧あはく鐘の音細し
○
本鄕區　渡邊三夜
病む母のみとりに更けし冬の夜半炭さしそへてひとり泣くかな
○
門司市　鈴木靜枝

若き身は戀にもだへて若しむがこよなく樂しうらやみ給へ
○
越後　井上貞子
亡き母の歸り來ましてわが名をば呼びます見れば夢さめにけり
○
橫濱市　矢野きみ子
春の宵町のかたへの木の茂みさゝやくごとき風の吹くかな
○
信濃　丸山峯子
童たち素足よろこび日傘して庭を步めば桐の花散る
○
伊豫　しら萩
たらちねの情もあつきはぐゝみにおのれ十九の春を迎へぬ
○
岡山　河村よし子
母君のいませし事もをさな子を抱きし事も夢なりし哉
○
岡山　河村律子
こぼれ種日陰に生ひて朝がほの花咲く迄に丈のびにけり
○
本鄕　那波ときえ
知らざるが如く裝ふ君が瞳は接吻たりしそれよりもよし
○
北多摩　坂口とら子
春の朝父の墓前にぬかづきて脊高くなるとそゞろかたりぬ
○
本鄕　望月薰子
遣羽子の巧をほこる妹の二尺の袖に春の風吹く
○
豐後　伏見孝子
君來しと花のやうにも我が胸の蝶は思ひて羽ばたきをしぬ
○
麴町　なでしこ
朝な夕君を思はぬ日とてなし君この胸を刺し給へかし
○
鳳仙花
父居まさす母もまたなき淋しさにかなしむ我を哀れとおぼせ
○
愛知縣　服部德穗子
少女てふはかなき誇たてとして君は居たまふあはれなるかな
○
麻布　君香
現つにも夢にも君の戀しくて歌の十卷をつくり上げける
○
熊本　塘田春穗子
若きとき戀をかたりし彼の友はかまくら山の尼となりぬ

和歌

○　東京　鳴澤百合子
いとくしき物怪にしもおはさぬにこの我たまをうばひ給ひき

○　長崎　持丸武子
なにとなく描きし顔の亡き母に似てあることの悲しきかなや

○　野村峯子
云ひしらぬ暗きかなしき胸みなをやきほろぼさんあゝの火もかな

○　小石川　渡邊霞子
琴の手もみだれがちなる朝寒や桐の火桶に白檀をたく

○　茨城縣　渡邊ひで子
秋風に庭の白菊花ゆれて野末に寒し夕暮の雲

○　若松市　佐藤安子
描く筆も歌ふ心も持たぬ身は只美しと初日おろかむ

○　尾張　秋月
五人の同胞の内年長けし少女を母はうとみけるかな

○　群馬　高橋ふみ
あなうれし春の夕に仕上りぬうす紫のなかきふり袖

○　大阪　順子
多く悩み多くいつはる身となりぬ母に別れし其日頃より

○　青梅　春子
君と我れ百里の道をへだつとも心は同じそのかみの人

○　福岡縣　仲道靜子
灯にそむき吐息して舞ふ小扇ゝ盗み見る目と美しき宵

○　福井縣　片山千里
君見れば春の夕をすや／＼と眠りいませり心憎さよ

○　加賀　勝崎菊子
我思ふ君がみ心知れぬほどさびしきはなし悲しきはなし

○　佐渡　古藤とみ子
我胸のもゆる思にくらぶれば白蠟の灯の淡きなぞ知る

○　佐渡　本間たかね
呉竹のみどりいろする窓の外にふるなり春の初雪

○　信濃　古田ほつえ
三とせ見ぬ姉とかたりしとある夜のみめよき面を思ひ出づる日

○　栃木縣　しのぶ子
少女子がまゝごとすとてうちつどひむしろならべぬしらもゝの花

○　京城　富迫霞萩子
鐘のみをわがこの君に與ふべく木枯の夜を忍び來にける

○　長崎　折口うめ子
小羊の寵育る牧場の春風に我が世の幸は足ると思ひぬ

○　豊後　井手野とめ女
神無月鳴る風の音我れ一人聞きつゝ君の衣を縫ふ日

○　西多摩　三ヶ島芳子
思はるゝ子もまたかくは思ふ故ひそかに泣くと君はしらなく

○　香川　長尾ふみ子
亡き母が筆そのまゝの姉君がなさけの文に涙たばしる

○　金澤　藤永靜子
あてもなく書きつる文を胸につき又雨だれの音を聞くかな

○　伊豆　片山[illegible]
あすしらぬごとき事言ふ御君を心たのみて我れ悲します

○　芝區　岡好枝
ある人に思はるまゝやすらかにいますみ心れたくうらめし

○　大阪市　鹿島綾子
思ふ事遂に得言はず取るべきを取らで悔みぬ小さき心に

○　山城　木の花
敎へ子は妹に似ぬ愛らしく日頃來りて人形作る

○　和歌山　木澤てる子
くり返しまきかへしつゝ見れど尙あかぬは君の水茎のあと

○　福岡　田中白萩
針仕事三人の姉に交り居てふとある事を思ひ初めぬる

○　岐阜　前田すゞ子
たへまなく遠くはなれし妹の如何にありやとやすからぬ秋

○　良中富よしみ
人妻のこのおとろへをかつてしも我がため泣ゝ人に笑まるゝ

○　韓國　坂東りやう子
妹が家様に寢むれる愛らしき小猫の背に山茶花の散る

○　伊豫　本多白萩
吹きすさぶ夜半の嵐に目のさめて昔の人をおもふさびしさ

○　水戸　重子
哀れにも細き聲して姉呼ぶと病む弟を夢みにしかな

○　麻布　花子
夕來てまたの朝に別るゝは悲しからずや人もさなるや

○　信濃　白梅女史
二人して誓ひに植ゑし百合の花つぼみふくらみ水無月つきぬ

○　上總　新宮はつ子
あら磯の千歳を經たる松が枝に靜に積る初春の雪

○　上總　眞砂子
春日野の鹿のなく音のほのきこゆ藤咲く家の垣のあなたに

○　磐城　相馬繁子
みこゝろにふれじとばかり昨日今日思ふ人をばにくみ給ふな

○　麻布　江森美子
少女てふいとやごとなきわれなれば熱き思ひにかへりことせず

○　遠江　富永雪子
靜かなるみ寺の庭の山茶花は經讀む僧の聲に散りけり

○　大阪　平尾とき子
林いていたりつきける御社に梅が香通ふきさらぎの風

○　靜岡　波多野いち
なゝたりのをのこの中に唯一人涙もろきを戀してありき

○　京都　井上澄子
をかしけれ君もし來なばわれもまたともに死なむと云へるちかひは

○　神田　三好富久子
くれなゐの野山の紅葉色あせてわれの二十の秋も行くらん

○　信陽　水の月
けざやかにはれたる空のしたにある大すゝき原はてししらなく

○　かすみ
われと云ふ少女が胸に戀草の萌えて咲きけり春ににる花

○　讃岐　衣笠すゑ子
何日の日かやさしき人の一人のわがため來たる事もあるらむ

○　牛込　星野あい子
われ別れ二年すぎぬ君は又人と戀ひして別れやしつる

○　長崎市　茂榮
物なべて新しき年明けにけれ世は白銀の雪のふりつゝ

○　越後　濱子
泣きつゝもれじけし性質の人なればにくきこと云ふ君をまつかな

○　加賀　そとゑ
祖父君のとうて給ひぬ白紗の絹につゝめる古瓦など

○　石狩　河合菊子
梅の花櫻の花にあくがるゝ春の胡蝶は我が心かも

○　岩見　藤田たれ
身ひとつの胸にあまれる思ひあれど語らん友のわれにあらなく

○　三島　遠山雪子
月負ひて我行き行けば夜の土に背き影つく苦きかなしみ

○　豊後　大角岸子
たゞ一人歌ひて倦みて秋の空ながめてあれば鳥啼き渡る

○　信濃　いち子
いろ／＼の秋花のせし小車の靜に行きぬ山里の街

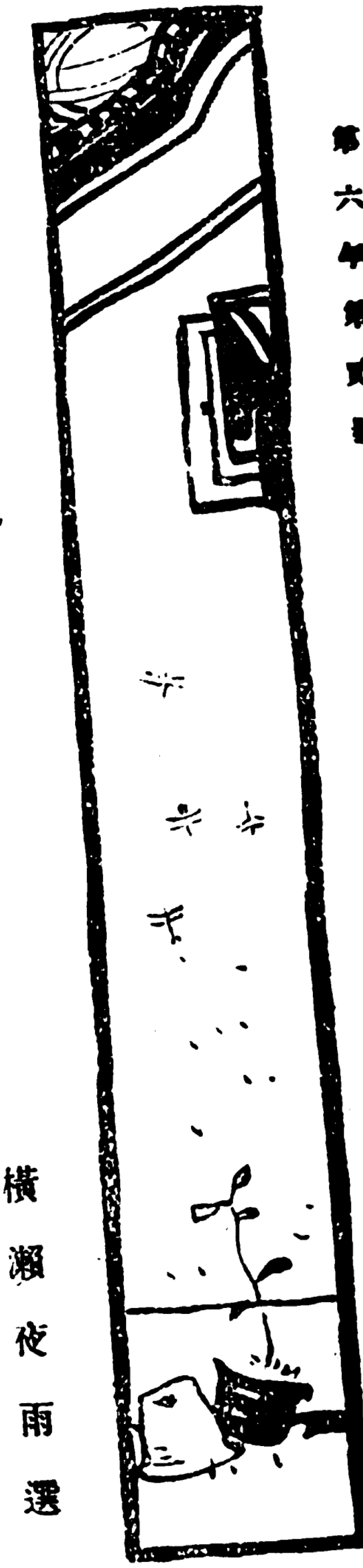
○　京橋　登倉夕哀
大空のはてに月みゆ木枯の吹きまく海の岸にし立てば

○　本郷　相樂燕子
朝の夢清き流れにそひ行けば白菊あまた咲ける野に出ぬ

○　青森　小野寺美能惠子
かゝるわがなげきをするはうすなさけ持てる君とも知らざりしゆゑ

○　京都　宮原みどり
鐘なりぬ銀杏は散りぬ鐘なりぬまた鐘なりぬ山寺の夕

○　松代　芳子
ほのかにも薫る天より降り來るくろ髮のごと匂ふ春雨



日記

橫瀨夜雨選

○年の暮（天賞）

橫濱　せゝらぎ

クリスマスの歌は今日からけいこ致します、と先生が仰有る。胸が迫る、去年のクリスマス時分は今から思ふとどんなに暢氣だつたかしれない、年一つとるといふことが譯もなく嬉しかつたが、今年は厭だいやだ。ゆめのやうな一年はもう暮れるのだ。若いはなやかな日は、來たと思へばすぐ逝いてしまふもの、儚ない短いものと思ふ。無心だつた日が一番こひしい。午すぎ鶴屋へ買物にゆく。お正月には初めて島田に結ふつもりなので、歸りに前髪の櫛と白丈長を買つてくる。母樣は私の小豆色の紋付を縫つていらつしやる、母に背きし罪を抱く不孝な娘の心も知りまさず、休むまもなく私のために手を働かしていらつしやる、と思へばつひ涙もこぼれる。すまないけれど、身躰と一緒に延びた心は母さん許りの胸に住まなくなつたのだもの。夜使ひに出る。町はうつすりと霧が罩めて、戸部山が夢のやうに見える。河岸はまつくらで舟の灯が水に映つて、どの舟からとも知れず男の唄聲が川面に滑つて下にながれる。目まぐるしい横濱の夜とは思はれないやうだ。街路はさすがに賑かて生に逐はれてる人達がやすみもない足どりて、大賣出しの紙札は泄さずにらめながら馳るやうにゆく。不景氣だ不景氣だといふが。この不景氣とはどんなものか、私には未だ解らない。それだけ私は幸福なのだらう。苦しい現實に觸れてないだけ、それだけ私は幸福なのだらう。

寢しなに雨が降り出した、種々の考へが浮んでねられない、先生はどうしていらつしやるかしら、あゝあの方は――。先生に手紙もあげたいのだけれど此ごろはかく暇もない。起き上つて雨戸をあけて眞黑なそらを仰ぎながら誰にともなく、さようなら、と言つてすぐ

に床に入つた。

髮を結ふに至りて張りつめたこの人の涙もやうやく乾かうとするを見る、傷いたる身傷いたる心、あざむいて人に嫁かんよりは、むしろ清き涙の中にあれかしと思ふ。無限の哀愁をいだいて、われ即詩、詩即われたる境にひとりあり、多く望むべからず、みづから呼しめてみづからさとらず、楊々として人を去れるヒツチをおもへ。涙おほき君の現在を祝福す。

○初めて先生になつた記（地賞）

佐渡　靜子

隙間もる濱風にふと目がさめた、昨日辭令を頂いて今日はじめて先生、校長先生といへば五十路に餘る、白いひげに、大きな眼鏡をかけて、校長兼訓導兼小使どちらから呼んでよいのやら分らぬ、今まで一人で六級を教へてゐたそうな、やつとの事で生徒へのあいさつがすむ、いよ〳〵明日から教へる事になつた、四、五、六で五十人程、漁村の事とて多吉、三藏、オトラ、オクマと云ふ樣な名が多い、今迄の教科書とは、はなれて小學教授法と親まねばならぬ（十二月四日）

朝から白いものがちら〳〵降り出した、早々と包かゝへて――生徒はと見ればこの寒いのに足袋もはかず。足中草履とかいふのをひつかけて雨が降らうと、風が吹かうと、赤毛布草履ははなさぬ、時間の折は四角な木を二本バチ〳〵とうつ問ひをかけると、オレに云はしておくれオレにオレにと立たんばかり、無邪氣なのには「靜に」との小言もいはれぬ、三時間目には一、二の遊、半ば頃になるとソラ吉やれ、トラあつちだぞ、オクマいかねエか、バカメ何しとる、まるで乞食が米でもこぼした樣なさわぎ、なれぬのでどうしてよいかわからぬ校長樣に話して見ると御互ひすてにするのは村の習慣だからとおつしやる、（五日）

習字をなほして居たら一人がオニを仕樣と呼びに來た親しくなるのはこゝぞと運動場へとび出す、皆嬉しそうに付きまとふ、明日から岸本浪子さんとやら云ふ人が此校へ御出なさるとやら、小學校終へたばかりだが教授は上手との事半途退學にもせよ一歩でも上をふんで來た私、どうかまけたくはないがさて又今夜も一生懸命に教授法と首引かそれとも教案かしら（七日）

先生になつた記もずゐ分見たが、これほど特色の有るのは一寸見つからなんだ、生徒の名のブッキラ棒なのもよく、おれが〳〵と答へを争ふといふのもよかつた。

○初冬日記（人賞）

岐阜　篠田とみ子

十三日。降りはせぬけど寒い日だつた、一ケ月計り前結婚した松野さんみえた「初樣が遠い〳〵處へ行つて奉公でもしてみたい、と仰有つたて、私も遠い處へ行つて奉公でもしてみたいわな、っていつたら初樣が、そんなら兄樣に、そう言つて二人で行かうかなつていふので、仕方なしそんなら一度尋ねてみますわ、つて何て言はうかと心配したけど、旦那樣にいふよりか義

母様に話したらいゝ、と思つてそつとその事を話したら、義母様はにつこりしてらした丈て、御返事がないから、初様に貴義妹から、そういつてごらんといつたら、初様も兄様にはそんな事は、よう言はんといふので、では仕方がないから紙にかこうといつて、巻紙に連名て、白太郎様として封筒へ入れてお机の引出にしまつといたら、明くる朝みつかつて、怒られてしまつて」、と話すの、「何つて怒りなして？」「、尋ねても返事どころか、右手横に振り乍ら笑つて顔をかくしてしまふの、始めて丸髷に結つたといふ赤いてがらが、色白のえり長の松野さんにはよう似合ふ、「では旦那様の怒り様を私がやつてみよか」、といつたら「御免なさい」つていふ。

十四日。今日は割合に暖かい日だつた、午後さつま芋のてんぷらをしようと思つて、油や粉を買つて來て貰つたから、早速やりにかゝる、こんろに早鍋をかけて五合の油を殘り少なに、たら〳〵とあけた、水でもふく様に待つて居てもぶく〳〵はいはぬ、姉様がもう入れにやだめだといふので、私は一つ鍋にそうと入れたピー、プ、ヂリ〳〵いふ、芋が大き過ぎたとみえて浮いて來ぬ、四本針持つて來て刺してみたら、ぷー、と強く私の顔や手に油の玉が二三滴かゝつた、衣が濃過ぎたのだ、頂く時先生が一きれ頂戴なんて見苦しい事はいはぬから、



とぎものや　大阪　渡瀬淳

私の方向いてお食り、ぢつと我慢しとるからと仰有つた事思ひ出して、一人てふき出したら、母様がそらまた獸へんと有つたのて、皆が譯も知らないて笑つとるの。

才氣横溢す、をしむらくは斯の人未王上の點無し。王上の點、こんな事を言うとまたにくまれよう。長曾我部菊子忠告して曰ふよう、女の人に對してはも少しやさしうおつしやるものです、私が詩を離れて散文に逃げたのはあなたの冷嘲熱罵に堪へられなかつたためだといふ、されぱとて逝く者の追ひがたきはひとり長江の水ばかりてはない、遠ざかり行く人々の影を見おくりてわづかに漏らすほゝゑみをとがめられてはたまらない。諜反者は女の中に有るのだ。

【秀逸】

○矛盾

本郷　千とせ

十一月廿七日、晴

額へ重い鉛の塊を乘せて居るやうな頭痛が漸く癒えて熱もすつかり醒めた、床の上に座つて左右に首を振つて見たがもう大丈夫らしいから胴着を一枚餘計に着て十時頃起きた、あと襟さへ付ければ出來上る父の羽織を拵らへて了ふと、針箱を持ち出したら母に止められたのて、日當りのいゝ座敷の障子を開け放して雜誌を讀んて居ると字がぎら〳〵して紫に見えたり青に成つたりする、眼のせいかしら、と思つてぎゆつと潰つたり開いたりして見たが、全く光線の加減だと確めたのて安心した、弟が「是れを胸へ付けて」と眞白なシャツとMKと切り拔いた黒羅紗とを持つて來たが「厭てすよ……又ボール仕やうと思つて」と叱つて遣つたら「ジャー僕が付けるからいゝ」と覺束無い手付て縫ひ始める、一寸私がすれば造作もないのだけれど、弱い體にベースボールは餘り運動が過ぎるから禁じて有るのだが、明日は大切のマッチだとか云つて二三日前から頻りとクラブから相談に來る樣子だから、如何に子供ても斷はれないやうな義理も有ろうと思ふと縫つて遣り度く成つた、「何て出來るものてすか、お出しなさいよ」と骨折つて付けたMを縫ひ直して「ズボンも綻びて居たから持つてお出て」と云へばかう云ふ時だけ素直に持つて來る、是れてはまるて行けよと仕度してやるやうな物だ、日頃止めて居るのに何だか可笑しいから「縫つては上げるけれど決してボールに行つては不可ませんよ」

此の間嬰兒を負うて五六歳の男の子の手を引いたお内儀さんが、駄菓子屋の前て「お前はお菓子の方計り見て居るんだね！、欲しいんだろう、今日丈は買つて遣るけれど是からは开麼お行儀の惡い事はさせないよ」强請りもせぬに與へて小言を云ふとは餘程變な人だと思つて居たが、口て行くなと云ひつゝ手て行くべく仕度を仕て遣る抔も隨分矛盾した話だ、けれ共こんな塲合はまゝ有るものだ、と獨て可笑しかつた。

才華。

○歲暮の記

麻布　花子

油氣ない二百三高地も潔よく捨ねばならない時がきま

した、……不衛生的とは思ふ……ても處女の誇りてせうこの島田は……初島田てすもの……あゝおもたう御座ます、否おもたきは頭ばかりてせうか？、それよりをもたきは私共の運命てせう！、處女と云ふて、初島田に憧がれてるも今暫しと母樣は仰有ましたもの……あゝこれより迎ふべき新年には進み行く世の習慣にも服從せねばなりませんか？つく〴〵變る自分の姿と共に……心もうつり行くのてせう？女とは果敢ないものてす……十二月二日記す、

とし子さんからの御手紙いつに變らぬ御書きぶり優しい御方だと嬉しくて……あゝとし子さまも、變化なき興味なき生活と仰有つた、處女とは變化なき、興味なき生活を示すのだろうか？、毎日〳〵同じことを繰返して、あゝ嫌だつく〳〵嫌だ、この單調なる生活にはあき〳〵する、……噫、誰れか私をこの生活の中から救ふてくれる人はないだろうかとつく〴〵思ふ、十二月四日記す、

すぐに行ねばならない用て、平生着のまゝ亂た姿は縉ても寂しい往來を行ふと思ひますが、どうしても華な町を通なければなりませんの、白晝往來を根高き髮ては恥かしう御座ます……矢張り心狹い少女てす……？人は見やしないてせうか？氣になります――この亂た姿が　をそる〳〵華な町を辿ります――けれども、流石は歳暮てす、も早名殘の日も幾日てせう……安閑として人の姿を見ますする人も無い樣てす……安神して、騷しい町を柔い温い靜な日光をあびて行きます……十二月十四日。

初島田を結つた感じがこれだけしかあらはれないのは殘念だ、ロントを與へられればこの人は確に往くべき途を發見し得る望みがあるのに。

○其前後

小石川　つゆ草

四日。晴
母樣に叱られ〳〵如何しても下し兼た肩揚をとう〳〵今朝……鋏て止を切た時、ズウッと絲を引た時惜しくて〳〵命がちゞまる思だつた。夫御覽すんなりしていゝと。後背に廻て母樣は仰しやるけれど、けれど些とも嬉しく無い。急に年寄の仲間に追ひ込れた樣な氣がして無暗と心細くて。午後姉樣が被入る。桔梗色の半襟がよう映えて一しほお色が白く見える。一ちやんは又太つたわ。あの可愛い目、口。林檎の頰はなめ度い位。あやせば聲立てゝ笑ふしォッコン〳〵と御話も上手。私に抱かして、僕に抱してと大騷ぎ。近頃は義兄樣も社が退けるとサッサと御歸宅、唯相手に御餘念なき由。誰だつてねえ、こんな可愛い天使が侍てるんですもの……。「アラ草さん取つたの」姉樣に肩を輕うたゝかれてときまぎする。レース糸求めに町に出ると通る人も〳〵肩の邊に視線を注ぐ樣て恥しく、俯いて小さく成て歩く。宵闇、ねしなに漸六日計の月を見た。

六日。秋晴一碧。空の高いこと、高いこと。風なきに散る

紅葉よ、銀杏よ。もう百舌も啼かなく成た。吁今年もおちきに暮れる。そうして〳〵十九の私の秋も逝く。幾歳だとお思ひだ……ふと母樣の御小言を寂しく繰り返して見た。あゝもう私は幾つに成る……………

チャリンと鋏を置く音。母樣は御始めに成たらしい。急いて私も御裁縫に座る。指の痛くなる程夢中に縫つてわたを入れる迄に漕ぎ付けてホッと息つくと四時。「今日の試驗は上出來よ姉樣」と晴々した顏して澄さんが歸る。今春迄は私も試驗の屈托より知らなかつたつけが……「混濁の浪逆巻きて——菊畑の方で兄樣の唱歌のみ聲が高い。障子開くとほんのり花の香がたゞよふて來る。夜炬燵で澄さんと來週の献立を相談して居ると、折惡しく兄樣が降りて被入て傍から何の彼のとまぜかへすのでとてもまとまらぬ。仕方なし止めて後は思ひ〳〵の御話に樂しく花を咲せる。如何したか大木樣の犬が吠えて〳〵氣味が惡い。十一時就寢。

「幾つだとお思ひだ」と言はれ〳〵した十九の秋はたうとう暮れて、幕の下りたのは寂しいけれど、洋々たる春の海はあなたの足下に横つてゐませうおめでたう。

○始めて商家の妻になつた記

名古屋　胡　て　ふ

十五日、前日からのお約束て今日三州の豐川稻荷へ連れて行つて頂く筈て昨日髮まて結ふて支度をしたけれど、姑樣が豐川樣は嫉妬深いから二人連れて參詣すると夫婦別れをするといふ事だよ、と被仰つた、旦那樣は何にそんな馬鹿な事が、と被仰つたけど何んだか氣にかゝつて恐い樣な氣がしたので無理から、お留守番をした、旦那樣は笑つてお一人ていらしたほんとは私も行きたかつたけれど、

十六日、午下り帳場格子てお茶を入れて居ると、廿五六の美しい上品な奧樣風のお客樣がいらした、舶來の毛織物を見せてくれと被仰る、店の者はいろ〳〵出してお相手をして居ると、光澤がいゝとか色がどうとか被仰つて敷居の外へ出て見てから、又出直して參ります、と出て行かれた、旦那樣が手代の秋どんに何か目くばせなさると、秋どんがついと表へ出て行つた、一寸してから、隨分大膽な女てすよ、私が今お買上げの品の代金を頂戴致しませんてしたから、といゝますと私は何も買つた覺えはないと白らを切るのてすもの、コートの下からこいつの端が見えたから引張り出してやつたら、隨分な目きゝだチと和笑り笑つて平氣で行きましたよ憖いちやつた、どうも大變な女てすよ、と八拾何圓といふ織物を出した、どうもあやしいと思つたが矢張りそうか是れからも皆んな氣を付けてくれ、と笑つて被在る、私は何んの事やら一寸ともわからぬので伺ふと、今の女が外へ出て品を見る風をして居て、そばを通つた十七八の令孃風の女に、するつと渡した、といふ事だ、こんな風の萬引はよくあるから氣を付けなくつてはならぬと被仰る、私は驚いてしまつた商買は店に座つて居ればよいと思うてたらなか〳〵六ヶ敷

しいものだ、私も馴れたらこんな目覺くなれるか知らとほと〳〵感心した、姑様も、だからお前もお店に居て見ならはねばならぬと被仰つた、夜、妹へ商買は學校より、よほど六ケ敷しいものだと今日の出來事をかいて手紙出した。

夫婦して行くと緣が切れるといふのは稲荷様だからつかはしめのこんこんちきがやくのかも知れない、萬引御用心の事。

○病める或日

越後　佐藤浪子

うつら〳〵苦しい夢路からさめたともなし亦さめんともなし。枕元障子が薄々と明るくなつて來た、電氣の光が褪せて、白々した幽かに透き通つたやうな曉の色が閉ぢ込めた室に流れて、私の體はヒツタリ底に押しつけられて居るやうだ、胸ばかりは非常に愁哀にハラ〳〵して、魂は薄暗い野に一人で泣いて居るんだ、と何日も思つて居る、すぐ側に横向に伏つて居る澤田さん（看護婦）の顔がいろ〳〵に見える、あゝ〳〵彼の顔がころびさうだ、おや矢張りはめてあるんだに、私は此頃どうして視線が動揺するんだらう、また、お腹の氷が溶けて終つた、――（曉け方）

お晝にはお乳が少し飲めたので皆様が大喜び。

「お孃さん芳井様つて方が見えましてよ」「まアー、早くこちらへ」「お苦しくはありませんの」「否、一寸も」「左様て、彼の御親友」と澤田はにこ〳〵して座ぶとん等敷いて席をつくろふ。

「浪さん、堪忍してね、私新潟へ行つてたもんだから一寸も知らないで、怨んで居たんでせう、ね、ね、」「いゝえ」と私は何も云はれなかつた、只熱い泪が頬に流れて、美さんもお頬を上げないで被在る、――「やつれたはね」と涙に濡れた眼でじッと私を見詰めて、頬に亂れた鬢の落ち髪を掻上げて呉れ乍、「すまなかつたわね、赦し



ちゝやの女　麻布　仁田みつ子

て頂戴な、浪さん此雪の消えない中に乾度癒つてよ、最早百日も經てば蕨狩の時節も來るし、それからは鯨波へても行きませうね、二人限りて」「美子さん、病氣になるとどうして涙脆くなるてせうね、諸々な事思ひ初めるとすぐ泪ですのよ、私こう思ふの、今の私の感情は細い〳〵丁度かひこの口から吐く糸のやうなものね、あの美さん四月迄になほれるてせうか、え、え、？」「あらッ、なみちやん癒らずに……」其儘美子さんは痩せた私の右手を犇と握つて下すつた、强い吹雪がザアーッとガラス窓にこぼれる、

美さんは浴室へ被居つた、枕元の時計を見ると四時、また日が暮れるのかと思ふと身を斷られる如に辛い、深々と更け行く長夜に幽かな人の寢息を夢か現にきく程辛い心細い事があらうか、　　バタ〳〵と嫌に上草履の音を立てゝ歩く、看護婦なんだらう、どんなにハイカラがつて居る事だろう等思ふとおかしくなつた、と、其間に遠く絕えて終つた、重い空氣が漂ふて居る、隣室で讀む己が罪を聽くともなしに聞いて居る、「御免下さい」年寄りの看護婦が這入つて來た、また吸入をやるのだな、妾は只懶うくなつてグッタリと瞳をとぢて終つた――。

廊下を通る足音を聞いて、內々、またハイカツてゐるだらうと看護婦をひやかす位てはこのお孃さん大丈夫だ。さるにても肺病の多いとよ、誰か死んで見るといゝ。

○初冬の一日

宮城　沼倉馥子

十一月十九日。

昨夜大變お夜がよかつたので、今朝は大霜、非常に寒い、菊も餘程萎えた。隣の柿の實は昨日より赤くなつた樣だ何時迄もがないて置くだらう。御飯後近いうちにお嫁さんに行かれるお和さんをお訪ねする、二人心地よい芝生に座つて懷舊の話に耽つた末、お和さんが「ね、何時迄も忘れないて頂戴、私は貴女が忘れたつて忘れないのよ」なんて、仰有るので急に悲しくなり不覺の涙を落した。途中迄送つて下さる「明日は乾度ねいらつしやい」と、お別れする。元より人の妻戀ふわけてはないが、年每にお友達と隔れるを見ると流石に寂しい吁我れもまた、弱き者汝の名は女なり、てあつたか？家の門を潛るとすぐ、正午の鐘の音が聞えた。いつもよりあはれつぽく感じた。

縫ひかけの羽織をきめたは、二時過ぎ、それから買ひ物に行く、歸りに松尾屋（果物、甘藷小賣）の店前て頗ぶるハイカラな夫婦づれを見た、婦人は今しも蒸した ての甘藷を買ふて居る、彼の扮裝て何處をかぢてあるくのか、聊恐縮する、近頃見たことのない人達だからこの邊てはあるまい、こんな田舍によさか、密月の旅てもなかろう。婦人の雪白のボアーとか云ふものが妙に私の眼に殘る。歸る早々取り殘し物があつてお眼玉を頂戴吁、私は百になつても二百になつても馬鹿が直らないか？夕方待ち兼ねて居た家庭日記がきた。取る手遲しと和歌欄を見たら、すつぽにもない。譯のわか

らぬ三十一文字を投書しながらも、もしや秀逸にても在りはしまいか等思ひ、人知れず口號みなどして居たつたが吁、私は馬鹿だ、私は出來ない、だから學才俊秀の人達はお友達をやめて下さるのだ。

名無し草様のお作には同情の涙を落した、東西南北人情には變りのないものと染染思ふた。若杉小夜子様は鳥子様ぢやあるまいか、菊地さんは今頃は、新らしき人か

今夜　寒むくて堪らない、北海道はどんなであらう臺灣は…。光村さんへの御返事書く、筆は思ふ様にうごかない、フウちやん（小猫）が余りやかましいので床に入る、十時五十分。

おつしやる通り菊池さんは新しい人と共に遠州濱松に居ります、鳥子さんはまだ茨城に居るかどうかは知らない。が其のうお國からは柿がまゐつたでせう、お裾分けを下さい。

○徒然に

福岡　田中白萩

夫れ御飯だよ御藥だよと母様が三度姉様が二度被入つた限り、夫もすぐ忙しさうに出て御行きなさる、心細い日だ、夕方森様から御手紙、貴方が未だ快くないつて、何事ですの此の忙しい師走に最つと元氣を御出しなさい病氣なんかさつさと追出して――

さつさと追出してさつさと出てくれゝばよいがよしともつかず惡しともつかず自身でさへも忌々しいもの。側から見たら猶更だらう。何だか落付いた心をせゝくられた様で腹が立つてたまらなかつた。（三日記）

今日も矢張り構手がない、母家の方は晝過ぎ小田さんが障子張替ゆると被入つたので紙の内へ紅葉を處々入れて下さいと頼んだら、最う紅葉なんかありませんよ、牡丹の花瓣など入れときませうつて吃驚した何時のまに落ちたんだらう、障子の交りに戸を閉られて暗い、ともすると眼を閉ぢやうとする眠りでもしたら夜が大變て。節穴數へにもあいて手首握つたり頰つねつたり夢中でして居た氣付いてからが可笑しくて〳〵夫れはやせたか如何かを一心に考へて居つたので暫くして障子が出來て來た、赤い花と青葉との並べ方が中々よい小田さんも男に珍う器用な人だお蔭で淋し時の御友達が出來た。夜突然叔父様が被入つて注射をなさつたそしてもう大分よいが此の結果一つだと父様に言つて被入つた、もうあの注射も三度目だが何のためだらう暫くすると汗がすつと出て眠氣がさしてつひうと〳〵してしまつた（五日朝記）

紅葉などはもう有りません、と言つておいて牡丹の花びらを入れようとあるのはどうしたゞです、まさか造花ではなからうし、秋か春かわからない。

○十一月の或る日

伊豫　殘月

學校から歸つて姿見を見ると、私は少しも血の色がない、沈んだ青白い顏をして居る、お友だちの頰はほてる秋だのに…　去年までは皆と同じに血色のよかつた私、もしか〳〵死ぬるのでは無からうか、姉さまは十

七て死んだ、私も十七……なつかしい姉さま、なつかしい妹、二人とも葡萄の多い向うの家で死んだ、私もあの家へ歸りたい……と思ふと、思はず涙がホロ〳〵と頬を流れた、あゝ私は、ほんとに思はなかつた涙を流して。

世の中の女がよく泣き、よく涙を流すのを、何時の程からか嫌つた私は、心の内にあふれそうな涙を飲みこんで顔では平氣をよそほうて居るひねくれ者、そのために、今まで多くの人、殊に先生から度々、悪く誤解された、……とう〳〵私は涙に負けた、

頭がギシ〳〵痛む、ピンと櫛とをぬくと輕くなつたから、つひてにゆるくマガレットに結うておく、銘仙の羽織に、松に手傳はせて綿を入れる、松は水仕事をするから、手があれて居て眞綿が引きかゝつて、一向自由に入らぬ、その内祖母さんが松を呼んだのであわてゝ、部屋を出る拍子に針箱を倒した、ガラ〳〵と鋏も糸まきも、引くり返つて、おまけに針箱の椺の所が凹んだ、去年買つてもらつた計りの毎日毎日汚れないやうに、みがいて居る私の針箱は「まことに飛んだ事をいたしましてございます」と、手をついてあやまつて居る松の顔と針箱とをながめて。私はおこりゃせず、そうかと云つて一向許してやるとも云はない、その内に松は針箱を元通りして祖母さんの方へ飛んで行つた、別にこはれて居なかつたのでホッと安心した、私に如何してこんなだらうとおかしくなる、腹が立つたら直に松におこつた樣を見せれば宜いものを、腹が立つて泣き度い程なのを知らぬ顔をしてすまして居るのだから。

やんちやの嬢さま、松がこはいと言ひます。

○月給日　　とよ子

二十一日　午前新任校長の奥樣御挨拶に入らした小紋縮緬のお召物に厚板のおみ帯むねから指にキラ〳〵とさながら滿艦飾、私も女、一生に一度はと、思つて後姿を見送つて居たら、鷄がコヽツヽてなく裏にいつて見ると三ッ玉子が産んで有るやれ餌代が出來た午後の時計が十一時打つ子供を連れて、わたと物さし買ひに行く途中米屋に寄つて、むぎと米と注文する小間物屋で、洗たく石鹸買つて居ると子供から毬をねだられる拾貳錢貧乏する坂の所迄來ると巡査が掛けて來て先にいつた内へ歸つて見ると裏の家主の内で今の巡査の聲がする何かと、思つて聞いて居ると昨夜とまつて今朝返つた家主の兄さんが、むさし坂で輕便鐵道に引かれて死んだて云ふ知せ、今日早引の夫は午後一時學校から歸宅、ポケットから淺黄色の狀袋出して、計算と云はるゝ算盤と帳面持つて書齋に行く砂糖をかひすぎるつて一寸お小言をきく、子供の被布の新調を願つたが無事通過した今一つと思つて自分の下駄をねだつたら、はね附られた。夕方井口氏來訪。豚汁でお夕飯上る。子供ねさせて文壇の臨時を讀む。外は大風。

校長の奥さんの帯を羨しがるところは若いようだが、砂糖を使ひすぎると小言を喰うて格別不平も無いに至つては純然たるおばさんだ、これは失敬。

○十一月の中一節

直江津　木島磯巾著

平生母様が「立ち通して何にも出來ん」とおこぼしなさるが左程とも思はなかつたが五六日前より母様が指はれ物で困つて被居るので私は勝手元に働いて居る、何ても思つたよりは六づかしいがお米をとぐのが一番困りますどうしても母様の樣な音がしない、大方力がたりないのだと思つて力を出してとげばお米が皆割れて仕舞う「せめて水流してでも」と叮嚀にしたら一時間かゝつた僅か二升のお米をお晝は別に變りもない二時に母樣が無沙汰に過した一二軒を訪ねるとて出かけられた。

夕飯には大根とイモノコのお汁にと云ひ付かつたので教へられた通りに大根を切つたが手が動かん細く切れない、是では又笑はれるけれど詮方ない汁の中へ一緒に大根を入れるのか汁が煮たつて居る所へ入れるのか分らない「イモノコは早く煮ないから先に入れる――よし大根も入れつちまへ」と一緒にしたやがてイモノコの煮た頃に大根も丁度よかつた御飯も日増によくなる樣一寸これ位るな事は出來る樣に思つてたがやつて見ればさつぱり分らない是からは毎日勝手て働かう。

夕飯には皆に笑はれるだらうと思つたら果せる哉皆が口眞似の如に大根の切方を責めた惡口の兄樣は柱の樣だなんておつしやるから堪らない「是では下女にも出られ相ない」とはあんまりだ「お生憎下女には出ませぬからね！」と云つたら父樣と母樣とがクスクス笑らつて居らつしやつた、定坊の股引は今日て七日になるが未だ出來ない此分ては正月着物も六づかしいもんだ。

下女には出ないかも知れないが、お嫁入はなさるでせう、七日かかつて股引が出來上らぬ奥樣では……と言うと、また餘おあひにく樣と喰はせるでせうか、頗る疑問だ。

○御出勤までの記

かはたれ

○月○日、旦那樣は未だよく寢つていらつしやつたからそつと床を出て臺所へ行くとお達が「もう朝御飯のお仕度が出來ました」と云ふ、をや早い事ね、今幾時？と柱の時計を見ると七時、まあ、よく寢たことても昨夜遲かつたもの。今日の新聞を持つてお寢室の唐紙を開けると「姉さんは最う起きて居るのか大變早いね」と起きて居らした、「お早う御座います最う七時てすよ、あんまりお早か御座いませんわ」「姉さんは平常遲いが今日は珍らしい早いと思つたら最う七時か」と、ムックリ御起きあがりになつて、冷水摩擦をするんだから水を持つてこい、と有仰る、まあ、この寒いのに、お毒ですよと云ふと、「何に上崎も二三日前からやりだしたから出來ない事はないさ」と緣に出て膚をお脫ぎになる、折から朝の日光が淡く照つて、初冬の薄ら寒い風がそよそよと吹く、旦那樣は學生時代から運動を

お好みにならなかつたそうだから男の割に乳の邊りの肉付きが惡いそれにこんな事を遊ばしてお風邪でも召したらと心配で〳〵て堪まらなかつた。

御一緒に朝餐をしてゐると、赤木樣が被入つした、御飯もそこ〳〵に、大急ぎで服をお召しになる、達と二人でお手傳い申す、旦那樣はお勢が高いから苦しいわ、と云ふと、そんならとおしやがみになる其のお姿の可笑しさ、私も逹も思はず吹出す。漸くお召しになつて、今日は少し遲くなると、赤木さんと並んでお出になる、私はお姿の見えなくなるまで門に立つて莞爾頰笑んだあゝ私は月日の經つのが何んだか早い樣だ、いつまでも〳〵年を取らずにこの儘暮らして居たいわ。日記の一節。

「あなたおせいが高くて、私爺をなほすのにくるしいわ」と言ふと、むさうかと先生屁ひり腰になつてかゞんだらしい、赤木樣は見てなかつたてせうか。

○淋しい日記

尾張　秋月

十月六日、曇り

授業後茶の湯へいつた。いつも乍ら優しい先生に、迎へられて上へ上ると何誰もいらつしやらない。まあ嬉しいとほつと胸をなで下した。稽古がすむと先生と二人きり四方八方の話をした。私は一日中で此處へ來た時が一番樂しく恰ど重荷を下した樣に身體が樂になる。何も思ふことなく靜かに安樂に送つていらつしやる先生が羨やましい。私も一生をこうして送られるのだつたら、ほんとうに嬉しいけど、夕方家に歸ると又濕つぽい空氣——家は陰氣でもないが家の人の心が陰鬱だから、私はこれが悲しくてならん。長くもない人生をこうして、ぶつ〳〵云ひながら送つて私はいつ樂しい時がくるのだらう。こう思ふと母——不貞な母が恨めしい。賑であつた家をこんなにしたも母である。姉さんをあんな陰鬱にしたのも母である。嗚呼恨めしい母が、時には家がぬけだし度なる。祖父母の邪慳な詞。ほんとうに冷たい家だ。

夜文典をしらべた。やりにかゝれば面白く色々な苦痛をすつかり忘れて愉快になる。どうしても眞面目でなければならぬ。眞面目でやれば最後の勝利がえられる。

十月七日、晴

春樣から長恨歌（芝居）を見に行かうつて來た。見たいは見たいけれど、樂しく見て歸れば後できつと皮肉なことばかり云はれる。まあ止さう。姉さんからお手紙が來た。何故姉さんはこんな悲觀的なのだろう。まあ死にたいなどゝ、私今に姉に別れたら、誰をたよるのだ、急いで返事を書いてポストへいれにいつた。

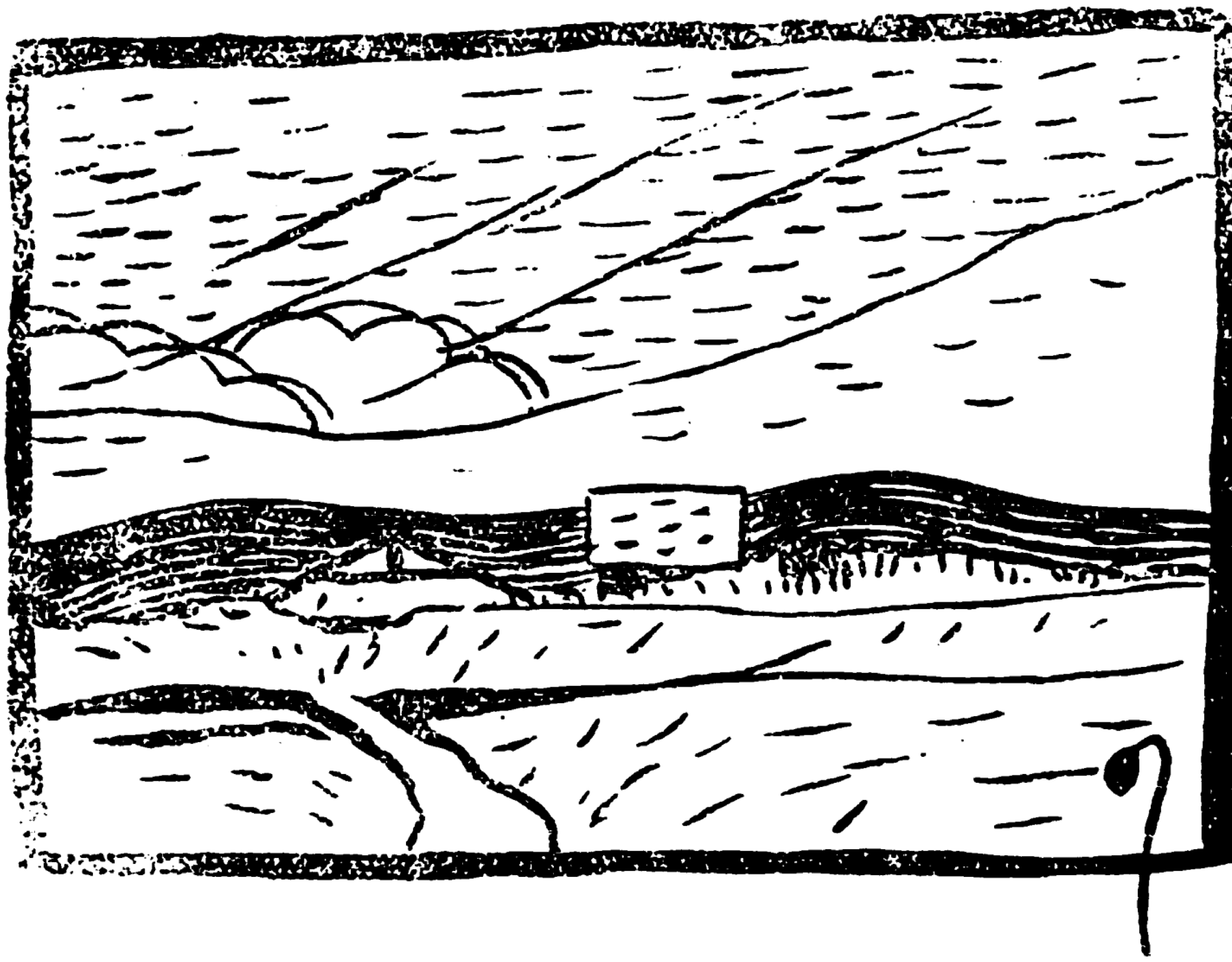
まがふとなき女の手なれど、これを作つてこの人に書かした男がある、二人となき生みの母を地獄におとしてまで文を作られればならぬ理由が有るのだらうか。

○交際日記

沼津　植松　操

如月〇日、郵便　と云ふ聲「姉さんどつさり郵便よ」と保ちやんが八九本の郵便をもつてくる、「有難うよ」

云ひ乍ら皆な住所を見るとひとりもしらぬ人ばかり：：ア分つた：：きつと今月の女子文壇へ出した交際を望んだせいに違いない、そう／＼と云ひ乍ら第一に赤い小形な封筒を破ると、バラリと落ちた紅のレターペーパーにすみれインクの走り書、：：：男――に違いない何んとなく嫌味たつぷりの文、「あなたのお名前は兼々紙上にて：：：」とオ、惡くらしい、しまい迄讀むとサラリと落ちたもの：：：三錢の切手まで添へてある、（ユウ、アール、カンニング）と云ふて見る、次のを取ると之れも男、ボキ／＼した金釘流の字や文を女らしく苦心した痕があり／＼見えて、氣の毒でもあり又ふき出しそう、早速膝の下へ卷き込んで次のを見ると字は下手ながら慥かに女、永久にお交際をとおきまりの文句が一二行と歌一首、次のは自筆の繪葉書に怪しげな歌一首――差出人はT



あたごやま　京都　寺井芥子

○とていつか一度よこした事のある云はずとしれた：男外の一通をとると實の女かとうなづかれる筆のつかいぶり、名をよく見ると文も優しい、どこかで見た事があると考へた末やつと、氣がついて、立つて三四月前の文壇を探すと東京○○○子と美文欄の一等：：此の方ならいつか口繪に出てゐた筈と又古い雜誌を探すと誌友の面かげの三人目に美しい目の方、一文字の眉が細く口元に少し忌なところがあるがとかく十人並の人だ、返事を書くつもりで机の上へのせて、次の手紙をとる極下手な女やら男やら分らない、今ついたのがすべてゞ七通女が二通に男のが五通、此の男のだけをモデルに小説を書いたら嘸面白いのが出來るだろう：：：

“You are cunning.” と罵る御當人が面をかぶつてるのぢや、あるまいか、見ず知らずの人に交際を求めて切手まで入れて來るも阿呆らし

いが、もしそれが男だつたら或野心を包めるものと認めればならぬ。
喝破して曰く "Omai wa poppolo zurue none"

○家庭日記の一節

鹿兒島市 冴 殘

弟や妹を出校さしてから、一人日向の良い所で裁縫する、もう心の中は郵便は未だか〱と待たるゝ、ポチが慌たゝしく吠へるので、今こそと針の手も休めてゐると、お米屋の番頭が願ひますつて云つて通帳をほり込んで行つてしまつた、僅か一分間も無い間に胸の中は、あゝ又例の……何んと云つて置かうかと思うては……茫然して手が遲れるし氣づいては針を動かす、けれども胸の中は裁縫どころでは無い、それでも動かさなくつちや、こうしてゐるときて無いから。ポチがまろく成つて日向に寢て居たが、急に頭を擡げた、來たなつと自分は犬を見て思つたがポチは吠へずに又寢てしまつた、—郵便配逵夫は家を過ぎて前の家に行つてしまつた、あゝてなかつたな……然し歸へりに必ず持つて來ると待つてゐると知らぬ風して、ズタ〱と草鞋の音さして、自分の顔を一目ギロリと見て行つて終つた、自分は吐息をついて後を見送つた、お父さまが戀しく成つた、別にお願ひしますと書いた事は一度も無かつたが、それでもお金は一日つて早くとも遲れた事はなかつた、兄さんのも初めは一日も遲れなかつたが、去月頃からそろ〱遲れる、よこして下さらないのか知らん—あんな良い兄さんが……まさか……と思へども今日も來ないもの、最う來ない……あゝお父さまがせめては今一年も生きて居て下されば良かたものを。昨夜は一目もれむられなかつた、敏ちやんは中學も來春迄だから勿論、富美ちやんも今の樣に女學校丈は出校させたいとこんなに思ひ通して明かした、

自分の苦しい胸は知らさない樣に皆を出校さしてから、したゝかに長い手紙書いてゐたら、ポチが吠へる暇もなく、郵便〱つて呼んだ、ハイ……書留—あゝ自分は暫時は手は震えて印を如何して出したか夢中てある、

出張の爲少し遲れた、心配したろう—常より多いはお正月の仕度に……

あゝ私は自分を何んとしましやう、お父さまも生きてまさぬ來ん度のお正月夢にも思ひもせぬこんな事迄も心づいて下さる兄樣てしたのを。

○大風日記

松本吉澤辰美

先日からの南風今日は一そうはげしい、向うの林の木の葉も美事に散た、しかし此大風にか落葉かきに行くわけにも行かぬので、裁縫する、かうして雨がふると云ては、風が吹くと云ては、寒いと云ては、野良仕事を休んで家に仕事をして居らるゝ私はしあはせだ、西在へ御嫁入りした八重さんは、こんなわけには行くまい、雪ぎえから雪のふるまでは野良袴をはなさないと云ふ所だもの、ほんとに御氣のどくだ、今日などはきつとあの優しいたれかたへ、大きなブリをかつひて山へ松葉さらへにでも御出てだろう。

これから日ましに寒くなる。奈ら井河の水はあたゝかいがあつさ河の水はつめたいと云ふ、其あつさ河の岸北風の吹く雪のチラ〱とふる夕べ、赤い小さな手てショキ〱と米洗ふ八重さんの姿が目に浮ぶ。

夜になつて風は、ます〱はげしい、どーつと吹くたびに落葉の音がさわり〱として、雨戸ががたん、がたんと動く、やまとの姉樣はどんなて被居るだろう。いとしい坊をかゝへて晩兄樣の御うつしゑの前て泣いて御出てだろう、落葉の音をきゝながら……。と思ふと、たまらず姉さんがなつかしく、御いたわしくなつて……。

十二時皆人のれてから、姉さんと、八重さんへ、長い長い手紙を書く。

公達に狐化けたり宵の春　蕪村
梅の花貧乏神の祟りけり　漱石
伐り下せし木の谷川に浸されて芽を吹く　虛子
雨風をよら〱の柳かな　つれ女
屋根葺にたばれられたる柳かな　也有
大佛の鼻から出たる燕かな　一茶



論文

編輯局選

○常識の涵養（地賞）

本郷　花精女

私共日常處世の上に取つて最も有力なる支配をするものは常識であらうと思ひます、假りに食事に例へて見ますならば正しく常識は御飯とも云ふべきものでありませう。

常識は知識と經驗に依つて築かるゝので、其發達するや穩健となり、爛熟するに至つて味が出るのであります、此の常識あらば言痛き理窟は左程必要も無くなりますし、又激烈なる感情に驅らるゝ虞も御座いません。

先頃女學生風紀取締の規則とかゞ出ました、私は既に學校生活を離れて居るものですが、あの條項を見まするに、若し一通り常識さへ備はつて居るならば決してあの樣な綱紀に依つて進退するまでも無く判斷の出來る事と思はれます、然るに甚しきに至ては文字に拘泥して杓子定規に解するものさへあるやうです。兎角に女子は非常識だとか感情に走るとか批難されます、又よく女の學問は不要だなぞと云ふ事も聞きますが、これも恐らく非常識を難ずるものでしやう、要するに淺薄なる習慣が累をして居るのだらうと思ひます。女子は昔しから食事さへ碌々しなかつたさうですが、啻に食事のみならず其の如く精神的修養をも忽諸に附して居る、つまり思想上種々なる缺點が斯く非常識な傾向を持たしむるのではありますまいが、果して左樣ならば一身を健全に支ふる丈の常識を具備すべく修養を必要としますから、猶更敎育の必要があるので御座います。

しかし人は常識づくめで宜いわけではありません、驚異の觀念や感激の意氣は無くてならぬものであります、是れ無くば常識以上に出でず平板に了つて仕舞ふのです、曩に申しました爛熟の味が出るには如上いろ／＼なものが必要てすが、要するに冷靜なる理性と、熱烈なる感情とを、常識的態度に於いて調攝するのでありあます、さうして破らず迫らず修養を積むならば健全な品性が完成するので御座います。

評　言ふところ穩健にして且つ味深い、好論文だ但し原作は隨分散漫てあつたのを惜しむところあつて其意を諒して手を入れたところが多い、作者の對比を望みます、

○看護について　（人　貳）

愛知　佐分華影

看護と云ふ事は誰でも心得て置かねばならぬ事と思ひます、優しく美はしく身に染みて行ふ女の務てす、枕元で爪を挾んだり小楊子を使つたり、さわ／＼音たて驗溫器の見方もをぼつかない、等色々と注意もなく心得てないと自然病人も氣を荒たてなどして其の結果が惡いと思ひます病人が少し氣にさわつて疳癪でも起すと後で發熱するのでよく解ります、變事に臨みても驚かず細事の事ても忽にせず謹みて親切にするのが肝要てす。看護と云ふ事は仲々六つかしい事て其れが又一番裁縫科と並べて缺けてはならぬ事で、若しむつかしき病人の看護が滿足に爲し畢れば其人は如何なる家政にても過がないと云はるゝやうに必要な事てす、病氣中は隨分忙がしく心配てありますが、病氣全快になりますと嬉しく愉快に思ふとか聞きます、病人の側に居りますと、自然と氣の毒なみじめなと同情致すと思ひます、一日中天井板と睨みつこしたり障子の小さい破れ穴を眺めたり活花の花辨を數へたり、いつも／＼同じ物を見て、夜寢れない時人は安々と寢て居るのに一人起きて寂しさを味ふなど實に氣の毒に感じます、兄樣の御病氣の時御飯の時母樣にかはつて側に居りましたら「皆と一緒にお茶漬でもよいから御飯が食べたいあゝ淋しい」と仰有た其時は私はまだ幼なう御座いました、雖然醫者が許したら私が抱いてもと涙ぐみました、お父樣のお死になさる時も兄樣のお死になさる時も淋しい／＼と仰有りつめてした、母樣が雇つた人と靜かに忙がしさうに介抱して被在るのを見て其時は看護と云つて六かしい物だと思ひました、看護法、應急手當など知つて居ますと俄の出來事、宅に病人等ある時など、ある程度までは狼狽せず、人も賴まずに濟むかと思ひます、看病と料理とは又深く關係して居ります、食物の方が不注意てもいけません、醫師に聞いて病人の好む消化のよい物を味よく料理して、淸潔を重んずるなど看護の心得は是非とも婦人に必要な事と

思はれます。

評　いさゝかくだ〱しきところもあれど、論じて人を首肯させます。

○「病は仇敵にあらず」を讀みて

【秀逸】

岡村雪子

不治の病程幸福なものはない、とは前々號「もみぢ樣の御說、成程己が心の持ち樣一つて、即ち信念によつては、どんな憂い事も、辛い事も、反つて幸福に感ぜられるてせう、四苦八苦の病床に在つて、なほ超然幸福を感ぜられた「もみぢ」樣は實に信念の人と思へます、御說は只健なる時より同情せらるゝからとか、同病者相互の慰藉があるからとかいかにも單純てすが是れ許りては不治の難症を人生の一大幸福として感謝し得るものとは、永年肺を病んでゐる私には、とても思はれません、御說の表はれた文にはありませんでも御說の籠もる處必らず信仰にあつたと思はれます、然らば何故お前は幸福を得るの道を知つてゐながら其の道を辿らぬのかと仰せてせうが、こゝが所謂凡夫の淺間しさてす、誰しも苦しい事は厭てす、幸福にてあり度いと念ずるのは是れは自然の人情てす、てすから覺束ながらも基督の教義を多少解してゐる私は、せめて心靈に許りも平安を賜へかしと人知れず祈りました、杜に、丘に、密室に、寐覺め勝ちな身の萬象寂として音なきの夜半に、されど信仰薄き私には結局失望の溜息を洩らすのみてした、又時として是れも神の御旨ど感謝して從ふべきてあると思ふ事もあります、がこれはホンの束の間切ない咳と共に又もや元の失望の兒胸の疼痛を覺ゆる度に顏を顰めます、さらでも血色のない肉落ちた淋しい顏が……咳する事頻りなる爲め喉頭を損じたとやらて聲さへ儘に發する事が出來ずなつたのてす、傳染病てふ故をもて世は私を排斥する事實に蛇蝎の如してす、噫斯くても皆樣は不治の病を人生の一大幸福として感謝しなさいますのでせうかよもやさるお方は一人もおありなさるまいと思へます、私は私の此の辛い憂い經驗よりして皆樣の健康を渾身の熱血を注いて祈ります。

評　沈痛なる懷疑實に尤もだと思ひます、しかし神は各人を其の順境に於いて惠む如く又逆境に於いても愛ぐむのであります、是れを言へば空論に陷らる、要は心からの自覺を待つばかりである、たゞ先達の覺者朗ら其れを證して居る、どうしても飛躍又飛躍此間の消息を味はればならぬ。

○整頓に就て

濱松　平岩白菊

物が不整頓てすと誠に見惡くて且、不便なものてあります先づ玄關或は店先に履物が脫ぎ放になつて居たりすることにしても他人が一寸見て何んとなく家内が取亂れて居るやうて不品行に見え、卑まれるのみな

らず、上り下りの際に、他の履物に蹟づき随て其履物が前後左右を向き尚更亂雜になります、斯うなつた時、下りやうとすると履物がとんでもない方を向いて居るので自然地に足がつくやうになります、實に不便で見苦しいではありませんか、さて是れを取揃へるとて大した手數も時間も要りますまい、上り下りの際自分の履物は勿論他人のなりとも足を下すと直ぐ履けるやうに外を向けて取揃へて置たならば如何程便利で奥床しく又來客が御座いまして體裁がよいでせう。又雜誌等も讀終つたらば順次よく積み重ねて置けば、何雜誌の何號を一寸見たいと云ふ場合に手數を費して索さずとも直ぐ取出して見る事が出來ませう、

以上は一二の例でありますが、是れ等に限らず私等女子に出來得る事は、成るべく整理を正しくしたならば、物品も傷まず外見上の體裁よく又自分としても心地よく感じませう、何事も事を爲す序でに心掛ける時は大した手間も要らず、遂には自然其れが癖になつて苦もなく整頓するやうになりますから是非とも勵行いたしたいと思ひます。

評 有益



おでんや　本郷　渡邊三枝

○お正月の緣起に付いて

埼玉　染谷廣子

いづこにても、お正月と云へば、お雜煮を食べるのが普通ですが、殊によると、風變りの事を爲す家もあります。現に、私の家は、三日の間冷飯を食す例になつて居ります、又、近所の家に大福餅を藁灰の中で、燒いて食ふ家も有り、里芋を以て三日を凌ぐ家もあります、こんな例を擧ぐれば限りもありません。而して、是等は、何の

爲てありますかと云へば、大方は昔の思出にするのてあります、例へば、今は立派な家に住ひ、美服珍膳に飽きて居りましても、昔はお正月の餅も食べられず、炭を焚く事も出來ませず、種々な艱難を侵して、朝は早くより、夜は晩く迄、一生懸命に働いて、遂に何不足の無い、今日に至らしめたのてあります。之は偏に先祖の賜物てあると感謝し、年に一度なりとも、昔を思ひ出て、平素の行をつゝしむと云ふ心は、實に、たのもしい習ひと、思ひます、其れを稍々もすると、昔は昔、今は今だなど云ひて、廢さうとする方があります此上ない心得違てはありませんか、斯の如き人は、往々先祖より受けたる財を、湯水の如く費消し、一時の快を貪り、遂には、處定めなき流浪者となるのてあります、愛讀者諸姉樣昔を偲ぶ偲ばざるにかゝはらず、儉約を旨とし、行をつゝしみ己れ手本となりて、大に世の人を導いて、頂きたいのてあります。

評　眞面目な態度覺えず人をして敬重の念を拂はせます、しかも是れは精神的に其主意を汲むので、一々其通りを學べよと云ふのぢやありますまい、米國の祝祭には七面鳥を昔し先祖が食べたからと云つて今も紀念に食ふさうてすが、昔しは深林にいくらも居たから手當り次第に食べたのだが、今てはなか〳〵不自由て珍膳に上るのてす、て、是れが妙な樣に、お正月に全國お雜煮も食べず里芋て三ヶ日を凌ぐと云ふのも却つて僞善なやうな氣がするのてあります

○心づきしまゝに

磨志緒

「先生の隣の山村樣の奥樣が俄に氣が着かぬ樣になりましたて、只今すぐ御出て下さい」と息はづませて、途切れ〳〵やう〳〵言ひ終つた此言葉「はあ前から少しはお惡るかつたてすか？どんな風てす、顏は赤いてすか青いてすか」と尋ねても「いや私は只賴まれて來たのてすから、其樣な事は知りません、ふだんから別に惡い樣には思ひませんてしたが、然し病身なたちて」こんな使が何になりませう、常に診斷して居る患者か或は時々起す癲癇等ならば其容態は聞かずとも藥の用意も出來ませうが、俄に氣が着ぬ樣になつたからとて隣の人に走らせて、病人の樣子も言はずに、醫者を迎へる。醫者のからだは藥にはならぬ病人にも利かぬ、矢張り病に適した藥が入ります、たゞ卒倒といつて腦の方ても溢血もあれば貧血もある、と前の樣な使に來られた時は兩の藥を持て行かねばなりません、それが猶腦の爲とも他に故障が有る爲とも判然せぬ時は、色々の藥を持て行かねばなりますまい、折角お使樣は大急に急いて來て下すつても、醫者の方て其藥を彼之と用意してゐる其時間はよく患者の有樣を答へ醫者も其話の模樣て大體を察して手に一瓶の藥じあ伺ひませうと俥走らす其時間の倍はかゝるでせう……と之は只今其村から急患者にて父を迎に來た實際談或は皆樣の御參考にならうかとの老婆心より

評　有益、しかも隨分と手嚴しい

○又貸に付いて

尾張　秋月

之は誰でもあることですが、余り世の中では注意せられて居りません。併しこの又貸することは、文明國と云はれ禮儀をよく辨まへた人のなすべきことではありませんと思ひます。何故なれば、たとへ紙一枚にせよ本一冊にせよそれはその人の財産であります。

その財産を親友だから兄弟だからといつて、所有者の許可も受けず無暗に他人に貸すことは決して宜しくありません。

つまり、これは日本人が自他の區別に乏しく物品を粗雜にするからであります。もし區別をする人があれば、其の大部は自分の物は大切にし、他人の物はどうしたつてかまわないのであります。噫何と情ない心でせう。どうかしてこの惡い癖を直さねばなりません。然し年取つた人は直せといつたつて、なか／＼直りませんから、これから第二の國民として交際塲裡に立つ、私等は擧つて、この惡弊を除かうではありませんか。

然し、誰でも人から貸して呉れと云はれた時、イ、エ貸す事は出來ませんと無下に斷はることは出來ませんし斷はれば先方の人に氣を惡くさせます。かう云ふ塲合に又貸をしたら直ぐ所有者に、そのわけを話して斷はつておけば宜しい。又は借りたいと云ふ人に、これは人のだから聞いてから貸すと斷はつて、一度本人にきゝ合した後で、貸す樣にすれば宜ろしい。かやうにして、皆がこれを守つたならば直に改めることが出來るだらうと思ひます。

評　細密叮嚀婦人論文の特長とも云ふべきであらう

○近來の小説

赤坂　田中はな子

私は近來の小説（殊に短篇）を讀んで、少しも面白いと感じません。悲しいとも思ひません。只六ケ敷いもの、理屈ッぽいもの、謎のやうなものと云ふ感じが致します。

どの小説を見ても、生活難とか、戀愛の神聖だとか云ふ、まるつきり論文見たいな事を書いて、文句の中には、どう考へてもわからぬ事ばかりの行列。折角讀むつもりで、振假名を力にみても、少しの興も起りません。

私は小説なるものが、何の爲に存在して居るのか、其の理由がわからなくなりました。今の小説はどうしても一般的でなく、專門的に出來て居るやうです。作者の方々とか、批評家の方々にはよくわかつても、私共のやうな人間、學問のあまりない下女や車夫にはちつともわからないやうです。

私がある友人に向つて、現代の小説の六ケ敷い事を云つたら、「貴女の頭が古いのよ。思想が發達して來る

と、乳姉妹や金色夜叉や不如歸の樣な單調なものには滿足しられなくなります。」と笑はれました。

しかし私は、金色夜叉や不如歸を單調とも思はれません。理屈ッぽい現今の小說より、誰れもよくわかる小說、好く出來た小說と思ひます。

それに此の頃の小說は、どれも皆同じような事ばかりて、文章の拙劣な事、思想のいかゞはしい事、內容の空虛な事、實に情ない樣てす。

田舍敎師も、落日も、生も讀みました。短篇も讀みます。しかしどれも物足らぬ作ばかりてした。

藤村氏の春は此の不滿な心を慰めてくました。

私はかう云ふ風の作品の多く出る事を希望して居ます六ケ敷い作、內容の空虛な作、いかゞはしい作にはもう倦きました。これ等の缺點のない、充實した作品を見たいと思ひます。

評　かう感情づくめに出ては批評の値打が無い內容の空虛とか思想のいかゞはしいとかもつとシツカリと理由を擧げて論じなければならぬ又下女や車夫の要求に合はなければ小說の存在の意義が無いと云ふ事も甚だ可笑しい斷案てある、再考を望みます。

○妻の見たる己酉文壇の回顧

沼津町　誠子

小說の方て傑作とか佳作とか云はれたものを擧げると第一に田山樣の妻と森田樣の煤烟とてありましよう遠慮なく私の拙ない意見述べさして頂くと田山樣の妻は餘り平坦に趣味に流れはしないてしようか、妻の前半は兎も角後半に成つたら殊に甚しいやうに思はれますあれが自然派の特長とすれば、何だか心細いやうな譯てす、もう妻なぞは型に這入つてゐないてしようか、私は妻なぞより寧ろもつと情緖の深い永井樣の歡樂や大塚楠緒子樣のそらだきなぞの方がよろしいように思はれます、論より證據歡樂の歡迎された事は大變だつたてはありませんか、次に煤烟てすけれど、あれは中に是れはと感心する處も少なくありませんけれど長編としては未成品のやうに思はれます、あれが低徊派の本領かもしれませぬが……

散文としては水野樣の響、微温に超したものはないてしよう之と云ふて對照物がありませんて云ふ餘地もありませぬ、他に藤村樣の新片町よりや白柳樣の秀湖小品なぞ出ましたが皆な似たり寄つたりのもので到底注目する價値はないだろうと思ひます、殊に新片町よりなぞはあれもこれもと云ふ風に雜然として中心もなにもありませんよ皆樣讀んて御覽遊ばせ、

詩としては三木樣の廢園と北原樣の邪宗門が詩壇の代表作だそうですけれどもとより詩に趣味のない私には官能なぞ云ふむづかしい言葉が解りません

長谷川二葉亭樣を失つたのは如何にも殘念てすけれど平凡、浮草、其の面影なぞを遺して逝つて下さつたのは誠に嬉しう御座います、水野仙子樣や加藤介春樣なぞ新進作家の活躍の樣は實に愉快てあります。

評　前出の「近來の小說」と共に實際問題に就いて論評を試みたるもの二編を採用したれども、いづれも批評として肯綮に中らず徹底するところが無い諸嬢の奮勵一番を望む

書簡文

編輯局選



○ないしよで一寸（地賞）

根室　よし枝

お母樣お喜び下さいませ、おまちかねの初孫の顔を來春はお目にかけられそうでございす故、朝も晩もよるとさわるともうその話でもち切りなのでございますよ、昨夜もねえ、あの田中樣がいらしたんでせうあすこてはもう三人目が來春早々におうまれになるのてすつて、それて、君はだめだ僕處ぢやもう三人目がとびだそうとしてるじやないか、本統に情けないねえ、そおしやると美夫が僕が惡いのじやないさ、山の神がいつも寢てたんじやないか、併し今度はまけないぞ、君處じや女ばかりだから今度のも又女さ、僕は、玉の樣な男を生てみせるさ、女が三人あつても男一人にやかなはないからね本統かい君？ほんとさ、うそなんぞいはない「本とてすかおばさんおたへさん？」つて田中樣びつくりしてらつしやるんですよ、だから私あんまり極りが惡うございましたから「うそうそその中こしらへてみせるといふまでゝすよ、といへばお姑樣つたら又あんな事いつて！「田中樣今度こそほんとうらしいんですよ」「いやそれはおめでたい」と改まつて「いやどうもおめでたうございます」、ですつて、吹き出してしまひましたわそしてお祝ひには何をあげたらいゝだろうつて一人て騷いてらつしやいますの、

田中樣がおかへりになつてから名の話がもち出されたのでせう、私は「助」これ以外ならどれでもいゝからすけをつけてほしいといへば美夫はいや田吾作か芋造とつけるつてきかないんですよ、そしたらお姑樣がねそんな事をいふものではありません初めての子はお里の方でつけて頂くものだからつて、だからねお母樣の好な名をつけて下さいましね男はすけ、女は枝をつ

けてね、美夫からもおねがひするつていつてましたから美夫の云分をおきゝ入れなさらない様に母様からお父様へおねがひしといて頂だい、それからお産の時は是非いらして下さいましね、心細そうございますからこれが生別れになるかもしれませんね故是非ね、お姑様も美夫もそんな、わざ／＼きて頂かなくつてもつて申ますけど、だつて片足は棺桶に入れてするものだつて申ますもの、ウンとそれつきりいつてしまへばおしまひですものねえ母様、

それから産着ね女ですと古代紫の地にひなけしに蝶をあしらつてはでに染めて下着はとき色りん子を、ひもは白の方がようございますわ、下着もふたこだといゝのですけれど男ですと黒羽二重に白をかさねて、あの兄様のお産衣の様にのし目にして頂だい

さつきから二度も三度もまだねないのかつて催促されます故これで筆をおきます、どうぞ寒さおいとひ遊ばしてね、春五月末にはぜひに、おねがひ申あげます

お父様へよろしくさよなら

評　女性の眞情流露して遺憾なし、作らんと欲して作り得らるゝ書簡と選を異にするところいつもながら敬服

○使に持たせて親しき友へ（人　箇）

備中　小見山春子

幸子様お目出度御座います、其後のお日立はどうでございますか、お尋致します、近頃御無沙汰勝で御様子も知らずに居ました處、昨日伯母が參りましての話に、貴女がお産があつた事を申ますの、私本當にびつくりしましてよ、夫れごらん遊ばせ、此夏校友會の歸りに一寸お寄した時、どうでもお顔色が變だと思つて姙娠ではなくつて？と申上たら、いーえと計り被仰つたけど、隠して居なすつたのね、女醫産婦人科專門宿望の私ですもの内診せないでもちやんとても能く當つたでせう、男のお子だつて聞きましたが本當に嬉しい事、御主人も喜んで居なさいませう、一寸およろこびに伺ひたいのですが、ごぞんじの私ですからお許下さいませ、此着物極お粗末なんですが、ふと思付いて暇の折々仕立て置きましたの、確かお宅の御紋は宅のと同じとの様に思ひまして、今急いで紋書きました、慣れないものですから可笑しう御座いますけれど、私はどう云ふものか赤ん坊にでも赤い着物着せるのが嫌で、こんな紫のモスに定紋付いた着物計り着せて大きく仕たいの、私なんかお母さんに成るのは未だ遠い事ですから、私をお母さんの仲間へ入れて下さいお願てす、今日案外伯母が歸ると申すので、序に福に持たせて差上ます、お氣には入らないでせうが、暫くは臺所廻りは下女に任して氣長く御養生なさいませ、産後は分けて大切と聞きますから、これはね今急いで婆やに挽かしたので少し計りですが時々小さく丸めてお昧お

汁の中へ入れてお上りなさい、御良人や外にお客様でもあつたら蔭で奥様に渡せと申付けて置きますが田舎者で氣轉利かす事なんか不得手の方ですからついお客様の前でも出したらおしまいだと思ひますので、態と箱へ入れて差上ます、

立派なお菓子ではないのです、びつくりなさいませぬ様何か御様子も伺たう御座います、て成る丈け奥様へお目に懸つて歸れと申ましたからお差支が御座いませねばどうか會つてやつて下さいませ、外に用事が澤山御座い升からゆる／＼は後より、末筆乍ら大切な御良人様へ宜敷、赤ん坊にもお母さんがよろしく云つたとお傳へ下さいませ、いつもながらのみだし書きごめん遊ばせさよなら。

評　委曲を盡くし懇切到れる好書翰

【秀逸】

○約して來らざりし友へ

横須賀　佐藤芳子



坊ちやんの新年　青森　松尾千代子

どう遊ばして八重様御用でも出來て！まあ芳はどれ程お待ちしたでせう、お約束の十時を待つて、待つて楽しい夢路を破る憎いめざましも、御化粧の水の冷たさも、けさばかりは何となくたゞ微笑まれて、いそ

〳〵朝のしまひして、床の花も、いつぞやからあり度いと裏の花園で徒ろあるきの時語り交した、清い香りの水仙と變へて、掛け軸も、八重樣のお好きな、あの正成櫻井驛のを掛けて、手あぶりの灰もふるつて、姿見の塵まで拂つた、快いこの室で、今日こそ一日を心ゆく許り語り暮さうと、ねえ八重樣かうして芳は坐つては立ち、立つては坐りして、午すぎても未だ、若しやお姿をと、笹の葉ずれの音にさへそれかと走り出たは、幾度でせう、もう日も薄く成つて、山際も赤くなるのに、芳は未だ緣に立ちつくして、八重樣の御姿を胸に畫いて鮮かにうつる御破布姿が却つて恨めしく、白い灰に成り掛つた火鉢にも幾度か炭つぎ足しては、長い長い一日を暮しました。

手と手と重ねて乾度乾度と誓つた、昨日の八重樣が怨めしい、けれど、けれど、故なく誓を破る八重樣ぢやない、乾度止むをえない御用に妨げられたに違ひない、どうしてなの？ え、八重樣眞逆御病氣とは思はないけれど、何となく心がゝりな。

緣の柱に寄つて、けさ喜ばした鳥影を恨むでも、もう日はだん〳〵夕暮れて行くの、八重樣、どう遊ばしてなの？

評　婉雅なる筆、うらみの數を述べながら猶ほ友の上を氣遣ふ友情の

ほども見えて床し

○小さき弟に

しのぶ子

勇ちやんお寒くなりましたね、お變りもありませんか、父樣も母樣も皆樣御丈夫？ 姉さんはいつも、丈夫よ、安心して頂戴！ 勇ちやん柚や蜜柑が黄色くみ事になつて居るでせうね、姉さんは考へ出すといつもよだれが流れるのよ、母樣にさう申上げて頂戴。勇ちやん來年は四年生ですね、なにかゞもう御上手になつたでせう。こん度お淸書送つて頂戴な、それから勇ちやん明日の朝ねお天氣だつたらお二階にいつて西の方の廊下から姉さんの居る方を見てごらんなさい。桔梗色のお山を眞白い雪がつゝんでそれが朝日にうつつてきら〳〵金色にひかつてゐる日光山が見えませう、姉さんのゐる處はあの山のすぐ近くだから寒い事よ、もう三度も雪がふりました、勇ちやんの方はまだ一度もふらないでせうても姉さんはおこたにはいつたり、ざぶとんしいたりしませんよ、勇ちやんも寒くつたつて男ですもの。雪がふつたつて學校休まないやうに今から竹馬にのる事習つておゝきなさい、そして父樣母樣のおいひつけをよく守つて一生懸命勉强なさいよ、お友達とけんくわするんぢやありませんよ、ね、お友達に打たれてもうちかへしたりしちやいけませんのね、それから「りんご」と「わなげ」を送つてあげますから、

「りんご」は皆さんてお上りなさい兄さんにも殘しておいて上げるんですよ。この「わなげ」は日曜に兄さんがいらしつたらようくあそび方を敎へておもらいなさい、そしてお隣の元ちやんともお向ふの秀ちやんとも仲よくおあそびなさい。それてはからだを大切にしてようく御勉强なさいよさよなら

評　少さき弟への手紙として至れり盡せり少しの間然するところもありませぬ

○都の友に

しめじ子

淑子樣、大變寒くなりましたのね、御通學も、隨分御寒いてしよう。あの、私の家の森蔭の田ね、もう、厚い氷が張りましたのてすよ、今は、貴女の家の潔樣と、弟と、寒い〳〵と云ひながら、氷滑をして居ります。私等も小さい時はと思ふと、小言も云はれないのてす。私は每日機織をして居ります、此頃は、ドタン〳〵てなく、チャカ〳〵と音がするやうになりました、其代り手が凍傷てひどいの、其を云ひわけに雜誌許見て居りますから、母が始中他家へ行つて困ると云ひますの、其なにも思つて下さるかと、感謝して居りながら又、お母樣が、始まつたつて云つては、笑はせてしまいますの。夜は、裁縫を致します眼が惡くなるとおつしやるかも知りませんが、他に、暇が無いのてすから、止むを得ません。貴女のやうに習はせて頂く事の出來ない身なのてすからあはれと思召て下さい、もうお休みも間近になりましたね都の御便りを、澤山にきかして下さい、お歸りになりましたら、昔の思出に田氷の上へ、乘つて見やうてはありませんか、スワ湖の、スケート以上の感があるてしよう、樂しみに待つて居ります。

評　疑ひもなく山家からの書翰と云ふ極印つき、質朴なるひゞきがします。

○養家先きの弟へ

大阪　高山米子

いよ〳〵今年も僅かに成りましたわね、もう學期試驗はすみまして?とうから一度お便りしようと思つてたのてすけれど、試驗中に又他の事て腦を痛めてはと差し扣へて居りました。潔さん、先日のお手紙あれは何といふ事てす?あなた一人が他家へ行つたんだから隨分不滿もあるてせう、其れは萬々お察ししてますけど、良く考えて御覽なさい、そうやつて何の心配もなくお年よられた御兩親が孫のやうに可愛がつて下さるし、學校だつてあなたさへ希望ならば、大學迄もと仰しやつてるさうぢや有りませんか。其れをどうしてあんな氣まぐれを起したの?「閑寂な處て簡易生活をやつて俳味禪味を痛切に味はつて見たい」なんて、未だちと早過ぎはしなくつて?

將來此の生存競走の烈しい社會に立たうといふ男子

が、今からそんな弱い心でどうします。中學位出たつて何の役に立つものですか、其れも學問が嫌ひなら兎も角ひと一倍勉强家のあなた、若しや御兩親と何か意見の相違から、自暴自棄を起したのでは無いかと心配して居ります。

あなたとつてもう來年は十九、良い加減に志を定めなければならない時期ては有りませんか、本當に今が大事な境目なのてすからも一度良く〳〵考えてね、つまらない事に挫折しないて、早くそちらの御兩親や兄樣初め私達の力に成つて頂だいね、女の私がつまらぬ事をと思ふかも知れませんが、只一人の弟、遥かに〳〵西の空よりあなたの成功を祈つて居りますよ。

評　好い捉へどころ筆の運びもたしかなもの

○弟へ寫眞の返し

大分　原田浮子

幸ちやんまあ大きくなつた事ねえ、妾し吃驚したわそしてこう正服正帽てシャンと立つてる所を見ると、如何しても、是が牛乳瓶の奪ひ合ひをしてる幸ちやんとは思へないもの。一年會はぬ間に本當に大きくなつたのねえ。此の樣子ては、來年あたり姉さんが負けますよ。兄樣もね、ウム可愛稚子さんになつた、と賞めて居なさつたよ。カラーなんぞはめて、小さな首の愛らしいよ。靴は何文？少し大きくはないの、ても立派なものねえ、兄樣が左樣お仰つてよ、こんなのを商業學校の一年生のには好過ぎるんだつて。でも父樣が喜んて買つて下すつたてせう、羨ましいは、幸ちやんは父樣のお秘藏つ子だもの。姉さんなんぞ始めに生れて全くつまらないわ。

此の四月は二年生になるね、うんと勉强して、あの省一さんなんぞに負けない樣心掛なさいよ、すると父樣がまたどんなにお喜びなさる事か。きつと幸ちやんに逆上して有宙天におなりなさるよ。

一年も離れて居て、久しぶりにこうして寫眞を見ると堪らなく懷かしくなつて來てよ。幸ちやんが兄樣に强られて、好きな甘酒をきゆう〳〵飲んて頰を眞つ赤にした時、酷い事叱つたはね。堪忍してお呉れ、何故あんな事云つたのだろうと、姉さん泌々後悔して居ますから。今迄叱つたのは皆姉さんがあやまるからね。もう今からは叱つて下さいつたつて、こんな幸ちやんを如何して〳〵。

本妙寺の三百年祭て、兄樣と三人して舟すべりしたのは夢の樣ね。ぴちやあんと舟が落ちて、ざぶりと水が上つた時幸ちやんが、姉さんの膝に抱き付いて兄樣から笑はれたつけ。てもあの時は面白かつたね、も一度一緒に遊び度いけれど。ては折角お大切に左樣なら。

評　いかにも懷かしいと云つた、心持が書面の隅々に溢れて居ます、眞の姉弟ならてはと羨ましい

○信洲より靜岡の友に

信濃　優梨子

昨日はお手紙有難う御座いました。まあそんなにお暖かう御座いますの、もうお正月ですのに雪が降らないなんて、とても此寒い信洲に居る私には、想像がつきませんのよ。それは、こちらはお寒う御座いますの、今もね、眞白い綿見た樣な雪がドン〳〵降つて居りますの、なか〳〵やみさうも御座いませんから、晩までには、一尺から積るて御座いませう。

手洗鉢の水は、幾度熱いお湯を掛けても〳〵、すぐ氷つて終ひますし、釣瓶の綱は棒の樣に氷つて居ますの酷く寒じる朝は、金物が手につくんで御ざいますよ、もう斯う寒くなりますとね、只お炬燵許りが戀しう御座いますの。一つ何かしてはあゝ冷たい、一寸立つては、あゝ寒いてすぐお炬燵なんて御座いますよ、是から三月まては懐かしい炬燵と首引きて、平和な冬籠りて御座います。

お正月と云つても、面白想に追羽子は御座いませんけれども、寒い夜の炬燵のまどいは又別段て御ざいます。

昨晩もね、こんな惡戯しましたの、お話しませうか、お夕飯が濟んで、何時もの樣に、母に私と妹と、それから松やと四人、茶の間のお炬燵にあたつて居りましたの、其内にふいと何か思ひ付いた樣に、妹が私に目配せするんてせう、私はすぐ悟つて、二人顏見合せて莞爾して、それから藝當を始めましたの。袂からそつと襷を出しましてね、片方をお炬燵の柱へ結びつけましたの、さあ是からがお手極なんて御座いますよ、「今夜は隨分寒いのね」なんて云ひながら、顏許りは途方もない方へ向けて、そつと松やの裾を探ぐり出して、今の襷の一方へ結びつけたの、さあ是て、と妹に目配せさしました。私はもう可笑くて〳〵眤と俯向いて耐えて居るんて御ざいますよ。

「松や、お願ひだけれど、お冷一杯頂戴な」と妹が眞面目な顏して云ひますと「ハイ」と松やは好い返事をして、ついと立つ拍子に、ばつたりと倒れたんてせうさあ私と妹は笑ひました〳〵終ひにお腹が痛くなりましたの、だつてそれはうまくいつたんてすもの。「お孃樣覺えて被在いまし」つて松やも、母も大笑ひ。時々こんな惡戯をしますのよ。おほゝゝ。

明日は諏訪のスケートを見に行く筈て御ざいますから、其樣子は又お知らせ致しませう。ては是て失禮。

評　冬籠りの興友は喜んて見る事てしやう

○都の姉え

福島縣　上野浦筆子

亡くなられた祖父さんが好きてあつた、裏の山茶花が綺麗に咲いて。南天の實が眞紅になつて、八幡さんの銀杏の葉がホロ〳〵こぼれ出して、私の村も全く冬と

なりました、都の姉さんには其後暫く手紙が參りませんので、お母さんが心配なされて居られまするが、別にお變りはありませんか、宅では父母を始め皆無事です、麥蒔も晴天續であるし、其上石井の伯父さんが、稻刈前から詰切て手傳うて下さつたので、思はず早く二三日後に全く蒔いて仕舞ました籾摺は一昨日から始めて居ます、今年新調した、專賣特許の臼で摺ると、妾一人でグル／＼摺れます、姉さんが宅に居られた時分の樣に、三人もせにや摺れん樣な臼と違うて、骨は少しも折れません、猶其上に今迄の臼の何倍も摺れます、今日で三日摺つたのに、土藏の床一面、山の樣に盛られました、もう二日程摺ると全部濟むでしやう。これが濟むと、例年の通り金比羅さんへお參りに行くのですまだ麥蒔のすまない內から、お友達と約束して待つてゐます、妾嬉しくてならないわ、豐作の事は前に通知してありますから二度と繰返しません、然し先に通知した豫想よりは猶澤山あるやうです、姉さんもお嬉しいでしやう、忘れてゐました明晚はそれ冬期で一番樂しいお亥の子さんです、都の方は知りませんが私の村は姉さんが居らしやつた時の樣に、矢張色々面白い事して遊びます。妾等は歌留多を始める心算です、前の亥の子の時には、麥蒔最中であつて忙しかつたので、お餅もよう搗かなかつたが、今度は搗くと云つて父は力んでゐます、もう今日はこれで筆を擱きます、猶これからは寒さが嚴しくなりますから、お身を大切になさいよ。左樣なら

評　どこが佳いと云ふでも無く趣味あり、質を以て勝る書簡である。

○都なる同鄉の友に

西多摩郡　三ヶ島よし子

四日に御差出しの御手紙は、昨日拜見いたしたのですが、昨夜は晝間の大根洗ひや何かの疲れて、御返事書くことも出來ず、寢込んでしまひましたところ、それは面白い夢を見ましたのよ。あなたもいらつしやれば光樣も見えれば……まあはじめから夢のお話などして御免下さい。今夜は早く片づけて机に向ひもう幾度も卷き直した御文を又繰返しました、まだ八時前ですが靜なこと夜半のやうですよ。あのあなたは（下弦の鋭月が身を刺すやうだ）なんて、このお寒いのにさう遲くまで起きていらつしやるのですか、私は十五日の月蝕とその前までは提灯なしで隣へ行つたり、よく月を眺めましたが、もういつにも朝でなくては見ませんの、きつと花樣はこの地この御故鄉をお思ひなさつて御目をうるませながら、御身の冷えるのをも知らずに、戶外にお立ちになつたのでせう。けれど御身體は何より御大切になさい、折角の御志望が叶つてゐらつしやるのですから半年も長く御在京遊ばすのが御得策ですわ。御父上の御元氣なこと、每日三十分と違へず前の

道をお通りなさいます。いくら役場は日當りがよいといつても東京にはくらべられますまいよ。御承知の通りこの頃の霜はまるで雪のやうです。四五日前の朝玉川屋まで行くとて、御父上と橋のこちらで御一つしよになり『欄干にいろはにほへと今朝の霜』といふ句があるつて教へていただきましたの。いまに山も畑も眞白になりましたら何と申し上げたらよいてせう。

さよなら

○續一人旅



緣日にて　水戸　玉川すま子

磨志緒

兄樣一人旅行の失敗談も今日て終りますの、隨分澤山ね。さがして〳〵宿に着きましたわね、其朝は早く目が覺めたのですよ、いゑ覺めやしないの眠らなかつたのですわ、朝飯を濟ませてすぐ教へて貰つた道をボツ〳〵と昨日の城樣を尋ねに出かけました眞直にいつて交番所の前から右に折れるつて、そこ迄

は行つたのてすけれど、ちつとも學校らしい建物が見えないんてすよ、又それ不安てね困つてゐると丁度私位の方がいらつしやつたので、尋ねましたらね、それは親切に敎へて下すつたの――ついその塀の中にあるんじやありませんか馬鹿らしい――城樣に面會と舍監にねがつて、さあ之からは大安心城樣がね「折角京都へいらつして何ぼ一人旅だと言つて名所〳〵も知らずにお歸りなすつては、人にお話も出來やしないわ、あなた知恩院へいらつして。えゝ行つてよ。さう淸水もハアそして動物園にも行つたのよ。さうぢやあ今日は金閣寺の方へ行きませうか、それとも京極へでも。：：：私南禪寺へも行きたいの。アラ南禪寺まだなの、ぢや南禪寺から京極へ行きませう」つて話し〳〵來ると早南禪寺、オホ…之ては宿のお神樣にも城樣にも笑はれて箬、ついそこが動物園てすものね、こゝて暫く遊て京極も見て、大丸呉服店て、さう二時間位暇どつてせう、お土産の反物――おもに私へのよ――を買て外に出た時は、もうお晝頃てしたわ宅ては今日歸るつもりて待て居るてせう、一人だから心配させてはと思つて大急て御飯すませて停車塲へ着きましたの、一時何分かの汽車に乘つてね城樣が見送つて呉れました、お別れの時お禮言はうと窓から顔出してゐるとゴトン汽車が動いて城樣が左樣ならアラ貨物車ても着けたのかと思つたら、其まゝ行つてしまふ、でも西へ行くじやないか私は東へ歸るのに？まさか乘違ひでもあるまい城樣もいつも此汽車で歸つていらつしやるんだものまゝよ次の驛名て分る」かう思て次の驛に着くのを待かねてやう〳〵着て一寸見ると「ふし」愕りしましたわ、來た時ふしなんて驛は過ぎませんてしたもの、ホホ：：：ふしみのみが見へなんだのてすわ、今にも飛び降りるのてしたが先づ安心して、それてもまだ、どうしても西に計り進む氣がして大谷驛から初めて東へ行く事がわかりましたの。笑つて頂戴、一人て外國へても行く人がありますわつて常に言つてた私是てはどうもね。：：：左樣ならおたい屆さま。

○薄倖なる友にめぐりあひし事を

大久保　森　英　子

勝手がましうも、加留多取る間は羽織脫ぎすてゝまでも騷ぎ候ものを、いざとてお宅を立ち出て、夜更けての風に面を吹かれて歸路を急ぎ候折の御寒さは、身に泌み渡りて堪えがたきまゝ、小走りに走りてかの駒止橋にさしかゝり候とき!!!風一しほ冷たく水の音さえて聞え候へば、月の光も寒く橋上の霜を照してあかるき事また晝の樣にて候ひし、渡りゆき候まゝに、橋の袂に佇みつゝ、何やら思ひに沈める未だうら若き辻占賣の姿を認め、所柄とて其哀れなる影の何となふ心にかゝり候まゝ、引返して辻占を買ひ求めて、ふと面を合せて驚き入申候、實に其後お案じ申上し花代樣ならん

とは、父上亡せ給ひかよわき腕にて御病母に御孝養おこたりなきよし承るまゝ、いかにもして一度お目にかゝり御慰めの言の葉だに聞え上度いつも御許様とお噂さ申上し其君をかく目のあたりに痛ましき姿拝しては、思はず涙ぐまれ申候、御住所聞参らするひまもなく涙を袖にひたすら恥入給ひて小暗き林の中を走り失せ給ひしよ、其御後姿見送参らせて、あゝ浮世の風はさまぐ\に吹きめぐるものかなと思ひしみ申候、ちゑ子様よ、加留多取るひまを一日花代様を御訪問申上此の初春を泣て暮し給ふ薄倖の友をお慰申上度存じられ候、いかゞ思召候や

○除隊の恩典に預りし兄上へ

京城　露萩子

例もになく再度の御音信に驚いて御端書拝見致し思はず胸一杯になつて知らずぐ\涙が溢れました、上等兵御進級、十日たつやたゝずに帰宅の恩典、一年振の御帰省、何と云ふ有難い御目出度事て御座いませう、私や御両親の満悦はいはずもがなて御座いますが、まあお祖母様がどの様にかお喜びてすか、きつとぐ\嬉し泣きをなさいますてせう、あの氣丈な方が涙をお見せ遊ばす時は餘程の時て御座いますよ、一年間軍隊て御殿へ遊ばした其の御體は先達ての御寫眞よりも一入御健やかて皆を驚喜せしめるお土産て御座いませう、これからは私もうお祖母様の事を案ぜず共よくなりましたわ、御両親に御帰國を御願ひは致して居りましたもの丶都育ちの義母様へ彼んな山の中へ是非にとは、少しお氣の毒て御座いましたものねこれから兄様、何卒宜い方を御迎へ遊ばして、御祖母様に孝行なすつて下さいませ孫中の孫なる兄様に侍され死水取つてお貰ひ遊ばしたら、過去七拾年の辛苦も夢とお忘れ遊ばすてせう、村中親戚中寄つてたかつて大祝ひ……嗚呼私も帰つて見度う御座います、御暇に御様子お知らせ下さい。

○つきたてのお餅を

牛込　平塚白百合

人目も草も枯れはてゝなんか古くさいこと葉はぬきにして、まあこの頃の花園のさびれ方、どうしたのてしやう。僅かに入つ手が手水鉢のかげから色も匂ひもかれつくしたといつたやう淋しく咲いてゐる計。霜は眞白く毎朝降りますしねー、そろぐ\清は手が荒れると艶の肌なんか此の間私がお正月のにとリボンをとりました時、一共に買ひましたの。

今日は家てはお餅つきなのですよ。風がありませんししますので、作爺と助と清と、も一人手傳ひが参りまして 今は助と清との振事の最中、助がペッタラコと杵をあげると清が臼をまはして餅をかく、その呼吸がなかぐ\ふるつてゐるのですよ。私？私だつて懐中手の見物てはありませんわ。蒸籠の火加減やら搗上げた餅

をのしたり、大福をこしらへたり、ても私一生懸命やつて居りますの。兄樣や兄弟は傍てこれこそふところ手、ても時々お手が出ましてねー、「露さんのは下手だなー、皮があつくつて餡はどこ？つて聞きたいやうだぜ」なんておつしやるのてすもの。もう前髮も何もだいなし、生れて初めて手拭を冠つて働いたのは。出來ましたよさそうなのを、勿論私のは二つか三つ雑じつてゐるかもしれませんけれど母樣や何かがこしらへました先よい處を只今弟に持たせて差上ますから、どうぞやわらかな處をおほめ下さいませ。皮の厚いのがございましたら私のてございますからお手際を……お笑ひ下さい。

いづれお正月はカルタのお手際拜見をたのしみに致して居りますさよなら。

○女子文壇に添えて

山口　酒向とし子

久しく御無音致しました御叔父樣も御叔母樣も御機嫌て被居いますか、もうお正月がぢきて御座いますねお仕事もすつかりかたづきまして此まあ短い日が長くてなりませんのよホヽヽて今日は御相手旁々面白い者を持つて參りました、ホラてんてこ舞もまつてお目にかけますし其他色變りの御話を澤山〳〵それこそ山に持つて參りましたからオヤおばさんそんなにアラおぢ樣も今からそう不思議さうなお顔遊ばしちや私走つて歸りますわ……實は近頃私ね此女子文壇を唯一のお友達と致して居りますの、まあ御覽下さいませ私も偉いてしよこんなに澤山の文學者姉樣をもつて居て……親しみは増長して大膽にもとう〳〵憚りなく投書を試る一人となりすましましたけれど御承知の私て御座いますもの、沒また沒のお頂戴それても我身はつめり度くなく御迷惑にも記者樣にどつさりと御憐みをかけたのて御座いますよしかし始めから和尚は無いとやらまあ〳〵さじはなげまいとはら〳〵し乍らも毎月投書を續けて居りましたらおかげ樣てあれても何か一ッ宛は掲載される樣に成りました、叔母樣この喜びてもなみ大抵ぢや御座いませんのよ、處が意外も〳〵あヽ忘られません十月は十八日しかも朝まだ早う、増刊に當選したから寫眞を一葉送つて與といふ端書が文壇社から參つたては御座へませんか……習つた事も見た事もないてんてこ舞を叔母樣ほんとに玄關から彼の私の部屋迄おどり續てどう机の前に座つたやらまるで夢中て御座いましたのよ、處がおかしなもので胸のどうきもおさまるにつれて堅くにぎつた端書にまあこんな疑をかけましたの、あれても間違いてはないかしらもしもうそてあつたらどう仕樣、なんてまあいやにこうまてもあいてあつたのだらうと實は此文壇を手にする迄は何だか奥齒にものヽはさまつた樣てともすればかこたれてならなかつたのて御座いましたがあヽ叔父樣、叔母樣うそても夢てもなかつたのて御座いますよ、ほんとにお母さんがいらしたらどんなにおよろこび下さるて御座いましやうね、お墓の前て讀む事はよみましたがあヽ果してきヽ下さつたて御座いましやうか？!!!!あらまたこんな事書きましたがまあ〳〵私のは高が知れた誠におはづかしい作ては御座いますが諸姉樣のおうて前をまあとつくりとごらん下さいませホヽヽてんてこ舞が見えましたかぢや今日は是ておいとま致します、時下御用心遊ばせ左樣なら。



短文

編輯局選

○始めての日（天賞）

伊藤よしゑ

曇つた日の午後、始めてお花のお師匠さん所へ行つた、玄關まで黄や紅の薔薇が咲き亂れて居る、上つて障子を引くと、四時過ぎだのに早内は薄暗い、ガラス越しの向ふの部屋に稽古して居る人の頭がゴテ〳〵動いて、まるで芝居の樂屋を見るやうだつた。

評　印象強き描寫、近來の佳作

○病床（地賞）

栃木しのぶ子

検温器をかけたまゝ窓の外を見てると、木の枝が皆いや〳〵をしてる。やつぱり外は風があるのかしら。昨日からはもう奥樣もお孃樣も來ては下さらないし。私の病があんまり長いからかしら、それとも肺が惡いのだからかしらと――思ふといやに心細くなつて泣いた。あゝいつての熱はさめるのでせう。

評　今日も暮れ近くなつた、

○霜の夜（人賞）

大久保　森英子

時計が數多なつて今日の終りを告げた、夜は森、と更けて寒さが身に泌み渡る、突然表の方で犬が頻りに吠えるので若き妻は何やら考へごとをして居た身を力なく起して立ち上つたとき唄聲高くしどろもどろの足音が門に止まつた、月影寒い霜の夜である。

評　哀史の第二章

【秀逸】

○銃の煙

白[illegible]

ズドンと一發獵銃の響きに私は、はつと胸躍らして、急いで障子を開い

た。見ると城山の麓の杉木立の間から、白――白――立昇る一筋の煙、悲しさうに木立の上をさ迷ふては消えて行く。今撃たれた何ものかの魂の樣に思はれて、寂しい悲しい思ひが湧く。

評　曇天頭痛を催ふす日

○響　伊勢　阿田　智子

ふと眼が覺めた、四邊は眞つ暗だじつと耳を澄すと、何だか遠い〳〵所を暴風雨でも行くやうに、それとも此の國の果に恐ろしい魔が來て喚ぶやうに、轟と絶えず鳴つてゐる、何の響だらう、と尚耳を澄まして居ると、天井を鼠が走る、私は竦然として首を引た。

評　正に屋の棟が三寸下る時

○風呂　兵庫　祥子

湯氣でぼつと霞んだ硝子窓を透して沈み行く夕日が私の肌を薄紅に染める、弱つた二三匹の蝿が、白茶色の壁に墨をふりかけた樣に靜かに止まつて居る、指先で羽根をおさへると、プンと力なく飛んで私の肌に落ちた、壁にはぬれた指跡が付く。

評　石鹸の香に多少の哀愁

○不安　大阪　高山　米子

捨てられたら？捨てられたら？兄妹にか、友にか……たえず私の心で斯うさけんで居る。誰さんは嫁いだだの彼さんはお母樣と呼ばれる身に成つたのと、同級生の消息を聞く度、云ひ知らぬ淡い妬と不安の念がきざす。何故、其れは自分にも分らない。

評　不斷の暗流

○愛憎　京城　露萩子

夫は初て愛樣を見た時美人だと大に讃めた、二度目愛想が可いとて一人悦に入つて居られた、三度目の今宵は餘り美かないと云つた、……私の胸は云ひしらぬ快さを覺えると同時に一度は夫を淺間しいと思つた心が却て私を傾して了まつたかと思へば情ない。

評　深刻なる内觀

○寒夜　大阪市　松山　芳枝

宵から起しつゞけの火鉢の火は衰えた面を白うしてもうお暇を呉れと云ひさう、弟も妹もよく寢就いて可愛い鼾が聞える、世間は寂として遠く夜番の犬の啼き聲が幽に、聞へる時計は今十二時をうつた、はゞかりに出て外を見ると、屋根の上のお月樣も蒼白い顏していかにも寒さうであつた。

評　描寫やゝ斬新

○ストーブ　信州　栄

今日からストーブがたかれたので、今までふり向もしなかつた皆樣なつかしさうに取り卷いて空想を語り合つて居る、煙突からは白く黒く煙が立上つては消えて行く、この煙もやはり皆樣の樣に空想をふりまきなが

廣い廣い世の中をさまようてあろうか?

評　さうかも知れない

○新坂　名古屋　胡蝶

新坂の下から七十余りのお爺さんが改名を刻んだ石碑を車につんでフム／＼白い息を吐いて上つて來る、後から腕白盛りの學校返りが五六人ワイ／＼言ひながら押してくる私も押してやりたうなつたがまた押すのも何んだか可愛想になつたのて眺めて居た。

評　面白きコントラスト

○壁隣　北海道　薫子

さつと一頻り、又一頻り、吹雪は屋根を越した。夜は靜寂、今し柱時計は幽かに一時を報じた。どしん――はつとして目を見張る、お前未だあんな女郎に逆上せてるのかへ。甚く激した隣の叔母樣の聲だ以前の物音何か投げつけたらしい、他から見ればさも男らしいあの武雄さんかと人事ながら親子二人の胸中を思ひやつて、私はほろりと致しました。

評　浮世の活劇



書架の前　失名

○年の暮　備中　山田靜乃

しんねりと身に泌む夜風が、今迄火鉢の側に計り居た私には一層こたえる、提灯を見つめて石橋迄來る、とばつたり人に出あつた、見れば隣家の浪さん、抱えた大布呂敷、横ふりに向いた其風情、同じ歳、年の暮、痛ましや斯うと知つたら、かはしたものを。

評　説明的になつたは惜むべし

○どういふものやら　山口　酒向とし子

友達が良い處にても、嫁きますと、何だか氣がもめる樣て有つたのが、何者に感化されてか此頃は、一日も長く此氣樂な美しい處女て居たい、

他家へ嫁くともうおばあさんに成つて仕舞ふもの、寢樣と起き樣と食べ樣と着樣と、何一ツ不自由のない現在！あゝ希くば此華かな時代に死んで仕舞つたらと思ふやうな事が時々あつて成りません。

評　人生の矛盾

○師走　日本橋　松岡千代子

起出て戸をあけると、お隣のブリツキ屋根がぼかしたやうに薄白く、霜が降りたのに驚ろいたのは、早二十日程前であつた、「ほんたうに今月は早十一月だよ」と母樣はおつしやる「まつたくてすね――！お正月もいゝが扨て來る迄が」と私が申しますと、「ほんとうに待ち遠しいね、いつたいお正月迄未だ何日かしらん」と後に居た弟は、眞面目に數へ初めたので、居合せた者は、思はず笑ひましたがやがて數へ、おへたかにこ〳〵しながら、弟は一心に凧の絲目を付け初めた。

評　人さま〴〵

○これても讀たいのてす　常陸　なてしこ

弟の着物を縫つて居りますと許りに散らして、ゆび皮をはめて、そとひざの下より雜誌を出して讀み出した、一字〳〵夢中、バタ〳〵とくる足音に手早くかくして、顔を出したのは小僧、笑ひ乍ら又讀み出した、かくて二三度驚かされ、四五度目には見つけられ、見事お目玉頂戴した。

評　樂在其中

○蜜柑畑　靜岡　こすもす

裏の蜜柑畑から哀れつぽい聲て絶え絶えに歌うのが聞えてくる、私は妙に其主が見たくつて素足に紅緒の下駄を引つ掛けて飛んで出た、誰も居ない、黄金の雲かとばかり美しい木木は霜にぬれて其れに朝日が映えてまぶしい樣だ、私はいつに無い神秘な樣にうたれて何だか恐しい樣な氣がした。

評　唄の主に遂に會ふ日が無いとすれば果敢ないかな

○小春日　安藝　吉川ひだ子

昨夜の嵐は何所へやら、今日はもうそのやうな好天氣、室の中に居てもぽか〳〵暖かい位ゐ、そつと障子を明けると、柔らかな日影が、室の中程迄射す。何所から來たか蠅が一匹、弱々しげに飛んてゐる。お父樣は庭の方て、チヨキ〳〵鋏の音さしていらしやる。

評　好景物

○春日和　長野　飯沼　春枝

長閑な春日和、熔ける樣な暖かい午後の日光が流れる樣に、書齋の窓からさしこんてくる庭の桃の樹には籠

の小鳥が止木に止まつてモンドリを打つて居る、桃の花が風もないのにヒラヒラ散つて、花の香を探ねて黄蝶白蝶が一つ二つ其邊を低う飛んで居る。

評 畫の如し

○あらしの夜　長野 淺田千代子

風は益々強くなつて、凄じく梢に鳴る。裏の鎮守の森で、木と木と摩合音がキーと、其れは〱悲しさうな何か物の最後の聲の如、總身がぞつとして、思はず布團を引被いだ。蠶室の屋根石でも轉り落ちたのか、非常な地響がした。

評 末段一節ありて全文振ふ

○落葉　伯耆 足立 春子

落葉を集て焚いた、白いむく〱した煙が、枯れた栗林から湧いて出た暫くすると、うす紫の煙が舞上つた、お宮の森の方で、荒がらすがしきりに鳴いて居る、「冬になつたなあー」今更らのやうにつぶやかれる。

評 氣持よし

○小春日　大阪 岡本 春子

障子の破れから日がさしてゐる、向ふの家根には大きなどら猫がひなたぼつこをして居て、縁に乾した足袋がよくかわいた、隣座敷で誰かのクシヤミが聞える。

評 短くしてよく利きたり、

○暮秋　かはたれ

見渡す野面は最う霜枯て淡い日光が草舍の白い壁に暖然と照つて居る。前の小川には美しい里の娘が白い脛も露はに大きな蕪を洗つて居る、柵に黑ずんだ楓の葉が名も知れぬ秋の蟲の骸とくる〱廻つて淋しい、

評 白壁陳、村娘の白い脛も陳、只末節ありて暮秋の景漸く活きたり

○病氣　神奈川 木村涙花子

自分は病氣に成るといつも此麼つまらない事を考へ出します。肺病は大名で、腹膜炎が夫人、心臓病がお姫樣、肋膜炎が若君胃病が下女で、風邪が下男と、それから其れへと考へ升、頭の何所から出て來るのかと思ひます。

評 ペストが人足て脚氣が車夫てすかね呵々

○お月樣　常陸 木村なか子

お月樣エライなお日樣の兄弟で、と何日も、お父さんとお母さんの野良から歸る迄、末弟の秀雄お負つて脊戸の畑を歩き乍ら歌つてやる、い丶心地にスヤ〱眠る頃はお隣りの樫の大木の間からお月樣が、ニコ〱上つて、眠むつて居る秀雄の顏を平和に覗き込む。

評 いつ見ても飽かぬ景物

○年始狀　京都市 本郷 春野

郵便！と投げ入れられた一通、然も元旦第一番に…誰からでせう、開いて見ると『御目出度、お年玉に故

短文

郷の梅を」とばかり、花びらの三四片と『草蔭より』とのみ。まさかお亡り遊ばした武夫様からでもなし、噫！『草蔭』の主や誰でせう。

評 ハテ面妖な

○芳ちやん　美作　當子

芳ちやんの、姉様は朝から鏡臺に向つてお化粧をしてゐる。芳ちやんは隣座敷で祖父様の膝に寄つて、手鞠をつきながら――「おしやれが、〳〵白粉つけて……」と歌つてゐる。祖父様はにつこりとして、「姉様の所へ行つて歌つてお遣り」と……。

評 おぢいさん中々隅にはおけぬ

○水車　岩代　笠間　松江

兄さんが朝疾くから水を踏んで働いてをられるから今朝こそは私がお手傳ひしやうと思つて兄様ちつと代りませうと水車の上にあがると水車はギーと止まつてしまひ水は池の中へザア〳〵と落ちた。

評 意地の悪い水車

○尼寺　神戸市　美佐　保子

ドンドンと向ふの尼寺から太皷の音が響いてくるお寺には美しい兄弟の尼様が一日佛様のお守りをしてゐる夜はふけてあたり靜に聞える物は夜嵐計り一陣の風が激しく吹く〳〵追つかける様に「ナンマンダー」と私は思はずゾッとしたが又急に浮世を離れた清い生活だなと深く感じた。

評 太皷が聞えて南無阿彌陀は少々變だ

○植物園に行く折を讀みて　小石川　つゆ草

あさましい車馬や電車の響、舞上る砂塵に木の葉の緑も灰色に濁り甍越しに漸仰ぐ月光：日本橋と聴くと直こんな嫌な光景を想像して、籠に飼ふ無慈悲な爲ず共小鳥の囀蟲の歌は聞き放題果實は眞に飽る程熟り、水々しい青葉の匂花の薫に包まれて静寂に暮す吾境の趣を誇つてた私は哀まれた戸崎町住民の一人、御作拜して不思笑つた様々の人心が可笑くて……。

評 戸崎町住民たるもの此挨拶なからざるべからず呵々

○女　四谷　柳の人

子爵松本雅子、松本子爵夫人雅子、大きく小さく半紙一杯に書いた反古雅子とは姉様の事です、姉様は今御母様と何か話して居られます、姉様はどうしてあんな年とつた松本様の家へなんか嫁きたいのでせう、やつぱり女ですは、私は山本様がお氣の毒で……。

○矛盾　信濃　紅百合

一體私はどうしたと云ふんだろう。自分で自分の心が解らない。優しく優しく涙の出る程優しくして下さつた一様が厭で厭で随分な素振をした私、今御逢してもつと瞳を逸す冷い御顔を見ると、侘しく悲しく、彼御胸に縋つてと思ふ事さへあるんだもの。

○一夜　土佐　寂靜子

靜かな夜だ、裏の小川の水が泣いてゐる、パサ

りく\と時を泣いては枝を離れた枯葉が凍つた地に寂しさを囁く、何處ともなく渡つて來る風も泣いてる、隣家の奥樣は一人で琴を彈てらつしやる、あゝお可愛想だ今夜もきつと旦那樣は外泊だらう。

○冬枯　大阪　平尾とき子

吹きすさむ風が落葉を捲いて梢には殘りの枯葉がなる、仕舞つた大工場を見下すと散り亂るゝ「鉋屑」を拾ふ女後めたき氣がしてにや周圍を見廻し勝ちである。あゝ今夕の薪なき故さぞつらからう思はず涙をこぼすと夜の幕はおりた。

○みせばや　金澤　むらさき女

春の頃叔父さまと縁日にいつて植木店の前に立つた時、圓い肉の厚い葉のみせばやが欲しいと云つて買つて頂きました。そして樂燒の鉢の儘で中庭に吊り提げておきました。此頃になつて薄紅に紅葉して皆の賞られ物になつてゐます。

○妹の一周忌　京都市　萩園家

今日は妹の一周忌、朝早うから母と、二人で拵へた團子を供へるべく佛壇の前に來て見ると、幾條かの線香の煙が揚つてゐる奥に、臨終の折撮影した十五才の妹千代子が立てられてある。よく見ると、笑ふが如く、悲しむが如く、怒るが如く、泣くが如き面持して私を見てゐるやう私は思はず團子を落して泣いた。

○皆様のねがひ　牛込　平塚つゆ子

お隣家の辯護士の奥さんは、米屋や酒屋へおわびなんかしないやうに、妹は早く姉さんのやうお稲様の長い着物着て母樣に叱られないやうに、弟は姉樣のやうにカルタがうまく取れるやうに、お父樣や母樣は霧ちやんを早く嫁にやつて、孫の顔が見たい、さて私、私はどんなねがひにしやうかしら。



旅行スケッチ（二）淺草　井上八重子

○秋の夜　水戸　重子

大きな爐を圍んで、皆て夕餉を終ると、又仕事場へ這入つて、薄暗いランプの下で稲こきをするのです、初めは唄つたり饒舌つたり威勢よくやります、八時九時となるとシーンとして更けるに從がつて淋しさが増て來て、稲を扱く音がサラリサラリと聞える許りです。

○凍る夜　相模　はる子

病院の白壁は凍れる月の光を浴びて雨に出來た染が髑髏に見える、流れて來た木枯に防風林が一際鳴り響く病棟の燈は太く細く吐息して居る、寒さに叫ぶか犬の遠吠が……。吁、幾多の患者が結ぶ夢は…… 涙ではなからうか……。

○灰　小梅子

鬼のやうな心になつて私は戀人の手紙を燒き棄てた、暖爐の舌が吐く炎の中に、懷し人の思ひの全部を投げ入れても、もう痛みも感じなくなつた胸には、泣く力も無かつた。……灰は崩れて煙は消えた。



俳句

○（天賞）
うつゝなの八幡鐘や古衾　出雲　山代夏子

○（地賞）
春寒く月代青き奴かな　信濃　飯沼春枝

○（人賞）
傘なくて木かげを走る時雨哉　栃木　しのぶ子

【秀逸】

品川や夜寒の沖のちら〳〵灯　伊豆　遠山雪子
何やらむ泡ふく堀の種俵　兵庫　杉山春翠
門松や十二分家の總本家　韓國　なでし子
春雨やある夜ひそかに琴の音　沼津　中村愛子

うらゝかに親が呼ぶ子や草の中　大阪　沼生美代
古足袋にぬぎそへてあるわらじ哉　大阪　川原あや子
白菊の花びらかたし霜の朝　廣島　平原ときを
椽に干す蒲團膨るゝ小春哉　兵庫　河中あさ子

内藤鳴雪選

初霰飛び駈ける子の二三人　加賀　野口そと子
新墾の村の家數や冬の月　奈良縣　中富よしみ
大川や舟曳き上る春の風　兵庫　祥子
朝しぐれ社遠かに鹿の聲　豐後　とめ女
齒朶を刈る鎌の光や朝時雨　相模　はる子
其中に一枝薫ずる榾火かな　福井縣　片山千里
名月や鎭守の森の木の間より　信濃　白梅女史
夜寒さや雁立つ澤の水の音　千葉縣　新宮初子
夢さめし身に冷やかに塗枕　上總國　伊藤眞砂子
寂として人なき寺の落葉かな　遠江　富永雪子
狂女が唄一節や冬の月　大阪　平尾とき
思ひつゝ待ちつゝ秋は暮れにけり　佐渡　古藤とみ子
鍬やめて嫁入を見る田打かな　佐渡　本間たかれ
凩や家並まばらに灯の見ゆる　讃岐　小野定子
上加茂や虎落の布に東風ぞ吹く　沼津　植松操子
呉竹のまき葉重げに雪雫　長崎　折口うめ子
梅園や笛吹き遊ぶ美少年　長崎　持丸武子
春雨や靜に廻る水車　和歌山　木澤てる子
蜑女の米とぐ暮や玉霰　福岡　田中白萩
鳩の子の脚はかくれて春の草　靜岡　波多野いち
しほらしき襷姿や若菜賣　三重縣　川原みさを

紅梅の鉢に日當る小縁かな　讃岐　衣輪すゑ子
春雨や灯火遅き草の家　羽後　三浦文江
雨雨と秋の日記や奈良の宿　本郷　渡邊三枝
雪の日や和尚は終日碁に耽る　尾張　秋月
時雨るゝや江は湛へつゝ水白し　愛知　服部德穗子
欠伸して暮れけり今日も春の海　麻布　君香
渡らんとして、佇みぬ雪の橋　伊豫　篠原ゆみ子
雪二日無絃の琴なかい撫づる　本郷　望月麗子
春駒は梅の館に召されけり　豐後　伏見琴子
犬の子の喜び顔や初日影　金澤市　芳子
踏青や遠目に牧の牛を見る　小樽　濟野芳枝
帆柱に大根つるや舟住居　東京市　渡邊芳子
新米を積出す濱の旭かな　茨城　渡邊ひて子
馬子唄の嗄れて淋しき裾野哉　長野　丸山榮枝子
山寺の塀低うして梅高し　京都　伊藤藤枝
秋の山ところ〳〵にけぶりたつ　樺太　ときわ
冬の夜やお伽噺のひそやかに　千葉　鶴岡一枝子
四辻やしろべ石立つ秋の暮　桑名　紅子
秋立や川邊の蘆のそよぎより　沼津　一笑
大道や正月らしき下駄の音　大阪　岡本春子
前髪に霰とけたる栗かな　根室　よし枝
仁和寺の鐘に暮れたる靈野かな　越後　藤原泣黑子
晴着きて若水くむや宿の妻　長岡　土田りた子
春の田を蝶とすみれの睦しき　豐前　赤田すみ子
石山の高く登て月寒し　すみれ會　加藤うん子
麥茶煮る鐵瓶太し橋の宿　すみれ會　白百合子
犬吠えて村。皆寢し冬の月　すみれ會　一葉女
鶯の初音に惜しき餘寒哉　すみれ會　小萩たかほ
峯の松みな木ぶりよし冬の月　すみれ會　萩原とよ子
明星の寒き光りや冬木立　すみれ會　本間てい子
蝶の羽の聊か濡れて春の雨　すみれ會　小原あき子

大風の空に驚く小鳥哉　すみれ會　白萩女
落葉焚く烟の下や石佛　明石　落葉子
狩人の肩にかゝれる紅葉哉　宮城　沼倉禮子
朝月や男は群れて芋洗ふ　鳥取　安木春子
鎖す戸に音まばら〳〵秋の雨　丹後　壺内わかば子
冬の月十戸の村を冴えてけり　北海道　伊東小百合
狐なく聲哀れなる冬の山　大阪市　吉田磯千鳥
春風や馬の手綱の手に長く　美作　光成晉子
たわ〳〵と折れんとすなり雪の竹　長野　深田千代子
行く秋や閾に溜る壁の土　岩手　波川かよ子
萬歲は都に入りぬ暮の雪　島根　すみれ
麗らかに雪晴れし磯の小松哉　新潟　吉田ひな子
我が家の低き廂や秋の雨　遠州　富永雪子
き夜を灯火暗く君思ふ　靜岡縣　袴田さと女
我が膝に猫の欠伸の小春哉　京都　田中よし
元朝の神代に似たる野山かな　下總　相川みよ
鐘つきて鐘樓を下る夜寒かな　栗田桂子
羽子の音も暮れ行く大路小路かな　京都　寺井芥子
武士の雜煮腹なる謠かな　京都　天野春也
咲きにけり枝より枝へ梅の花　神田　佐藤いつ子
普請する木を見廻るや小春山　東京　是輪幸子
大賓を迎ふる館や菊の花　麻布　田代一枝子
小春日や佐渡へ小舟の小商人　廣島　横谷島子
病む我に有情無情の秋の風　秋の野の人
夕立のあとはさびしく日の暮るゝ　石狩　市原まさ子
日のあたる方へ〳〵と秋の蝶　能登　近江加能惠
布洗ふ人の背に散る柳かな　京都　伊藤ふじ子
菊の香や衣桁にかけし能袴　庫山秋草子
月の橋詩人歌ひて渡りけり　長野　山西てる子
水を掻く葦の折葉や秋の行く　信州　山本操
又六が門の灯や御取越　越後　藤原法子

私が入學するならば

(餘　　興)

○女醫學校(地賞)

淡路　菊　子

今は病中で、希望も何も思ふに任せませぬが、先天性の病氣でないからやがて癒ゆる時が有るでせう、再び健康になつたら私は女醫學校に入學たい、そして産科婦人科の名醫となりたい、それは實母が私の産後、産蓐熱に罹つて晨の露と消え失せ、後の繼母も流産が元因で久しく患らひ遂に夕の嵐に誘はれて、彼の世へと旅立し、三度、只一人の姉は嫁して三とせの後實母と同じ産蓐熱で二十才を此世の名殘りとして秋の木の葉と共に土と化してしまつた、殘された私はせめて生理學の一頁でも覺えたいと思ふのです。

○師範(人賞)

西山登美子

私の父や兄は官途に從事して居ますが急に財産を失ひましたので私は尋常小學校だけで母の農事を手傳いました。間がなすきがな本箱をさがして自身で讀めさへすれば意味も解らぬ物を見て居ましたがしらず〳〵に智慧を働かせましたのかだん〳〵上の本を讀む樣に成つて意味も解つて來ました。後日人の母としては是非とも學問の必要と云ふ事を認めましたので何卒して學問がしたい、さればとて世の人の如く學校へ入る事も出來ないから他家の仕立物をして女子師範學會へ入會いたしましたが若し私に入學すれば如何なる學校を取るかと問はれたならば私等の如き、まづしい者は報酬の得られる敎員を目的として師範へ入學いたします。

【秀逸】

○內容

愛知　柴　水

私が入學するならば、形式的の學問はせぬ心組です。形式的とは名譽や地位を得るた

めに、又は卒業證書を得るために勉強するのです。若しそんな風で何の得る所もなくノートに智恵を預けて置く様な學問ならせぬ方が増しです、なまじ女學生かぶれて、嫌に氣取つたり妙に高襟ぶつたり、して、兩親に心配を掛けるより家にゐて家事を手傳ふ方がいくらよいか知れません。私はどこまでもまじめて、内容的に學問しようと常々心掛けてゐます。

○何處？　牛込　平塚白百合

學習院は高島田にお振袖式、銀襖しとやかに開くと高麗べりの、と云ふ處。女學館は先づ學校中の花でしやう花やかな交際界へ出るには實に的中、これからの世には語學が必要なので、といつて安官吏の娘位ぢや玉の輿にのればいざしらず、切角の寶の持ぐされもおしいし、三輪田、平等てよいとは云へ老先生がもう先が見えてゐて。それでは何校。私は一家の妻として家政もとれば交際も實地にして、こう云ふ校長であるならその主旨も實行も出來るし、キットよろしからうと思ひます。さて何校に白羽の矢を立てたら……。



試驗前の電車　失名

○誇り　土佐　寂靜子

私此春から東京の叔父の所から學校へ行く事になりましたの、何の學校かまだ定まらないけど土佐なんかとは違つて紫紺の袴に靴て腰にはバンドが輝いてますつて、叔父樣は高襟だからきつと一番振つてるのへやつて與れますわ、然したら私、其學校ても一等ハイカラになつて西洋人とも平氣て對話しお友達にもなる樣に成りたいわ、さう、音樂學校も可いのね演奏會等の時美しい衣裝に、其ビオロンの音に數多の聽衆の耳を奪ひ目を眩まし然して高いプラウドを示したらどんなに愉快てせう。

○女子大學　山口縣　中塚繁子

卒業に間もなき今日此頃暇さへあれば同級の友の未來を想像し乍ら皆喜んで居る今日も亦その話が出た「ね

皆さん、あなた方花子さんの未來をどうお判じ遊して？」「私女子大學に御入學と判じますの、どうもあれ臭いわね」すると隅で之を聞いた花子さん「なんてすつて私が大學に入學するつて……」と平氣でおつしやるのでそらごらんあたつたでせうと皆笑ふ笑はれた花子さんの仇返しをする「ね皆さん君子さんこそ御入學だわねえゝ私がそんなことでもすると日本は正方形になつて猫と犬が其の中でダンスを初めますわオホヽヽヽ」

○女文士　鳥取縣　失名

妾は文士に成るのが目的であります、それて先づ高等女學校に入學致し、そして、なを進んて、文士の門下に入るつもりてす何しろ忍耐が、第一なれば何處迄もやり通そうと思つて居ます、

諺に「精神一到何事かならざらん」「忍耐は運命に勝つ」と云ふ事を、かね〴〵先生より、承つて居ます忍耐なくして、挫折したならば、何うてせう？一生哀れなる運命に立ち到るて有りませう、妾が一生の成功は、忍耐に有ると毎日心がけて居ます、——

○信者　神奈川　幸枝

私が入學するならば百合子樣がはいつて居らつしやつた學校、あの學校は庭が廣くてところ〴〵に花壇があつて四季花がたへない、校長は鼻のまがつた髮の毛の赤い、目の大きいほんとうにこわい顔をした方一寸見たところでは恐ろしい人と思つて居た、それと反對ていい方て、キリスト教信者だそうだ、キリスト教者といふのはいやだけれども同情があつてよく生徒を教しへて下さるといふ事だ私入學するならば此の學校に入らうと一人て決した。

○文學　中川　野菊

文學を主とした學校て校長先生始め他の先生方も慈愛深く親切て生徒も皆品行が良い學校を撰びます起居は殊更規則正しく日曜日には郊外散歩近き渡りの名所古跡をたづね時には、遠足運動に又雨中の旅行も面白い、而して文學の資料を得研究をも致したいと思ひます。

○餘興新題

作家見立

▲作家見立と云ふのは、作家を花に見立てるとか鳥に見立てるとか、或は昔の作家に見立てるとか或は女に見立てるとか、或は各種の人物に見立てるとか、何に見立てやうと隨意てす、只其類似點に面白みがあれば宜いのてす▲作家は凡て現在の人に限ります▲作家と云ふ中には小說家、詩人、歌人、俳人、脚本作家など凡て文學作家に限ります▲勿論大家を選ぶのは宜しいが、中には投書家見立もあつて關ひません▲餘り澤山の人を選むと行數を取ります、少くて十人內外、多くも二十人ぐらゐまでゞす▲只見立だけてよろしいのてす、特に說明を要するものがあつたら說明をして下さい▲原稿には作家見立の文字を書入れて下さい▲ハガキに書いたものは採用しません▲賞品は例の通りてす。

▲しめきり本月十五日

讀友倶樂部



短評

○新聞や他の雜誌なんかで廣告を見て、もう待ちに待つてた新年號を受取つたのは空の曇つた寒い十二月廿九日、私は郵便の配達夫が宅へ這入つた黑影を遠くの畑で大根ひく手を休めた時みて其儘とんで歸つた。今年から本誌にも短評欄ができるといふお互に眞面目に評し合つて發展を計るのは誠に好ましい事だと思ふ、私はこゝに一寸新年號を開いた時の感じを書かして頂きます、元より、文才はゼロ、思想の淺薄な者ですから失禮な事もありませう、こんな事は前以てお謝はりして置きます。

先づ、表紙――妹等は好い／＼と引張る、少女と比べたりなんかしてる昨年のからみると何樣に好いか、あつさりとハイカラですつきりとして見て心地が好い。口繪――溫室も好いが雪路も好きだ暖國に生れて雪らしい、雪をみた事の無い私は云ひしれぬ、懷かしさを覺えて吾里の雪景色を想像してみた、貴婦人や令孃、美しいと思つた、でも文士の家庭や令孃がもつと／＼緣近く思はれてなつかしい、讀友の面影、たゞ容姿のみ出して文を出さぬ人と、物書かれる方とは一目で知れる、どことなく。

本欄……、松の葉（鏡花）、鏡花狂の私はもう嬉しくつて／＼振ひ付いた、「まあ孃樣方の御奇麗な……」と見入つて母の手から引つたくつたので母はびつくりした、「餡ならお手間が取れますつ」とばた／＼媚ぐ奴さん、馬鹿に景氣好がい、「おら餡のを一盃」と鐵拐に怒鳴られ面喰つた顏、見える樣だ、錦絵に描いた野がけの美人にそつくりの美人は何樣しても鏡花式の美人？と思つた、じり／＼と色づく團子、這入つて來る種々の人、行者、衞と立つて「僕はまだ布施をしません寸志だが老人うけたまへ」と云つた大學生、活々と浮んで自分も團子屋の脇の床机に腰かけてる心地がした。敵地（星湖）、眞壁の圖太い母親が憎らしくなつたり氣の毒になつたり可愛想になつたりしてあり／＼と浮ぶ、あの大きな躰！。「己あつて言葉があるか」つてブリ／＼弟を叱るのでよく眞壁の神經質も浮んでる自分まで敵地に這入つてる作者になり澄して、不安な恐怖な思に攻められて頭が痛くなつた樣に感じた。女流文學と精神生活の根底（天弦氏）、女學生と小說（春葉）なんかは非常に嬉しく、有力な／＼强い／＼味方を得た樣な心地がして幾度か會心の笑を洩した。名流婦人の日記、興味深く讀んだけど思つた程にも無いのがあつた、忙がしく無い樣で仲々働らいてらつしやる奧樣もあればまだ十代の孃樣らしい奧樣もあると思つた。婦人の寂淸生活、（尙江）、再三繰返して讀んだ實際よく突き込んである、と思つた然して私の獨身生活を淸守する!! といふ心が益々强くなつた、意地てはない。文士と家庭（天聲）、目次を見て妾の目を引いた一つであつた、天聲氏の樣に家庭に重きを置かれてる方が文士には比較的多いから？と思ひ感じた、私は妙に思つてから、氏の奧樣は幸福だ、其日記を拜見したい、見た事のあるやうな無い樣な氏の

御顏を思出さうと努めたが何樣してもハッキリしたのが浮ばない全く知らない樣にもあるけれど、今も思つてゐる。異性の爲に與へられたる刺戟、「妾れ之見てほんとに一人で赤くなつたのよまるで自分の事書かれてる樣な氣がして」と息せき切つて眞赤になつてＳ子樣は話して た、其日の從姉の日記をそつと見たら「…何も知らぬ妾は男つて面白い者だ、心の底の底を固く屏して置いて、一つぶつかつて其裡を解剖したら!?…」と書いてあつた、私はm子樣に振られた從兄に之を讀ましたら何樣云ふだらう、正月の三日頃には是非行つて聞いてやらうと思つた。余り書いて先生や皆樣に生意氣と冷笑されるとまづい〻からこれで。…、もう一つ一寸投書欄のを…。短篇小說、株日（筆子）、「さあ如何いふものかねえ」と氣のなさそうに云ひながら土人形の店なんか眺めつ〻行く、人の中世の中を知り拔いた母親、單純な、燃え安い少女、が見える樣だ、此樣時には度々逢ひながらよく捕へない人が大分あると、思ふ、女らしい感じの作。凪（浮子）、媚びる樣な調子で「何時戻つたかい」と云つた爺樣の性格も表はれてる、「一時間計り前に戻りました」と語尾を震はして云つた時のお流の顏も目に浮ぶ、行き屆いた作だと思ふ、養子（村岡文女）、筆の銳き冷靜な態度が女とは違ふ樣に思はれる、男子ではありませんか？詩、今日のは大分解るが、六ケ敷いと云はふか、何と云はふかちつとも、解ならいのがある、こんなのが天かと思ふと、ひよつくり、極く平易なのが上位にある、そうすると私の頭はなほ解らなくなる、妾には全く詩の要素が無いんだ！とあきらめてみたりせめて十八になつたらなんて勝手な理屈も付けてみたがもう今年で十八滿十六年一ケ月となつたがまだ仲々だ、其僻夜雨先生と太田きく子樣とは好きで〳〵〳〵耐らないからおかしい、せめて〳〵と評を味ひ、暇さへあれば讀んでゐる、散文、殘せる友の一人あゝはゝき木樣と幾度も〳〵返し讀んだ、こんな赤ン坊の樣な頭では云ふとを知らぬ、でもきし子樣に笑はれると恥かしいですもの、春を迎ふる綠門（紫花）、此方は淡い哀愁の籠つたそして懷かしみや曖昧のあるのをお書きなされる、同じ四國の方だと思ふと一層なつかしく拜見してゐます、和歌好きだけれど餘り下手の自分だから…。日記、夜雨樣が撰者になられたのでもう〳〵嬉しくつて〳〵、先生！先生！詩でなすつた樣な御評をなすつて下さいまし、誌友倶樂部、讀者は一向おかまいなしの樣だが記者の苦心の跡はあり〳〵と見られる、雜報、都會の顏と眼、非常に、非常に面白く讀んだ、スバルで「寫眞」を讀んで其作者は何誰？と思つて仲々振つてる、閨秀作家の動靜も嬉しい、スバたら鷗外先生の夫人だつた、同じ心の友にすぐ知らしてやろう、お才の越後に歸つたことも、女の味方も面白い、とにかく雜報は世間識らずの田舍者の妾なんかには非常に助けになる、嬉しい、新刊の中には讀みたいのばかり多い、信仰や近世大陸文學史、父に云つたら一言ではねつけられるけれど。告も面白そうた、夜雨先生の冷淚記が氣になつて仕方がない、ではこれで次號を待つとして筆を擱きませう、重ねて妄評多謝（土佐、寂靜子）

○本誌投書家中、私の一番尊敬して居るのは信濃の詩人太田貴志子樣、此方の作は何度讀んでも、詩は勿論美文さへも、無學な私には解する事が出來ぬ、而し敬慕して止まぬ、又本郷の筋井千とせ樣の作、美文幾度讀みかへしてもあきない面白い、實に興味が深い、私は此方の作が好きだ（木村桂月子）

○第一號で一番目をひいたのは「女の位地を高めんとする露西亞婦人の過激なる活動」、でした、悲劇の活動寫眞を見る樣な感がした、泉鏡花樣の松の葉は讀んだ計りで御馳走にならなんだ益子樣の短文、「さびしき笑」は入賞以上の傑作だと思ふ、小梅子樣の「冷たき胸」は女らしい文章に過ぎぬ、稻の花樣の「冷落」を讀み乍らも落淚した、私は淋しい文章が好きです俳句、地賞の「秋逝かば逝けよと鐘の響かな」は、へガキ文學の天賞「秋逝かば逝けよと鐘の響かな」の燒直しでなきや、詩、岸次子樣の「冬」はいつもながら感服の外ありません、實讀は濱松でせう、御差支なくば御住ひを詳しく御知らせ下さい雲井の雁樣の「月」を何故三賞の內へ入れる價値が無かりしか、私は遺憾に思ふ和歌は私のが沒書されて居るから批評は止します（濱松平岩白菊）

○一月號の「自覺したる個性と個性との衝動」まあ何といふ悲しい苦しい文でせう、私何ですか斯うがつかりしたやうです、嗚呼實に呪はしきは男子よ、か弱き女子を欺いてそして慾を充

たしした上は邪魔物扱ひ……、ああ、思ふも嫌てす、嫌てす、然し私は幸ひてした、未だ學生にして許婚の良人すらない身、生涯結婚をせないてすむ事がてきたのてすもの、あゝ幸てした、こゝに記してあるやうな家庭の人となつて、幼子を脊負ひ、賴む良人につれなくあつかはれてすげなき他人の中に辛き苦痛に秋しぼり悲憤のくちびる嚙んて人知れず家庭を呪ふやうな憂身となつたなら何と致しませう、實にこの四頁は私の心の血と涙をしぼつて讀んだ所てす（臺北の亂れ萩）、

○新年號短篇小說緣日をお作りになつた筆子樣は却々同情者と思ひます、誰がお讀みになつても感心致しませう、筆子樣は思ふに歲は二十三四て何時も小說に注目して眞似て書く會話は餘り旨くはない併し細く判ります筆子さんの母君も相當の敎育はあるらしい家庭は中流てせう要するに筆子さんは女としては豪い方て私はうらやましいわ！

○新しい年と題してお作りになつた矢野きみ子さんはお優しいお方と思ひます彼の作物も題の通り新しい家庭に新郎新夫水も洩さぬ暖かき二人の間に何時しか菊子樣はお喜びの種を宿し早三月目て夫婦共々悲みも打忘れて喜びの聲に長き月日も短しと新年の祝儀を迎へ扨は分娩の日を指折り數へて待つ、二人の心持如何てせう嘸ぞお喜びてあらう……、小說ながら思ひました。（神田、いつ子）

○一月號の畫稿を評して見よう、先づ天に上つた「石工」石工てあれば無論男てあらうに此の畫の顏？、何んだか姉さん冠りの樣に見える「萬歲」妾はこんな風な畫き方は嫌いだわ「晩酌の使」畫題宜く畫き方のそれも宜く本號の白眉だ「年行く日」一寸夢二さんに似てゐる處があつてよ－「糸あはせ」用筆が面白い……（蝶子）

○女子文壇紀念號は實に改良されました、其の內、ことさらに、目に付いたのは、新年附錄（溫室）は美くしかつた、又新に出來た新詩句の如きは、餘程面白味が有ると思ひます、妾も大贊成致します、（鳥取縣、松浦春江子）

○短篇小說――筆子さんの緣日は、實に面白いと思つた。若い娘の心が、うれしいやうに出てゐます。妾もあんなのが書いて見たいと思ひます。

○澤子さんの風は澤山あるタイプてす。後添のお流が立聞きするのも古くさくて、寧ろそれからの變化――騷動を描いたらばどうてせうかと思ひました。

○新しい年は、お羞しいものてす。とうかよろしく御指導下されまし。

○本欄――松の葉、鏡花先生のは、近く朝日て拜見しましたが、あれは何だかどつとしませんてした。此の方が好いと思ひます。「餡ならば手間が取れますッ」と言ふ小僧、餡の團子を遣へてゐる三人も、能く現れてゐます。結末に老人を出した所は、矢つ張り鏡花式と申したい位てす。

○敵地、之れは題が嫌やてす。もう少しセンチメンタルな人が書けたらうと思ひました。息子も、もう一寸印象深く描いて戴きたかつたと思ふ。

○本誌以外――荷風先生の冷笑が朝日に出てゐます。何てすか大變理屈やら、片假名の文句やらが現れます。先生獨特の情味が、どの章にもはつきり出てゐます。

○正月の趣味に出てゐました花袋先生の何やらと申す小說の中に「……」の印しのあつたのには嫌やてした。（橫濱、矢野君子）

記者曰　本誌の評、投稿家の評、文壇全體の評等を募る、「誌友くらぶ短評」と原稿に明記して下さい、

交際を望む

○南洋の島より　なつかしき故國に暮し給ふ諸孃樣、私は父母とたゞ三人、南洋セレベス島の山奥に淋しく暮して居るものです、當地にありては戀しい知人もなく、うれしい友もなく、每月來る雜誌を無上の樂しみとして入船每に指折り數へ待ちこがれて居るのです、賢明なる孃樣方何卒御手紙及びお寫眞を御送り下さいませ御禮には不束ながら私の寫眞及び當地土人の風俗繪葉書など御送り致します、皆々樣きつとですよ又皆樣のお內に婦人畫報臨時（花の姿）及び女學世界臨時（嬉く手紙）等御送り下されし人には當土人ハイカラ令孃の寫眞送付致します（鯉登子）(J. R. Yumula, Japanese. Tomohon. Menado, Celebes)

○池田様へ　是非お聞き遊ばしませ。前々から愛讀者會の無いのを殘念に思つて居りましたの。皆様に親しく御目に懸り記者様に願つて有益の御話でも承つたら、どんなに樂しいでせう！然なし猿ていく地なしの私、とても〳〵御盡力致す事など及ばぬとですけれどもし御催しの節は席の端にてもつらられて頂ふと樂しみに待つて居升。では御成功を祈ります…　さよなら（つゆ草）

○諸姉様へ御禮　新年號で私の身の淋しき事や、悲しい事など御話し申して誌友の御姉樣樣へ御願ひをしましたれば、御玉章や雑誌など、各地の御情厚き御姉樣様方から御送りに預りて誠に嬉しく唯々涙を以て謝して居ります、淋しく心細く暮す私は何につけても早や涙で御座います、御住所を明瞭に記して下された方には、一々御禮状を差し上げた筈ではありますけれども、洩れた方がありましたら、悪しからず御赦し下さい、此欄を拜借して厚く御禮申述ます。何卒皆様末長く、淋しく日を送つて居る私を不憫と思召して御交際を願ひます。繪葉書や御玉章を下さい、必ず〳〵御返事は致します。讀み古しの御本でも御惠送下さるならば誠に嬉しう御座います、（大分縣直入郡城原村四六九番地渡部艶子）

○新家庭　諸友姉上様方、私はもと石見の小松原徳子と申した者です、昨年十月此地へ參り新家庭を作つてゐます、何卒御交際を御願ひします（加賀遊泉寺銅山社宅、田中徳子）

○遠方と近方　お正月々々と毎日の様に指を折つて待つて居ましたが遂々來て仕舞ひました、來たかと思ふともう何處へか行つて仕舞つたのでまた一層と淋しいわネ、どうぞ皆さんお暇にはお遊びに被入て下さいそしたら又面白い事もありませう若しお出になれば寫眞や繪端書帖を御覧に入れます但し御出になる前に御一報下さい御遠方の方は御手紙やお寫眞の交換を願ひますハイチヤ（東京神田區豊島町卅九竹内方佐藤逸子）

○小學教師のお方に　本誌愛讀の諸姉様の中の小學教師の方々様、不束な者ですが温かい御交際を願ひますそして忠實に此の職の爲に盡そうではありませんか御近い方は御遊びに御出で下さいませ、（埼玉縣兒玉郡本庄町本町磯野菊子）

○俳句同好の方に　東京藤掛常子様京都伊藤常子様福岡今井とし子様京都井上澄子様小櫻畑尾濟子様どうぞ御交際を願ひます妾俳句好きなので誌上の姉様方を見てうらやましき思ひを致しますよ、どうぞ御交際を御願ひ申ます必ず願ひますよ（秋田縣仙北郡金澤町厨川町加藤うん子）

○孤獨　妾は五年前たつた一人の姉に逝かれましてからは淋しさは一しほまさりて毎日〳〵涙のかはく時とてはありません情ある諸姉上方よこのあはれなる妾は貴女方によつてなぐさまれます何卒〳〵御交際を願ひます（秋田縣仙北郡金澤町すみれ會員大越のぶ）

○和歌と音樂に　妾は至つて不束者で御座いますが皆様の中で和歌と音樂に趣味を持つて被居る御方と御交際を致し度う御座います同趣味の御方は下名へ御玉章を下さいませ但し男子の御方は御断り致します（名古屋中區東古渡字柳畑二三番地大橋方宮田和子）

○注意　時に皆様に忠告して置きますがね、誌友諸嬢の内に、一概にではありません、本欄で、先咎何名の方々は、何を送るわなんて、眞實かと思つてますと、中々酷い方がありますのよ、ほんとに、開いた口が…、詩的に趣味ある交際を祈りますよ、（備中後月郡木の子村馬越昌子）

○母を喪ひて　誌友の諸姉様よ私は去年母様に別れましたのよ其の後はたゞ淋しくて、何事も手につかず。誠にこまつて居りますのよ、どうぞ、今後御手紙や葉書の交際御願ひね、男子の方でも、正しき人なればかまひませんよ。（京都市東洞院錦上ル野々山方、信子）

○不審　大阪西區北野西三町佐、徳子様に申上げます。去明治四十二年十二月八日頃御申込になつて直ちに私方より御送付申上げました自然と人生、寫生文範の二冊、まだ御落手なさいませんか右二冊到着次第貴方より御送り下さるべき御約束の女學講義まだとゞきませず不思議でなりません故失禮乍ら一寸御照會申します。（明治四十三年正月拾一日、東京府南葛 s.h女）

○御禮と問　記者様へ御禮申上ます、早速誌上へおのせ下さいましておかげで、今日までに（一月十日）五人の誌友を得ました。それは、横濱、東京、美濃、と岡山縣に二人まで得ました、それに私の望み通りの御方ばかりで、早二度までも、手紙のやりとりを致しました、ので

す、重ねて御禮申上ます、又京都の方にお願ひ申上ます、上村松園女史の住所御存じのお方があれば何卒、御聞せ下さいませ、御禮は致します（近江國長濱町御堂前小倉壽榮）

○北海より　月日に關守りなしとや、私も二九の春を迎へました、さらば皆様よお心變らずに、私の此の世に在る間に淸きお交りをお重れ下さいな、さらば（北見國網走南通り、宮本鯛子）

○よろしく　私は毎日つまらぬ思ひに大切な日を送つてゐる鄙な子てす どうぞ永く御交際下さいませ（福井縣坂井郡鶴小學校內、北利子）

○一陽來復　可愛い梅が一輪二輪、笑ましげに床をかざつて、谷間を越ゆる初鶯のもう啼いて出そうな頃となりましたが、皆様お變りはございませんか、私も病氣のため、しばらくなつかしい文壇から去つて居りましたが、遂に病ひに打勝つて、再び文壇にま見える事が出來るやうになりましたど うぞ昔に變らずお交り下さい。おなつかしいお玉卒一日も早くお待ち申して居ります（一月十日備後神邊紺屋町井上年子）

○玉章室、綺葉書室、寫眞室　私女子文壇愛讀の記念として、前年よりこしらえて居りました、玉章室は大分山の様になりました、綺葉書室も大分飾られる様になりましたよ、今又寫眞室をこしらえんと思つて居ます、誌友の諸孃様の御面影にても何てもよろしい故御送り下ださい、御禮は私の見苦い面影や岡山名物てきつといたします、姫路、大阪、神戸、岡山の方御文通くださいれ（岡山縣邑久郡朝日村大字西片岡桐本末吉內、桐本悦子）

○自筆　誌友の皆様私は田舍に住む淺學無才の者てすが綺葉書、寫眞、自筆の圖畫自作の歌是れ等の交換をして下さい交際成し下されし御方には當地山水の寫したる者や牧野名所の箱岩の撮影の綺葉書を必ず御禮に送ります（岐阜縣加茂郡和知村下牧野 日置桃亭）

○回覽雜誌　女子文壇の誌友の皆様よ、今度誌友の方ばかりて和歌俳句小品文を集めて隔月一回つゝ回覽雜誌を發行したひと思ひますから半紙に行儀よく書ひて送つて上さいませんか好く出來た作品は粗末な賞品てすがあげますから皆さんどうぞ妾の望みを達する様にお願ひ申します、俳句文は皆な刷つて一部づゝ差上げます（福島縣田村郡三春町北町百十八番 橋本ふさ子宛）

○朝顔の種子　誌友の皆様朝顔の種子が御入用てしたら女子用又は家庭用の書籍か女子文壇か女學世界等の如き好き雜誌か紀念綺葉書（五枚以上）かを御送り下さい、朝顔の種子百種交りを送りますわ（大阪市南區天王寺大道三丁目四二六二 松澤豐子）

○燐標　マッチのペーパ、綺端書、玉卒、寫眞、小説等の交換を願ひます但し男子の方は絕對に御斷り致します、マッチのペーパ異りしもの十枚以上御惠破下し方へは妾の寫眞に小説一冊を添へて御返しします（下總國海上郡高浦村神宮寺區湯淺方、湯淺もと子）

○改號　記者様や誌友の皆々様、私はこれまて雅號の、みどりといふ名て投書やお交際をしてゐましたが、これから花子といふ本名て投書いたしますから相替らずよろしくお願ひいたす（京都市硯屋町出水下ル、宮原花子）

○おたづれ　諸孃様方の中て外國人にやとはれるのには如何なる手續を要するかを御存じの御方は敎へ下さいませ御禮は必ず〳〵致します（東京南品川裏五丁目四六五石崎方明月須磨子）

○末永く　誌友の諸姉様方私は、取つて十七の歲を迎えましたる、不束者てすが、何卒、末久しう御交りの程を御願いたします、男子の方なら御斷いたします、それから、一時的の御方も御斷りいたします、私は姉様もなし妹もない只兄様と二人きりなのてすから、姉妹の様に末久しう御交り下さる、方なら、ほんとによろこばしう存じます、何卒、以上の事を御承知の上ごく親しく御交りを御願いたします（茨城縣筑波郡大曾根成島りう子）

○繪畫　誌友の皆様よ、私は繪畫を練習致して居るものてすから皆様の中て同じ趣味を有して居る方と水彩畫日本畫（なるべく掛物額面位ゐの大きいさのを望む）うるはしきお筆跡、俳句、和歌等の御交換を願ひます、返葉は早速差上げますから是非御惠み下さいませ。（上總山武郡鳴濱村白幡八一〇藤田すみれ）

○改めて　記者様貴方の御影を受けまして只

今交際下さる御方が二十人程に成つて參りました有難う御禮申します今後一時的でなく改めて御交際下さる御方に御交はり下さる樣お知らせ下さいなそしてれ、雜誌、寫眞繪葉書を御交換下さる樣記者樣から讀者樣へ御知らせ下さいな御願ひです（大阪市東區上本町九丁目一五三阪田方須子）

○繪葉書　わたくしも、つとめのかたはら女子文壇を日々よんでをりますわたくしは、しやしんや繪はがきを、もつてたのしんでをります女子文壇の讀者皆樣、繪はがき好きの方が多いようですから、交換していたゞきたいですが何卒〳〵ぶつゝかものですが御交換願ひます（京都魚棚通西洞院西入中井方高須しづ）

○繪はがき　誌友皆々樣定めし樂しき春を御迎へになり御心も豐に日々御過しの事と存候妾は昨年の此頃に表記の裁縫所に入り勉强致し居る事に相成り候私離れて田舍に在る頃交換した繪葉書澤山持つて居りますが皆樣如何です御交換して下さいませんか誌上て拜見した五六の御方には御送付しましたが色々と澤山ありますから御望みの御方と御交換致さうてはありませんか（京都市醒ヶ井通松原下ル山崎裁縫所方三木あや）

○改名　誌友の皆樣！祁より齡を一つゞつ頂きましてお目出度御座います私も十八となりました。此歳も本誌のお陰で樂しふ暮さうと思つて居ります扨て私が今迄金田香雲子の名て拙い文乍ら投書致して居りましたが此の後は本名の金田よし子を代志子と書きかへて投書致しますから御見知り置き願ひます（和泉金田よし子）

○お見知り置き　私は昨年迄少女世界や文壇の妹雜誌を愛讀して居ましたが本年から本誌の愛讀者の一人になりましたから宜敷御見知置な願ひます倘女子文壇の發展をいのります（東都麻布新網町の和久井菌久子）

○水彩畫　水彩畫をおかきなさる誌友の皆樣肉筆水彩畫繪ハガキの交換をお願申します返禮は美しい繪ハガキてきつといたしますから：：それから文通てのお交りと寫眞の交換もどうぞお願申します（茨城縣稻敷郡大須賀村幸田、田口ひさ子）

○郵券　四方の兄弟姉妹の方々よ妾は世界の郵券を集めて居ます餘分も澤山ありますから御交換を願ひます又昨年遞信省發行の伊勢遷宮紀念繪はがき入用てすが御所持の方は十五ヶ國の外國郵券と交換願ひたし（小石川林九七平島久）

○長岡市のお方に　越後の長岡に居住遊ばさる誌友方の内に誰か私しに長岡市名所舊跡さては各學校の繪はがきと私方の地方の繪葉書との交換をお許し下さる方は御座いませんか私は或る事からお地の事が知りたくてなりませんどうか繪はがきの交換を願ひます（福井縣今立郡鯖江町寺町瀧澤嵯花）

○通信　私も今度皆樣の仲間入りをさして頂きます次に繪ハガキ其他御地方の通信などの交換を願ひます、（京都市西陣紋屋町小島庄太郎方靜月子）

○御禮と病氣　御情深き姉樣方から御年賀狀や御玉章戴きましたが昨年末より病氣療養中にて書く事を絕對に禁じられて居りますので何れ全快致し次第必ず御返事差上ます故何卒惡しからず、先は貰い紙上を拜借して一寸御禮申上ます（賀茂郡下田町土谷鈴子）

○つゞいて　先日は誌上にて文通を願ひましたところ失禮を申したにもかゝはらず御懷かしき姉上樣から御玉章にお葉書など下さいまして有りがたう存じますあのもしや御返事さし上げ申ませんでした御方がございましたらなにとぞ御ゆるし下さいませこれからはきつと致しますから先日御手紙下さいました田舍娘とおつしやる御方御住所を御しらせ下さいませどうか誌友の皆樣も御手紙下さいませ御願ひよ（東京市深川區東元町一鈴木美喜子）

○風景　未使用の着色なき風景繪ハガキの交換をお願ひ申しますお禮には當地方風景繪ハガキにて同枚數だけお送りいたしますから可成澤山に御送付下さい（茨城縣稻敷郡大須賀村幸田、田口ひさ子）

○お別れ　誌友の皆さん不束な私へ親しく御交際下されましたが都合にてなつかしき皆さん方とお別れ致さればならぬ樣になりました機あらば又御交際を願ひます然し御手紙下されたるお方へは御返事必ず〳〵差上ますいざさらば（在米國にて、阿久津波月より）

○歷史繪　わたしこと歷史にちなむ繪葉書頂戴致したく御交換をねがいます（滋賀縣甲賀郡信樂、氏家よね）

○若學生の方に　諸友の皆様の中、苦學なして居らるゝ御方がございますならば、どうか御交際が願ひたうございます、私は某高等女學校の三學年で今は何不足無く、寄宿生活をして居る身でございますが、女學校を卒業すれば、もう大ぎの學校へは覺束無いので、其時は苦しい境遇に落ち入てもと覺悟して居ます、それで今からさういふ境遇に在る方々と御交際申して其間の消息を知り他日の心の準備に供したく併せて、さる心麗はしき御方々と終世の交が結びたうございます、目的地は京都ですから京阪地方の御方は最もうれしうございますが、廣く全國の諸姉様に願ひます只憂ふのは、男子の方が下さる事です、舍監先生の手前誠に迷惑致します、もし下されたならば誌上に氏名を發表致します、初はどうか、御玉章で姓名は記者様の所でなき丶下さい（小島の千鳥）

○十六才　妾しは片田舍の一少女で當年僅に十六才で明治四十三年一月から諸姉様の御厄介を得て永久無窮の御交際を望み升る不束者で御座い升特に下總の諸姉様と深密なる御交際を幾重にも（千葉縣印旛郡川上村上砂山本みつ子）

○左の諸孃から も皆さんと交際を望まれました、玆に發表して紹介いたします（記者）

○新潟縣中蒲原郡臼井小學校内、若井みよの。
○伊勢河藝郡日塚村宮野菊次郎方、よし子。
○岐阜縣加茂郡三和村古屋三一、柴田なか子。
○長崎縣南高來郡島原町一七一、大澤けい子。
○北見國利合島鬼招村、鈴木稻子。
○千葉縣長生郡畝安村、牧田文子。
○山城乙訓郡久世村、長岡濟子。
○石川縣鳳至郡七浦村皆月一八、山岸きみ子。
○能登鳳至郡七浦村皆日七、松井きくえ子。
○石川縣鳳至郡七浦村、松枝とき子。
○徳島縣撫養町、鞍本好子。
○大分縣直入郡城原村四六九、渡邊つや子。
○石川縣石川郡蚓村三日市、福田せつ子。
○相模三浦郡船越一五一、小川てつ子。
○石川縣鳳至縣七浦村皆月二、三四、中村きく子。
○能登皆月本町五、松井ひさ子。
○京都市府屋町出水下ル宮原方、婁木はな子。
○深川區東森下町九十四、林秋月子。
○千葉縣山城郡東金町小川喜八方、たか子。
○佐賀縣神崎郡西郷村尾崎下村、ふじえ子。
○京都市五條通油小路東大島裁縫所内、今坂なら枝。
○伊勢河藝郡白塚村宮野菊次郎方、宮野よう子。
○大和高田町、貴治總佐子。

持つてゐる書物
讀みたい書物

○歌集　皆様の内に西行の山家集、源實朝の金槐集、税所敦子の御垣の下草、香川景樹の桂園一枝、大和田さんの雪月花、徳富さんの自然と人生等御持の方は如何程古くてもよろしいから御ゆづり下さいませんか、私の小說雜誌等とお代へ下さつてもよろしい、其方は下名へ御一報下さい。（岡山縣勝田郡古吉野村石生、大土井澄子）

○國文書と婦人もの　私の書齋に若菜集、竹取物語、方丈記、土佐日記、成功の途、自然と人生、世を渡るたつきの風琴（家庭小說）歐洲忠臣藏新細君、日英新會話、裁縫と編物、實用家事經濟學、婦人と情力、エノクアーデン、其他女學世界、女子文壇、婦人世界、婦人くらぶ、英語世界、新國民、ハガキ文學ムラサキ等の諸雜誌、やさしき英語書類等淋しそうに皆様の御訪問をお待ち受け致して居ります、永井荷風氏のあめりか物語、若松賤子女史の忘れがたみ其外面白き物語、紀行文など御不用書お持の方々は私の不用書の内いづれなりともお氣に召しましたものとおとり換へ下さいましな、若松女史の忘れがたみをお土產に訪問下さつた方には舶來の上等エハガキを澤山に差上げませう、（神戸市中山手通一丁目四十六ノ十四岸本新子）

○早稻田大學講義　皆様の御手許に、早稻田大學講義錄、お持ちでしたら、全部お讓り下さいませんか、お讓り下さる方は至急お報らせを願ひます。（埼玉縣比企郡小川町岩田文窓子）

○新刊もの　妾の手元に薬舟の惡夢、響、未明氏の惡星、近代文學註釋叢書第一編、獨步集第二、花袋集、秋聲集あり梁川の病間錄有明氏の春鳥集露風氏の發園二葉亭氏のうき草（ルデン）鷗外氏の一幕物、藤村の新片町よりの中より交換を望む（山形縣飽海郡鵜渡川原村長泥町阿部花子）

○家庭日記　皆様のお中に四十二年十一月の本誌增刊家庭日記御不用のお方が御座いましたら下名へ御送り下さいませんか代假の外編物な

御禮として差上ます（群馬縣佐波郡芝根村川井大塚千代子）

○金色夜叉の歌　皆樣の内に金色夜叉の歌御不用の方は私の上等美人繪ハガキ十五枚と御交換下さいませんか御望みの方は早速御送り下さい（北海道北見國稚内町今村りせ）

○唱歌の譜　妾は昨年から小學校に出ておりますが女學校に居ました時にオルガンを練習致しませんのでしたので誠にこまつて居ります皆樣の中で軍歌及び小學唱歌鐵道唱歌御持の方は何にても御送り下さいな御禮には雜誌繪葉書しほりにて差上ます又永久に御交際を、何方樣にてもかまひませんから御不用になりましたのをぜひ〱御願申ます（新潟縣中蒲原郡臼井小學校内若井みよの）

○文學と婦人書類　皆樣の御手許に御不用の文學書類、又は古雜誌等御持ち合せの御方は私の、婦女の操、ますかゞみ、なでしこ、筆の花、花つみ日記、彌生のあらし、文筆、女學世界、婦人世界、泰西婦女龜鑑、日本婦女龜鑑、嫁ぐ人、等其他の本と御取りかへ下さいまし、相當の書籍へ妾の、拙き寫し繪を添へて御返禮致します、（長野縣北佐久郡望月町、眞山みつる）

○御情厚き誌友の諸姉樣方の内に少女御持ち合せの方が御座いましたら私所持の昨年の婦人世界冒險世界新國民各十餘册づゝ及文壇の光、新美文、新作家、短篇小説、本誌などゝ御交換下さい（岩手縣岩手郡田頭村、館坂秋月子）○妾の手許に二十八人集、獨歩集第二、一葉全集、自然と人生、鷄頭、青蘆集古々呂の日記俳句作法、和歌入門、伶人、武藏野、綠雲、及び古雜誌數十册ありますから皆樣の内で面白い小説御持ちならば御交換下さい皆樣の内に藤村の「春」か花袋の妻御坐いますならば妾の方より鷄頭と青蘆集差上げますから御交換下さいませ（長野縣南安曇郡南穗高村三八三〇、飯沼はる枝）

○皆樣私音樂が大好よ殊に（ヴアイオリン）は面白いわ、諸姉樣、面白いとお思ひ遊ばした唱歌御存じの方は曲譜共何卒教えて頂戴、校歌でも何でもかまひません、此度舶來共の仙當地風景繪葉書て御禮致しますわ猶失禮ながら繪葉書、玉章等の交換も併せてお願ひよ、當區の皆樣も宜しく……、（札幌區北一條西拾九丁目一番地、見澤翠）○二人娘、深山の美人、魔風戀風、不如婦、小猫など有りますから御望みの方は自身の御寫眞を添へて御申越下さい先着五名限り當地牧場繪葉書を添へて御貸し申します（千葉縣下總國遠山村三里塚、荒井くみ）○島野樣の禮法折物御持ちの方は、御送り下されませ御禮はきつと致します（福岡縣鞍手郡若宮村福丸古田ひでの）○誌友の皆樣よ妾は左の書が不用ですわ雜誌では婦人世界、女學世界、女子文壇、新文林、文藝世界、英語研究其他地方雜誌數册書籍では文章組立法新英和字典等不用書がありますから皆樣の内にナショナル讀本三四御不用の御方は御交換下さいませんかゆずつて下さいましてもよろしいですわ外雜誌はリボン、ヒヅツキ、シチリで申込んだ方に差上ます（美濃加茂郡黒川局區内鷲見吉六樣方花井しず子）

○只今妾の手許に紅葉全集全六册、眉山全集全四册、其他小さな小説、文學雜誌數十册ありますから、皆樣の樂器なればヴアイオリン、手風琴、ハーモニカ、小説なれば己が罪、椿姫八犬傳、魔風戀風、編物及造花ならば何でもよいから交換を御願致します男女の差別はありません、極々清い御方ならば、妾は決して不正なことは致しません。（遠江金指局都田新木六三鈴木小菊子）皆さん、妾の手元に、讀書作文辭典、新詩辭典、文話詩話、魔風戀風、不如歸、吾輩は猫である、妾、あゝ青春及女子文壇、婦人世界が深山ありますから、皆さんのお持になる田舍教師、海の聲、有明集、ハイネの詩、其のほかの雜誌と交換して下さいませんか、又繪葉書交換御望の方は、近江八景のと――但し三名限りですから、早くハガキて申込むで下さい（滋賀縣神崎郡御園村今田居志賀小なみ）○絹ハンケチ、ヒヅツキ、絹栞、リボン、お惠み下さつた方には妾の小説、想思怨、愁人、戀の夫婦、猫、小猫、不如歸、新不如歸、後の不如歸、花紅葉、雪月花、雜木林、野菊などに不出來な妾の寫眞（先着十名限り）を添へて御禮致しますから――御願申上升よ、（美濃黒川郵局區内藤井欣一郎方紫芳女）○誌友の姉樣方、前月は種々の好い、小説年賀狀山の如く御送り下され、誠に有がたく幾重にも御禮申上ます、倚相變ず小説孝女白菊、女學用算術書卷二、家庭教科書、文藝倶樂部、婦人世界、女子文壇各種の定期增刊、鶴香水、香袋、姉上樣の御仕立て襟、お前掛け、御持ちの御方は送つて頂戴、御送りの方には相當の御禮は致します、先着十三名には自身の寫眞に繪葉書、五枚づつ添へて必ず御禮します、（常陸國金江津局內山口方ちう子）

編輯通信

年賀狀到着表

▲信濃、山田邦子。東京、若杉とり子。東京、靜江。群馬、塚越かれ子。東京、江森美子。伯耆、萬枝。福岡、仲道澄子。同靜江。渡島、みや子。岩代、山口ます子。神戸、岸本新子。東京、鈴木春子。福井、片山千里。信濃、丸山美根尾。淡路、水島好子。神戸、田中落葉子。門司、鈴木靜枝。近江、細野鈴蘭。東京、新村基子。東京、朝井千とせ。熱海、木村綾野。相模、鳥井俊子。名古屋、原田琴子。足利、柳田秋月子。千葉、高橋良輔。札幌、今間八重子。横濱、峯女。伏見、田舍娘。島根、藤井とも子。東京、望月麗子。秋田、高橋きみ子。同賀千代。宮城、八崎りん子。茨城、田村はつ子。越後、根岸光子。佐渡、植田ひさ子。大阪、平尾とき子。秋田、加藤うん子。長崎、林田しづゑ。福岡、熊谷經子。高知、濟水貞子。羽後、三浦文江。東京、池田喜美子。甲斐、やす子。山口、兼常文子。越後、佐藤浪子。越後、井上貞子。北海道、長尾登與子。茨城、尾見秀子。信濃、野口千鶴子。越後沼倉馥子。渡島、伊藤小百合。福島、齋藤くに子。奈良、福西たづ子。東京、高木とめ子。横須賀、君枝。岐阜、篠田とみ子。茨城、赤澤千代子。淡路、鎌田麻之。横濱、矢野きみ子。石川、澤口いと子。神奈川、鈴木郁子。常陸、梅子。近江、佐和田よし子。近江、ましな。熊本、西原こめ子。下野、しのぶ子。長野、加藤伊代子。兵庫、津上百合香。山口、酒匂とし子。福島、田中とよ子。山城、文子。山形、山口治子。伊賀、山村龍子。石川、北利子。丹波、山田松枝。和泉、金田よし子。越後、木島磯巾着。樺太、眞田信子。佐世保、西村かのゑ。横濱、鈴木まつ子。淡路、加藤香菊。茨城、黒澤とよ子。伯耆、竹本春江。近江、山内靜江。鎌田光枝。京都、伊藤はつせ。上毛、千代子。伊豆、加藤ため子。岩代、武藤たみ子。東京、吉野阿隆。大分、立川悌子。釧路、北川悦子。高知、靜子。秋田、大山愛子。岩代、菅野やい子。東京、加藤ふて子。東京、三宅恒子。臺灣、稗貫みつ子。沖繩、井之口かれ子。信濃、田村あい子。長野、下枝よし子。越後、うつろ木。靜岡、佃たつ子。徳島、堤よし子。布哇、上土井定子。函館、柏倉ふて子。岡山、桐本悦子。徳島、吉田古磨子。

右の諸嬢より新年早々年賀狀をお送り下さいましてありがたう存じます、芳名を掲げて聊か謝意を表します。(記者)

○本號本欄の記事の中て、前號の豫告に洩れたものは次號て發表いたします、紙面の都合て掲載が出來なかつたのてす。

○醉茗の脚本「落潮」はつゞける筈てすが、作者感興を起す機會がまだないので、腹稿のまゝ放つてあるのてす、何れ一二號の間に掲載します。

○衛生顧問は自今隔月位に發表します、本月は一回休みました。

○「若き婦人」は愈よ來る十五日に發行します、今度は一風變つた雜誌が出來ます、材料は甚だ豐富であるばかりてなく、多方面に渉つてゐます、そして例のわか〳〵しい態度は婦人雜誌中の一異彩てあらうと思ひます。

○到る處好評を博して大部數を發行し盡した本誌の五週年紀念號は極く僅かの部數だけしか殘つて居りません、揃へて置きたい方は此際至急申込になるが宜しいでせう。

歌御會始披講

御製

たにはたにゆきぞつもれるたみのためゆたかにとおもふとしのはじめに

皇后宮御歌

とよとしのみつぎのゆきぞつもりけるはれのおものをきこしめすひに

東宮御歌

としたちてふるゆきみてもおほぎみのふかきめぐみをひとあふぐらむ

東宮妃御歌

かどまつのみどりのいろもいやふかくなりまさりけりけさのみゆきに

海軍大將大勳位功三級　威仁親王

きみがよのひかりをそへてあらたまの
としのはじめにふれるしらゆき

勳一等　慰子

よのちりをふりかくしたるしらゆきに
としのはつひのかげぞかゞやく

侯爵臣藤原朝臣實則上（德大寺）

ふるとしのものといふものうづもれて
みわたしきよきけさのゆきかな

公爵臣　源朝臣具定　上（岩倉）

こむあきのみのりをゆきにまつみせて
みよのどかなるとしたちにけり

伯爵臣　藤原朝臣光顯　上（田中）

あかつきにまづひらきみるにひごよみ
ゆきのひかりをまどにうけつゝ

題者點者　男爵臣　藤原朝臣正風　上（高崎）

うつせみのよをきよめむとあまつかみ
ゆきふらすらしとしのはじめに

子爵臣　源朝臣千秋　上（渡邊）

かみぢやまにひたまがきにつむゆきを
としのはつひのてらすさやけさ

讀　師　侯爵臣　源朝臣通久　上（久我）

おほみよのひかりをうけてあらたまの
としたつけさのゆきぞかゞやく

發　聲　伯爵臣　源朝臣重朝　上（大原）

あらたまのとしほぎにゆくもろびとの
はれぎのそでにゆきのはなちる

講　頌　伯爵臣　藤原朝臣實麗　上（滋野井）

あさまだきゆきをはらひてたがいへも
としほぎびとをまづむかふらん

講　師　子爵臣　藤原朝臣功長　上（堤）

あさぼらけかぜしづまりてゆたかにも
ゆきこそつもれとしのはじめに

講　頌　子爵臣　藤原朝臣以季　上（大宮）

ふるゆきをとしのはじめのはなとみて
さむさもけふはうちわすれけり

講　頌　子爵臣　藤原朝臣基哲　上（持明院）

ふりつもるゆきにむかひてあらたまの
としほぎさけをくむぞたのしき

奉　行　子爵臣　藤原朝臣量弘　上（町尻）

つるのよぶちよだのまつのはつみゆき
としたつそらにあふぐけふかな

奉　行文學博士臣　忌部宿禰榲邨　上（小杉）

ゆきははやとしのはつひにうちとけて
したゝりそめぬみめぐみのつゆ

講　頌　臣　平朝臣信道　上（長谷）

ふるゆきにちまたのちりもうづもれて
けさあらたまのとしたちにけり

選歌

圖書寮主事從六位勳六等　高島　張輔上

ふるゆきをまづめづるかなつきはなのたのしみながきとしのはじめに

宮內屬從七位勳八等　片岡久太郎上

としのたつあしたのゆきをはじめにてうれしきことのなほつもらなむ

大日本歌道奬勵會會員
三重縣士族　堤　盛言上

としほぎにいでてしひとひははれまにてゆきにこもれるまつのうちかな

愛知縣士族　長岡　秋道上

いとまあるとしのはじめにうれしくもふらばといひしゆきぞふりける

長野縣平民　桑原　保松上

やまのゐのこほりくだきてわかみづをくむそてしろくたまるゆきかな

雜報

新年の各作家

新年には何の雜誌も材料を多く要求するから從つて作家の顏觸もならぶ、今年は餘り變つた顏觸も見受けないけれど、人數にするとかなりの數に上つてゐる主なる作品に就いては世間にも批評の出ることであらうと思ふから、此處には新年に現れた各作家と其の作物の題とを擧げて後日の記憶に便ならしめやうと思ふ、勿論小說、詩歌、脚本等の創作を主とし、飜譯、評論の主立つたものも少しは擧げて置かう、而して此等の作物の發表されたる雜誌は、わが「女子文壇」の外に「太陽」「早稻田文學」「文章世界」「ホトトギス」「趣味」「スバル」「中央公論」「秀才文壇」「帝國文學」「新文林」「新小說」「歌舞伎」「東亞の光」「文藝俱樂部」「新潮」「新聲」等である。

森鷗外　獨身　杯　電車の窓（以上創作）負けたる人　釣　白　人の一生　午後十一時（以上飜譯）
田山花袋　丘の家　死　踵　町より山へ
正宗白鳥　猫　浴啞の家　噂　傍見
中村星湖　雪國から　敵地　犬ころ　畑　二葉亭四迷論
泉鏡花　國貞ゑがく　松の葉　歌行燈

小山內薰　役者　眞空　逸話
德田秋聲　ふる馴染　その前日　娘二人
永井荷風　見はてぬ夢　詩三篇
小栗風葉　無爲
眞山靑果　家實　煙草の村
岩野泡鳴　川本氏　悲痛の哲理　樺太雜感
水野葉舟　興　一週間　歸途
小川未明　笑と眼付　越後の冬
窪田空穗　重荷
野上臼川　郊外
後藤宙外　きよ川
秋田雨雀　父の友達
木下杢太郎　市街を散歩する人の心持　醫師ドオベンの首（脚本）
與謝野晶子　驅落者（脚本）日記より　金鳳華（以上歌）
高村光太郎　文部省展覽會最後の一瞥　ロダンと云ふ人　巴里の寫生　詩歌と音樂
上田敏　蟋蟀（譯詩）
蒲原有明　民衆　月のたまもの　貧者の眼　散文小詩（以上譯散文詩）
河井醉茗　落潮（脚本）信濃町の月夜（散文詩）
三木露風　感覺と美の憂愁　日かげの停車場　憂愁の庭　我が憂　日沒のあと（以上詩）

服部嘉香　正岡子規論　詩壇の三潮流
片上天弦　國木田獨步論　一月の短篇小說　誇張の核心
島村抱月　人形の家（譯）現實的自己內省的
坪內逍遙　ロミオとジュリエット　演劇の種類　劇壇所感
姉崎嘲風　諷言の藝術
藤岡東圃　昨年の日本畫
阿部峙樓　自由劇場印象記
平田禿木　鄕愁　夏の夢　三本木より
小林愛雄　雨の降る夜
尾上柴舟　あざけり　山の記より　靑山より海（以上歌）
櫻井天壇　詩は氣息なり
與謝野寬　乞食　或夕のきまくれ（以上詩）
白松南山　大西操山論
生方敏郎　綱島梁川論
相馬御風　樋口一葉論　獸と鳥と魚
前田夕暮　彼の懺悔　冬夜集　黃落集　塵談集（以上三項歌）
松原至文　ホイットマン
若山牧水　運命　落葉林　わが室の夕（以上歌）
人見東明　赤き唇　雨の世界と夜　雨音獸（以上詩）

加藤介春　音樂會の歸り（詩）
森しげ女　あだ花
平野萬里　事務室の一夜（脚本）寒夜（歌）
長谷川時雨　空華（脚本）
長田秀雄　曉　詩二篇
白柳秀湖　白鷺の羽
吉江孤雁　獄色　村吉の家
小島烏水　三味線林
金子薫園　冬を味ふ歌　ちらばれる星（以上歌）
鈴木三重吉　小猫
伊藤左千夫　眞面目な変
長塚節　隣室の客
兒玉花外　赤色　直熱詩
川路柳虹　薄暮の瞳（詩）
佐藤紅綠　一人と二人（脚本）
内田魯庵　灰燼十萬卷
島崎藤村　スケツチ
杉村楚人冠　變な女
一色醒川　通り雲
安倍能成　自己の問題として見たる自然主義的思想
寒川鼠骨　見送り

新年の雜誌界

▲新年の各雜誌に現れた作物の主なるものは大抵別項の「新年の各作家」欄に於て網羅して置いたから此處には言はぬ別に雜誌界全体に就いて一瞥した處を述べてみやう。

▲『無名通信』は『美人號』と云ふ厚い雜誌を出した、東西古今の美人に關する事柄を澤山集め猶諸名家の美人談が山のやうに載つてゐる。

▲最も紙數の多いのは『ホトトギス』であつた小說の外に魚住折蘆氏の『美術上の基督』と題する興味深い一文があつた、外に『五明句稿』あり、『春興』と『秋風歌仙』は古俳書を其まゝ石版に附したもので俳人の珍重すべきものであらう。

▲『早稻田文學』が故人となつた明治の藝術家十人を選んだ評論したのは最も眞面目な企圖である。『中央公論』は二百五十號に滿ちたといふことだが、紙上に於ては別に目新らしいこともなかつた。

▲『趣味』の文士相互評は考へたものらしく『新潮』の文藝百家小傳は此種のものとしては纖力味ふべく、『秀才文壇』の諸文士の結婚談は愛嬌があつた、『新小說』の不老門は頗脳がまるで異ふから好奇心を以て讀まれるであらう。

▲『中學世界』は日本學生の歌を發表した、『文章世界』は變りがない。

▲『雙六』の附錄は婦人もの少女もの少年ものに多かつた。殊に例年の通り博文館の雜誌に多かつた。

▲『新年画』は「あらゆる古き思想と形式とを捨てゝ云々」と表紙に宣言書を書いてあるだけに、意氣込も盛んらしい。

新聞紙の初刷

新年の新聞と云へば年々何か際立つた特色を示すものだが、本年も亦餘り氣の附かぬ特色が各新聞に現れてゐる、それは何かと云ふと、わざと新年らしくする風の少くなつたことだ。むやみに紙數を增して何十頁と云ふやうな大新聞を發行し、新年から威勢を示した事もあつたが今年の如き大抵の新聞は平素より四頁增すか、六頁增すか、極めて頁數は少かつた。世の中が餘りお正月らしくすると云ふ風が少くなつた影響とも思へやう、廣告が集め難いからだと云つた人もある、それも一つの原因であらう。とは云ふものゝ何の新聞も流石に新年のことだから附錄のお景物は添えた、朝日の『世界一周雙六』は不折の繪も好く、趣向も旨く出來てゐた。萬朝や二六は年々變らぬ曆の附錄を添え、電報は最も手數のかゝつたいろは骨牌を添えた、讀賣、國民などは餘り常と變つたこともなかつた、報知と中央は飛行器あてこみの雙六を添えた、其他の繪附錄は東京毎日の文學の「狗兒」鄒の華村の「笑」日々の金鳳の「狗」日本の應擧の「狗」等であつた。

朝日の永井荷風の「冷笑」と、別に新年から出るやうになつた國民の上田敏の「渦捲」、讀賣の島崎藤村の「家」の三つは文藝上の作品としては注意すべき好個の三幅對である。

年賀状のさま〳〵

△巖谷小波氏の年賀状は意匠を凝らしたもので新聞のやうに輪廓をつけて四段に分け、俳句と昨年洋行したことゝ、其挨拶と、二男の生れたことゝ、出版すべき書名などを揭げ、中央に自分の肖像と併せて愛兒の寫眞を載せてあつた。

△眞山靑果氏は相模足柄下郡小八幡村に當分居住する旨が記してあつた。

△畫家のは孰れもお手のものだけあつて、多くは狗又は雪に關した繪である、太田三郎氏はいたづら坊ちやんが畫家に扮して狗を彩つてゐる處、片山春帆氏は雪達摩を描いた凧、山中古洞氏は新式の雪輪に狗の顏、宮崎與平氏の狗張子の繪は墨の色の印刷に苦心してある。

△賀正として岩野美術、遠藤淸子と並べて印刷してあるはがきは、文士間に注意された一つである。

△白秋、泣菫、柴舟、葉舟、寛、晶子、長江夕暮、露風、孤雁、主文、烏水、夕咲、御風、介春、未明、薰、林外、天弦、有明、薰園、楠緒子の諸氏は皆自筆であつた。

△花袋氏と、木城氏と揃ひの綺紫書て、雪中の塔が描いてあつた。

△平木白星氏は例年の通り「賀新年」も所も名も凡て朱印で押捺したもの。

△人見東明氏の「賀正」の文字も住所姓名も共に芋版かとも思はれて、一風變つてゐた。

△姓名が印刷で、文句が自筆であつたのは島村抱月氏と佐々木信綱氏

△刷て印刷したものは鏡花、淸哲、天外、流星、虛子、藤村、秋骨、光風、紫紅、醉夢、勇幟笛の諸氏であつた。

文界消息

△山本露葉氏主筆となつて『新文藝』と云ふ雜誌が二月から發行される。

△或る靑年文士は『明星』と云ふ文學雜誌を新たに起すさうだ。

△『萬朝報』ではハリー慧星が人間に近づいて愉快な心持になる事を描く想像小說を募集中。

△三宅克己氏は本年第二の洋行をするさうで矢張歐州漫遊が目的の由

△『ハガキ文學』は松美佐雄氏が編輯に入つた。

△此度若山牧水氏が主となつて「創作」といふ詩歌本位の雜誌が京橋の東雲堂から發行される。

△三木露風氏の第二詩集は『寂しき曙』と題して今春出版の噂がある

△『シキシマ』の新年號は地方雜誌と思へないほど體裁內容の整つたものが出來た、服部嘉香氏、秋元蘆風氏其他諸家の創作も多く常の號とは面目一新した。

京橋の匂ひと寂味

▲輪廓のボンヤリした光線、薄い鈍色の微塵埃り、塀ぎはに押しつけられた雪泥の低いため息。曇り日の陸の町を、濁んだ空氣が垂頭れて通つて行ぐ。二月の朝騷がしい都會の雜踏の中の一と時――沙漠のやうな寂しみ▲大きな響音器の底から、かすれ聲で聞こえて來る京橋通の活動の息づき、疲勞と倦怠から出るあくび、うつとりと寢てゐるやうな小路から漏れる煎藥のにほひ、崩されつゝある家の床下から出て來る土の溫氣と黴びた舊世紀の匂ひ――それ等のものが皆低い氣壓の爲めに沈んで、煙のやうに軒下を這つて居た。▲あゝ崩される家の歎き、一つ一つにもぎ離される骨と肉の苦しみ、固く食ひ入つた古釘の錆の執着、隱れ場を失ふて逃げ惑ふ舊世紀の悲み▲電車は烈しいベルの音を立てゝ、まつしぐらに「現在」の軌道の上を走つて行く。▲さびしい京橋の裏通、新らしい世紀の瞬の古いにほひ、其弱々しい反抗、糸のやうに斷續する舊い世紀の悲鳴、ぬかるみの底に沈む憂愁の色――若い女の脂肪の匂ひが凡ての匂ひを打消すやうに其處らを漂ふた。

色彩と表情

色の表情は大變に多いが、普通の所で赤は情熱を、靑は眞理を、赤と白と並べるとラブを、黑赤を並べると惡魔を表はすと云ふ事になつて居る。彼の西洋の處女が白衣と靑色の衣とを共に着るのは、右の表情の關係に基づいたもので只白はかりではラブの表情には成るが、眞理が無いからいけないと云ふ理由から、特に靑色の衣を共に着る事になつて居るのである。西洋ばかりでなく、日本でも芝居などでは、矢張り赤と黑との衣を並べ着ることを以て、惡魔的の表情として居る。これは別段深く考へてした事ではあるまいが、結果は甚だ面白く學理的になつて居るだから、單に芝居ばかりでなく凡ての着

物でも、この色彩の表情といふことを考へて作つたならば、大いに面白いものが出來るだらうと、畫家の吉田博氏が或人に語つたさうだ。日本人は温和とか優美とか乃至高尚とか云ふ意味の象徴として、或る色彩の選擇をやる習慣はあるが、其他に於て色彩に關する智識は皆無と云つて可い。これは日本人殊に日本婦人の屈辱であるに相違ない。

女臭いにほひ

若い女の人――官能の鋭い若い女の人は、襖のむかふに居る戀人のにほひをかひで心がときめくと云ふ。醫者の方から觀ると、無論一種の病的發作に違ひないが、私はさうした心持が甚だ面白いと思ふ。ヒステリー若くはヒポコンドリー、其他神經衰弱症の人々は、多く斯かる特殊の鋭敏な感覺を持つて居る。さうして又さう云つたやうな人々は、殊に同性よりもヨリ多く異性のにほひに對して強い刺戟を感じる。

よく女の人は男臭いと云ふことを話す。――其男臭いにほひと云ふのを自分も嘗てかいだことがある――男臭いとは煙草のやうな匂ひてある分泌する脂肪のにほひ、汗のにほひ、垢のにほひの一つに相集つた臭氣である。男臭いのに對して女臭いにほひと云ふものも無ければならぬ女臭いにほひは古來白粉のにほひ、紅のにほひ、香油香水のにほひだとされて居るが、そんな外來的にほひて無く、本來の女臭いにほひは甘いにほひ、砂糖のやうなにほひてあると、或悪者が語つて居た。これは主として分泌物の性質が違つて居るせいであらう。或は女の人は甘いものを餘計に食べるから、其にほひが出るのかも知れない。

隠れたる春色

よく霜枯れとか冬かれとか言ふ言を聞きますが、私は少からず異存がある、私の見るところでは初冬以來孟春にかけて草木が衰へるなぞと決して思へない、人目も草も枯れはて丶と云へば人が肯づくのは如何にも困つたコムペンションである。なぞと理窟を捏ねるのでは無い、諸君歎くはあらうがまア一寸外へ出て御覧なさい、風はヒユー／＼吹きながらも、日色晶々としてコバルト色の空をわたつてゐる下に、一葉を附けざる赤裸々の木々が何處となく烟つたやうに生々の氣を見せて居るてはありませんか、梅は申すに及ばず、固く蕾を含んで居る櫻や桃の枝の、絹ふきんて拭うても及ばない程つや／＼しく紅味を帶びたのが、日光に輝やいて居るのはどうてしやう、籔を見ると竹は心地よく青い、椿が中に深紅の色を見せて居る、カサ／＼と乾いた中にも和める光を吐く枯笹の音を靜かにお聽きなさい。更らに又諸君その足下を見ると、雪て埋めやうが霜て閉ぢやうが、意ともしないらしく芹て御座れ薺て御座れ、ほの紅い柔か味を見せて居るてはありませんか、蒲公英も押しつけられたやうこべりついてゐる、狐色した野薺の茅花は根に力をひそめて居る、どうかすると野生のすみれのハイカラ臭くないのが慈悲深い日かげに咲いて居るのさへ見出される、かう云ふものを見るときに私はどうしても冬枯れを認め得ない、却つて尤も力のある見ゆるからに氣がせい／＼する時だと思ふ。若し一年中眞に倦怠凋落する、ミゼラブル見る影もない衰殘の時を言へば、共れは八月末から九月の初めへかけてでありましやう、あの時分枯死するものは草木のみてはない、秋風わたり金氣沈んて天地覺醒する時、秋と云ふ道師が授くる洗禮に依つて萬象に元氣が出る、冬は尤も希望ある努力の時だと私は思はずに居られないのです。

雪

▲正月になつてからも冬は暖かい、暖かいのに半月の間に雪が三度降つた、しかも四五寸積つた▲暖かいから市中の雪は直ぐ融ける、山の手方面は雪の上に雪が降つた▲雨が雪に變るのは興味があるけれど、雪が雨になるのは面白くない▲十六日拂曉雪中に少し大きい地震があつた、今年の初地震だ、東京はちよい／＼地震があるから滅多に大地震がゆらないさうだ、地震が遠のくと油斷してはならぬわけだ▲雪が少し深く積ると電話電燈の線に故障が多い、電柱に昇つて働いてゐる工夫は新しい雪中の圖だ▲雪の日はさすがの大都會も其騒きが鎭靜する、靜寂の底に活動の聲を聞き得るのは雨の日に限る▲吹雪の中を學校通ひする子供の姿は尤も其天眞を發揮してゐる▲雪の日を歩いてゐる人は皆芝居氣があるやうに見える。

文士と萬年筆

△上司小劍君はつい此間七圓を投じて萬年筆を買つた。「まだ原稿の五十枚とは書いて居ない」

△德田秋江君が内田魯庵君から貰つた萬年筆は既う疾くの昔廢物つた △德田秋聲君が柳川春葉君の持つて居た二本のうちを讓受けたのも既うペンの先のプラチナが無くなつて漢字は書けるが傍訓は振られなくなつた △故獨步の遺品をうけた眞山青果君のは丁度今が使ひ頃て漸く將に啟からんとしてゐる青果君曰く「國木田さんは貰つて餘り書いちやゐなかつたので其代りに僕はこれでウンと書きました」顧ふに此ぺん原稿料の四千圓位は確に稼いて居るだらう。

一萬圓の懸賞

大阪朝日新聞一萬號の記念の爲め、懸賞金額總計一萬圓の文藝作物募集をするさうてある、其種類と締切期限は左の通りてある。

〇論文題　（イ）時代傾向の觀察及批判（ロ）對外商工策二十回以上三十回一回九十行内外五月三十一日迄〇小說（材を現代に採り創作に限る）八十回乃至百回一回八十行内外六月三十日迄〇史傳題　德川初期の海外貿易家約五十回一回九十行内外六月三十日迄〇喜劇（上品なる滑稽劇創作に限る）幕數、場數制限なし五月三十一日迄〇お伽譚（創作に限る）△回數三回以上十回一回九十行内外四月三十日迄〇新體詩題太平洋の歌（長短章節隨意）一人一首四月三十日迄〇唱歌題海（小學校用）動物（幼稚園用）一人一題三月三十一日迄〇學歌題「雪月花」の中隨意（歷史に因みたる）一人一題三月三十一日迄（寫眞題活動一人一枚三月三十一日迄〇和歌題雲（短歌）一人一首二月二十八日迄〇漢詩題古城春望（七言絕句用韻隨意）二月二十八日迄〇俳句題春雜題一人一首一月三十一日迄選者内藤鳴雪氏〇狂歌題美人の洋行加藤淸正一人一題二月二十八日迄〇川柳題最近時事一人一首一月三十一日迄〇情歌題無線電信一人一首二月二十八日迄

山姫現はる

前月十一日のことてある、美作山中に棲息せし山姫（年齡廿位）苫田郡東苫田村にて取押へ言語を發せずキヤツ〳〵と怪しく叫ぶのみ木の實蛇等を食し頭髮固く縺れ爪長く銳く一見獸類の如し身丈四尺種痘炙痕あり人家に虜れたるは明てある、警察署て保護中にも大人しくニヤリと笑ふばかりて殊に物凄かつたさうだ。

眠れる顏の美

一口に美人と云つてもいろ〳〵種類がある。然し、美人の美に見えることから云つて見ると槪して眠つて居る顏は美はしい。例へば、オセロのデスデモナが眠つて居る寢床へ、殺意を含んで這入つて來ても、その眠つて居る顏の美に打たれて、思はずも接吻したと云ふとがあるまた、ジユリエツトが、眠り藥を飮んて、墓場に眠つて居つた顏が、ロメオを如何に惑せしめたか。

眠つて居る顏に近いのは、物に見恍れて、うつとりとした時の顏てある。

この二つの場合に於ける顏は、不變的な形てある。ある調和が認められる。定着の美が認められるので極致的の美が現はれて居るのであらう。

古代、我が奈良朝の全盛な時代、又、藤原氏極盛期の彫刻若しくは繪畫などに現はれたる美の型の如く、半眠の優美は又、ふつくりとした豐頰の美を持つた美て、眼を充分に瞬つて活動を現はした寫實的の思想に動かされた時代のものと異つた美を現はしたものは、此の美を能く示して居るやうに思はれる

斯う云ふ場合の美人を見ると、此の美人が目覺めたならば何うか、又、何に見恍れて居るのかと、その前後の關係を連想せしめる。何がその美人をいき〳〵させて居るかと云ふ、そのいき〳〵せしめたものを此方て思ひやるやうにする。即ち、その美人の心に思つて居る何かゞ、うるはしき心に滿ち溢れて、こちらにもれて來らんことを求むるやうになる。（紀淑雄氏談）

新刊

〇ハムレツト　坪内逍遙譯

シエークスピヤのハムレツトは誰知らぬものなき有名な劇てあるが、多年シエークスピヤの研究に心を碎かれた坪内博士の譯が今一冊に纒つて出版された、錬りに錬り、鍛へに鍛へた結果だから、一字一句も輕忽にしてゐないことは言ふまてもない、此まゝ劇に上しても少しの故障もない。博士の苦心は只英語から譯すると云ふ場合よりも、日本語の選擇に就いて苦心されたらうと思ふ、即ち對話に於て、現代語を斟酌し、中古近古に涉つて行はれた日本の國語中、適切なものを拔いて用ゐてある、時代ものと云ふ事を現はすには必然の用意てあらうと思ふ。製本堅牢質實（定價一圓三十五錢、早稻田大學出版部發兌）

●●

▲此他新刊數册の紹介は次號にゆづる、

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲投稿は每月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、新論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。地賞金八拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分　▲▲▲▲每月一回（一日定期發行）

一册（一回分）	定價金拾五錢	：郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三册（三月分）	同前金四拾三錢五厘	：同　四錢五厘	計金四拾八錢
六册（半年分）	同前金八拾四錢	：同　九錢	計金九拾三錢
十二册（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	：同　拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲▲▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一册（一回分）	定價金貳拾錢	：郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二册（半年分）	同前金三拾八錢	同　三錢	計金四拾壹錢
四册（壹年分）	同前金七拾貳錢	同　六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部▲▲▲十六回

四册（三月分）	定價金六拾三錢五厘	：郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八册（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	：同　拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六册（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	：同　二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▼申込注意　振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁……	半頁十二圓
部數多く有効に比し無類の割安		一行四拾錢
〆切每號十五日前		

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○弘報堂○博報堂○東京勉强社

明治四十三年一月二十六日印刷
明治四十三年二月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話（本局六〇七番）
女子文壇社

特約賣捌元
○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

好評嘖々……殘本僅少速に申込あれ

今の女を知らんとする者は此一冊を繙け

家庭日記

女子文壇 第四 增刊 要目 十一月十五日發兌

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲憚る處なき女學生の境遇
▲開放したる心の扉
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と、出たる後

▲大地震當時の虎姫村
▲母に氣を附られて日記を試む
▲新しい書室と新しい少女
▲家事のひまひまに讀むツルゲネーフ
▲診察室の三日間 ▲引越の日
▲學生時代より家庭時代に移らんとする薄き愁
▲都會生活の一面
▲ある朝、ある午後、ある夜
▲二三日の間に定まる運命
▲猫の嫁入 ▲一生懸命になれ
▲周圍に連れて大人びて行く
▲不思議の早起 ▲和洋の御馳走
▲夫の愛を疑ふ若き妻のやるせなき思ひ
▲スヰートホーム
▲思ふ儘なる別荘住居 ▲出勤日
▲田舎廻りの似而非講師 【以上日記文】

附録

最近の日記

三宅花圃女史　長谷川時雨女史
大塚楠緒子女史　國木田治子女史
與謝野晶子女史　尾島菊子女史
岡田八千代女史　荒川澄子女史

和歌・・▲鉛筆▲潮▲夜・・▲湯殿の姿見▲お目・・▲壓倒▲門・・・▲
の室▲戀▲自然 美文 見へ▲雪降るまで 小說 の柳▲手紙 書簡文 雨
につけ風につけ▲切なる胸・・・▲今の女▲妾が心の・・▲月光・・
を姉様へ▲お花の先生へ 新論文 告白▲母のつとめ 詩 の下 俳句

定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘
頁二百三十 挿畫澤山
當選作家 肖像密刷

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 （振替壹九七貳） 賣捌 全國雜誌各店

●婦人に對する四問

（一）女に白帶下は持者である、女は冷る者である、頭痛のするは時候の關係である、子供は授り者で生れぬのも致し方がないと、自分の身體に異狀があるも病氣と心付かず過し居る婦人なきか

（二）自分では病氣である、身體の工合が變だ、機を見て治療しやうと思ひながら、夫や姑に弱い嫁だと愚痴云るを遠慮して治療を怠る境遇の婦人なきか

（三）治療を受け様としても、醫師の許へ行けば厭な所迄も診察される恥しさに治療を怠り居る婦人なきか

（四）婦人病は多く慢性で、其初めは極く輕症なれば地方の名醫に乏しい土地の婦人は勿論都會の婦人でも多忙の爲め其手當を怠り次第に重症となり居る婦人なきか

、若し如斯婦人あらば早く津村順天堂の自宅療法により無病の幸福を得たまへ、順天堂は一藥で萬病を治すとは云はぬ、十數種の加減内服藥と最も進歩せし外用藥を以て、婦人病の根治を保證するのです、今内服藥中將湯と外用藥中將球を使用すべき諸症を同病患者に告白す、幸ひに自己の症狀を考慮して本劑を用ふれば必ず滿足なる結果を得べし

どん〻婦人病が自宅療法で治癒するか

●俗に『血の道』と唱へ、氣鬱ぎ癇高ぶり些細の事を氣に懸け思ひ詰ては夜も眠られず自然に神經衰弱症となるこれ醫師の稱ふる『ヒステリー』症で、痞癪寸白と唱へて腰足引つり痛み胸先へ差込乃至は居常に白血赤血帶下に惱み顏色惡しき子宮病子宮内膜炎等は云ふに及ばず、頭が痛む目が眩む、耳が鳴る肩が凝る、腰足が冷えると云様な症狀、年頃になり月經なく有るも不順不規則にて、其都度痛みを感ずる者、産前何となく常ならざる或は『つはり』とて嘔吐を催し飲食物落付かざる、産後の日立ち惡しき手足の水腫しびれに惱む者、特に婦人に最も大切なる春氣發動及び月經閉止期の注意を怠るより起る諸症等には内服藥中將湯の必要が有ります、外用藥中將球はそうでは有りません、子宮内膜炎、白帶赤帶こしけ子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、子宮惡臭、子宮搔痒、尿意頻促、月經時の疼痛、麻毒性子宮病等に中將湯を服用して中將球を兼用するの必要が有ります、

●中將湯代價は五週貳圓五十錢、三週壹圓六十錢、二週壹圓拾錢、一週六拾錢、中將球の定價四十五個貳圓、二十個壹圓、九個五拾錢、本舗は東京日本橋通四丁目津村順天堂です●取次全國各藥店

●本舗へ注文の方は必ず病人容躰詳して申込加減藥有

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）
女子文壇 定價金拾五錢 郵税壹錢五厘
【東京株式會社秀英舍印刷】